

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第75集

えん っ う じ こ ぼ
円通寺古墓
NA335 号窯 I・II

1998

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県大府市、名古屋市は、愛知県西部のほぼ中央、知多半島の付け根部分に位置しています。この両市境は現在でも緑濃い丘陵地が広がっており、太古の昔から我々の祖先の足跡が刻まれてまいりました。特に、小規模な谷を含んだ複雑な地形は、豊かな動植物の生態系を生み、またこの地形を利用して、古くから窯業生産活動が活発に営まれてまいりました。

このたび当地に、建設省及び、日本道路公団によって、第2東海自動車道・伊勢湾岸道路が建設されることとなりました。この工事予定地付近には、近世の墓地伝承が残る「円通寺古墓」、隣接地では愛知県遺跡地図に記載の「高根山古窯」（遺跡番号 01-14132・滅失）などがあります。愛知県教育委員会及び名古屋市教育委員会では、両地点周辺の試掘調査を行ったところ、円通寺古墓では墓墳、高根山古窯周辺では窯体が確認されました。そして、窯体は名古屋市の遺跡分布地図に「NA 335 号窯」として追加されました。このような経緯から財愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて建設省、日本道路公団からの委託を受け、建設工事に先立ち事前調査を行いました。その結果、中世・近世の遺構、遺物を検出することができ、この地域の歴史に新たな資料を提供できることとなりました。

調査にあたりましては、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、大府市教育委員会をはじめとする関係諸機関、さらに周辺住民の皆様から多大なるご協力をいただきましたことに、深く感謝申し上げます次第です。

最後に本書が埋蔵文化財の理解、研究の一助となれば幸いと存じます。

平成10年8月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 塩 見 修 哉

円通寺古墓



例 言

1. 本編は愛知県大府市共和町神戸地内に所在する、円通寺古墓の発掘調査報告書である。
2. 調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局による「第2東海自動車道・伊勢湾岸道路」建設工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて建設省、日本道路公団から委託を受けて実施した。調査面積は1500 m²である。
3. 発掘調査は平成7年4月から8月にかけて実施した。さらに平成8年度には、調査報告書作成のため整理作業を実施した。
4. 現地における発掘調査は、多くの作業員の方々の参加を得て、本センター水谷寛明（主査・現佐久島小学校）、松田訓（調査研究員）、加藤博紀（調査研究員）、堀木真美子（調査研究員）が担当し、伊藤羊子（発掘調査補助員）がこれを補佐した。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、大府市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本編の編集は松田訓が担当し、執筆分担は第IV章を堀木真美子が担当し、それ以外を松田が担当した。
7. 遺物整理作業については松田訓、堀木真美子が担当し、次の方々の参加を得た。
奥村勝信、渡辺泰子、河合明美（調査研究補助員）、棚木えみ子、中西和子、加藤豊子、平野みどり、田中和子、野川佳江（整理補助員）
8. 本編に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠する。また、本編に示す海拔表記は、東京湾標準（T. P.）の数値である。
9. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として本文中に示した。
10. 調査記録は本センターにて保管する。
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
12. 本書の執筆にあたり、つぎの諸氏、諸機関にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝したい。

（五十音順、敬称略）

内野 正 遠藤才文 川道 寛 久保和士 嶋谷和彦 積山 洋 永松 実 速水信也

古門雅高 松尾信裕 水野裕之 森 泰通 森村健一 森山栄一 山崎純男

愛知県教育委員会 大府市教育委員会

目 次

第I章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	(松田) 1
第2節 調査の経過	(松田) 1
第3節 遺跡の位置	(松田) 2
第4節 歴史的環境	(松田) 4

第II章 遺構

第1節 基本層序	(松田) 6
第2節 遺構	
第1項 概要	(松田) 7
第2項 上位土坑群	(松田) 7
第3項 中位土坑群	(松田) 10
第4項 下位土坑群	(松田) 17
第5項 溝	(松田) 19

第III章 遺物

第1節 土器・陶磁器	(松田) 21
第2節 金属製品・その他	(松田) 25

第IV章 出土人骨概要

(堀木) 36

第V章 ま と め

(松田) 54

挿図目次

第1図	愛知県・大府市概観図	2
第2図	遺跡周辺地形図	3
第3図	周辺遺跡位置図	5
第4図	調査区土層概念図	6
第5図	調査区土坑群位置図(1/250)	8
第6図	上位土坑群位置図(1/100)	9
第7図	SK61周辺図(1/20)	9
第8図	中位土坑群位置図(1/125)	11
第9図	SK84出土状態図(1/20)	11
第10図	SK48平・側面図(1/20)	13
第11図	SK53・76・77・78平面図(1/20)	13
第12図	SK82平・側面図(1/20)	14
第13図	SK85平・側面図(1/20)	14
第14図	SK89平・側面図(1/20)	15
第15図	SK91平・側面図(1/20)	16
第16図	下位土坑群位置図(1/100)	18
第17図	SK29平・側面図(1/20)	20
第18図	SK30・55平・側面図(1/20)	20
第19図	遺物実測図①	22
第20図	遺物実測図②	23
第21図	銭貨拓影①	26
第22図	銭貨拓影②	27
第23図	銭貨拓影③	28
第24図	銭貨拓影④	29
第25図	遺物実測図③	30
第26図	遺物実測図④	31
第27図	遺物実測図⑤	32

表目次

第1表	調査工程表	1
第2表	土器・陶磁器観察表	24
第3表	銭貨観察表①	33
第4表	銭貨観察表②	34
第5表	金属・ガラス製品観察表①	34
第6表	金属・ガラス製品観察表②	35
第7表	石片観察表	35
第8表	出土人骨性別一覧	45
第9表	頭蓋骨計測表①	46
第10表	頭蓋骨計測表②	47
第11表	歯冠計測表①	48
第12表	歯冠計測表②	49

写真目次

写真1	出土人骨①	50
写真2	出土人骨②	51
写真3	出土人骨③	52
写真4	出土人骨④	53

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

円通寺古墓は墓域の伝承が残る地で、愛知県大府市共和町神戸地内に所在する。この伝承地内に建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局によって、第2東海自動車道・伊勢湾岸道路の建設工事が行われることとなった。このため愛知県教育委員会では、道路建設工事に先立ち、この伝承確認及び埋蔵文化財の包蔵状況を確認するため、平成6年に試掘調査を行っており、この時点で墓墳及び人骨、近世陶器などを確認した。これらの遺構、遺物検出地点は道路建設予定地内に入っており、事前に発掘調査が必要と判断された。

（財）愛知県埋蔵文化財センターではこのような事前協議を経て、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、大府市教育委員会の協力のもと、平成7年4月から発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

調査区は、道路建設予定地内の舌状台地先端斜面に一括して設定した。この調査区に平成7年4月から資材搬入を行い、表土剥ぎを実施し、発掘作業を開始したのは4月21日であった。

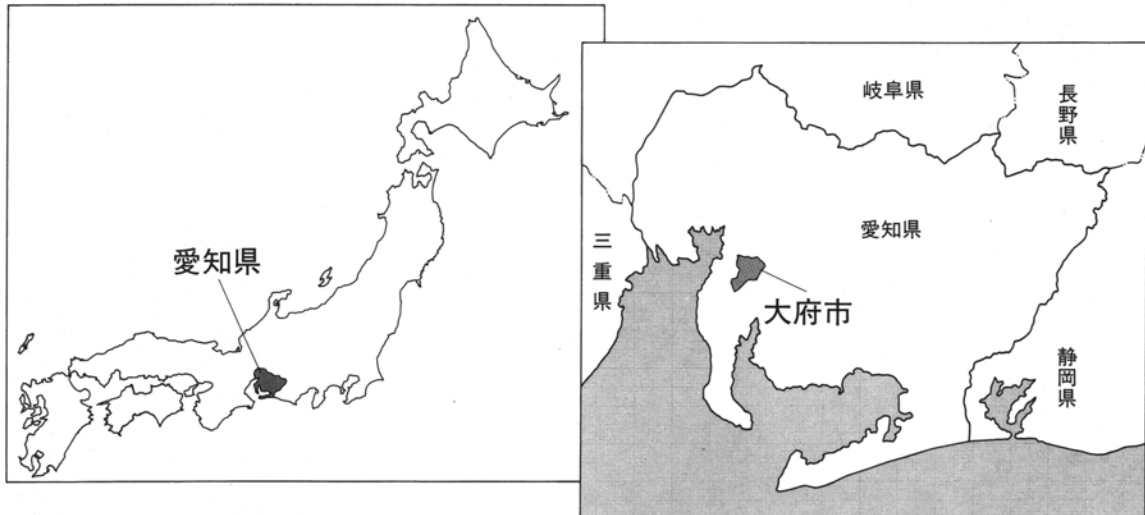
調査地の旧態は竹林及び畑地であり、竹、笹の根が遺構検出面以下まで張り出していて、これらの除去に時間を要した。調査期間は4ヶ月を要し、測図、写真撮影、補足調査を含めて8月1日に現地調査を終了した。

出土遺物の整理作業は、調査中及び調査終了後、洗浄・注記作業を現地事務所でを行い、引き続き本センター三河事務所において、調査報告書作成までの作業を行った。

	H. 7 3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
作業員説明会	・												
資材搬入		—											
表土剥ぎ		—											
発掘調査		—	—	—	—								
航空測量					・								
補足調査					—								
資材等撤収						—							
基礎整理		—											

第1表 調査工程

第3節 遺跡の位置



第1図 愛知県・大府市概観図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。円通寺古墓の所在する愛知県大府市の位置は、伊勢湾・三河湾に挟まれながら太平洋に向かって南北にのびる、知多半島のつけ根部分にあたる。市域は海に面しておらず、その東境は刈谷市、南境は知多郡東浦町、西境は東海市、北境は名古屋市・豊明市と接する。この中でも東境は旧尾張・三河國境で、往時より東西交流の接点としての位置にある。

円通寺古墓はこの大府市域の北東端に位置し、北側の名古屋市、西側の東海市の境界とは至近距離である。遺跡東側には、国道23号線の大高インターチェンジを縦貫する県道大府東浦線が通っている。この県道を大高インターチェンジより南下するとせまい谷筋にはいるが、この谷口の西側丘陵斜面が今回の調査地点であり、これと向かい合う東側の丘陵を登り切った位置に円通寺が対座する。

円通寺古墓の所在する地形は、丘陵が舌状にのびる末端部分である。この丘陵は地層的には、知多半島の丘陵ほぼ全体を形成している常滑層群に属し、これは尾張丘陵の瀬戸層群の延長として位置付けられる。この常滑層群は、第三紀鮮新統の時期にこの地域に存在した東海湖の淡水性堆積物である。市域の丘陵は、石ヶ瀬川・鞍流瀬川の流れる谷によって東西に分けられる。この中で遺跡の位置する丘陵は、西部丘陵に属する。丘陵上の現況は、畑地、果樹園、雑木林、竹林等が広がるが、大府市のもつ名古屋市に対するベッドタウンとしての機能が強まるとともに、JR 東海道線側より急速に宅地化が進んでいる。

参考文献

大府市誌編さん刊行委員会編 1986 『大府市誌』 愛知県大府市



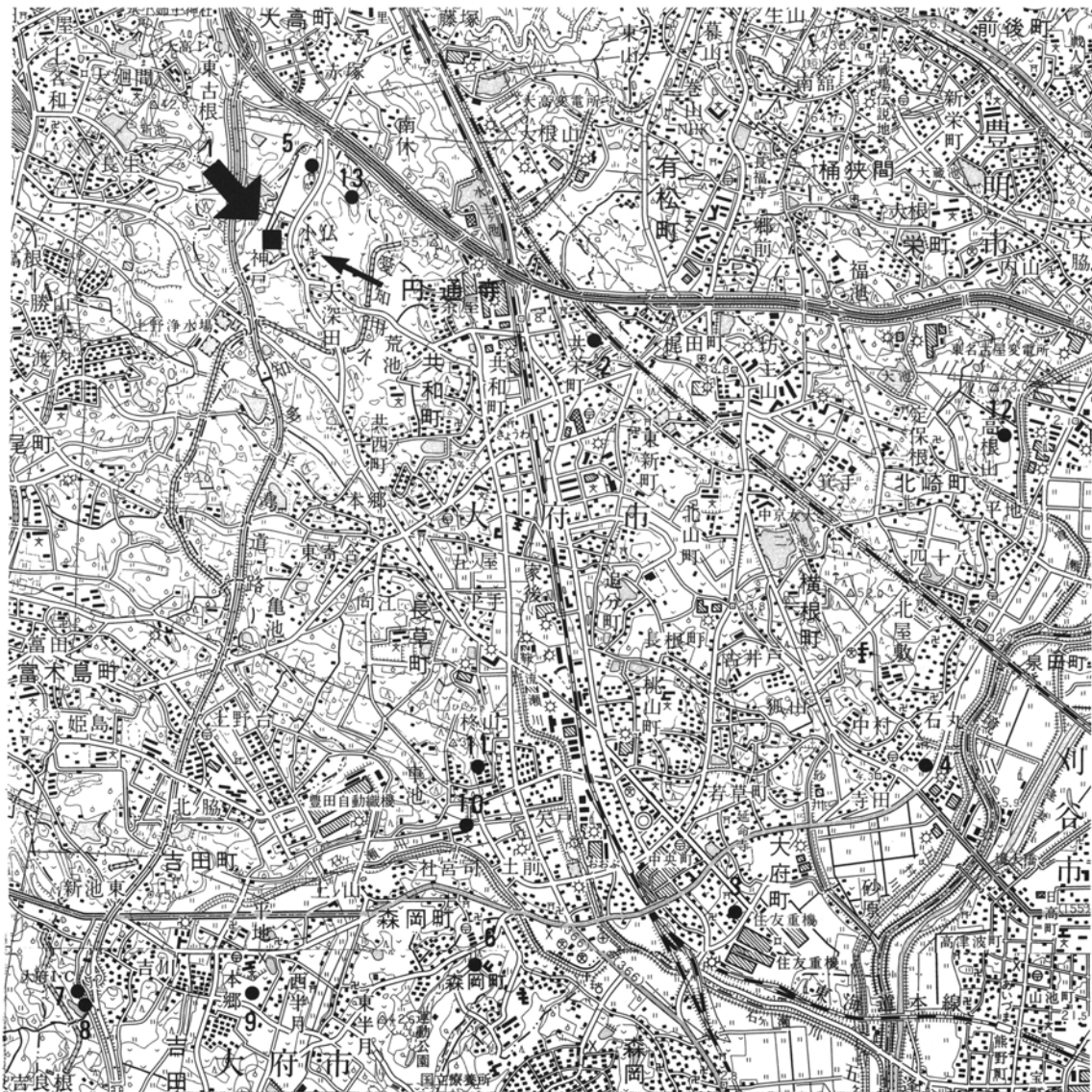
第2図 遺跡周辺図(国土地理院1/20地勢図「名古屋」部分)

第4節 歴史的環境

円通寺古墓の位置する知多半島北部の丘陵は、舌状台地が複雑に発達しており変化に富んだ地形を形成している。こうした複雑な地形は、海に近いことも含めて豊かな動植物の生態系を生み、古くから人々が生活を営む場として利用されてきた。たとえば台地先端部分や段丘面、さらに低地に沿った部分には、各時代の人々の生活の痕跡が今も多く残されている。こうした遺跡の中で、調査地の所在する大府市域を中心として、その歴史的環境を概観してみたい。

遺跡周辺に目を向けてみると、各時代の人々の痕跡で最も古い時期のものは、共栄町石器散布地である。この地点は名古屋市南端から続く丘陵の先端に位置し、本格的な発掘調査は行われていないが、石器が数点採集されており縄文時代後半と位置付けられている。縄文時代が終わり、弥生時代が始まる時期のものでは、市南部の丘陵端に位置する栈敷貝塚がある。市域にはこのほかに貝塚は見つかっていないが、大府市と境川をはさんで対岸に位置する刈谷市では、縄文時代の各時期にわたる貝塚が台地の縁辺部に所在しており、衣ヶ浦最奥部周辺がこの時期に豊かな海浜をひかえていたことを物語っている。弥生時代の遺跡としては、複合（弥生～室町時代）遺跡であるが、市東部の沖積低地に位置する惣作遺跡がある。さらに古墳時代になろうとする時期には、市北端の丘陵上に位置する子安神社遺跡や、南端の丘陵上に位置する源吾遺跡などがあり、沖積低地やその背後の丘陵端に人々が生活を営んだことがうかがえる。こうした傾向は古墳時代にも引き継がれたことが、惣作・子安神社遺跡などの複合遺跡から見て取れるが、古代になると衣ヶ浦奥部は製塩地帯としての様相が顕著になる。市域では惣作遺跡から製塩土器が出土しているが、周辺地域である半田市、東浦町、刈谷市、高浜市、碧南市の衣ヶ浦沿岸部には古代製塩遺跡がならぶように分布する。こうした製塩遺跡とともにこの時代には、市南部の丘陵上に灰釉陶器を生産した野々宮古窯、瓦を生産した吉田第1・2号窯がある。平安時代になりこれらの生産遺跡が登場してくるのは、律令国家体制の成立に関わるものと思われる。しかし、この体制と密接に関わる条里制地割は、狭小な平地以外のほとんどが丘陵部で形成される大府市域では見出せない。中世に至るとこの地は、猿投山西南麓古窯址群、知多古窯址群といった陶器生産地域に包括されて行くが、生産体制の中心として位置したわけではないようである。現在知られているこの時期の陶器生産窯としては、吉田第1・2号窯、ハンヤ古窯、石ヶ瀬古窯、柊山古窯、高根山古窯、別岨古窯、外輪古窯などがある。戦国時代には、当地は尾張・三河の国境に位置するため戦乱の地となることもあったが、近世に至り幕藩体制の確立とともに尾張藩の支配下となり、藩直轄の蔵入地や藩士の知行地である給知の混在地となり、明治を迎えることとなる。こうした歴史的経緯のもと、本遺跡は円通寺という寺院の「もとはか」としての特質を有するが、この円通寺の縁起について概観したい。

円通寺は、春江院という名古屋市緑区大高町に所在する寺院の末寺にあたり、現在の宗旨は曹洞宗である。円通寺では、文禄二（1593）年に当時の住職が書き残した資料を所蔵しているが、この「観音縁起」によると開山は天平六（734）年に僧行基によって行われ、当時は法相宗の寺院であった。しかし、承久・天慶の乱により焼失したため真言宗の寺院として再興され、建武の戦乱によって再び焼失した。その後、貞和四（1348）年に立ち寄った夢窓国師が、中興開山をして臨済宗の寺院となり、この「観音縁起」を書き残した哲栄の後継者が決まらなかったため、村人の合議により曹洞宗の僧を後継者として迎え、この時点で春江院の末寺となった。その後、文政七（1824）年には知多新四国札所の第八十八番に列し、現在に至っている。したがって、円通寺の宗旨は法相～真言～臨済宗を経て、現在の曹洞宗に至っている。



- 1：円通寺古墓 2：共栄町石器散布地 3：棧敷貝塚 4：惣作遺跡 5：子安神社遺跡 6：源吾遺跡
7・8：吉田第1・2号窯 9：ヤンヤ古窯 10：石ヶ瀬古窯 11：柊山古窯 12：高根山古窯 13：別俣古窯

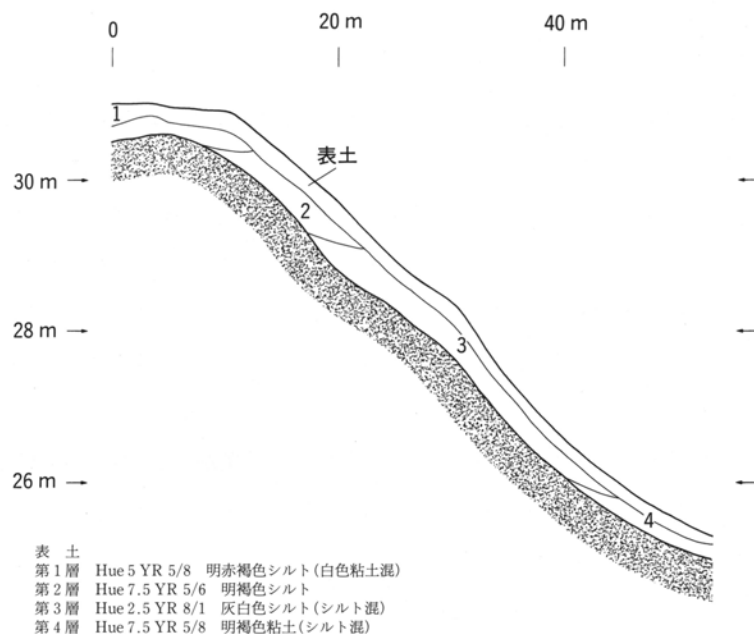
第3図 周辺遺跡位置図（国土地理院1/5万「名古屋南部・半田」部分）

第II章 遺 構

第1節 基本層序

今回の調査区における遺跡の基本層序を概観すると、第4図のような状況がみてとれる。調査地点の立地環境は、調査区の設定が東西方向にのびる舌状の丘陵端になされたため、全体が東方向に傾斜する斜面上に位置する。この調査区全体は、旧耕作土と思われる淡黄褐色の水はけの良い表土が覆っており、この下には調査地点の下位から順に遺物包含層が薄く斜面上に堆積している。以下に各土層の堆積状態、土質を説明する。

調査区における地表面は標高約25～31mで、地表面には前述の表土が約20～30cm程堆積している。この表土中にも近世～近代にかけての遺物が含まれていたが、この表土の締まりは悪く明らかにローリングを受けた結果と判断し、この層を機械掘削によって除去した。この表土直下には調査区の上位から順に、白色粘土の混じる明赤褐色シルト（第1層）、明褐色シルト（第2層）、シルト混じりの灰白色粘土（第3層）、シルト混じりの明褐色粘土（第4層）がそれぞれの下位層にかぶるように堆積していた。これらの下の基板層は淡赤褐色粘土であった。



第4図 調査区土層概念図

第2節 遺 構

第1項 概 要

本遺跡で検出した遺構は、土坑・墓壇 (SK) 106 基、溝 (SD) 3 条である。遺構検出面は概ね標高 25～30 m である。

調査区内の各遺構分布状況は、北側には溝 3 条が方向をやや異にしてのびており、南側には土坑が集中している傾向がみられる。さらにこの各土坑は、北側にはほとんどみられず、東に向かって傾斜する斜面上では、西から上・中・下位と 3 つのグループが認められる。これら各グループ間の境界は、極端に明瞭とはいえず、密度の濃淡や等高線の緩急によって判断した。しかし、土坑・墓壇の掘り手や依頼者は、まずは斜面における標高の差によって、ある程度掘削の場所を意識したことが考えられる。この意識が、各遺構をグループ化させる要因の一つとなったことは、推察できる。したがって、このグループ化がどのような理由で意識されたかを考えるために、遺構は各グループごとに記載を行い、比較してみることにする。

各遺構の時期については、人骨とともに出土した副葬品と思われる遺物からは、細かい時期まで特定し得るものが無く、銅銭やその他の金属製品などの特徴から、近世から近代初頭が想定できるに留まる。

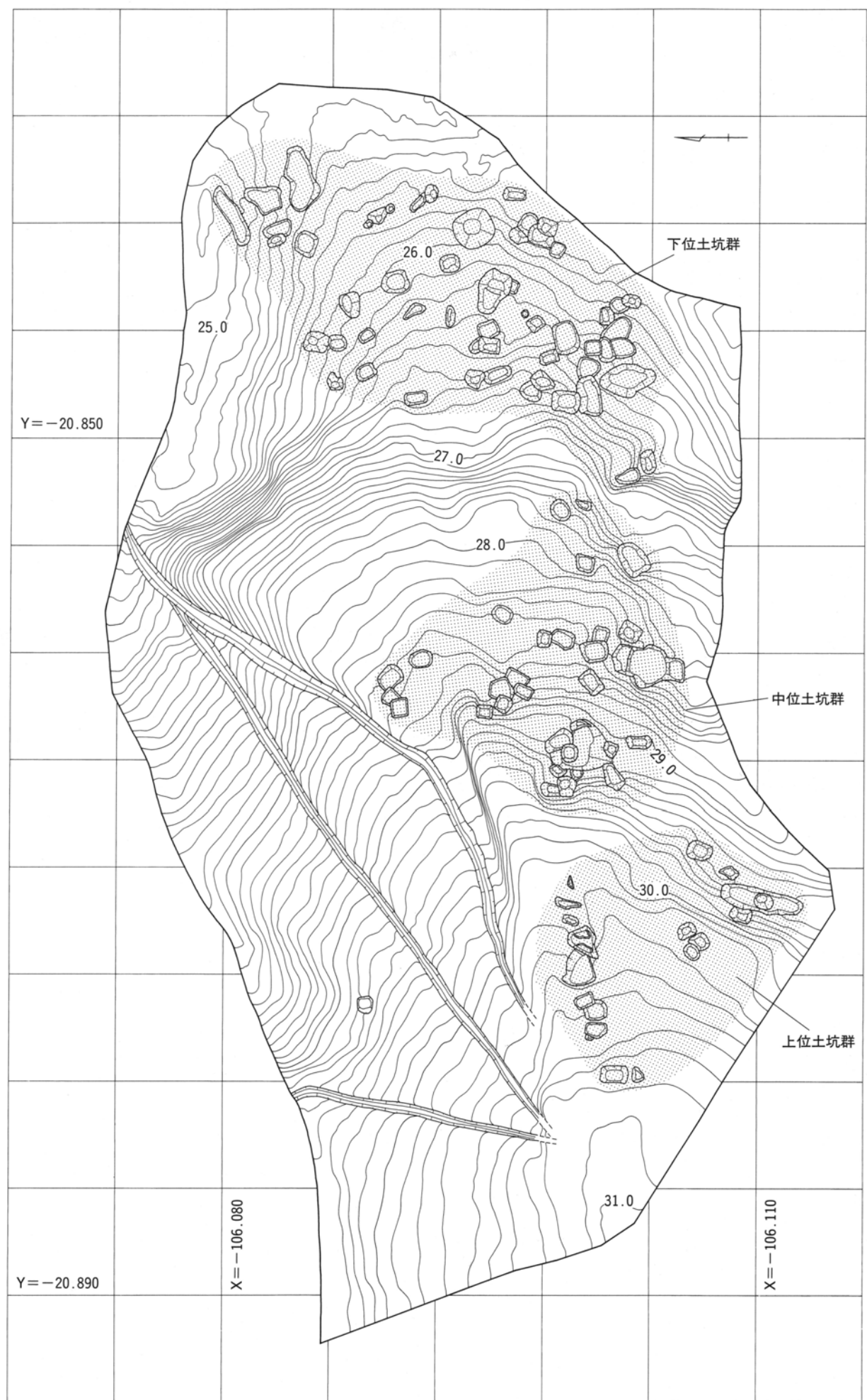
第2項 上位土坑群

調査区西側の南半分に集中する。各土坑の掘り込み面は標高 30.2～30.8 m の位置からで、この中でも北側で東西方向に並ぶ列と、その南側で集中する土坑群との間には、遺構の空白部分が見られる。北側の土坑集中部は明らかに列を意識して掘り込まれており、位置的には緩やかな斜面の尾根部分に並んで検出される。また、標高 30.0 m の等高線付近では、尾根筋から分かれて遺構の空白部分が帯状に認められると考え、この部分を上・中位の境界とした。そして、等高線上に表れる尾根筋と、そこから分岐する空白部分に墓道の可能性を考えた。

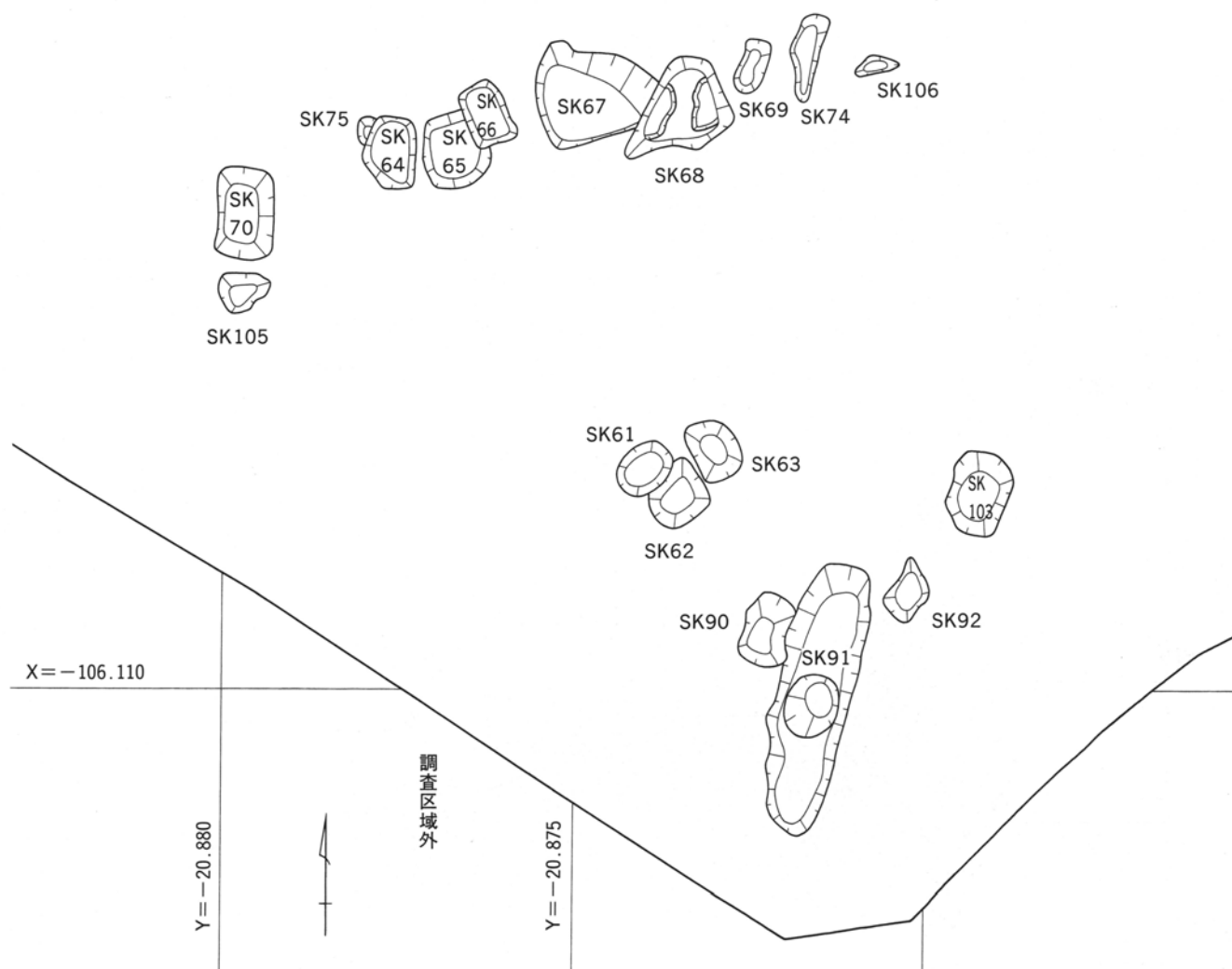
各土坑の平面形態は概して不整長方形で、規模は長径が 1 m 前後のものが多くみられる。深さは、極端に浅いものを除けば、検出面から 0.44～1.2 m で、統一性は窺えなかった。このなかでは、SK61、65 から人骨と思われる骨片が出土しており、SK64 からは、骨片はないものの副葬品と思われる遺物が出土している。本群の土坑数の合計は、14 基である。

SK61 上位土坑群の中ではほぼ中央に位置し、SK62 を切っている。平面形態は楕円形で、長径 0.85 m、短径 0.55 m、深さ 0.65 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨と思われる人骨が出土している。

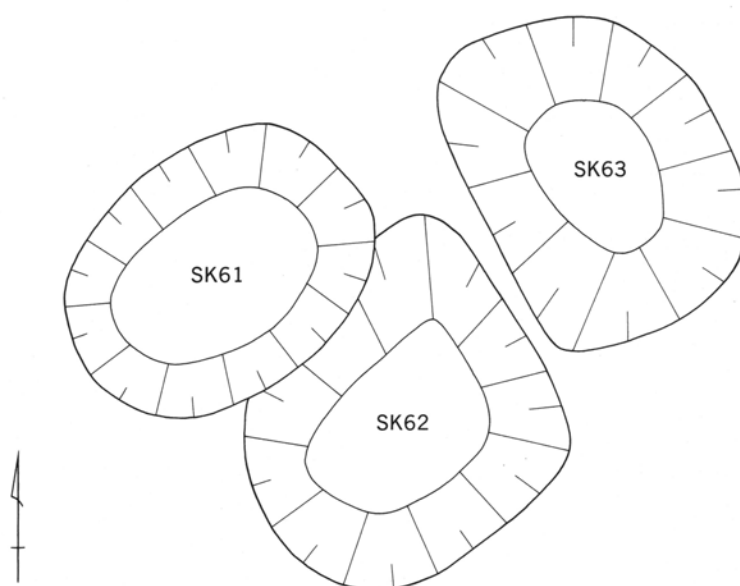
SK64 本群の東西土坑列の西側に位置し、SK75 を切っている。平面形態は不整長方形で、長径



第5図 調査区土坑群位置図(1/250)



第6図 上位土坑群位置図(1/100)



第7図 SK61 周辺図(1/20)

1.0 m、短径 0.75 m、深さ 0.44 m を測る。土坑内からは、陶器鉢の破片、鉄製の火打金、銅製の煙管雁首など副葬品と思われるものが出土している。

- SK65 東西土坑列の SK64 東隣に位置し、SK66 を切っている。平面形態は隅丸の不整形と思われ、長径 1.05 m、短径 0.95 m、深さ 0.53 m を測る。土坑内からは、四肢骨と思われる人骨が出土している。

第 3 項 中位土坑群

調査区中央の南半分に集中する。各土坑の掘り込み面は標高 27.3～29.5 m で、土坑の集中部は、本群中西側の最も標高の高い部分や、本群中央の標高 28.4 m 付近にみられ、そのほかにも数基程度の集中が 3 ヶ所みられる。標高 28.0 m の等高線から上の部分では、傾斜が緩やかで遺構の検出されない部分が認められ、この部分のすぐ上には土坑の集中部が並ぶため、この空白部分は墓道の可能性が考えられる。

各土坑の平面形態は、上位土坑群と同じく不整形が多く、規模も似通っており長径 1 m 前後のものが多くみられる。深さは、極端に浅いものを除けば検出面から 0.3～1.3 m で、上位土坑群と同様に一定の傾向は窺えなかった。このうちでは、SK53、54、76、77、110 からは人骨が出土しており、SK48、49、78、82、84、85、89、91、92、98、99、107、109 からは、人骨とともに副葬品と思われる遺物も出土している。本群の土坑数は、32 基である。

- SK48 中位土坑群の中央やや北側に位置する。平面形態は不整形を呈し、長径は 0.95 m、短径 0.8 m、深さ 0.76 m を測る。土坑内のほぼ底面から、1 体分の人骨が良好な残存状態で出土し、この人骨の頭部付近からは鉄製の火打金、銅銭 6 枚が出土している。埋葬形態は右横臥屈葬と思われ、埋葬頭位は、北西と思われる。

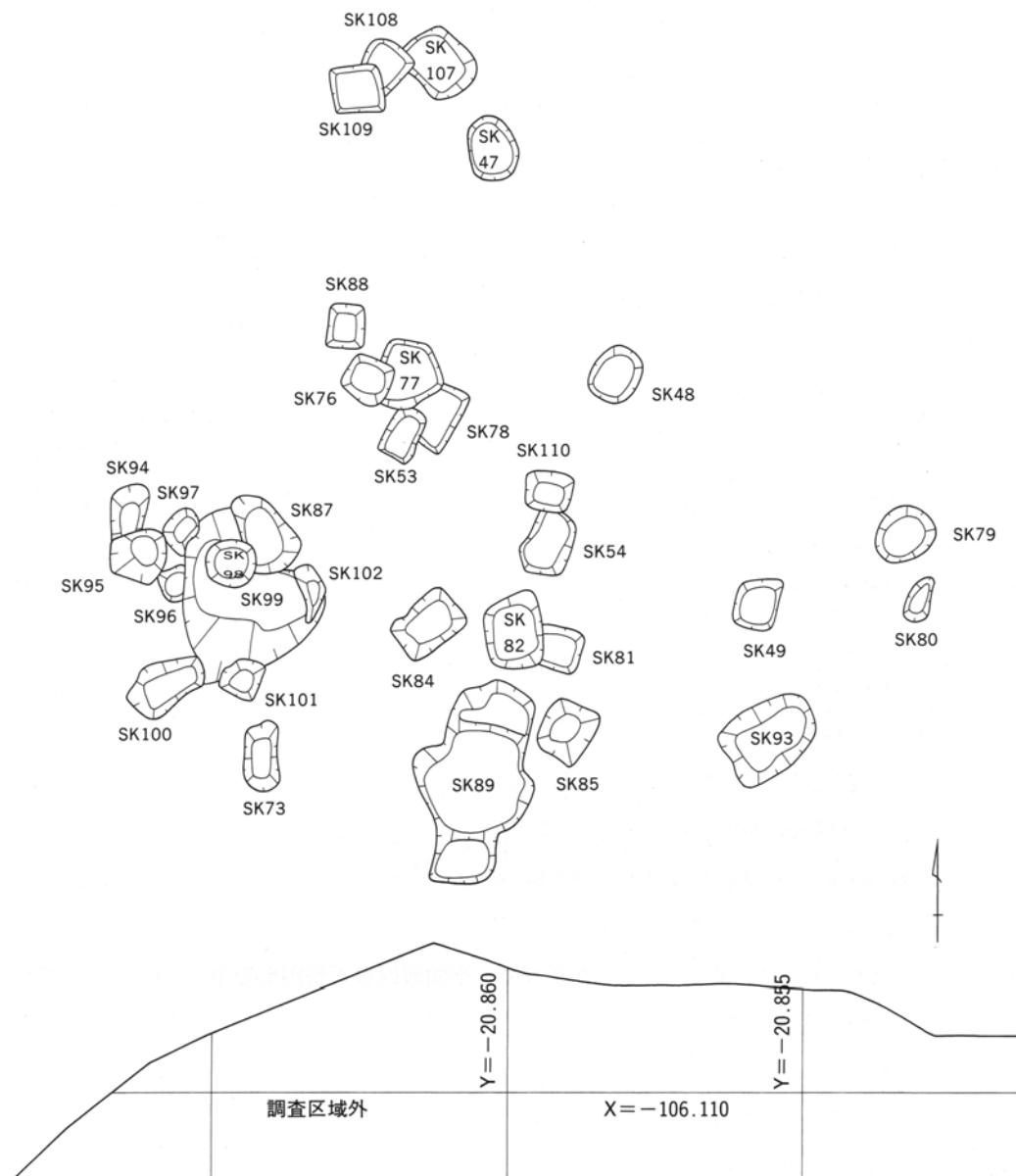
- SK49 本群の東側に位置する。平面形態は不整形で、長径 0.85 m、短径 0.75 m、深さ 0.71 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨、腸骨と思われる人骨とともに、鉄製の釘、銅製の煙管雁首、鉄製の火打金、チャート材の火打石が出土している。

- SK53 本群の中央やや北に位置し、SK78 を切っている。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われ、長径 0.9 m、短径 0.6 m、深さ 0.39 m を測る。土坑内からは、残存状態の比較的良好な 1 体分の人骨が出土し、埋葬形態は左横臥屈葬と思われる。

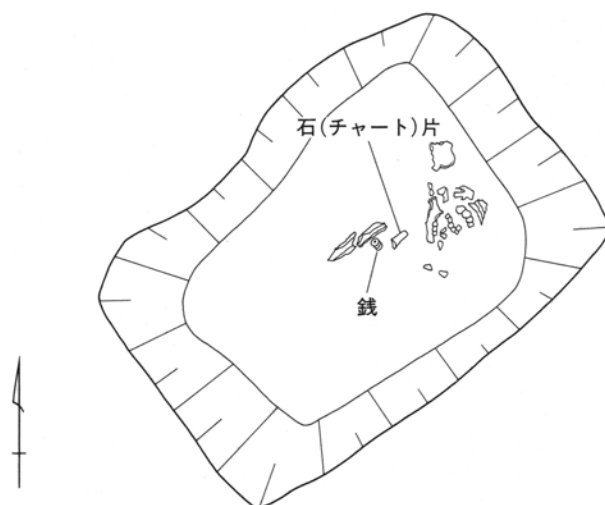
- SK54 本群のほぼ中央に位置し、SK110 に切られている。平面形態は不整形で、長径 1.1 m、短径 0.75 m、深さ 0.88 m を測る。土坑内からは、四肢骨、椎骨と思われる人骨が出土している。

- SK76 本群の中央やや北に位置し、SK77 を切っている。平面形態は隅丸方形で、長径 0.8 m、短径 0.75 m、深さ 0.65 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨の一部と思われる人骨が出土している。

- SK77 本群の中央やや北に位置し、SK76 に切られている。平面形態は不整形で、長径 1.15 m、深さ 0.36 m を測る。土坑内からは、残存状態の比較的良好な 1 体分の人骨が出土し、埋葬



第 8 図 中位土坑群位置図(1/125)



第 9 図 SK84 出土状態図(1/20)

形態は右横臥屈葬と思われ、埋葬頭位は北西と思われる。

SK78 本群の中央やや北に位置し、SK53、77 に切られている。平面形態は隅丸方形であったと思われ、長径 1.05 m、深さ 0.26 m を測る。土坑内からは、埋葬形態が左横臥屈葬と思われ、埋葬頭位が北西と思われる残存状態の比較的良好な人骨が出土し、この頭蓋骨脇から鉄製の火打金、チャート材の火打石が出土し、椎骨脇から銅銭 6 枚が出土している。

SK80 本群の東端に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径 0.8 m、短径 0.4 m、深さ 0.42 m を測る。土坑内から人骨は未出土ながら、銅銭 4 枚とともに土製皿が 3 枚出土している。

SK82 本群の中央やや南に位置し、SK81 を切っている。平面形態は隅丸方形を呈し、長径は 1.25 m、短径 0.95 m、深さ 1.3 m を測る。土坑内からは、残存状態の比較的良好な 1 体分の人骨が出土し、この寛骨と大腿骨が定位置にありながら、上腕骨が大腿骨と並んで出土したため、埋葬形態は少なくとも横たえられた状態とは考えにくく、前屈で座らされた状態であったと思われ、これとともにチャート材の火打石が出土している。

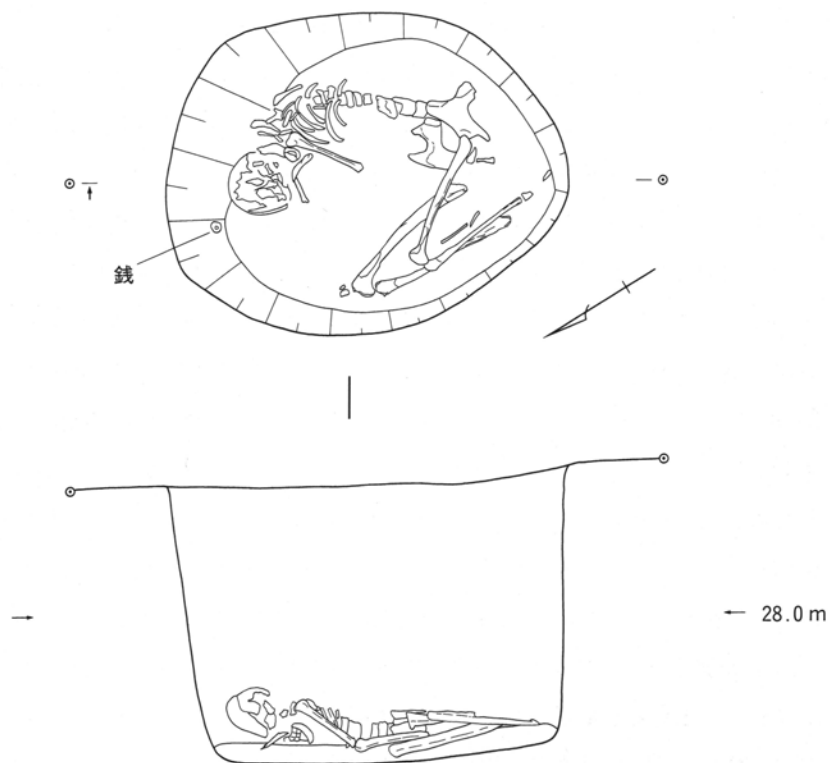
SK84 本群の中央やや南側に位置する。平面形態は隅丸方形で、長径 1.15 m、短径 0.8 m、深さ 0.8 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨が出土しており、これとともに火打金と思われる鉄片、チャート材の火打石、銅銭 7 枚が出土している。

SK85 本群の中央南側に位置する。平面形態は隅丸方形で、長径 1.15 m、短径 0.8 m、深さは 0.8 m を測る。土坑内からは、残存状態が比較的良好な人骨が 1 体分出土しており、頭蓋骨が倒立状態で出土していることなどから、埋葬形態は少なくとも横たえられた状態とは考えにくく、座らされた状態から、頭部が時間差で落下したときに倒立状態に至ったことが考えられる。鉄製の釘と、銅銭が 5 枚出土している。

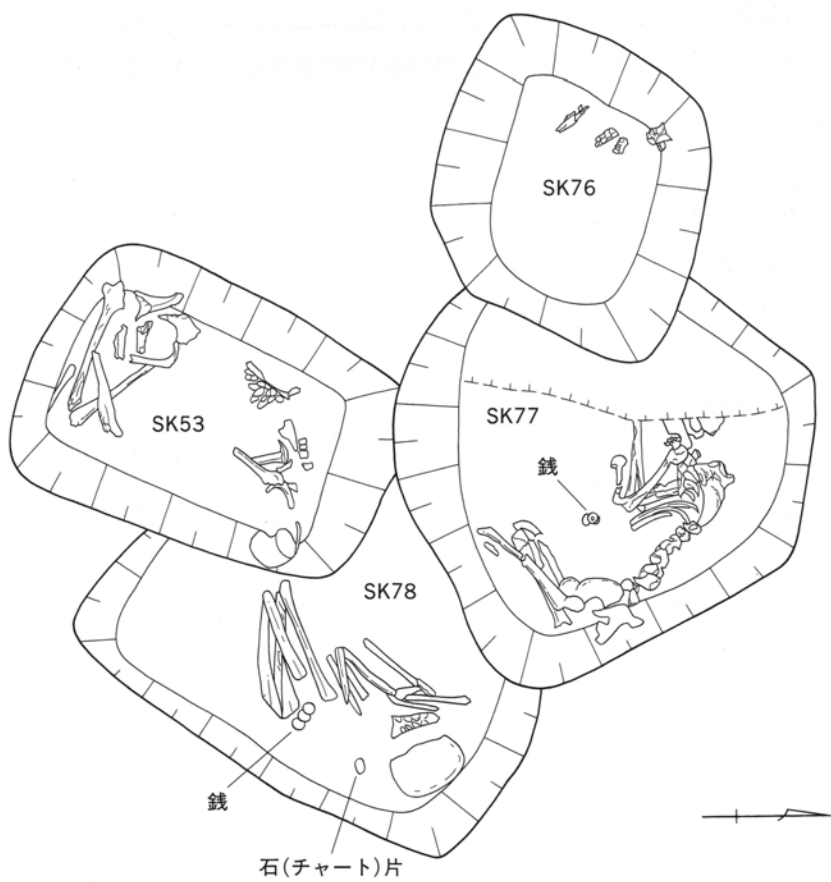
SK89 本群の中央南端に位置する。平面形態は不整形で、床面も安定しておらず、単一の土坑とは思えない落ち込みもみられるため、複数の土坑が重複している可能性も考えられるが、平、断面の観察からは掌握し得なかった。長径 3.45 m、深さ 1.23 m を測り、少なくとも、10 体分の人骨が出土する。残存状態の比較的良好な人骨のうち、図中の人骨 a・f は埋葬形態がどちらも右横臥屈葬で、埋葬頭位は a が南西、f が東と思われる。また、人骨 b は大腿骨が遠位端を上位にして出土していて、上位の肋骨から下位の肋骨までが重なって出土しているため、埋葬形態は横たえられていない可能性が考えられ、前屈で座らされた状態であったと思われる。鉄製の釘、銅製の飾り金具、銅製の煙管雁首・吸口、鉄製の火打金、チャート材の火打石、銅銭が出土している。

SK91 本群の南西端に位置し、SK90 を切っている。平面形態は不整長方形で、床面は単一土坑のものとは思えない落ち込みもみられるため、複数の土坑が重複している可能性も考えられるが、平・断面観察からは掌握し得なかった。長径 3.85 m、短径 1.05 m、深さ 1.08 m を測り、土坑内からは頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨が複数体分出土しており、そのうちの 1 体分は全て焼骨であった。これらとともに銅製の煙管吸口・雁首、銅銭 7 枚が出土している。

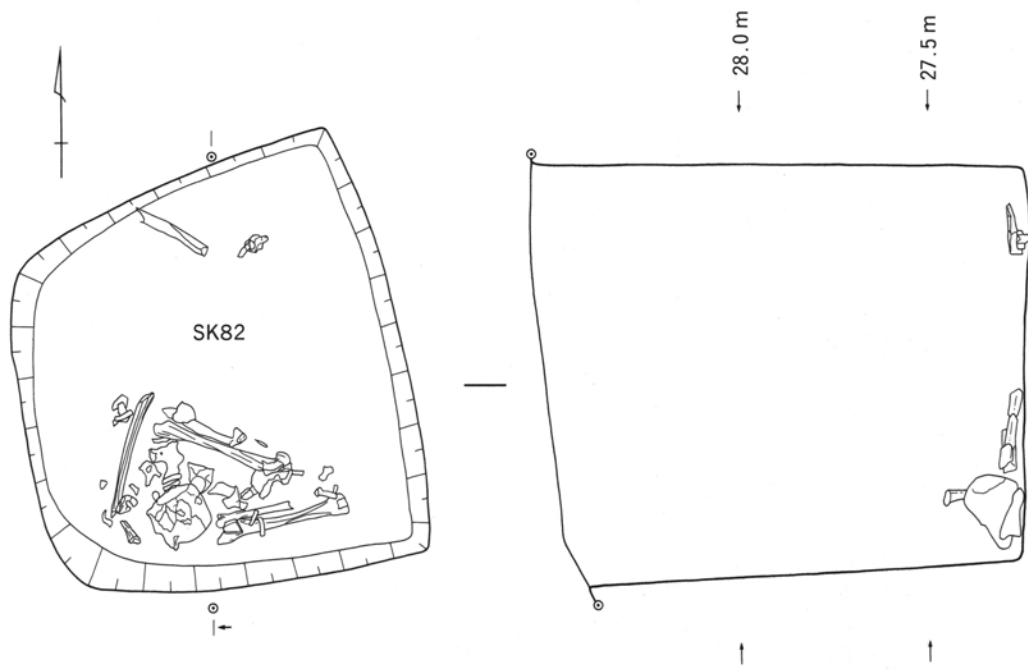
SK98 本群の西側土坑集中部の中に位置し、SK87・99 を切っている。平面形態は円形で、長径



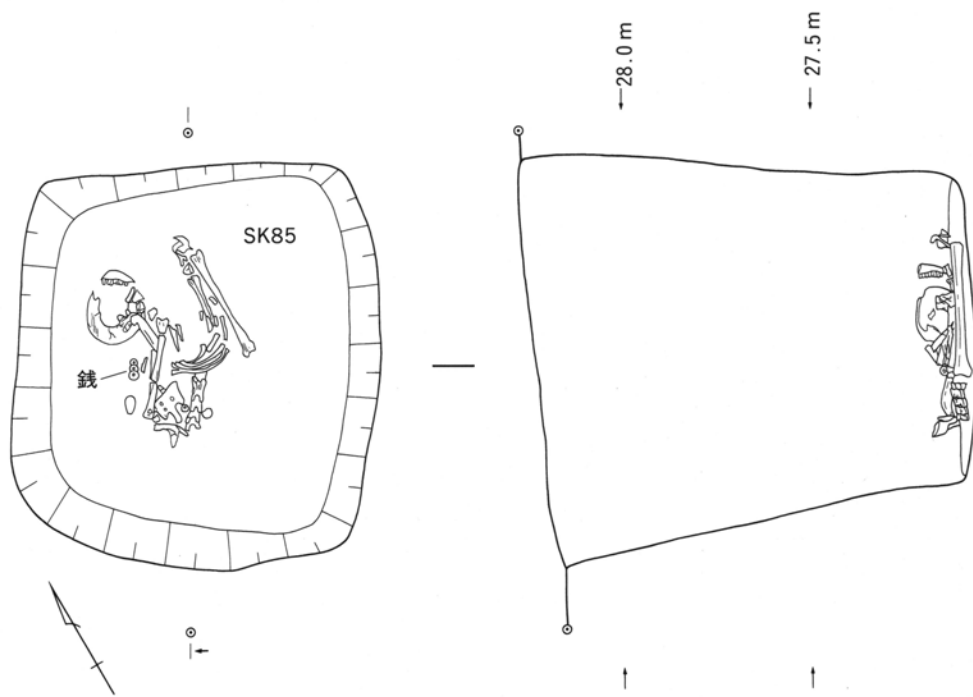
第10図 SK48 平・側面図(1/20)



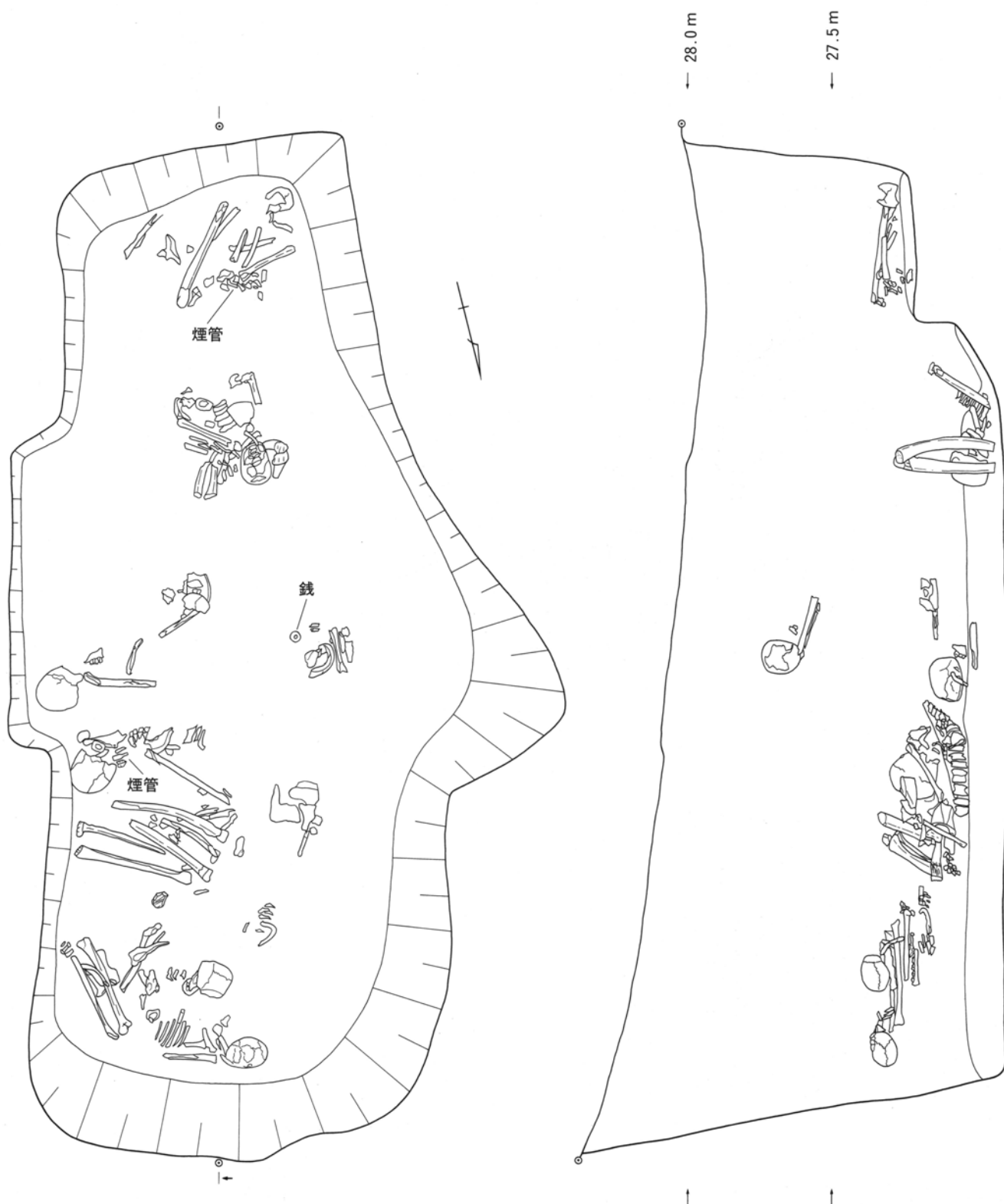
第11図 SK53・76・77・78 平面図(1/20)



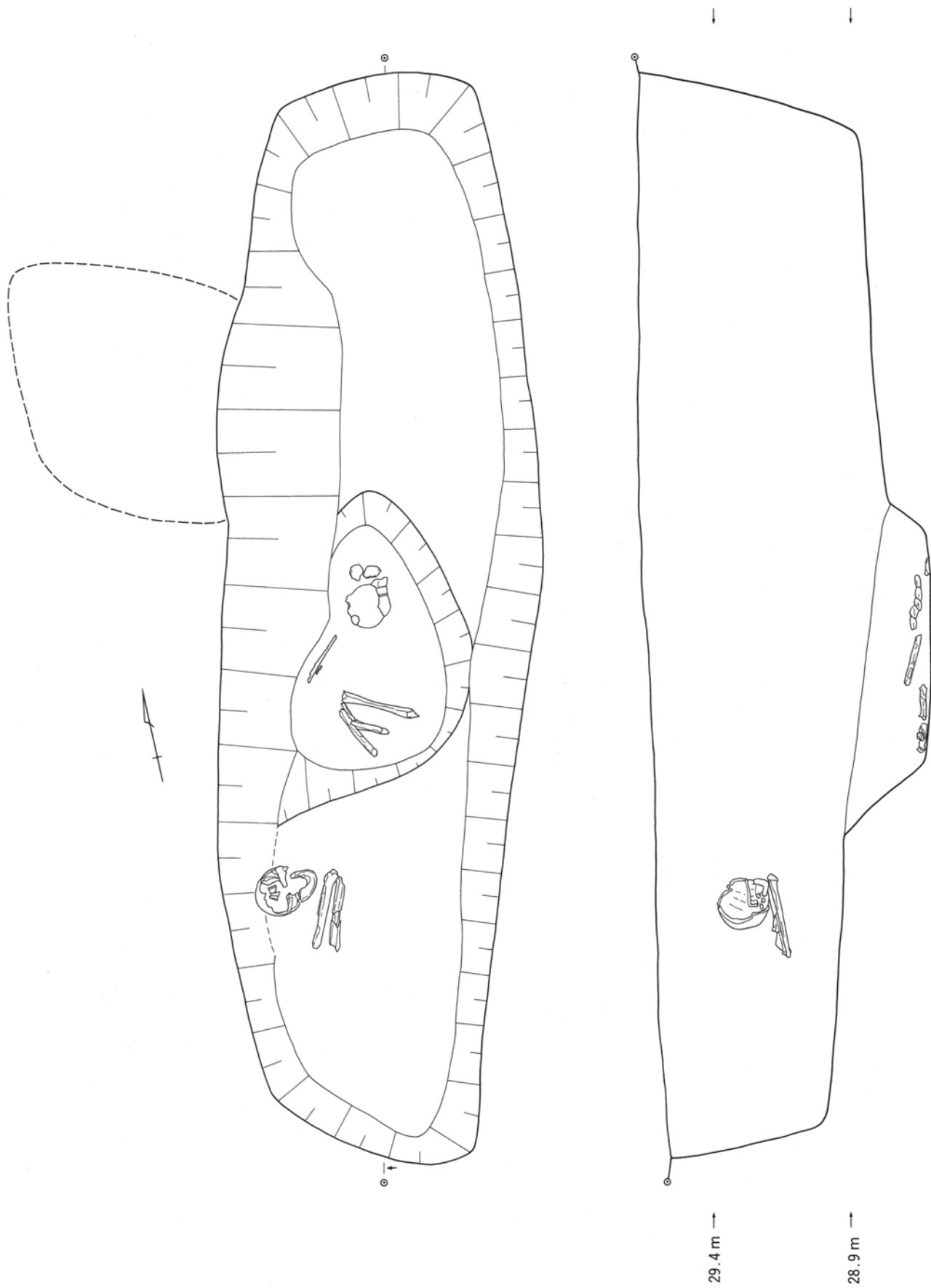
第 12 図 SK82 平・側面図(1/20)



第 13 図 SK85 平・側面図(1/20)



第 14 図 SK89 平・側面図(1/20)



第15図 SK91 平・側面図(1/20)

0.85 m、短径 0.8 m、深さ 0.61 m を測る。土坑内からは、椎骨と思われる人骨が出土しており、これとともに火打金と思われる鉄片や、銅銭が 3 枚出土している。

SK99 本群の西側土坑集中部の中に位置し、SK87・98・100～102 に切られている。平面形態は楕円形と思われ、長径 3.0 m、短径 2.05 m、深さ 0.42 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨が出土しており、これらとともに鉄製の釘、銅製煙管の雁首、銅銭が 13 枚出土している。

SK107 本群の中央北端に位置し、SK108 に切られている。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われ、長径 1.2 m、短径 0.95 m、深さ 0.86 m を測る。土坑内からは四肢骨と思われる人骨が出土しており、これとともに銅製の煙管吸口が出土している。

SK109 本群の中央北端に位置し、東側の SK108 を切っている。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 0.85 m、短径 0.8 m、深さ 0.88 m を測る。土坑内からは四肢骨と思われる人骨とともに、銅製の煙管吸口が出土している。

SK110 本群のほぼ中央に位置し、SK54 を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 0.75 m、短径 0.65 m、深さ 0.91 m を測る。土坑内からは、残存状態の比較的良好な人骨が 1 体分出土している。

第 4 項 下位土坑群

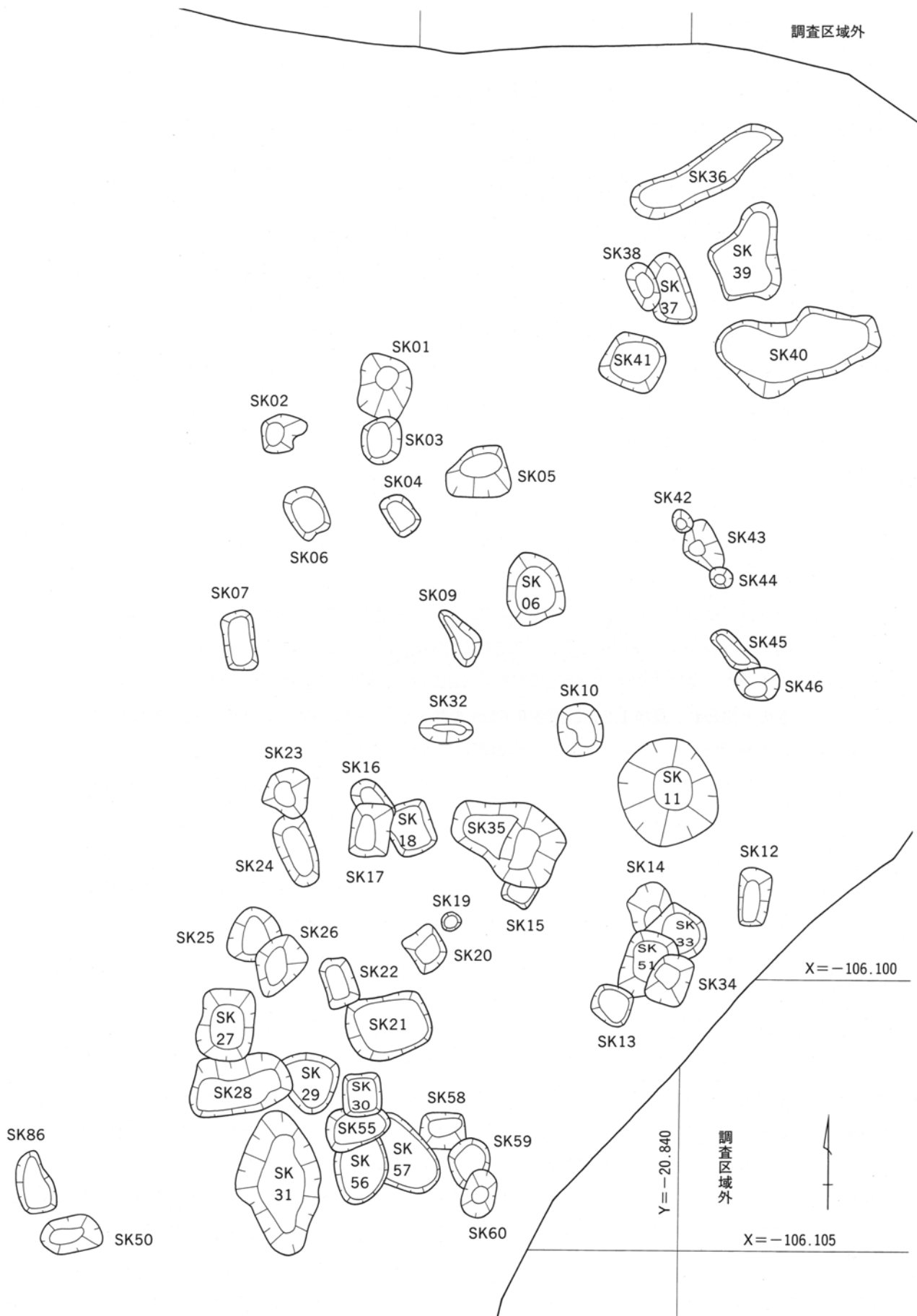
調査区東側、丘陵の舌状部先端に集中する。各土坑の掘り込み面は、標高 24.9～26.9 m である。この中で、標高 25.7 m の等高線部分では、傾斜が緩やかで遺構が検出されない空白部が帯状に認められる。本群の中での土坑の集中部は、このわずかな空白部をはさんで南北に分けられようが、上・中位土坑群に比べると極端な集中箇所はほとんどみられず、散在した様相を呈する。また、標高 27.0 m の等高線付近には、傾斜は緩やかではないが遺構の空白部分が帯状に認められると考え、この部分の中・下位の境界とした。これら帯状の空白部は、墓道の可能性を考えた。

各土坑の平面形態は、上・中位土坑群と同じく不整長方形が多く、規模も似通っており長径 1 m 前後のものが多。深さは、極端に浅いものを除けば検出面から 0.31～1.39 m で、上・中位土坑群と同様に統一性は窺えなかった。このうちでは、SK12、35 からは人骨が出土しており、SK07、09、29～31、33、55、58、86 からは、人骨とともに副葬品と思われる遺物も出土している。また、銅銭のみ出土している土坑も 9 基みられた。本群の土坑数は、55 基である。

SK01 本群の中で想定した墓道に南面し、SK03 に切られている。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われ、長径 1.1 m、短径 0.95 m、深さ 0.97 m を測る。土坑内からは、土製皿が 2 枚出土している。

SK07 本群の西側に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 1.05 m、短径 0.55 m、深さは 0.55 m を測る。土坑内からは頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨とともに、銅銭 3 枚が出土している。

SK12 本群の中央東端に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 1.05 m、短径 0.55 m、深



第 16 図 下位土坑群位置図(1/100)

さ 0.15 m を測る。土坑内からは、椎骨と思われる人骨が出土している。

SK29 本群の南側に位置し、SK28 に切られている。平面形態は不整形で、長径 1.15 m、深さ 0.46 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨の他、頭蓋骨脇から鉄製の火打金、チャート材の火打ち石が出土している。

SK30 本群の南側に位置し、SK55 を切っている。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 0.8 m、短径 0.7 m、深さ 0.44 m を測る。残存状態の比較的良好な 1 体分の人骨が出土し、副葬品と思われる銅製の煙管吸口やガラス製の髪飾りがともに出土する。人骨の埋葬形態は右横臥屈葬と思われ、埋葬頭位は北西と思われる。

SK31 本群の南端に位置する。平面形態は不整形で、長径 2.65 m、短径 1.6 m、深さ 1.18 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨とともに、鉄製の釘や火打金、チャート材の火打石、銅銭 6 枚が出土している。

SK33 本群の南東側に位置し、SK14 を切り、SK34、51 に切られている。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われ、深さ 0.21 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨とともに、鉄製の火打金、チャート材の火打石、銅銭 5 枚、銅製の飾金具、煙管吸口・雁首が出土している。

SK35 本群のほぼ中央に位置し、SK15 を切っている。平面形態は不整形で、長径 2.05 m、短径 1.45 m、深さ 0.81 m を測る。土坑内からは、四肢骨と思われる人骨が出土している。

SK55 本群の南側に位置し、SK30 に切られ、SK56 を切っている。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、長径 1.2 m、深さ 0.62 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨が出土し、これとともに銅製の煙管雁首が出土している。

SK58 本群の南側に位置し、SK59 に切られている。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 0.8 m、短径 0.65 m、深さ 0.39 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨とともに、鉄片が出土している。

SK86 本群の西端に位置する。平面形態は不整形で、長径 1.15 m、短径 0.65 m、深さ 0.49 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨、椎骨と思われる人骨とともに、鉄製の火打金、銅銭 6 枚が出土している。

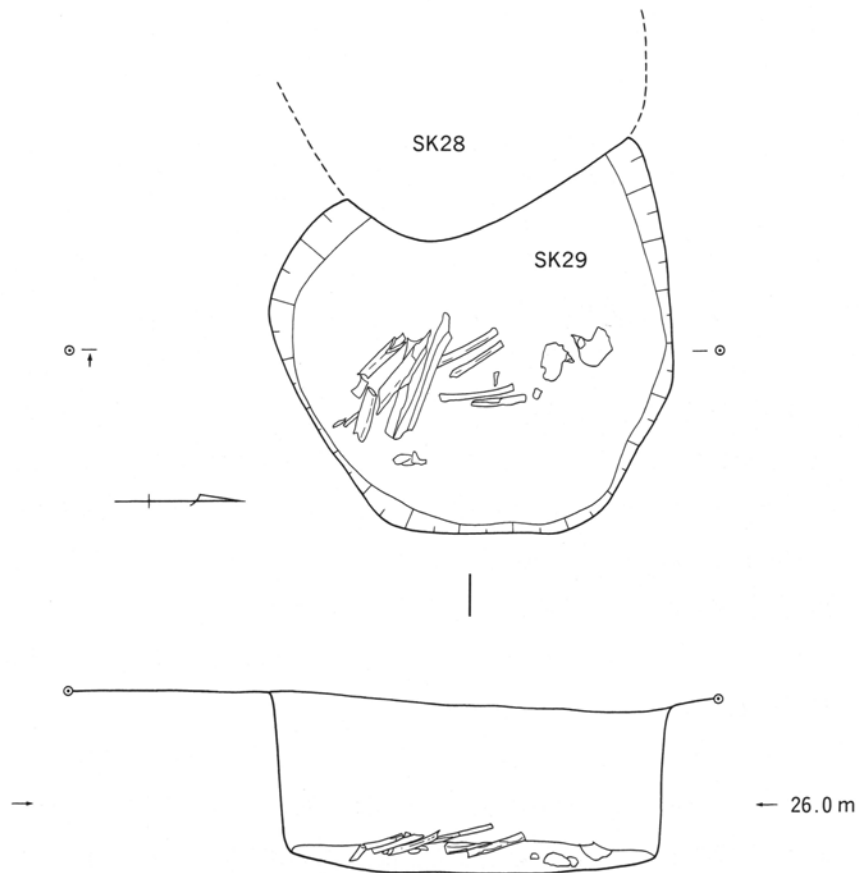
第 5 項 溝

調査区北西側に 3 条が集中する。いずれも傾斜に沿う方向で低みに向かっていて、それぞれのびる角度は若干異なり、このため調査区北端で SD02 と 03 が交差する。

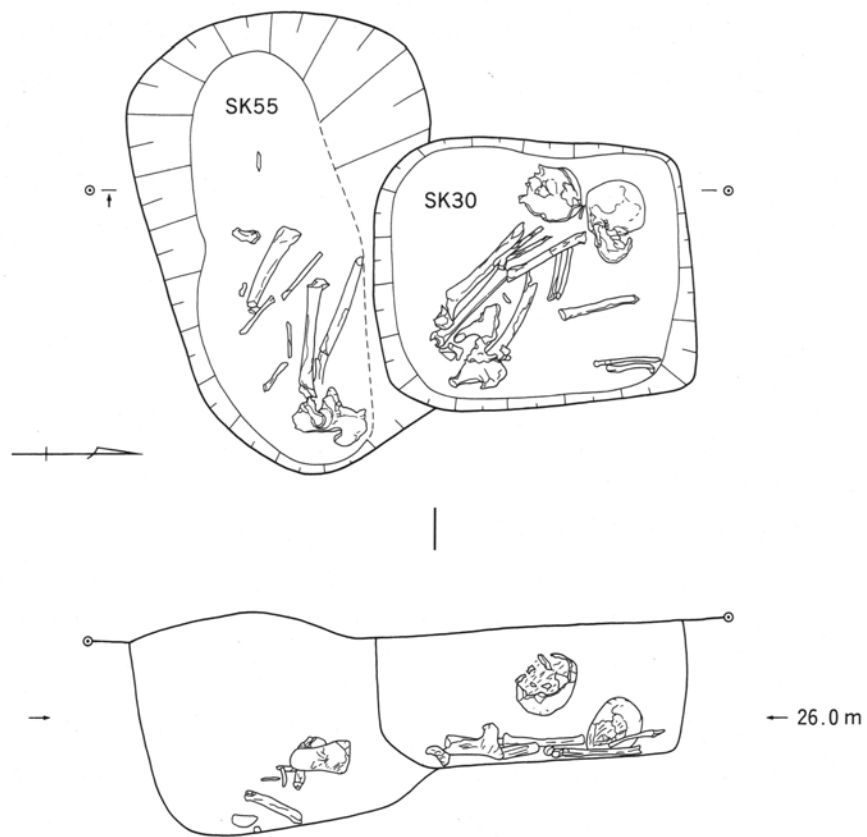
SD01 調査区北西に位置し、規模は概ね幅 0.5 m、深さ 0.25 m である。調査区内の最上位付近から、東にやや振りながら北方向にのびる。無遺物で、時期を判じ得ない。

SD02 調査区北西側に位置し、下位で SD03 に切られている。規模は、長さ 29.5 m、幅 0.5 m、深さ 0.15 m を測り、主軸の方位は N-55°-E を測る。無遺物で、時期を判じ得ない。3 条の溝の中では、最も直線的である。

SD03 調査区北西側に位置し、下位で SD02 を蛇行して切っている。規模は幅 0.4~0.9 m、深さ 0.2 m を測る。無遺物で、時期を判じ得ない。



第 17 図 SK29 平・側面図(1/20)



第 18 図 SK30・55 平・側面図(1/20)

第三章 遺物

第1節 土器・陶磁器

本遺跡から出土した遺物のうち、陶磁器、土器などは、同じく出土の金属製品に対して比較的少量で、このうちでも遺構内から出土したものはさらに少なかった。遺構内の人骨周辺から出土した陶磁器等は、本遺跡の古墓としての性格から類推すると、副葬品の可能性が考えられる。しかし、本遺跡ではこうした例はほとんどみられず、生前に使用した陶磁器を副葬するような習慣は、この調査地では窺い得ない。

図版に掲載した出土遺物の内、1～3、6～8が遺構内出土遺物で、それ以外のものは遺構外の検出遺物である。

1～3・7・8は土器皿である。1～3はSK80出土で、全てロクロ成形である。これら皿の遺存度はいずれも比較的良好であったが、残存する口縁部にはタール等の付着はみられず、灯明皿としての使用は成されていないようである。7・8はSK01出土で、いずれも1～3とは異なり、手捏ね成形された後、非常に丁寧に布引きと思われるナデ整形が施されて、薄手に仕上げられている。6はSK64出土の陶器底部で、外側底部を除いて内・外面ともに鉄釉が施されており、17c末～18c初頭の片口鉢であった可能性が考えられる。

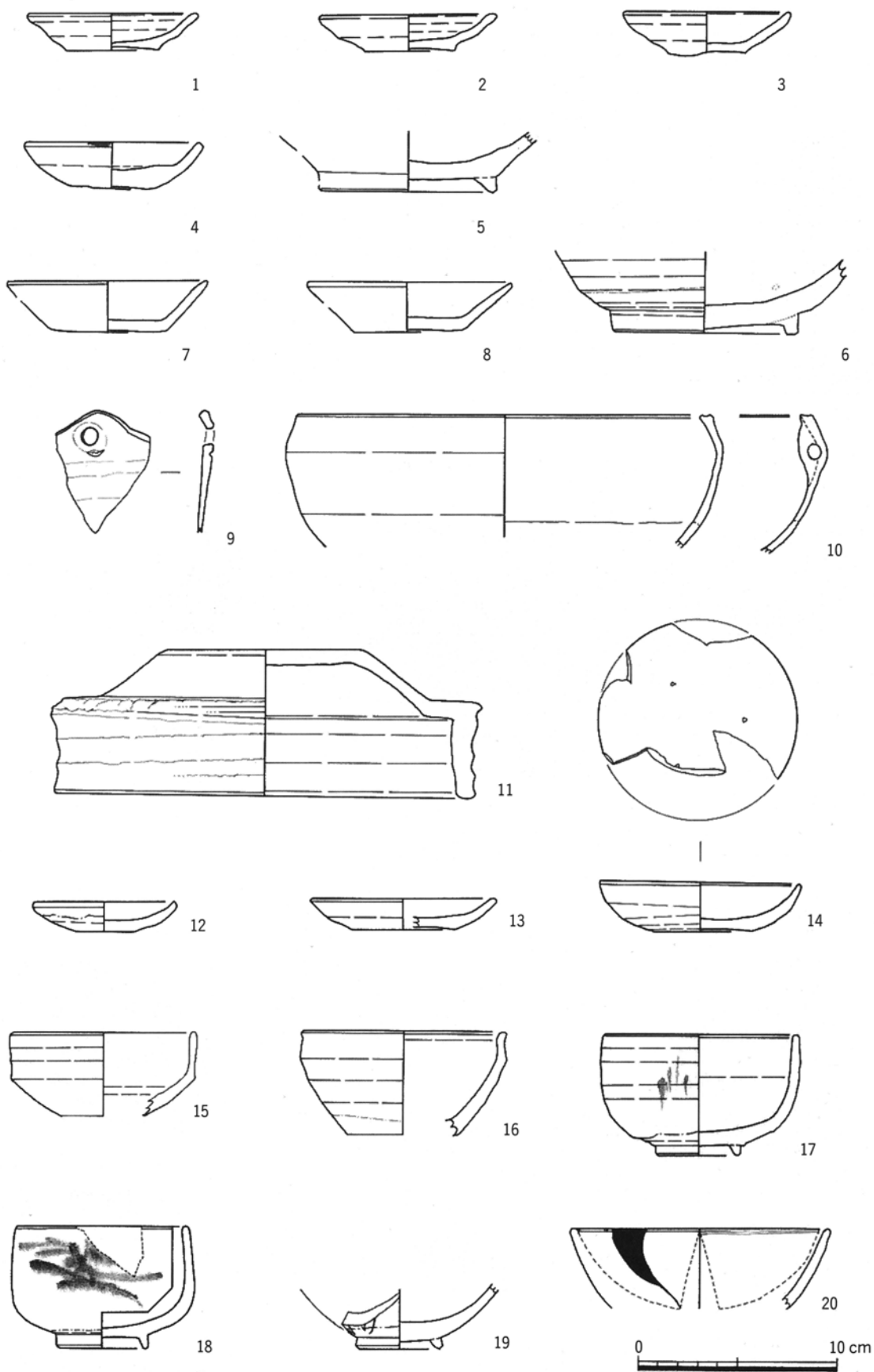
4・5は中世灰釉系陶器の内、いわゆる山皿・山茶碗である。4の口縁部にはタールが付着しており、体部に比べてかなり厚く無高台の底部であることから、12c後葉～13c前葉のものと思われるが、灯明皿として再利用された可能性が考えられる。5は、高台がしっかりとした高さを持ち、丁寧に整形されており、靱痕などもみられないことから、12c前葉の山茶碗と思われる。

9・10は土器鍋で、9は吊り手取り付け用と思われる穿孔が、口縁部の一部を山形にした部分に施されており、10は内耳を有する。

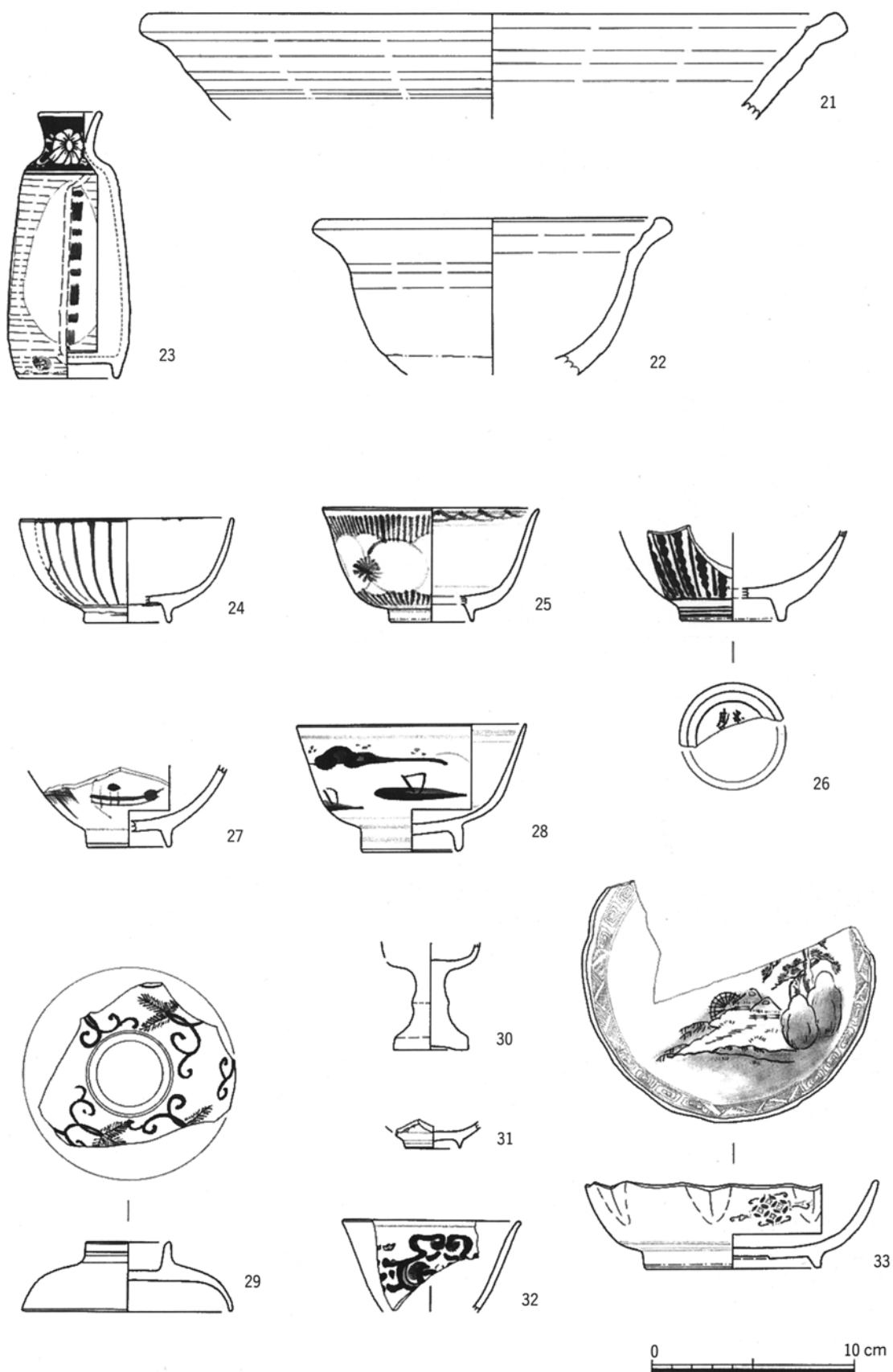
11は窯道具であるサヤ鉢で、いわゆる「えんごろ」と呼ばれるものであるが、調査区及びその周辺に窯跡は確認されておらず、転用された可能性も考えられる。

12～23は陶器で、12～14は皿である。12は19cに至って、灯明皿専用に灰釉を施して焼かれたものと思われ、13は釉調などから志野皿の系譜に連なるものと思われるが、盛時のものに比べると小型化した18c前葉のもので、14は錆釉が施された18c後葉の美濃産と思われる。12・13の口縁部にはススが付着しており、13は灯明皿としての転用が窺える。

15～20は陶器碗である。15は体部中程に稜線が入るいわゆる「せんじ」と呼ばれるもので、18c後半の美濃産と思われる。16は17c後半の「天目茶碗」、17は18c中葉の瀬戸産の「御室茶碗」である。18は呉須で絵付けされた灰釉の碗で、18c後半の瀬戸産と思われる。19は残存部にわずかに鉄絵が見られる灰釉碗で、18c後葉の美濃産と思われる。20



第 19 図 遺物実測図①



第20図 遺物実測図②

は幕末期美濃産の陶胎染付で、外側には捻梅文が施されている。

21 は擂鉢で、口縁部内側に隆起が巡ることから 17c 前半のものと思われる。22 は灰釉が施された鉢で、19c の瀬戸産と思われる。23 は陶器の徳利で、外側口縁部脇から肩部にかけて呉須で絵付けされており、体部には鉄絵で施文が成されており、外側高台脇には、楕円形の枠に「犬山」の文字が陰刻されている。

24～33 は磁器で、24～29、32・33 は瀬戸・美濃産である。24～28 は、椀で、29 は椀に伴う蓋と思われ、32 は小椀である。33 は波状口縁の皿で、内・外側には、銅版刷りで絵付けが施されている。これら椀・蓋・小椀・皿ともに呉須による染付で、いずれも幕末から明治期のものと思われる。

30・31 は肥前系の磁器で、30 は仏飯器、31 は猪口と思われる。いずれも 19c の製品と思われる。

遺物 番号	出土位置(グリッド)	材質	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	備 考	登録番号
1	SK80	土器	皿	1.8	8.3	4.6		E-1
2	SK80	土器	皿	1.9	8.6	4.4		E-2
3	SK80	土器	皿	2.1	8.2	3.9		E-3
4	検出(I B20i)	陶器	皿	2.3	8.5	4.6	番号取り上げ・口縁部にタール付着	E-4
5	検出(I B19g)	陶器	椀			(8.6)	番号取り上げ	E-5
6	SK64	陶器	甕?			8.9	17C～18C 初, 片口?	E-6
7	SK01	土器	皿	2.5	(9.9)	5.8		E-7
8	SK01	土器	皿	2.4	(10.1)	5.4		E-8
9	検出(I B20i)	土器	鍋					E-9
10	検出(II B1k)	土器	鍋		20.7			E-10
11	検出(I B20i)	土器	窯道具	7.3	19.4	9.5	番号取り上げ・明治?	E-11
12	検出(I B20j)	陶器	皿	1.5	6.9	3.0	番号取り上げ・灯明皿, 19C 前	E-12
13	検出(I B20j)	陶器	皿	1.6	(9.0)	(5.2)	番号取り上げ・灯明皿, 18C 前	E-13
14	検出(II B1j)	陶器	皿	2.4	10.0	4.8	18C 後半, 美濃	E-14
15	検出(II B1k)	陶器	椀		(9.0)		18C 中～(後), 美濃	E-15
16	検出(II B1h)	陶器	椀		(10.0)		17C 中～(後)	E-16
17	検出(I B20j)	陶器	椀	6.1	9.5	4.2	番号取り上げ・18C 中, 瀬戸	E-17
18	検出(II B1i)	陶器	椀	5.1	8.5	4.2	18C 後, 瀬戸	E-18
19	検出(II B1j)	陶器	椀			4.0	18C 後, 美濃	E-19
20	検出(II B1g)	陶器	椀		13.0		19C 中 (第二四半期), 美濃	E-20
21	検出(II B1j)	陶器	擂鉢		34.1		17C 前	E-21
22	検出(I B20f)	陶器	鉢		16.9		19C (明治), 瀬戸	E-22
23	検出(I B18h)	陶器	徳利	13.1	3.0	4.9	明治? 小牧? 「犬山」の刻印	E-23
24	トレンチ(I B20h)	磁器	椀	5.1	10.4	4.0	明治	E-24
25	検出(II B1j)	磁器	椀	(5.6)	(10.6)	(4.0)	19C 中, 美濃	E-25
26	検出(I B19h)	磁器	椀			(5.0)	明治	E-26
27	検出(II B1i)	磁器	椀			(4.1)	明治	E-27
28	検出(II B1j)	磁器	椀	6.2	10.2	5.0	19C 中	E-28
29	検出(II B2i)	磁器	椀蓋	3.4	10.2		明治?	E-29
30	検出(II B2j)	磁器	仏飯具			3.2		E-30
31	検出(II B2f)	磁器	椀			2.7		E-31
32	検出(II B1j)	磁器	椀		8.7		19C 中	E-32
33	検出(II B1h)	磁器	鉢	4.1	14.2	8.7	明治, 銅版	E-33

* () 内数値は推定

第 2 表 土器・陶磁器観察表

第2節 金属製品・その他

本遺跡から出土した遺物のうち、金属製品などは、陶磁器、土器などが少量であったのに対して、一定量の出土を得た。今回の調査では、遺跡の性格が近世～近代の墓域であったことから、金属製品のうち60%以上が銭貨で占められていた。金属製品の総出土点数は249点で、材質は銅、鉄である。

34～104は銭貨で、すべて銅貨である。銭貨の総出土点数は162点で、これらの出土状況は、遺構内から出土しているものが大半を占め、六道銭として用いられたことが窺える。このうち海外渡来銭と思われるものは3種出土しており、94が元祐通宝、95が元豊通宝、96が紹聖元宝と思われる。58～61は文久永宝で、渡来銭と文久永宝以外の銭貨はすべて寛永通宝である。寛永通宝のうち、34・36～38・51・63・65・67・73～75・80・101が古寛永、それ以外のものが新寛永である。

105～120・126～129は、銅製品である。105～120は煙管の雁首、吸口で、竹製のラウが一部残存するものも見られる。雁首はいずれも脂返しが大きく湾曲せず、首部全体も短めで、肩を有するものは見られないが、113・120には小さめの火皿の根本が急激に広がった部分に、稜線が見られる。吸口も肩を有するものは見られないが、105・111・114には急激に径がしぼられる部分に稜線が見られ、114には草花文と思われる装飾が施されている。

121～125は、鉄製の釘である。調査区全体では37点出土しているが、いずれも遺構内から出土しており、棺の仕立て用材として使用された可能性が考えられる。

126～129は、銅製の金具である。127・129には装飾が施されており、木製品の仕立て用材として使用された可能性が考えられる。

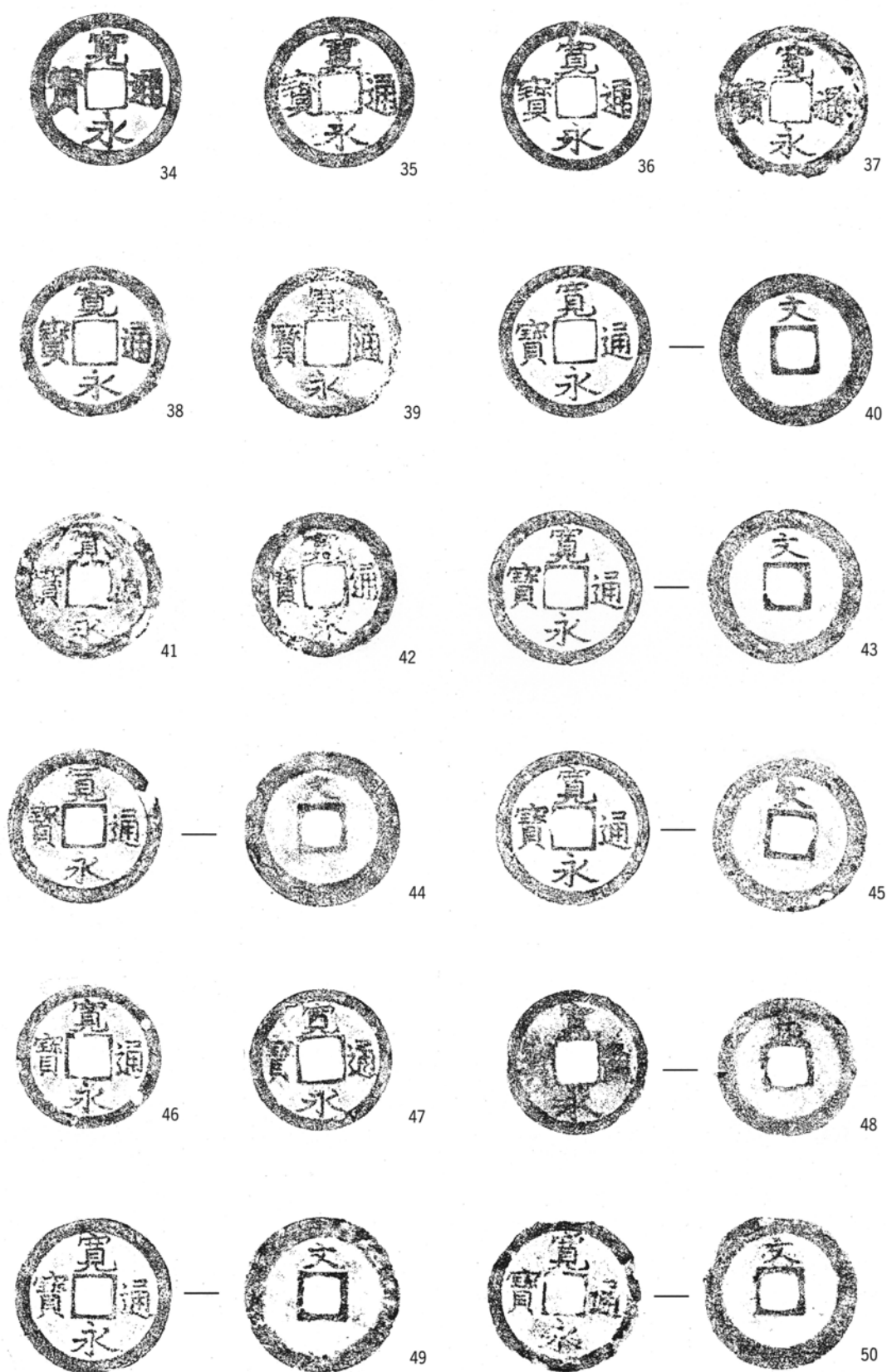
130～144は、鉄製の火打金である。原形を留めているものは少ないが、いずれも片側に突起部を持つ形態と思われ、遺構内から出土しており、副葬品の可能性が考えられる。

145は、ガラス製のかんざしである。遺構内から出土しており、副葬品の可能性が考えられる。

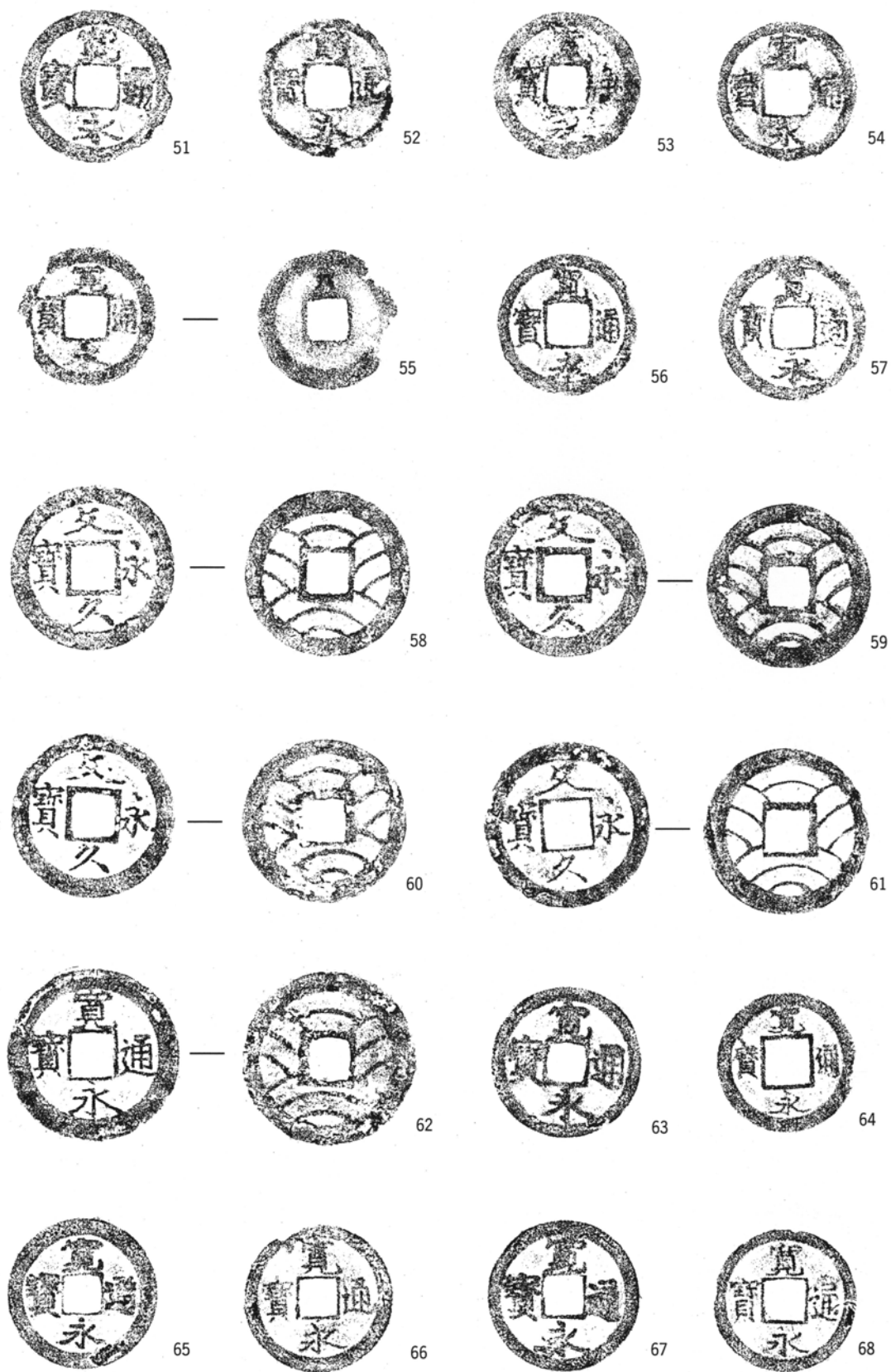
146～154は火打石と思われる石片で、材質はいずれもチャートである。これらのチャート片は火打金と同様に遺構内から出土しているが、調査区周辺は遺構掘削に伴い自然にチャート片の入り込む環境とは考えにくい。したがってこれらチャート片は、火打石として火打金とセットで副葬された可能性が考えられる。形態はいずれも不整形で、凹凸が表面に認められるものや、火打金との打ち合わせによって生じたと思われる剝離痕が、縁辺部に認められるものもみられる。

参考文献

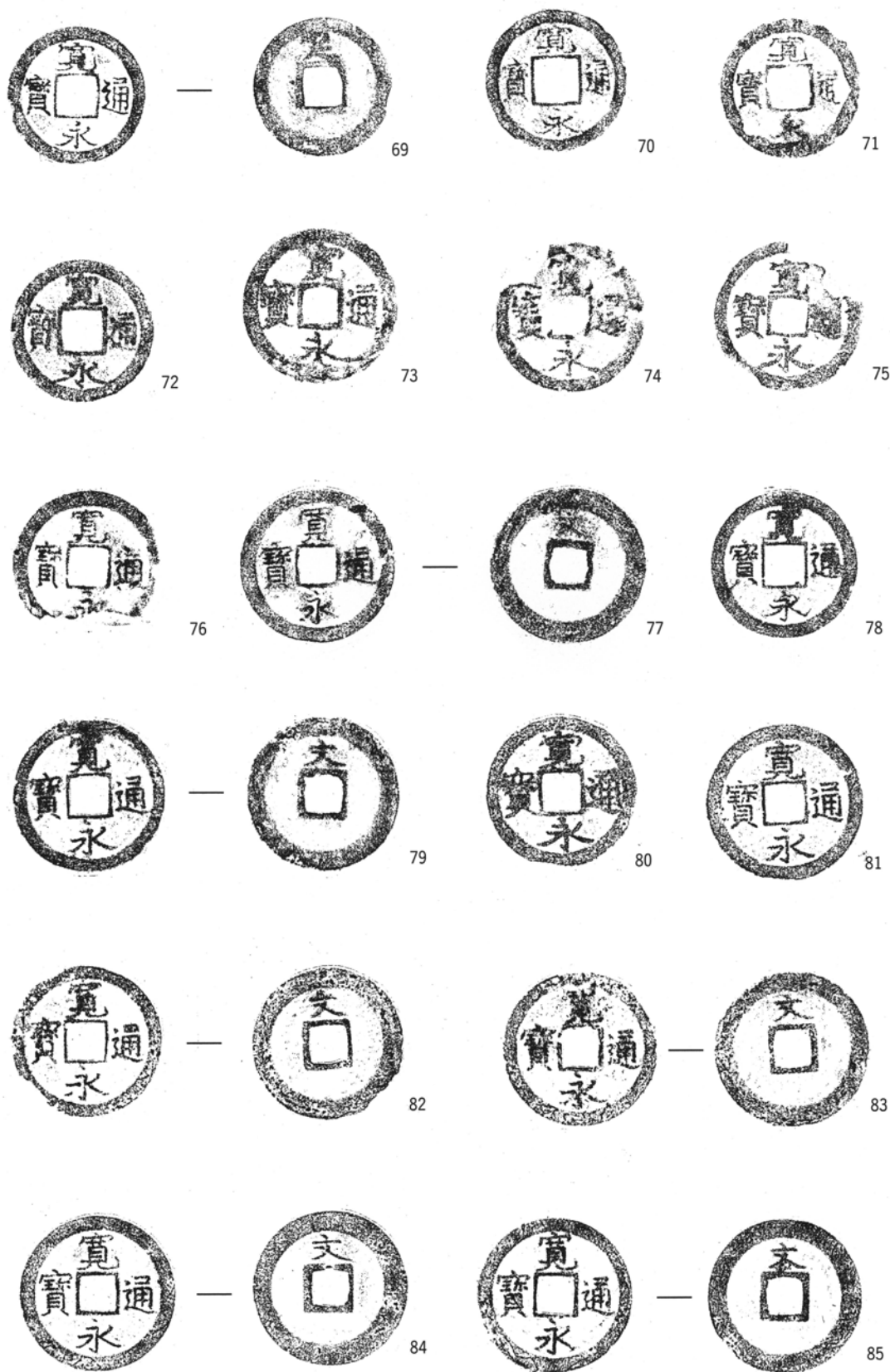
古橋佳子 1995 『名古屋城三の丸遺跡(V)』—金属製品— (財愛知県埋蔵文化財センター



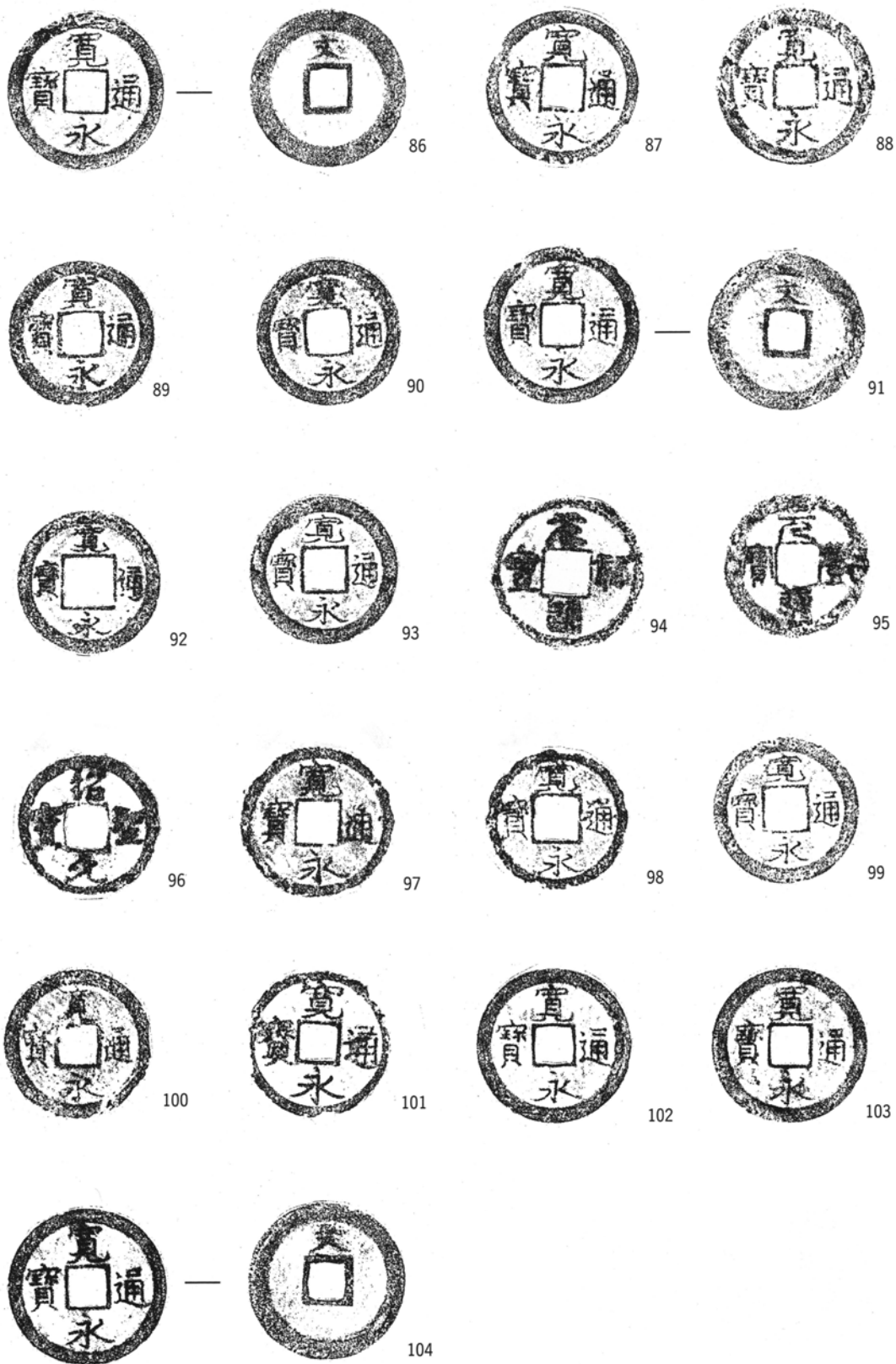
第 21 図 錢貨拓影①(原寸)



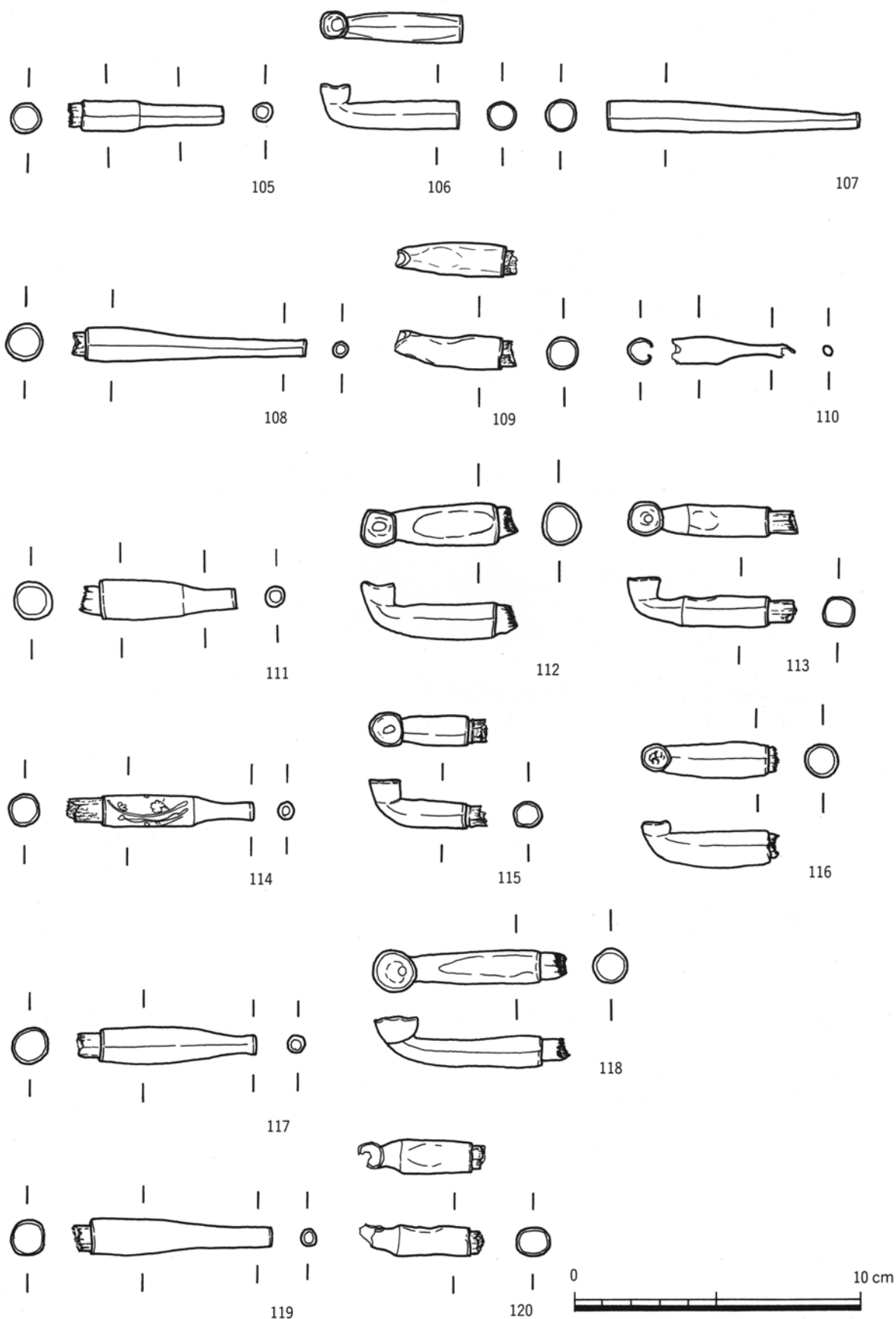
第 22 図 錢貨拓影②(原寸)



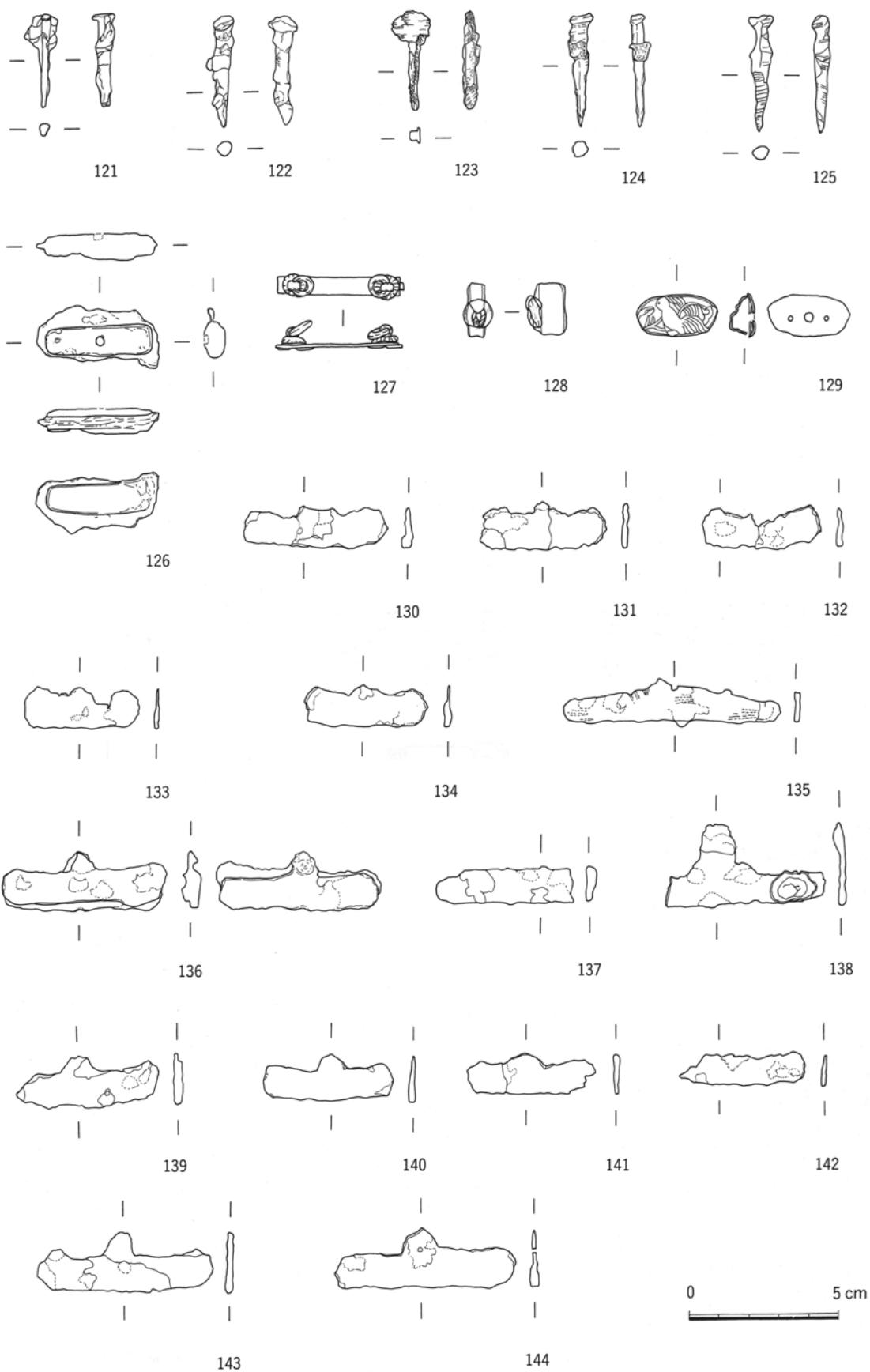
第 23 圖 錢貨拓影③(原寸)



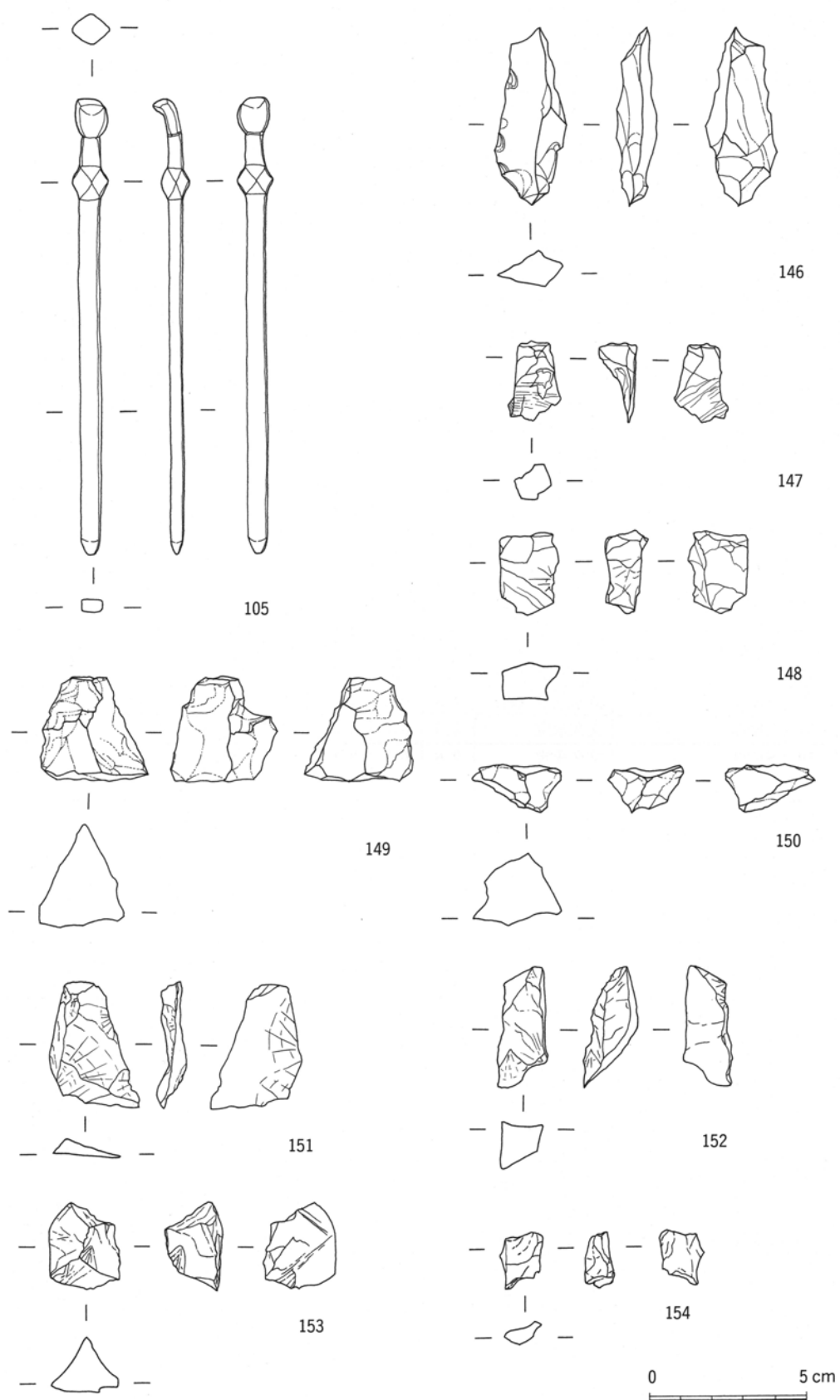
第 24 図 錢貨拓影④(原寸)



第 25 図 遺物実測図③



第 26 图 遺物実測図④



第 27 图 遺物実測図⑤

遺物 番号	遺 構	種 類	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備 考	登録番号
34	SK04	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	2.9		M-34
35	SK05	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	2.4		M-35
36	SK05	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	3.1		M-36
37	SK05	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	2.8		M-37
38	SK07	寛永通宝 (古)	2.4	0.7	2.7		M-38
39	SK07	寛永通宝 (新)	2.4	0.7	3.3		M-39
40	SK07	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	2.9	背郭上に「文」	M-40
41	SK11	寛永通宝 (新)	2.3	0.7	2.7		M-41
42	SK11	寛永通宝 (新)	2.3	0.6	2.6		M-42
43	SK21	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	3.2	背郭上に「文」	M-43
44	SK21	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	3.7	背郭上に「文」	M-44
45	SK21	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	2.9	背郭上に「文」	M-45
46	SK21	寛永通宝 (新)	2.3	0.7	2.2		M-46
47	SK22	寛永通宝 (新)	2.3	0.7	2.6		M-47
48	SK22	寛永通宝 (古)	2.3	0.7	2.1	背郭上に「元」	M-48
49	SK27	寛永通宝 (新)	2.5	0.6	2.8	背郭上に「文」	M-49
50	SK27	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	3.4	背郭上に「文」	M-50
51	SK27	寛永通宝 (古)	2.4	0.7	2.9		M-51
52	SK28	寛永通宝 (新)	2.2	0.7	2.4		M-52
53	SK31	寛永通宝 (新)	2.3	0.6	2.6		M-53
54	SK31	寛永通宝 (新)	2.2	0.7	2.5		M-54
55	SK31	寛永通宝 (新)	2.2	0.7	1.3	背郭上に「元」	M-55
56	SK31	寛永通宝 (新)	2.2	0.7	2.6		M-56
57	SK31	寛永通宝 (新)	2.3	0.6	3.3		M-57
58	SK33	文久永宝	2.6	0.7	3.0	背に11筋の青海波文	M-58
59	SK33	文久永宝	2.6	0.7	3.1	背に11筋の青海波文	M-59
60	SK33	文久永宝	2.6	0.7	3.2	背に11筋の青海波文	M-60
61	SK33	文久永宝	2.6	0.7	3.8	背に11筋の青海波文	M-61
62	SK33	寛永通宝 (新)	2.6	0.7	4.4	背に11筋の青海波文	M-62
63	SK48	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	3.7		M-63
64	SK48	寛永通宝 (新)	2.2	0.7	2.4		M-64
65	SK48	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	3.5		M-65
66	SK48	寛永通宝 (新)	2.3	0.6	2.8		M-66
67	SK48	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	3.2		M-67
68	SK68	寛永通宝 (新)	2.3	0.7	2.6		M-68
69	SK68	寛永通宝 (新)	2.2	0.7	1.7	背郭上に「足」	M-69
70	SK68	寛永通宝 (新)	2.2	0.7	2.5		M-70
71	SK78	寛永通宝 (新)	2.2	0.7	3.3		M-71
72	SK78	寛永通宝 (新)	2.2	0.6	2.6		M-72
73	SK78	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	4.0		M-73
74	SK80	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	2.3	3個接合	M-74
75	SK80	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	1.8		M-75
76	SK80	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	2.4		M-76
77	SK82	寛永通宝 (新)	2.5	0.6	2.7	背郭上に「文」	M-77
78	SK85	寛永通宝 (新)	2.3	0.7	2.4		M-78
79	SK89	寛永通宝 (新)	2.4	0.7	2.5	背郭上に「文」	M-79
80	SK89	寛永通宝 (古)	2.4	0.6	3.2		M-80
81	SK89	寛永通宝 (新)	2.5	0.7	3.1		M-81

第3表 銭貨観察表①

遺物 番号	遺 構	種 類	径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備 考	登録番号
82	SK92	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	2.8	背郭上に「文」	M-82
83	SK99	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	2.9	背郭上に「文」	M-83
84	SK99	寛永通宝 (新)	2.5	0.6	3.0	背郭上に「文」	M-84
85	SK99	寛永通宝 (新)	2.5	0.6	3.8	背郭上に「文」	M-85
86	SK99	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	2.8	背郭上に「文」	M-86
87	SK99	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	3.6		M-87
88	SK99	寛永通宝 (新)	2.5	0.6	3.1		M-88
89	SK99	寛永通宝 (新)	2.3	0.6	2.7		M-89
90	SK99	寛永通宝 (新)	2.2	0.7	2.2		M-90
91	SK99	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	2.8	背郭上に「文」	M-91
92	SK99	寛永通宝 (新)	2.2	0.8	2.1		M-92
93	SK99	寛永通宝 (新)	2.3	0.7	2.5		M-93
94	検出(I B18m)	元祐通宝	2.3	0.7	3.2		M-94
95	検出(I B18m)	元豊通宝	2.3	0.7	2.9		M-95
96	検出(I B18m)	紹聖元宝	2.2	0.7	2.5		M-96
97	検出(I B18m)	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	2.4		M-97
98	検出(I B18r)	寛永通宝 (新)	2.2	0.8	2.5		M-98
99	検出(I B18i)	寛永通宝 (新)	2.3	0.7	2.7		M-99
100	検出(II B1k)	寛永通宝 (新)	2.3	0.6	2.4		M-100
101	検出(II B1j)	寛永通宝 (古)	2.2	0.6	2.7		M-101
102	トレンチ(I B19k)	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	3.9		M-102
103	トレンチ(I B19k)	寛永通宝 (新)	2.4	0.6	3.4		M-103
104	トレンチ(I B19k)	寛永通宝 (新)	2.5	0.6	3.5	背郭上に「文」	M-104

第4表 銭貨観察表②

遺物 番号	遺 構	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	吸口 径	吸口 幹径	高さ	火皿 径	幹径	材質	重さ (g)	登録番号
105	SK30	煙管吸口	4.9			0.5	1.0				銅	10.1	M-105
106	SK33	煙管雁首	4.8					1.6	0.9	0.9	銅	9.3	M-106
107	SK33	煙管吸口	8.7			0.5	1.0				銅	15.0	M-107
108	SK49	煙管吸口	7.6			0.6	1.0				銅	15.0	M-108
109	SK55	煙管雁首	(3.8)					1.3	-	1.1	銅	6.6	M-109
110	SK64	煙管吸口	(4.3)						-	-	銅	2.3	M-110
111	SK89F	煙管吸口	4.6			0.7	1.3				銅	11.2	M-111
112	SK89F の下2	煙管雁首	4.7					2.0	1.1	1.3	銅	12.0	M-112
113	SK89A の20	煙管雁首	1.6					1.6	1.2	1.0	銅	10.7	M-113
114	SK89A の20	煙管吸口	5.3			0.6	1.0				銅	10.6	M-114
115	SK89 南	煙管雁首	4.2					1.6	1.1	0.9	銅	7.3	M-115
116	SK91 南	煙管雁首	4.4					1.6	1.0	1.0	銅	11.4	M-116
117	SK91 南	煙管吸口	5.3	0.7		1.1					銅	12.7	M-117
118	SK99	煙管雁首	5.8					1.8	1.5	1.1	銅	12.5	M-118
119	SK107	煙管吸口	6.4			0.7	1.2				銅	6.6	M-119
120	SK109	煙管雁首	(3.9)					(1.1)	-	1.1	銅	6.6	M-120

第5表 金属・ガラス製品観察表①

遺物 番号	遺 構	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	重さ (g)	登録番号
121	SK31	釘	3.1			鉄	1.1	M-121
122	SK31	釘	3.6			鉄	2.2	M-122
123	SK89 中央	釘	3.8			鉄	0.9	M-123
124	SK89 南	釘	3.3			鉄	1.0	M-124
125	SK99	釘	4.9			鉄	1.0	M-125
126	SK33	金具	3.5	1.0		銅	4.9	M-126
127	SK33	金具	0.8	4.2	0.1	銅	2.7	M-127
128	SK89	金具	1.3	1.8	0.9	銅	1.4	M-128
129	SK89	金具	2.6	1.4	0.6	銅	1.8	M-129
130	SK29	火打金	4.8	1.4	0.3	鉄	2.3	M-130
131	SK33	火打金	4.2	1.6	0.2	鉄	1.6	M-131
132	SK31	火打金	3.9	1.2	0.2	鉄	1.5	M-132
133	SK48	火打金	3.8	1.3	0.2	鉄	1.5	M-133
134	SK49	火打金	4.1	1.4	0.2	鉄	1.6	M-134
135	SK64	火打金	7.2	1.4	0.2	鉄	3.1	M-135
136	SK78	火打金	5.5	1.9	0.6	鉄	6.8	M-136
137	SK78	火打金	4.6	1.2	0.3	鉄	3.2	M-137
138	SK86	火打金	5.4	2.8	0.3	鉄	3.2	M-138
139	SK89	火打金	4.6	1.7	0.3	鉄	2.4	M-139
140	SK89F	火打金	4.3	1.5	0.2	鉄	1.8	M-140
141	SK89F	火打金	4.3	1.3	0.2	鉄	1.3	M-141
142	SK89F	火打金	4.2	1.0	0.1	鉄	1.0	M-142
143	SK98	火打金	5.9	2.0	0.3	鉄	3.6	M-143
144	SZ04	火打金	6.0	2.0	3.0	鉄	3.7	M-144
145	SK30	かんざし	14.6	1.1~0.6	1.0~0.4	ガラス	15.9	XB-145

第 6 表 金属・ガラス製品観察表②

遺物 番号	遺 構	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	登録番号
146	SK29	チャート	5.7	2.2	11.1	S-146
147	SK30	チャート	2.5	1.7	3.1	S-147
148	SK49	チャート	2.7	1.9	7.8	S-148
149	SK78	チャート	3.3	3.5	33.0	S-149
150	SK78	チャート	2.9	2.8	7.3	S-150
151	SK84	チャート	4.0	2.4	6.3	S-151
152	SK86	チャート	3.9	1.7	8.7	S-152
153	SK89	チャート	2.8	2.3	9.4	S-153
154	SK89	チャート	1.8	1.3	1.8	S-154

第 7 表 石片観察表

第Ⅳ章 出土人骨概要

SK07をはじめとする40個の土坑より42体分の人骨が出土した。ここでは各人骨について形態的特徴を記載し、マルチン法（江藤、1991）による計測を行った。頭蓋骨計測値は表8・9に、歯冠計測値を表10・11に示す。身長 の 推定には藤井（1960）を用いた。

- SK07 骨の保存状態は良くない。頭位および埋葬姿勢は不明であるが、歯が土坑の北部にあり、下肢骨が南西部から出土していた。また頭骨の近くから銭3枚が出土した。残存する部分は、後頭骨、右側頭骨、左右不明の上腕骨骨体、右大腿骨骨体、左大腿骨骨体。出土した歯は全て下顎歯で、左犬歯、左第1小臼歯、左第1・2大臼歯、右第1小臼歯、右第2大臼歯の合計6本である。咬耗はほとんどみられない。

* * * * *	* * * * *
* 7 * * 4 * * *	* * 3 4 * 6 7 * * :不明

- SK09 保存状態は著しく不良である。出土した骨は左大腿骨近位端の一部である。また銭3枚および土器片が供出している。

- SK12 保存状態は著しく不良である。出土した部位は椎骨片数点と火を受け白色化したと思われる長骨片である。

- SK29 保存状態は良くない。頭位および埋葬姿勢は不明であるが、下肢骨が土坑の南方に頭骨が北方に位置していた。また火打金・チャートが供出している。残存する部位は、後頭骨の一部、下顎骨の一部、右上腕骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、不明骨片が数点出土している。いずれも保存状態が悪く、計測に耐えられなかった。歯は出土していない。

- SK30 保存状態は比較的良好である。頭蓋骨が2点出土しているが、1点は頭蓋骨以外の骨が出土していない(SK30-19)。1点は他の四肢骨等とほぼ同じ高さからの出土であり、同一個体のものと思われる(SK30-18)。四肢骨の出土した個体の頭位は北西で、埋葬姿勢は右横臥屈位である。他に煙管吸い口とこうがい出土している。頭蓋骨は2点とも保存状態はほぼ良好である。

SK30-18：頭蓋骨・右頬骨・右側頭骨・右頭頂骨下部および左右頬弓骨を欠損する。頭蓋冠の骨は厚い。外後頭隆起および眉上隆起は余り発達しない。矢状縫合は内板が癒合しているが、矢状縫合の外側および他の縫合は癒合していない。下顎骨は右半分を欠いている。頭蓋骨最大長は174 mm、最大幅136 mmであることから長幅示数は78.2となり、中頭に属する。歯列は以下の通りである。このうち左上顎の第1小臼歯から第1大臼歯にかけては、咬耗は部分的に象牙質まで進んでいる。また左下顎第2・3大臼歯の脱落跡は歯槽閉鎖の途中である。

* * * 5 4 * * *	* * 3 4 5 6 * *
* 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 * * □ :遊離歯、* :不明

体幹骨・四肢骨-残存する部位は以下の通りである。右鎖骨、左右上腕骨、左右尺骨、左

右大腿骨、左右脛骨、右腓骨。いずれの長骨も骨端部を欠いているため、身長推定を行えるだけの計測値は得られなかった。椎骨は第1・2頸椎、第5腰椎および仙骨である。頭蓋骨の形態から女性と思われる。

SK30-19について残存する部分は前頭骨・左右頭頂骨・後頭骨・上顎前部である。矢状縫合および人字縫合は一部内板が癒合しているが、外側および他の縫合は癒合していない。外後頭突起と眉上隆起は余り発達していない。残存する歯列は右上顎第1小臼歯、左上顎第2切歯、左上顎犬歯、左上顎第1・2小臼歯である。咬耗の度合いは、歯の保存状態が著しく悪く不明である。最大長184mm。頭蓋骨の形状から女性と思われる。

SK31 この土坑からも頭蓋骨が2体出土している。1個体は頭蓋骨のみが土坑の底部から30cm程度上部に位置しており(SK31-1)、底部から出土した頭骨には同一個体のものと思われる四肢長骨が出土している(SK31-3)。頭位は東と思われる。埋葬形態は不明である。釘・火打金・銭6枚が供出している。

SK31-1：残存する部分は頭頂骨および後頭骨の一部。歯は残存しない。

SK31-3：頭蓋骨は前頭骨・左右頭頂骨・左側頭骨。矢状縫合は内板が癒合しているが、冠状縫合は癒合していない。残存する歯は左下顎第2切歯、犬歯、第2小臼歯、第1・2大臼歯、左上顎犬歯、第1・2小臼歯、第1大臼歯。体幹骨は残存しない。四肢骨は右上腕骨片、左右大腿骨、左右脛骨、左右不明腓骨片が出土している。いずれも骨体のみである。

* * * * *	* * 3 4 5 6 * *
* * * * *	* 2 3 * 5 6 7 * * :不明

SK33 頭蓋骨の保存状態はほぼ良好であるが、四肢骨は骨端部の破損が大きく、計測は行えなかった。人骨の他に釘・火打金・チャート・銭5枚・飾り金具・煙管吸口および雁首が出土している。頭蓋骨は左右頬骨および上顎部分を欠落する。後頭孔周辺も破損している。外後頭隆起および眉上隆起が発達していない。縫合は全て癒合していない。左後頭部が右に比べやや突出している。残存する歯列は以下の通りである。このうち右下顎第2切歯～第2大臼歯および左第1切歯～第2大臼歯にかけて咬耗が激しい。特に左第1・2大臼歯は頬側面が歯頸部まで咬耗している。右第1切歯は他の歯列よりもやや低かったことから、咬耗がみられない。

* * 6 * * 3 * *	* 2 3 4 5 6 7 *
* 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 * □ :遊離歯、* :不明

頭蓋骨の形状から女性と思われる。頭蓋骨最大長は162mm、最大幅125mmをはかり、長幅示数は77.2となり中頭に属する。四肢骨では左右上腕骨、手指骨6本、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨が出土している。いずれも身長を推定するための計測値は得られなかった。

SK35 不明長骨が一個出土したのみである。

SK48 頭位は北西で埋葬姿勢は右横臥屈位。骨以外では木片・火打金・銭6枚が出土している。

骨の保存状態はほぼ良好で、残存する部位も多い。頭蓋骨は左頬骨および左側頭骨部分を欠損する。矢状縫合と冠状縫合の一部の内板が癒合しているほかは、癒合がみられない。下顎骨は左の一部を破損する。頭蓋最大長は 173 mm である。残存する歯列は以下の通りである。いずれの歯もあまり咬耗していない。左右下顎犬歯、左右第 1 小臼歯にエナメル質減形成がみられる。

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
*	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	*

□：遊離歯、*：不明

体幹骨は環椎から仙骨まで全て残存する。尾骨は残存しない。骨増殖はみられない。胸骨体および胸骨柄が残存する。左右寛骨が残存するが共に恥骨部分を欠損する。肋骨は骨端部分を欠損するものがほとんどであるが、左右ともに 12 本が確認された。上肢体では、左右鎖骨、左右肩甲骨、左右上腕骨、左有頭骨、左有鈎骨が残存する。下肢骨では左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右踵骨、左右距骨が残存する。頭蓋骨において眉上隆起および外後頭隆起があまり発達しないこと、寛骨の大坐切痕がやや鈍角であることから女性と思われる。左大腿骨の最大長が 400 mm、右脛骨の最大長が 314 mm であることから、推定される身長は 151 cm、147.0 cm となる。

SK49 骨の保存状態はあまり良くなく、頭位および埋葬姿勢は不明である。骨以外の出土遺物は釘・煙管雁首・火打金・チャート各 1 点である。残存する部位は頭蓋骨の一部、下顎骨の一部、右寛骨、左右上腕骨、左尺骨、左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨である。長骨はすべて骨体部のみで身長の推定を行えるだけの測定値は得られなかった。頭蓋骨は眼窩より下の顔面を欠いている。眉上隆起は発達しておらず、女性と思われる。頭蓋骨最大長は 167 mm である。矢状縫合および環状縫合、人字縫合など全ての縫合が癒合していない。

SK53 頭位は北、埋葬姿勢は左横臥屈位。骨の保存状態はあまり良くない。残存する部分は、頭蓋骨では、左右頭頂骨、後頭骨の一部、右半分を欠く下顎骨、頭蓋底の一部である。矢状縫合、人字縫合はすべて癒合していない。外後頭隆起は発達していない。歯列は以下の通りである。上下の左第 1 切歯にエナメル質減形成がみられる。咬耗は残存するすべての歯にみられる。特に右下顎第 1 大臼歯、左下顎第 1・2 大臼歯、右上顎第 1 大臼歯、左上顎第 1・2 大臼歯はいずれも象牙質まで磨耗している。

8	7	6	5	*	3	*	*	1	*	*	4	5	6	7	8
8	7	6	⑤	4	3	2	*	1	*	*	*	5	6	7	8

○：歯槽閉鎖、□：遊離歯、*：不明

体幹骨は環椎、軸椎、第 1～4・10・11 胸椎、第 1～5 腰椎、仙骨である。仙骨と第 5 腰椎は癒合している。また仙骨以外の椎骨は保存状態が悪く、椎体のみもしくは椎骨刺のみが残存する状態である。肋骨片が 4 点残存する。右寛骨は恥骨部分および腸骨の一部を欠損するのみであるが、左寛骨は腸骨一部を残すのみである。上肢体では左肩甲骨、左鎖骨、左右上腕骨、左橈骨である。下肢骨は左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨である。寛骨の大坐切痕が鈍角を示すことや外後頭隆起が発達していないことから、女性と思われる。

SK54 頭位は北東。右横臥屈位。SK110 に隣接しており、椎骨が連続していることから、SK110

で出土した頭蓋骨が同一個体のものであると思われる。出土した部位は胸椎 3 点、腰椎 2 点、仙骨、左寛骨大坐切痕付近、左大腿骨、左膝蓋骨、左脛骨、左腓骨。寛骨の大坐切痕が鈍角であることから、女性であると思われる。左大腿骨の最大長が 355 mm であることから、推定身長は 140.6 cm となる。

SK55 寛骨より下の部分しか出土していないため、頭位および埋葬姿勢は不明である。供出遺物は煙管雁首 1 点である。出土部位は頭頂部付近のみの頭蓋骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右距骨、指骨片 4 点。頭蓋骨に見られる縫合はすべて内板のみが癒合する程度である。保存状態はあまり良くない。性別は不明である。

SK58 頭蓋骨の一部と長骨片数点が出土。不明鉄片も供出する。保存状態は不良である。残存する部位は、後頭骨片、側頭骨片、上顎および下顎骨。このうち第 2 大臼歯には咬耗の跡が認められなかった。性別は不明である。

* 7 6 5 4 3 2 *	1 2 3 * 5 6 7 8
* 7 6 5 4 * * 1	* * * 4 * 6 7 8 * : 不明

SK61 頭位、埋葬姿勢は不明である。保存状態は不良である。出土部位は、左側頭骨、左頭頂骨下部、右頭頂骨、前頭骨上部、後頭骨上部、右上腕骨、右橈骨。歯は出土していない。

SK65 保存状態は著しく不良で、出土したものは、不明長骨（大腿骨？）片 1 点のみである。

SK76 頭部のみ出土である。保存状態は不良である。出土部位は左右側頭骨片、上顎片、歯 23 点である。残存した歯列は下記の通りである。咬耗の度合いは全ての歯において部分的に象牙質までおよぶ程度である。性別は不明である。

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 * 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 1	* * 3 * * * * * □ : 遊離歯、* : 不明

SK77 頭位は北西で埋葬姿勢は右横臥屈位。残存する部位は頭蓋骨で、前頭骨眉間部、上顎、下顎骨、後頭骨、側頭骨一部。歯列は以下の通りである。咬耗は上下ともに、第 1 切歯から第 2 大臼歯まで、部分的に象牙質まで咬耗が進む程度である。

* 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 * *
* 7 6 5 4 3 2 1	* 2 3 4 5 6 7 * * : 不明

体幹骨は第 1 頸椎から仙骨まで全ての椎骨が確認された。骨増殖は見られない。肋骨片も数点確認されている。左右寛骨は腸骨の一部が残存する程度である。上肢では左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左尺骨、下肢では左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨、左右距骨である。右上腕骨の最大長は 260 mm、右脛骨の最大長は 305 mm であった。

SK78 頭位は北東で埋葬姿勢は左横臥屈位。保存状態はほぼ良好である。供出した遺物は木片・火打金・銭 6 枚である。頭蓋骨は顔面右側を欠損する状態で、残存する部位は左右頭頂骨、左側頭骨、前頭骨、左眼窩周辺、下顎左半分である。縫合は矢状縫合の一部およびラムダ縫合の一部の内板が癒合している。頭蓋骨最大長は 188 mm である。眉上隆起が発達することから、男性と思われる。残存する歯列は以下の通りである。このうち左右上顎第 3 大臼歯、右下顎第 1 小臼歯から第 2 大臼歯までには咬耗が見られない。他の歯には少しであ

るが咬耗が見られる。右上顎第2小白歯に齲蝕がみられる。また左下顎第2切歯から第2小白歯までに、エナメル質減形成がみられる。

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	*	1	2	3	4	5	6	7	8

*：不明

体幹骨では胸椎が1点出土している。上肢帯では、右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、右橈骨、右尺骨。下肢帯では左右大腿骨、左右脛骨が確認された。いずれの長骨も骨端部欠くため、計測はできなかった。

SK82 下肢骨から上肢骨までがほぼ一カ所に集中していることや、寛骨と大腿骨が大きく離れずに出土していること、肋骨が重なった状態で出土していたことから、埋葬姿勢は膝を立てた状態の座位であったと推測される。供出した遺物は銭1枚である。骨の保存状態はほぼ良好である。頭蓋骨では顔面と左側頭骨部分を欠損する程度である。眉上隆起が発達していることから男性と思われる。左眼窩上面に小さな孔が5点ほど確認された。体幹骨は頸椎2点、胸椎4点である。右寛骨は破片であるが出土している。上肢帯では左右肩甲骨、左上腕骨、尺骨片が、下肢帯では右大腿骨、左大腿骨近位端、左右脛骨が出土している。いずれも骨端部が欠損していたり、骨端のみの出土で計測には耐えられなかった。肋骨が重なる状態で6本出土したが、いずれも骨体部のみである。

SK84 骨の保存状態は不良である。出土部位は左右側頭骨下部および左右不明の大腿骨片である。他に木片・不明鉄片・チャート・銭7枚が出土している。

SK85 埋葬姿勢は、椎骨が連結していたこと、左大腿骨と左上腕骨が並列に並んでいたこと、頭蓋骨が大後頭孔を上にした状態で出土したことなどから膝を立てた状態の座位であったと思われる。骨の他に釘・銭5枚が出土している。骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋骨では残存する部分は、前頭骨左半分、左頬骨、左右上顎の一部、左側頭骨、後頭骨上部、下顎前方部である。頭蓋骨は土圧による変形を受けたと思われる。縫合は矢状縫合の一部の内板が癒合するのみで、他の部分の癒合は認められない。残存する歯列は以下の通りである。咬耗の度合いはすべて少しである。右下顎第2、3大臼歯に齲蝕が見られる。

*	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	*

□：遊離歯、*：不明

体幹骨は、環椎から仙骨まですべて残存する。ただし保存状態が不良なため、椎体のみの出土が多い。肋骨が12本、重なった状態で出土した。胸骨板も確認されている。左右寛骨も残存している。大坐切痕が鈍角であること、頭蓋骨で眉上隆起および外後頭隆起があまり発達していないことから女性と思われる。上肢帯では左右鎖骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、左月状骨、舟状骨、有頭骨が確認されている。下肢帯では左大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左足根骨、足指骨10個が出土した。

SK86 保存状態は著しく不良である。骨と共に火打金・銭6枚が出土している。頭蓋骨は、右側頭骨下部、右上顎片、下顎片および歯16本が確認されている。歯列は以下の通りである。このうち左右下顎第3大臼歯の歯根部がともに2/3程度形成された状態であった。

* * 6 5 4 3 2 1		* * * 4 * * * *
8 7 * 5 4 3 2 1		* * * * * 6 * 8 * :不明

他の残存部分は右恥骨の一部、左大腿骨近位端、足指骨片2点である。

SK89 この土坑からは11個体分の人骨が出土した。人骨の他には、釘・煙管雁首3個・煙管吸口3個・飾金具・火打金・チャート・銭11枚が出土している。各個体はそれぞれ隣接しており、完全に重なり合うものはなかった。また各個体が隣接していることから釘などの遺物がどの個体に付随するのかわからない。土坑の南方から順にaからjの記号を添付した。

SK89a 頭位は南西、埋葬姿勢は右横臥屈位。保存状態はほぼ良好である。残存部分は頭蓋骨では、顔面および左右側頭骨、後頭骨下部を欠く。眉上隆起が大きく発達することから、男性度と思われる。矢状縫合、環状縫合、人字縫合の全てが癒合している。上顎骨は右下半部を、下顎骨は前方部のみを残存している。残存する歯列は以下の通りである。このうち左右下顎切歯はほぼ半分が咬耗でなくなっている。左右下顎第1・2大臼歯も半分ほどが残る程度であるが、特に頬側は歯頸部に達するほど咬耗している。また上顎の大臼歯では舌側に咬耗がみられる。

* 7 6 5 4 3 * 1		1 2 3 * 5 6 7 *
* 7 6 5 4 3 2 1		1 2 3 4 5 6 7 * □ :遊離歯、* :不明

体幹骨では、寛骨から仙骨まで全て残存するが、保存状態は悪く椎体のみのものが多い。このうち、第5腰椎と仙骨はほとんど癒合した状態であった。また第3腰椎と第4腰椎も癒合していた。胸骨体が確認されている。左右寛骨は破片でのみ確認された。上肢帯は左右肩甲骨、左鎖骨、左右上腕骨、左右頭骨、左右尺骨が確認されている。下肢帯では左右大腿骨、左右脛骨が確認されている。

SK89b 大腿骨および脛骨が立て膝の状態出土していること、椎骨が連続して出土していることと大後頭孔が上になる状態で頭蓋骨が出土したことなどから、膝を立てた状態の座位で埋葬されたものと考えられる。骨の保存状態は大変良好である。頭蓋骨は左頬骨の一部、後頭骨上部、右乳状突起の一部、大後頭孔右側、左右下顎顆を欠損する。眉上隆起および外後頭隆起はあまり発達しない。頭蓋骨最大長は171 mm、最大幅は134 mmであることから、長幅示数が78.4となり中頭に属する。舌骨体は舌骨柄と結合した状態で出土している。縫合は内板は全て癒合している。残存する歯列は以下の通りである。歯列はいずれも咬耗が激しく、歯槽閉鎖も著しい。右上顎第1切歯、左上顎第3大臼歯は約半分ほど咬耗でなくなっているが、左上顎犬歯、第1・2小臼歯、第2大臼歯、右第1小臼歯は歯冠部が咬耗でなくなり歯根のみとなっている。下顎でも咬耗が進んでいる。右下顎第2切歯から右第1大臼歯まで、左下顎第2切歯から第2小臼歯まではやはり歯頸部まで咬耗が達している。特に第1小臼歯よりも前方に位置する歯は、いずれも前方（頬側）がひどく咬耗している。下顎骨には歯槽膿漏とおもわれる孔が無数に分布している。

8	⑦	⑥	⑤	4	③	②	1	①	②	3	4	5	⑥	7	*
*	⑦	6	5	4	3	2	①	①	2	3	4	5	6	⑦	*

○：歯槽閉鎖、□：遊離歯、*：不明

体幹骨では環椎から仙骨まで残存する。骨増殖が著しく、第3・4頸椎、第3・4・5腰椎に特に認められた。肋骨は破片が出土している。寛骨は左右ともに出土しており、大坐切痕の角度と頭蓋骨の形状から女性であると思われる。上肢帯では、左右鎖骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨が出土している。保存状態は良好であるが、骨端部が欠損するものが多く、計測に耐えられるものは少ない。手根骨は左右有頭骨、有鈎骨、大菱骨、月状骨、舟状骨、左三角骨、手指骨8個が出土している。下肢帯では左右大腿骨、脛骨、腓骨、左右距骨、踵骨、舟状骨、中間楔状骨、足指骨12個が出土している。計測値はそれぞれ最大長で右橈骨 234 mm、左橈骨 230 mm、左尺骨 253 mm、となる。これらの値から推定する身長は、156.2 cm、155.8 cm、156.0 cm となる。

- SK89c 骨の残存状態は不良である。残存する部分は、後頭骨、左頭頂骨、左側頭骨下部、右側頭骨、上顎歯7本（右上顎第1・2大臼歯、左上顎犬歯、左上顎第1小臼歯、左上顎第1・2・3大臼歯）、長骨片数点である。前頭骨には前頭骨縫合がみられる。左第3大臼歯は歯根部が半分しか形成されていない。環状縫合、矢状縫合、人字縫合の全て開いている状態である。また頭蓋骨の骨盤が他のものに比べ薄い。

*	7	6	*	*	*	*	*	*	*	3	4	*	6	7	8
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

*：不明

- SK89d 保存状態はあまり良くない。残存するものは、眉間および左眼窩上部、上顎下部、舌骨体、歯30本である。眉上隆起および外後頭隆起はあまり発達していないことから女性と思われる。歯列は以下の通りである。いずれの歯もあまり咬耗していない。

8	7	6	5	4	3	*	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

*：不明

体幹骨では第1～5頸椎、上肢帯では左肩甲骨、左鎖骨、左頭骨、手根骨（左舟状骨）、手指骨3本である。下肢帯では左大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右距骨、左右踵骨、足指骨5本が出土している。

- SK89e 頭位は東。残存する部位は少ない。頭蓋骨の保存状態はほぼ良好である。顔面と左右側頭部が欠損している。矢状縫合の前方部のみが癒合している。眉上隆起はやや発達していることから男性と思われる。下顎は左前方部のみが残存する。歯は、下顎歯のみである。左犬歯は第1小臼歯側が大きく咬耗している。

*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	③	②	①	①	②	3	4	5	6	7	⑧

□：遊離歯、*：不明

他の部位は右肩甲骨近位、左右上腕骨遠位、肋骨3点、左大腿骨近位、右脛骨骨体である。

- SK89f 頭位は東、埋葬姿勢は右横臥屈位。保存状態は良好であるが、鼻骨以下の顔面が変形しており、顔面の復原ができなかった。眉上隆起と外後頭隆起が発達している。上顎には歯槽膿漏と思われる孔が存在している。頭蓋骨最大長は190 mm、最大幅は142 mm であるこ

とから、長幅示数が74.7となり、長頭に属する。残存する歯列は以下の通りである。左下顎第2切歯は犬歯側の半分が、左右下顎犬歯および右上顎第1・2切歯、左右上顎犬歯はすべて歯冠の1/3ほどが咬耗している。左下顎第1大臼歯、右第2大臼歯、左上顎第2大臼歯、左上顎第1・2小臼歯、右上顎第1・2大臼歯はいずれも歯冠の半分まで咬耗している。このうち下顎の大臼歯は頬側が歯頸に達するほど咬耗しているのに対し、上顎歯では舌側がひどく咬耗している。右下顎犬歯にエナメル質減形成がみられる。

* 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 *
* 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 * ○: 歯槽閉鎖、□: 遊離歯、*: 不明

他の出土部位は第1～7頸椎、第1～3・7～12胸椎、第1・5腰椎、仙骨が確認できた。このうち、仙骨に骨増殖がみられた。左右寛骨は長骨の一部を欠損するのみである。大坐切痕が鋭角であることから男性であると追われる。肋骨片が2点、胸骨柄、胸骨体が確認されている。上肢帯は左右肩甲骨、鎖骨、左上腕骨、左橈骨、左尺骨、左右有頭骨が出土している。下肢帯では、左右大腿骨、左右膝蓋骨、左右脛骨、左右腓骨、左右距骨、左右踵骨、左右舟状骨、左右内側楔状骨、右外側楔状骨、右立方骨、足指骨13本である。四肢長骨の計測値は、左右上腕骨の最大長が311 mm、311 mm、右橈骨が249 mm、左右大腿骨440 mm、435 mm、右脛骨365 mm、右腓骨354 mmである。これらの値から推測される身長は、160.9 cm、160.0 cm、164.7 cm、163.6 cm、162.3 cm、164.1 cm、163.0 cmとなる。

SK89g 保存状態は著しく不良である。残存する部位は、頸椎の一部、胸椎の一部、仙骨の一部、左右腸骨の一部、左上腕骨骨体である。

SK89h 残存状態は良好であるが、残存部位は少ない。出土部位は下顎骨、左右鎖骨、肋骨4点である。歯列は以下の通りである。

* * * * * * * *	* * * * * * * *
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8 □: 遊離歯、*: 不明

いずれの大臼歯にも咬耗がみられる。このうち右第3大臼歯は歯冠の1/3が齶歯で欠損している。左第3大臼歯の歯冠部にはエナメル質減形成がみられる。

SK89i 頭位は北西。出土部位は頭蓋骨、舌骨および胸椎10点のみである。頭蓋骨の欠損部分は右眼窩周辺、上顎前方部、左頬骨、左右胸骨弓、左乳状突起である。頭蓋骨最大長は175 mm、最大幅は134 mmとなり、長幅示数は76.6で中頭に属する。顔面部分の保存状態は他の部分に比べ不良である。外後頭隆起が発達している。矢状縫合および環状縫合の内板は癒合している。他の縫合は癒合していない。残存する歯列は以下の通りである。

8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
* * * * * * * *	* * * * * * * * □: 遊離歯、*: 不明

SK89j 埋葬姿勢は膝を立てた状態の座位。保存状態はほぼ良好で、残存部分も多い。頭蓋骨は左頬骨の一部および右頭頂骨下部、左右側頭骨上部を欠損するのみである。眉上隆起および外後頭隆起はあまり発達していない。下顎はおとがい付近の保存状態が不良である。頭

蓋骨の縫合は全て癒合している。歯列は以下の通りである。このうち右下顎第1小白歯は咬耗が激しく歯根部のみが残存している。右下顎第2小白歯～第3大臼歯にかけての咬耗が激しく部分的に象牙質まで達している。右上顎第2小白歯、第1・2大臼歯も咬耗が激しい。左下顎第1大臼歯は奥側が欠落している。また、上顎切歯がかなり前方に突出するのが特徴である。

* 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8	
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8	□:遊離歯、*:不明

他の出土部位は次の通りである。体幹骨は第1・2頸椎、第10～12胸椎、第1～4腰椎、仙骨。左右寛骨はともに保存状態が良好である。大坐切痕が鈍角であることや頭蓋骨の形態から女性であると思われる。肋骨が2点確認されている。上肢帯の残存部位は左右肩甲骨、左鎖骨、左右上腕骨、右橈骨、右尺骨、手指骨5点。下肢帯は左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、右距骨、足指骨4本が確認されている。

SK89 南 この個体は、他のSK89の一連のものとは出土レベルが明らかに異なるものである。保存状態も不良である。残存部位は頭蓋骨の破片3点、腰椎1点、尺骨片1点、右膝蓋骨、右脛骨近位端、右距骨、右踵骨、右内楔状骨。

SK91 骨の保存状態は良好であるが、残存部分および部位は少ない。煙管吸口・雁首・銭7枚が供出している。頭蓋骨は顔面および上顎、頭頂部が残存している。下顎も右半分が残存している。矢状縫合は内板が癒合している。眉上隆起はあまり発達していないことから女性と思われる。残存している歯列は、下記の通りである。咬耗は全体に少ない。左下顎第3大臼歯は齲歯である。右下顎第2切歯にエナメル質減形成がみられる。

⑧ 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8	
* 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8	○:歯槽閉鎖、□:遊離歯、*:不明

他の出土部位は左鎖骨、左右大腿骨、左右脛骨、右腓骨である。

SK98 骨の保存状態は不良である。出土部位は頸椎2点、胸椎5点、腰椎2点である。骨の他に火打金・銭3枚が出土している。

SK99 保存状態は残存しているものは良好であるが、残存部位は少ない。釘・煙管雁首・銭13枚が供出している。残存している頭蓋骨は左右頭頂骨の一部、前頭骨の一部、後頭骨の上部、左上顎片、下顎骨前方部である。残存する歯列は以下の通りである。左上顎犬歯に咬耗が少し認められた。左下顎第1切歯から右下顎犬歯までの間は、下顎が残存しており、歯槽閉鎖が確認された。

* * * * *	* * 3 4 * * * *	
* * * * * ③ ② ①	① * 3 * * * * *	○:歯槽閉鎖、*:不明

四肢骨では左鎖骨骨体。肋骨3点のみである。

SK107 骨の保存状態は著しく不良である。出土した部位は右寛骨臼と右大腿骨骨体である。ほかに煙管吸口が出土している。

SK109 煙管吸口が出土している。人骨では大腿骨骨体の破片が出土しているのみである。

SK110 SK53 と隣接しており、出土状態から SK53 の頭部である。頭位は北東。保存状態は良好である。頭蓋骨は左側頭部を欠くのみである。眉上隆起も外後頭隆起もあまり発達していないことから女性と思われる。頭蓋骨最大長は 155 mm である。上顎切歯が突出する特徴を示す。矢状縫合および環状縫合の内板は癒合している。残存する歯列は下記の通りである。左右上顎第 3 大臼歯、右下顎第 3 大臼歯はいずれも齲歯であり、歯冠の半分程度欠損している。残存する歯の全てに咬耗がみられる。その中でも左右上顎第 1 大臼歯は特に咬耗が進んでいる。

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

残存部位は、体幹骨は第 1～5 頸椎、胸椎 6 点、腰椎 3 点。上肢骨は左右肩甲骨、左右鎖骨、左上腕骨、右橈骨、右尺骨、手指骨 2 本。下肢骨は右大腿骨、右腓骨である。右大腿骨の最大長は、355 mm となり、推定身長が 140.6 cm となる。

遺構番号	性別	遺構番号	性別	遺構番号	性別
SK07	不明	SK55	不明	SK89d	女性
SK09	不明	SK58	不明	SK89e	男性
SK12	不明	SK61	不明	SK89f	男性
SK29	不明	SK65	不明	SK89g	不明
SK30-18	女性	SK76	不明	SK89h	不明
SK30-19	女性	SK77	不明	SK89i	男性？
SK31-1	不明	SK78	男性？	SK89j	女性
SK31-3	不明	SK82	男性	SK89 南	不明
SK33	女性	SK84	不明	SK91	女性
SK35	不明	SK85	女性	SK98	不明
SK48	女性	SK86	不明	SK99	不明
SK49	女性	SK89a	男性	SK107	不明
SK53	女性	SK89b	女性	SK109	不明
SK54	女性	SK89c	不明	SK110	女性

第 8 表 出土人骨性別一覧

参考文献

- 江藤盛治 1991 「人体計測法」『人類学講座別巻 1』 雄山閣出版
 茂原信夫 1994 「本飯豊遺跡(福島県)出土の江戸時代人骨」『福島県文化財調査報告書第 307 集』 p 293-321 福島県教育委員会
 藤井 明 1960 「四肢長骨の長さとし長との関係に就いて」『順天堂大学体育学部紀要 3』 p 49-61

sk 番号	30-18 女性	30-19 不明	33-2 女性	48 女性	49 女性	77 子供？	78 男性？	82 男性？	84 不明	89b 女性	89d 女性	89e 男性	89f 男性	89i 男性？	89j 女性	99南 不明	110 女性
1 頭蓋骨最大長	174.0	184.0	162.0	173.0	167.0		188.0			171.0			190.0	175.0			155.0
3 グラベロラムダ長	170.0	183.0	153.0	170.0	154.5		179.0	182.0		171.0			189.0				153.8
5 頭骨底長	97.0		94.0	105.0						103.0			107.0	93.0			92.0
8 頭蓋最大幅	136.0		125.0							134.0			142.0	134.0			
8/1 長幅示数	78.2		77.2							78.4			74.7	76.6			
7 大後頭孔長										32.4	36.1		38.9		34.5		33.8
9 最小前頭幅				93.0						94.3			103.5	88.3			
10 最大前頭幅				105.0						107.6			124.1	107.0			
9/10 横前頭示数				88.6						87.6			83.4	82.5			
11 両耳幅	107.0		111.0							126.1			130.0	103.4			
12 最大後頭幅	104.0									111.0			113.0	104.4			93.7
17 バジオンプレグマ高										137.0			145.0	134.0			
16 大後頭孔幅										28.1	26.5		30.4		29.1		28.0
17/1 長高示数										80.1			76.3	76.6			
17/8 幅高示数										102.2			102.1	100.0			
23 頭骨水平周				445.0						497.0			548.0	498.0			
24 横弧長	315.0		285.0							295.0			330.0	315.0			
25 正中矢状弧長													392.0				341.0
26 正中矢状前頭弧長	125.0	130.0	113.0	115.0	115.0		120.0	128.0		127.0		115.0	135.0	124.0		126.0	110.0
27 正中矢状頭頂弧長	130.0	130.0	100.0	123.0	105.0		120.0	120.0	126.0	123.0		110.0	140.0	139.0	109.0		115.0
28 正中矢状後頭弧長										110.0			115.0	117.0	117.0	127.0	116.0
28(1) 正中矢状上鱗弧長	65.0	75.0	100.0		95.0		95.0	65.0		65.0			73.0	60.0	55.0	82.0	71.0
29 正中矢状前頭弦長	110.5	115.6	100.5	102.0	104.6		114.6	113.6		108.3			110.1	118.1	107.0		108.5 996.0
30 正中矢状頭頂弦長	112.3	115.2	90.7	112.8	98.4		109.2	109.0		110.8			104.2	123.0	124.6	98.2	105.1
31 正中矢状後頭弦長										91.7			89.3	100.2	101.4	104.4	100.2
31(1) 正中矢状上鱗弦長	64.8	70.7	87.8		82.8		86.4	65.3		61.8			63.4	57.0	54.0	75.9	94.1
40 顔長										96.1						90.5	91.9
43 上鱗顎幅										105.5			110.2				
44 両眼窩幅										102.4							
45 頬弓幅										130.5							
46 中顔幅										98.0							
47 顔高										101.5							
48 上顔高										68.0						73.3 66.0	60.9
47/45 コルマン顔示数										77.8							
48/45 コルマン上顔示数										52.1							
47/46 ウィルヒョウ顔示数										103.6							
48/46 ウィルヒョウ上顔示数										69.4							
50 前眼窩間幅										41.8 L 41.6 R				19.4 21.1			18.3
50/44 前眼窩間幅示数										34.4 L 35.1 R							
51 眼窩幅																38.9R 38.5L	38.6
52 眼窩高																37.8R 41.6L	31.8
52/51 眼窩示数																97.2R108.1L	82.4
54 鼻幅										25.9	22.3		26.5	23.9	23.9		23.4
55 鼻高																	48.1
54/55 鼻示数																	48.6
57 鼻骨最小幅	8.4						12.4			10.3				9.0 11.2			9.5
57(1) 鼻骨最大幅										18.0						27.4	11.7
60 上顎歯槽長															51.8	51.6	50.0
61 上顎歯槽幅				70.7						74.2			73.4			60.3	64.7
61/60 上顎歯槽示数																116.9	129.4
62 口蓋長										40.0	41.2		42.4		45.4	43.8	46.5
63 口蓋幅				41.0						40.3			33.1	36.2	38.1	39.7	45.3
63/62 口蓋示数										100.8			78.1		83.9	90.6	97.4
67 前下顎幅				44.7						47.6	47.0		47.8		44.1	44.7	
68 下顎長																67.0	
69 オトガイ高				35.0						35.2		33.7	45.4			29.0	29.0
69(1) 下顎体高	31.5			32.9		31.4	34.1								34.2		25.9
70 下顎枝高							75.9										
79 下顎枝角							113.5										
70(3) 下顎切痕高										14.0			14.8		13.1		10.0
71(1) 下顎切痕幅										33.9			40.9		30.3		32.0

第9表 頭蓋骨計測表①

sk 番号	n	円通寺(愛知)		本坂豊(福島)		鍛冶久保(福島)		無縁坂(東京)		桑島(熊本)		関東人		
		男性平均	n	女性平均	茂原(1994)		茂原(1994)		森田・河越		脇(1970)		森田	
					男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
1 頭蓋骨最大長	3	184.3	6	167.0	182.1	176.5	185.0	176.0	183.5	173.2	180.1	172.6	178.9	170.8
3 グラベロラムダ長	3	183.3	6	162.1	173.0	173.5	180.3	170.0	178.0	168.7	173.9	169.7	174.8	166.3
5 頭骨底長	2	100.0	5	98.2	105.3		104.0	98.0	102.6	97.8	103.9	98.4	100.7	95.6
8 頭蓋最大幅	2	138.0	3	131.7	137.0	133.0	138.7	129.0	141.1	136.8	131.0	128.5	140.3	135.9
8/1 長幅示数	2	75.7	3	77.9	75.3	76.9	75.4	73.3	77.0	79.0	72.7	74.4	78.5	79.7
7 大後頭孔長	1	38.9	4	34.2										
9 最小前頭幅	2	95.9	2	93.7	93.9	95.2	100.7	94.0	94.9	91.5	93.5	91.9	93.2	91.0
10 最大前頭幅	2	115.6	2	106.3	115.4	111.0	118.5	120.0	117.0	112.3	102.9	102.5	115.9	111.6
9/10 横前頭示数	2	83.0	2	88.1	81.8	92.2	86.1	83.3	81.3	81.1	90.9	89.7	80.5	81.5
11 両耳幅	2	116.7	3	114.7	126.7	114.7	130.3	119.3	126.6	119.8	121.5	118.4	12.9	118.8
12 最大後頭幅	2	108.7	3	102.9	113.4	109.4	107.0	109.3	109.5	104.5	109.3	105.7	108.4	104.2
17 バジオンプレグマ高	2	139.5	1	137.0	136.7		137.0		138.5	134.1	135.9	132.0	138.1	132.5
16 大後頭孔幅	1	30.4	4	27.9										
17/1 長高示数	2	76.4	1	80.1	75.7		75.6		75.6	88.5	75.5	76.5	77.3	77.7
17/8 幅高示数	2	101.1	1	102.2	103.6		100.7		98.2	98.1	104.6	102.9	98.6	97.7
23 頭骨水平周	2	523.0	2	471.0	524.0	537.0	527.0	504.0	522.2	497.3	507.8	492.6	513.7	493.7
24 横弧長	2	322.5	3	298.3	301.5		310.0	298.5	324.9	315.1	307.8	294.0	324.4	313.2
25 正中矢状弧長	1	392.0	1	341.0	361.6		376.0		377.3	359.9	372.0	356.2	371.7	357.6
26 正中矢状前頭弧長	5	124.4	6	117.3	124.8	118.0	125.5	129.0	127.6	123.7	130.6	117.4	127.4	122.1
27 正中矢状頭頂弧長	5	125.8	7	113.7	121.8	128.0	129.0	125.0	126.1	121.3	120.4	127.4	125.1	121.0
28 正中矢状後頭弧長	3	116.3	3	117.7	118.0	114.7	114.0	102.0	123.8	114.9	124.4	111.4	119.1	114.3
28(1) 正中矢状上頭弧長	5	69.6	6	79.7	77.7	69.3	57.7	58.0	78.1	71.9	66.6	57.9	73.1	68.8
29 正中矢状前頭弦長	5	112.7	6	253.7	111.8	100.9	111.2	108.6	111.9	108.2	113.5	110.2	111.8	106.5
30 正中矢状頭頂弦長	5	114.0	7	104.0	108.7	109.4	114.9	114.8	113.0	109.2	111.7	111.0	111.8	108.6
31 正中矢状後頭弦長	3	97.0	3	98.8	100.7	103.8	99.7	90.7	101.9	97.5	101.4	92.1	100.4	97.0
31(1) 正中矢状上頭弦長	5	65.2	6	77.9	73.4	65.4	56.6	51.5	72.6	67.0	66.4	56.1	67.5	64.1
40 顔長			3	92.8	103.3		100.0	99.0	98.5	82.5	99.5	94.4	97.6	94.4
43 上顔幅	1	110.2	1	105.5	105.1	101.3	105.8	101.0	105.6	100.7	96.7	102.0	103.7	100.1
44 両眼窩幅			1	102.4	96.3	96.2	98.1	92.5	99.9	94.4	104.6	100.0	97.2	94.1
45 頬弓幅	1	130.5	136.7	121.0	122.0		136.4	125.9	126.3				132.9	124.9
46 中顔幅			1	98.0	99.0	93.4	106.0		101.6	95.1	101.1	91.6	98.6	93.5
47 顔高			1	101.5	126.7	117.0	123.6	110.5	123.5	119.0	122.4	117.7	123.8	115.0
48 上顔高			3	67.4	72.4	68.1	74.4	63.7	71.8	68.3	72.5	71.4	70.7	67.1
47/45 コルマン顔示数			1	77.8	91.9		95.9		91.7	95.7	93.7		93.1	92.2
48/45 コルマン上顔示数			1	52.1	52.6		56.0		53.0	54.4	55.4		53.3	63.8
47/46 ウィルヒョウ顔示数			1	103.6	126.9	120.9	115.0				115.8		125.4	123.3
48/46 ウィルヒョウ上顔示数			1	69.4	72.5	70.4	68.5		70.9	72.3	70.2		71.8	82.0
50 前眼窩間幅	1	19.4	4	30.7	18.7	19.4	20.8	18.9	18.5	17.3	20.5	18.0	17.8	17.4
50/44 前眼窩間幅示数			2	34.8	18.9	20.8	21.3	19.2	18.5	18.3	20.6	19.2	18.3	18.5
51 眼窩幅			2	38.8	42.0	40.7	40.9	39.7	43.3	41.7	41.8	40.0	42.7	41.1
52 眼窩高			2	34.8	43.9	33.8	34.4	33.9	35.1	35.3	34.5	34.9	34.3	33.8
52/51 眼窩示数			2	89.8	83.0	80.7	82.0	85.0	81.6	84.7	83.3	78.1	80.4	82.4
54 鼻幅	2	25.2	4	23.9	25.6	25.4	24.4	25.7	25.1	24.6	25.9	24.2	25.0	24.5
55 鼻高			1	48.1	53.6	48.1	52.8	47.7	53.6	50.4	50.5	49.9	52.0	49.0
54/55 鼻示数			1	48.6	47.8	52.9	46.4	56.1			51.3	48.4	48.4	50.2
57 鼻骨最小幅	2	10.7	4	9.9	6.8	6.3	7.0	8.0	7.7	7.7	9.2	7.0	7.0	7.1
57(1) 鼻骨最大幅			2	14.9	18.1				18.0	17.7			17.9	17.5
60 上顎歯槽長			2	50.9	57.6			52.0	53.7	50.4	52.6	53.2	52.4	50.3
61 上顎歯槽幅	1	73.4	3	69.9	68.6		65.7		67.7	63.4	64.7	63.5	65.8	61.7
61/60 上顎歯槽示数			1	129.4	118.1				127.1	126.3	123.7	119.7	126.0	123.2
62 口蓋長	1	42.4	4	43.3	46.8		46.0	50.1	46.2	44.1	42.5		44.0	42.7
63 口蓋幅	2	34.7	4	41.2	46.2		36.9		40.4	38.4	29.6	28.2	40.0	38.4
63/62 口蓋示数	1	78.1	3	94.0	97.9		80.2				92.0		91.1	90.4
67 前下顎幅	1	47.8	4	45.9	45.3		47.1	44.9	47.8	44.7	46.9	43.2		
68 下顎長					72.2	72.0	70.7	70.0	76.5	71.4	68.1	67.8		
69 オトガイ高	2	39.6	3	33.1	36.5	37.0	35.4	31.8	34.5	32.5	31.7	29.7	36.1	33.2
69(1) 下顎体高	1	34.1	4	31.1	35.1		33.9	27.5	33.3	29.3	32.1	31.3		
70 下顎枝高	1	75.9			61.8	57.0	65.0	52.5	69.8	59.4	60.2	52.8	62.6	57.6
79 下顎枝角	1	113.5			129.0	129.0	128.3	127.0	122.9	132.2	128.5	128.2	127.7	131.3
70(3) 下顎切痕高	1	14.8	3	12.4	14.0	13.2	14.2	12.6	15.6	13.3	14.8	13.9	14.7	13.1
71(1) 下顎切痕幅	1	40.9	3	32.1	36.9	32.3	39.4	33.6	35.2	33.9	36.1	34.7	35.4	34.0

第10表 頭蓋骨計測表②

SK 番号		上顎歯															
		I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
		m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l
7	右																
	左																
30	右							—	9.6	9.0	9.8						
—18	左					7.7	—	7.7	10.4	6.5	10.1	—	—	—			
31	右																
—3	左					7.3	7.1	7.0	8.4	6.3	8.4	5.4	11.1				
33	右					7.5	8.1					—	—				
	左					8.1	8.8	—	—	—	—	—	—				
48	右	8.4	7.5	7.6	6.9	8.5	8.4	7.7	10.0	7.2	10.2	11.6	11.7	9.9	11.6		
	左	8.8	7.8	7.4	7.1	8.6	8.8	8.4	10.0	7.6	9.9	11.4	11.5	10.3	11.3	8.8	10.8
53	右					8.5	7.9			6.7	9.9	10.3	11.8	10.1	11.7		
	左	18.2	7.5					7.2	10.2	7.6	10.5	9.9	12.2	9.6	11.7	9.4	—
58	右			4.9	6.8	5.9	6.8	5.4	6.2	5.9	6.9	11.5	11.5	11.8	11.0		
	左	6.9	5.0	6.0	5.2	5.9	7.0			5.7	6.9	8.0	10.0	8.1	9.9	9.6	8.0
76	右	9.2	7.7	7.3	7.3	7.3	8.9	8.4	11.2	7.0	10.6	11.7	10.9	10.0	11.8	—	—
	左			7.0	8.8	7.8	8.9			7.0	10.2	—	—	10.3	—	11.9	10.5
77	右			—	—	8.2	8.6	8.4	9.7	7.1	9.2	11.4	—	9.7	10.8		
	左	—	—	6.9	6.7	8.4	—	7.9	9.5	—	—	10.9	11.3				
78	右	4.9	6.1	5.8	6.4	7.0	8.5	—	—	7.3	—	—	—	—	—	—	—
	左	5.1	5.9	6.4	6.4	7.3	8.5	7.7	8.1	6.8	—	11.2	10.2	11.3	10.5	—	10.6
85	右	—	—	—	—	7.9	7.7	7.2	9.2	6.4	—	—	—	8.9	10.1		
	左	—	—	—	5.9	7.5	7.5	7.0	9.2	5.8	8.9	10.1	11.0	9.8	10.1	8.8	9.7
86	右	6.3	4.9	4.5	4.8	6.0	6.5	5.2	7.7	4.2	7.0	6.0	8.9				
	左							7.5	—								
89a	右	7.3	6.1			—	—	7.4	9.2	7.1	8.9	10.5	11.1	10.5	11.1		
	左	—	6.3	—	—	—	—			—	—	9.8	—				
89b	右	6.9	6.6					—	—							—	—
	左					—	—	—	—	—	—			—	—		
89c	右											12.6	11.3	10.5	12.2		
	左					8.2	9.1	7.6	10.2			11.9	13.4	11.1	12.3	9.3	11.4
89d	右	8.5	6.9			8.3	8.1	7.5	10.0	8.4	10.3	11.1	12.4	10.2	12.5	11.8	11.4
	左	8.8	7.0	7.3	6.6	8.0	8.0	8.2	10.1	7.3	10.3	10.8	12.0	11.8	12.2	12.2	11.4
89e	右																
	左																
89f	右	9.3	8.1	—	—	8.5	9.9	8.1	—			—	—	—	—		
	左	9.1	8.4	7.7	7.0	8.5	—	7.2	—	6.5	9.6	—	12.5	—	—		
89h	右																
	左																
89i	右							7.9	—	—	—	—	—	9.5	16.8	—	10.8
	左							7.6	—	7.5	—	—	—	10.2	—		
89j	右	9.3	6.5	—	5.9	—	—	7.7	9.9	6.1	—	10.6	11.4	—	—		
	左	—	—	—	—	—	—	8.4	—	7.2	9.0	6.7	11.0	10.0	—		
91 南	右			6.2	6.0	7.2	6.6	6.9	—	6.5	8.3	11.0	10.9	11.3	10.0		
	左			6.2	—	7.2	6.9	7.2	7.6	7.2	8.3	11.5	10.3	10.4	10.1	11.1	10.5
99	右																
	左					8.5	9.2	7.3	10.1								
110	右	—	—	—	—	7.3	7.9	7.9	9.6	7.6	9.8	9.8	11.2	9.8	10.8	—	—
	左	8.5	6.5	7.5	6.3	8.1	8.4	7.4	9.5	6.5	9.4	9.8	11.3	10.0	11.5	—	11.3

第11表 歯冠計測表①

SK 番号		下顎歯															
		I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
		m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l	m-d	d-l
7	右							8.4	9.0					13.0	12.0		
	左					8.6	11.3	8.3	8.0			—	1.8	13.3	11.9		
30	右																
−18	左							7.5	—	7.4	—	11.6	11.2				
31	右																
−3	左			5.9	—	7.4	8.2			7.6	9.1	11.8	—	—	—		
33	右	3.2	4.4	—	—	6.0	6.5	6.6	7.3	4.2	5.5	10.5	9.9	9.5	9.9		
	左	6.1	6.6	6.1	6.9	7.3	7.5	7.2	7.4	6.5	7.4	7.7	8.7	—	—		
48	右	5.9	5.5	5.9	6.7	7.8	9.0	7.6	8.0	7.3	9.1	10.8	10.5	10.6	9.7		
	左			6.1	5.6	7.4	8.6	7.5	8.2	7.6	8.6	11.1	10.6	10.7	10.1		
53	右			—	—	7.0	7.7	—	—			—	—			8.3	11.2
	左	7.0	6.8							7.8	8.6			10.8	10.8	9.0	9.5
58	右	4.0	3.5					6.2	9.2	6.0	9.1	—	—	—	—		
	左							5.1	8.6			9.9	9.0	9.0	8.1	9.0	8.2
76	右	5.2	—	5.8	6.6	7.0	8.6	6.8	8.5	8.4	10.5	10.2	12.4	11.2	12.0	7.9	12.6
	左					7.5	8.9										
77	右	6.1	5.9	6.7	6.3	7.2	7.2	7.0	7.8	7.9	8.0	11.7	10.7	10.2	10.2		
	左			6.9	—	7.4	—	7.4	6.9	7.1	8.0	11.5	—	10.0	10.3		
78	右			—	—	7.5	—	7.0	—	—	10.9	10.8	—	10.0	—	—	—
	左	8.8	7.7	7.5	6.8	8.1	8.5	7.5	9.7	6.8	9.8	9.2	11.2	10.1	12.1	11.7	10.4
85	右			5.8	6.8	6.4	7.2	6.9	—	6.3	—	11.8	10.2	—	—	9.2	10.4
	左					—	—	6.3	7.5	6.5	8.5	11.2	—	9.8	9.9		
86	右	4.2	4.3	4.2	3.8	5.3	5.5	5.5	6.5	4.8	6.0			7.6	9.8	8.2	7.7
	左											9.2	8.0			8.2	7.5
89a	右	5.6	5.7	5.9	5.6	6.6	—	7.2	8.1	7.0	7.9	10.8	9.8	11.1	9.7		
	左	5.0	5.3	6.0	5.6	—	—	7.6	7.6	7.5	8.0	11.0	9.9	10.2	10.0		
89b	右			—	—	—	—	—	—	—	—	11.3	10.7				
	左			—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.3				
89c	右																
	左																
89d	右	3.5	3.5	4.0	4.0	5.0	6.0	5.5	6.1	—	—	10.5	9.5	10.0	7.0	9.9	9.1
	左	3.9	4.0	4.0	4.0	4.9	5.2	6.0	6.9	6.5	7.0	10.0	7.0	9.0	10.1	12.0	10.1
89e	右																
	左					6.2	6.8	6.7	6.6	7.0	7.3	10.9	9.3	9.8	9.4		
89f	右	6.3	6.8			7.3	9.0	7.0	8.5			11.8	12.4				
	左	5.7	6.7	7.0	6.7	7.5	8.8	8.0	9.0	7.8	9.1	11.9	13.1	—	—		
89h	右	6.5	7.3	—	6.5	7.2	8.0	7.6	8.3	—	—	11.6	11.4	11.8	11.2	10.8	11.0
	左							—	—	8.3	—	12.0	11.3	11.4	11.0	—	—
89i	右																
	左																
89j	右	6.0	5.0	—	—	7.6	8.0	—	—	6.9	8.1	10.3	10.2	11.2	10.2	11.4	10.0
	左	—	5.5	6.3	5.6	—	—	7.4	—	7.4	7.8	—	—	—	—	9.9	9.5
91 南	右	9.0	7.1	7.1	6.5	8.3	7.8	7.1	9.8	7.3	9.1	11.4	11.3	10.0	10.6		
	左	9.1	7.0	7.1	6.3	7.5	8.1	7.0	9.9	6.5	9.2	10.9	11.5	10.5	10.6		
99	右																
	左					—	—										
110	右	—	—	5.8	6.2	7.2	6.6	7.2	7.3	7.6	7.7	10.7	10.3	9.7	9.9	10.0	9.4
	左	—	—	—	—	—	—	7.5	7.9	7.7	7.9	11.6	11.0	11.6	10.6	9.9	9.5

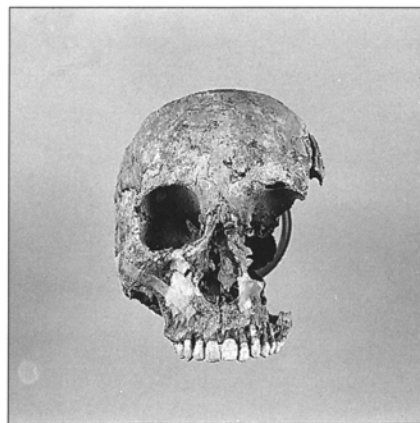
第12表 歯冠計測表②



SK30



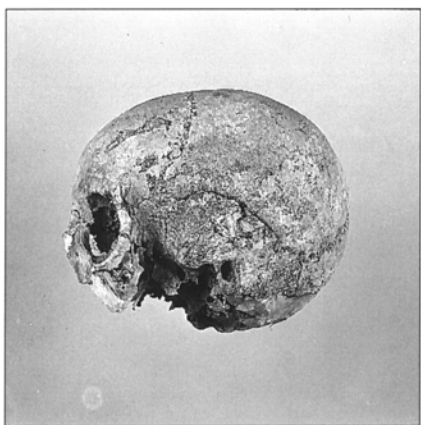
SK33



SK48



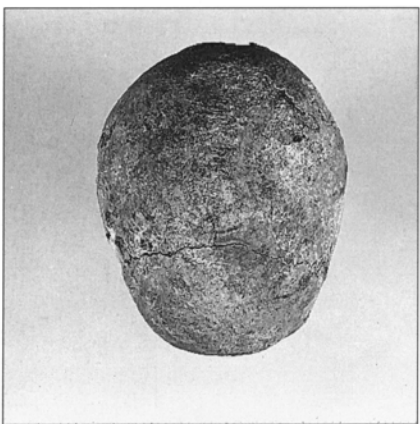
SK30



SK33



SK48



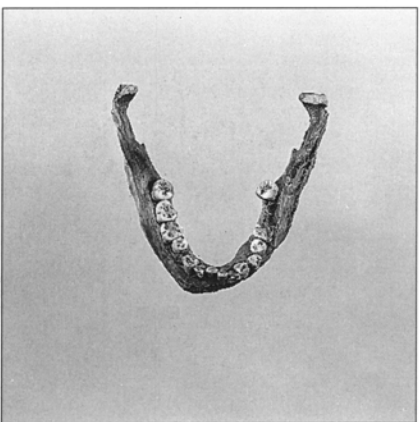
SK30



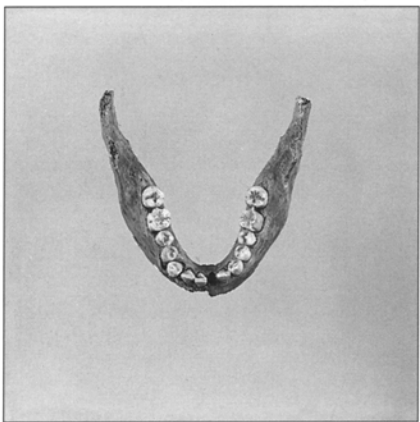
SK33



SK48

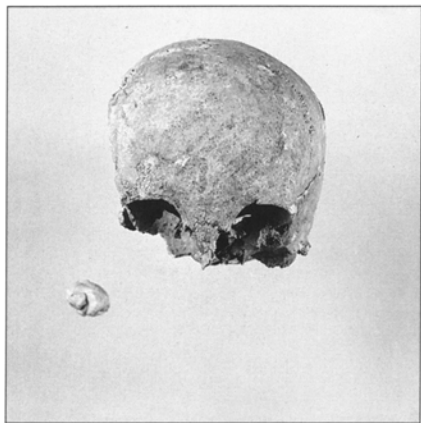


SK30



SK48

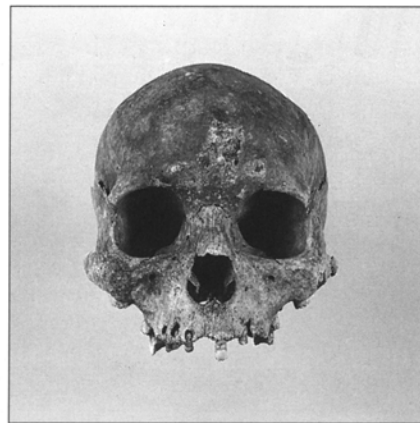
写真1 出土人骨①



SK49



SK78



SK89b



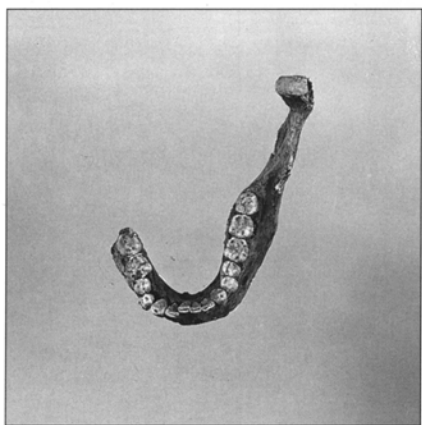
SK49



SK82



SK89b



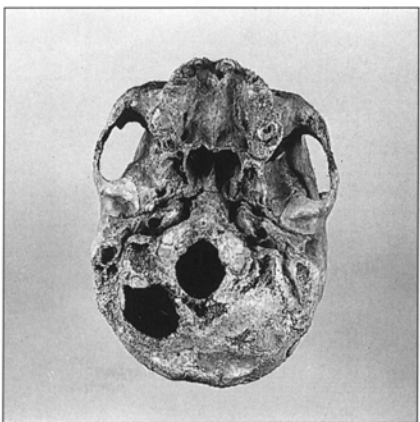
SK78



SK89b



SK89b



SK89b

写真2 出土人骨②



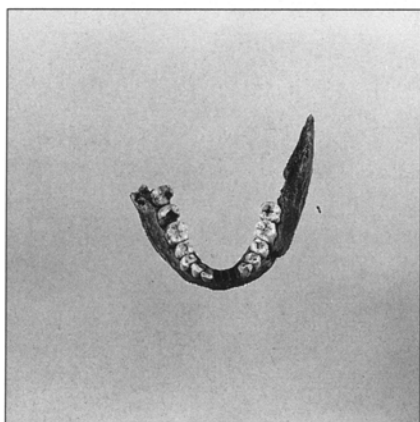
SK85



SK89f



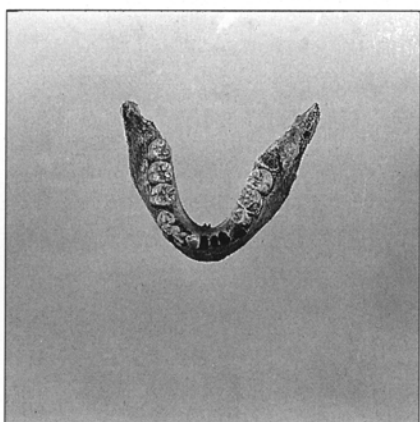
SK89f



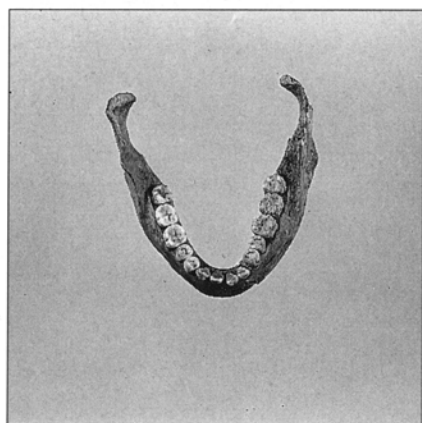
SK85



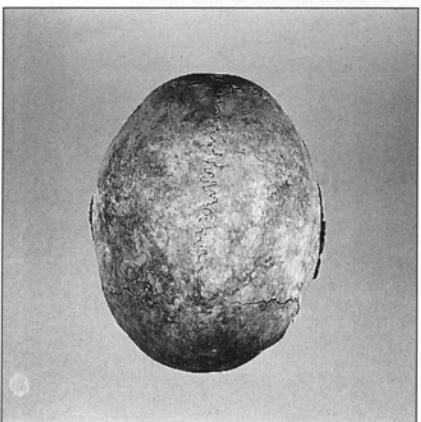
SK89f



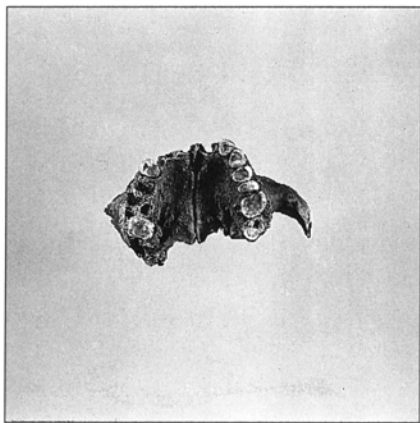
SK89h



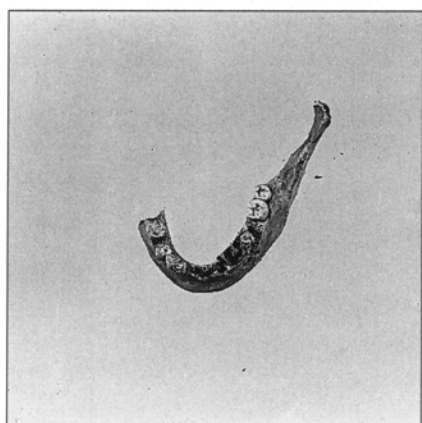
SK89a



SK89f

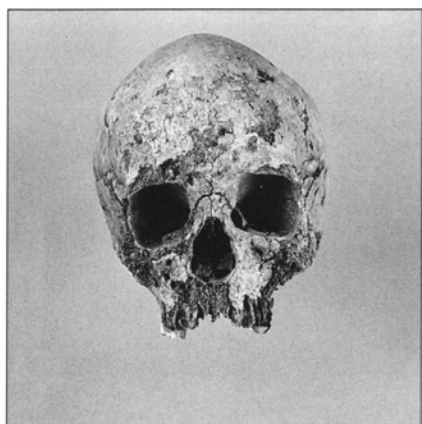


SK89f



SK91

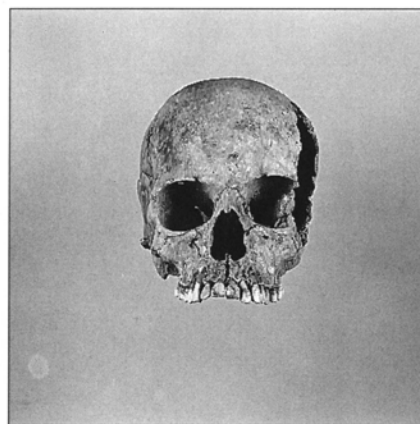
写真 3 出土人骨③



SK89i



SK89i



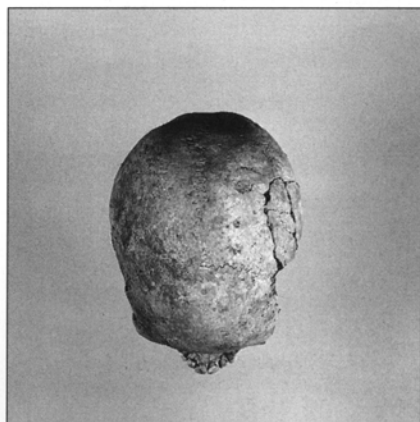
SK110



SK89i



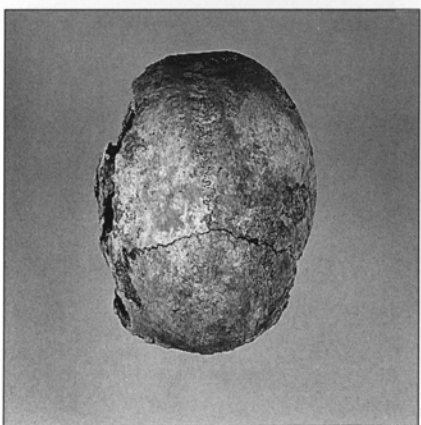
SK89i



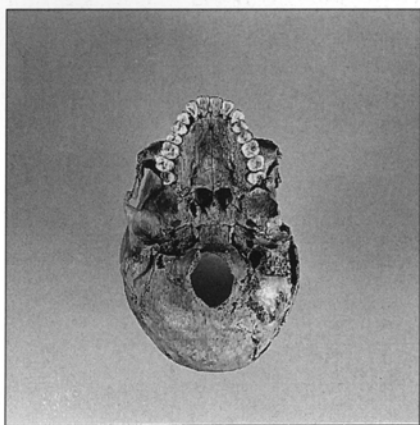
SK110



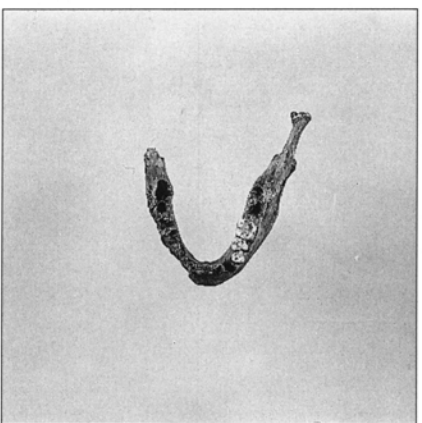
SK89i



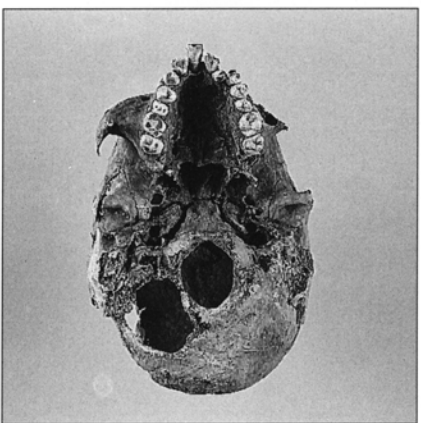
SK89i



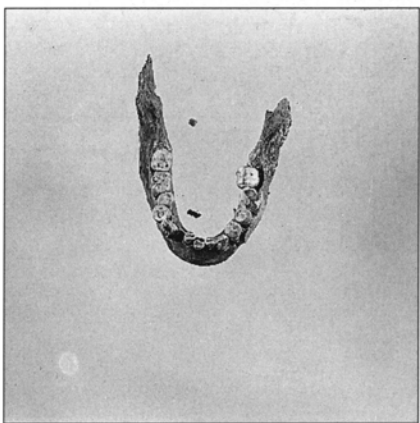
SK110



SK89i



SK89i



SK110

写真4 出土人骨④

第V章 ま と め

本報告書では、円通寺の古墓と言い伝えられる地点について、発掘調査した知見に基づいて整理報告作業を行った。調査によって得られたいくつかの情報について、その意味するところを私見も交えてまとめてみたい。

遺構については、調査区全体で3群のまとまりがあると解釈し、群ごとに取り上げることにより、その検出内容にも各群なりの特徴が見出せることを期待した。しかし、結果としてこの試みは、期待を裏切ることになった。本調査地点では、時期を特定し得る遺物が出土した遺構がほとんどないため、時期的なまとまりが解明できなかった。さらに遺構の形態的特徴は、群ごとに差を見出せるほどではなく、比較する材料に事欠いた。こうした中で、ある程度様相を推察し得たのは墓道の存在である。推察する要因としては、等高線上に表れる尾根筋や、緩やかな傾斜で等高線が巡る部分に、遺構が検出されない帯状の空白部が見られたため、こうした部分が墓道であった可能性を想定した。この想定した墓道位置は、各遺構群の境界部とも重なる部分が多く、各遺構の比較分析材料が乏しかったことが惜しまれる。

遺跡から出土した土器・陶磁器については、最初に述べたように遺構内から出土したものはほとんど見られなかった。時期的には、古いものは12c後半から13c前半にまでさかのぼるものも含まれるが、これらはあくまでも製作年代であって、この調査地点での使用または廃棄された年代と一致するとは考えにくい。こうしたものを除けば、これら出土遺物の主体を成す時期は、幕末から明治にかけてのものと思われ、調査地の墓域としての使用もこの時期が主体であったことが窺える。

近世の墓制は、考古学的な調査が少ないながらも各地で行われるようになり、断片的ではあるものの、階層制、宗教色、思想的背景などが考察されつつある。これらの調査事例が示すようにこの時期の埋葬は、現在の行政区画では隣接するような市町村域であっても、方法がそれぞれ全く異なる場合が多い。実際、本遺跡の所在する大府市と名古屋市は隣接するが、本遺跡と同じく墓の跡で、時期的に近似する中区白川公園遺跡の調査事例では、生前に使用したであろう器を多く伴うなど、副葬のされ方に違いが見られる。この差を、都市部とその近郊農村との差と捉えるのか、被葬者の所属する宗門の差、あるいは階層的な差に要因を求めるのかは、比較する調査事例の増加を待ちつつ、今後の課題としなければならないであろう。

いずれにしても墓制は、各時代の社会構造を構成するさまざまな要素がそこに含まれており、地域史を研究するためには欠くことのできない材料である。本遺跡の発掘調査及び報告が、この地域における歴史を解明する上で、その一助として有効な資料となることを願う。

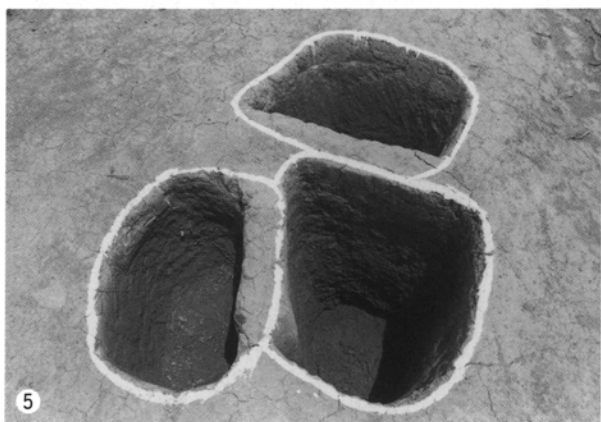
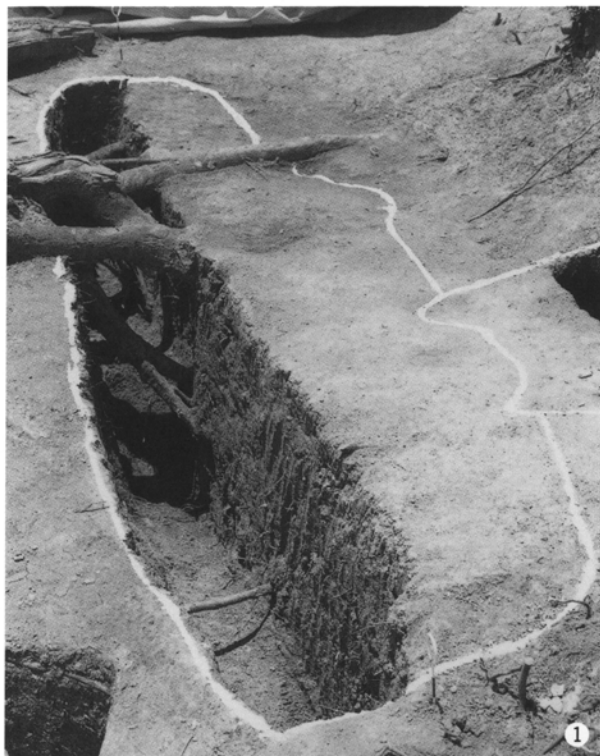
圖 版

■ 図版目次

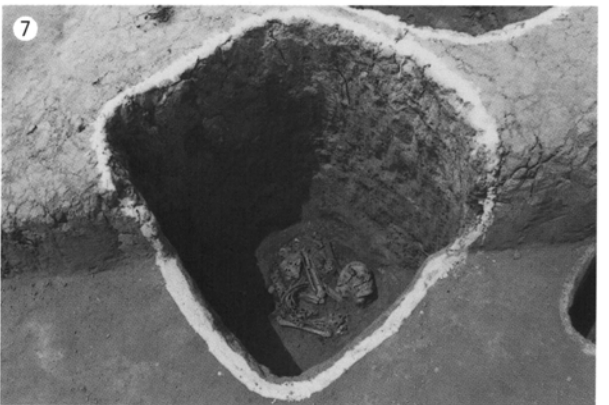
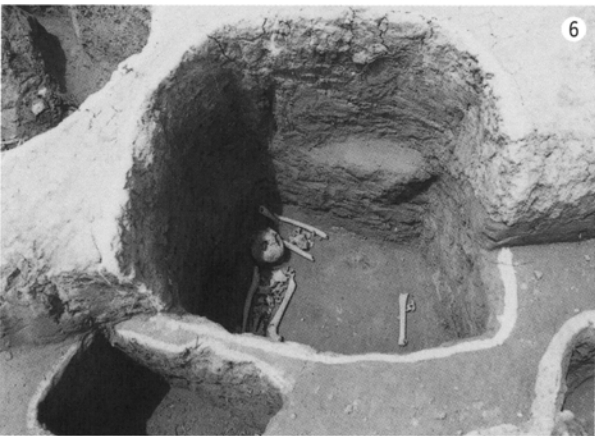
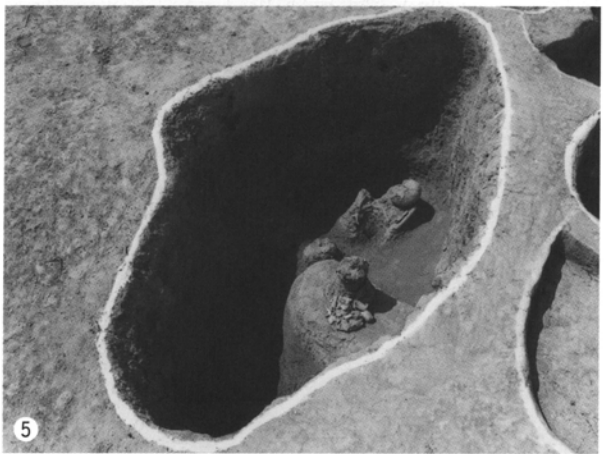
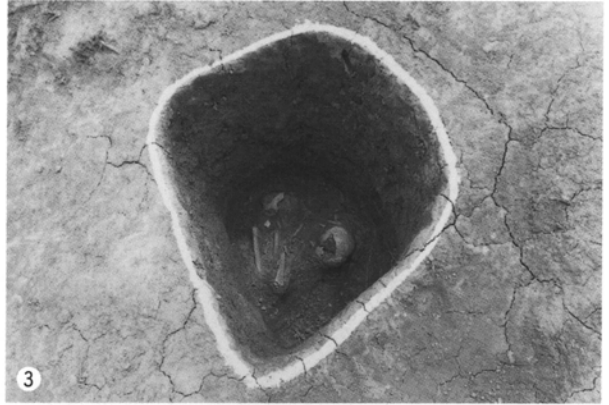
- 図版 1 ①表土はぎ風景（東より）
②遺構検出状況（西より）
- 図版 2 ①SK91 断面（北より）
②SK107 周辺（北東より）
③SK01 周辺（北西より）
④SK30 周辺（東より）
⑤SK62 周辺（南より）
⑥SD01、02、03（南西より）
- 図版 3 ①SK67 周辺（西より）
②SK80 遺物出土状況（東より）
③SK49 人骨出土状況（北東より）
④SK30、55人骨出土状況（北東より）
⑤SK31 人骨出土状況（南東より）
⑥SK82 人骨出土状況（東より）
⑦SK85 人骨出土状況（東より）
- 図版 4 ①SK48 人骨出土状況（南西より）
②SK89 人骨出土状況（南西より）
③SK89 南端部分（東より）
④SK89 中央南部分（東より）
⑤SK89 北端部分（北より）
- 図版 5 ①SK77 人骨出土状況（南西より）
②SK78 人骨出土状況（東より）
③SK77 人骨出土状況（西より）
④SK53 人骨出土状況（西より）
⑤調査区完掘状況（西より）
- 図版 6 ①SK29 人骨出土状況（北東より）
②SK61 人骨出土状況（東より）
③中央土抗群脇遺物出土状況（北西より）
④作業風景（西より）
⑤航空測量風景（東より）
- 図版 7 調査区全景（左が北）
- 図版 8 遺物写真(1)
- 図版 9 遺物写真(2)
- 図版10 遺物写真(3)



①表土はぎ風景（東より） ②遺構検出状況（西より）



① SK91 断面 (北より) ② SK107 周辺 (北東より) ③ SK01 周辺 (北西より)
④ SK30 周辺 (東より) ⑤ SK62 周辺 (南より) ⑥ SD01、02、03 (南西より)



① SK67 周辺（西より） ② SK80 遺物出土状況（東より） ③ SK49 人骨出土状況（北東より）
④ SK30、55 人骨出土状況（北東より） ⑤ SK31 人骨出土状況（南東より）
⑥ SK82 人骨出土状況（東より） ⑦ SK85 人骨出土状況（東より）



① SK48 人骨出土状況（南西より） ② SK89 人骨出土状況（南西より） ③ SK89 南端部分（東より）
④ SK89 中央南部分（東より） ⑤ SK89 北端部分（東より）



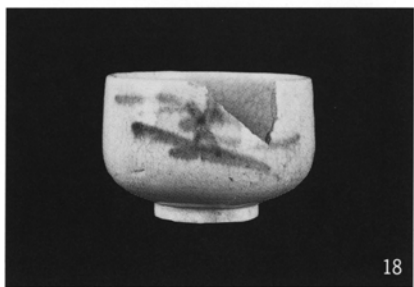
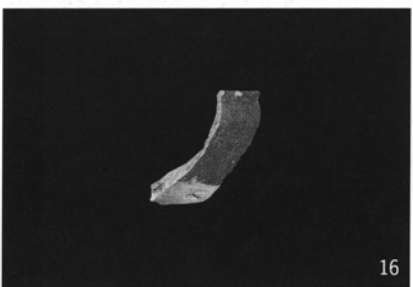
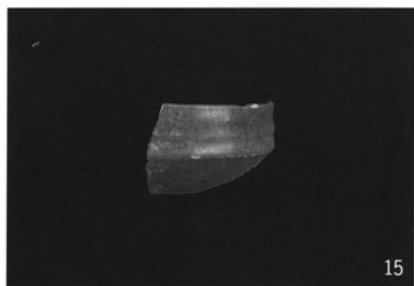
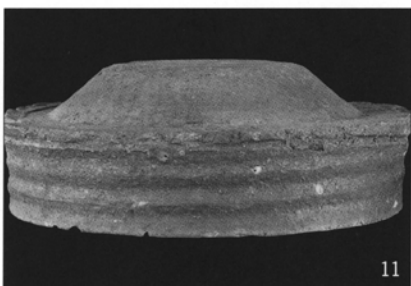
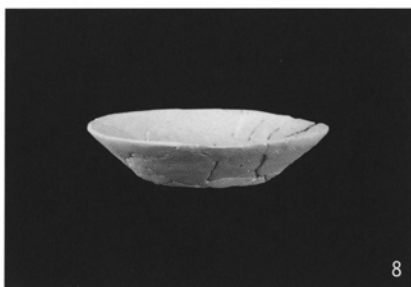
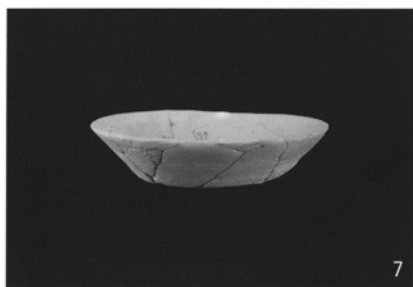
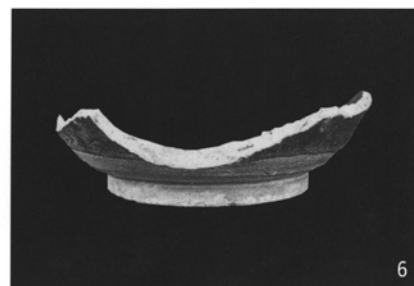
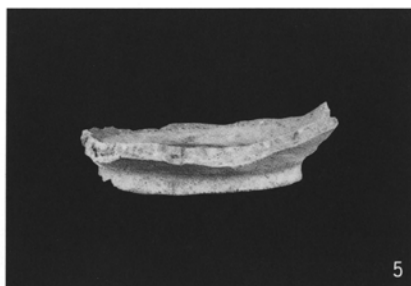
① SK77 人骨出土状況（南西より） ② SK78 人骨出土状況（東より） ③ SK77 人骨出土状況（西より）
④ SK53 人骨出土状況（西より） ⑤ 調査区完掘状況（西より）



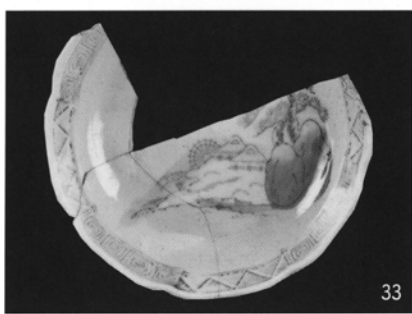
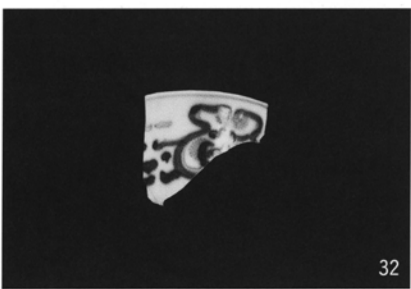
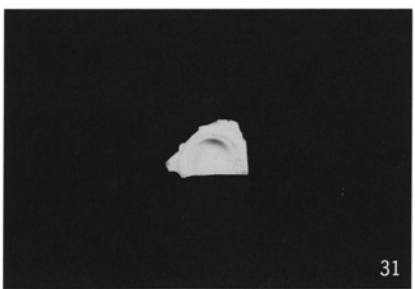
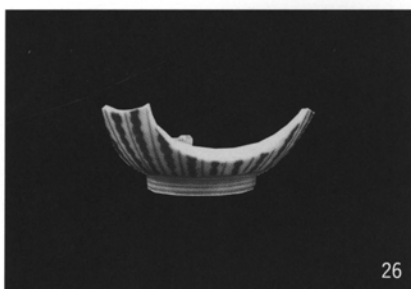
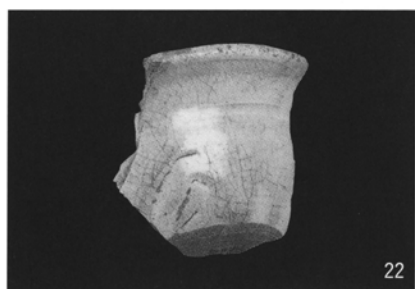
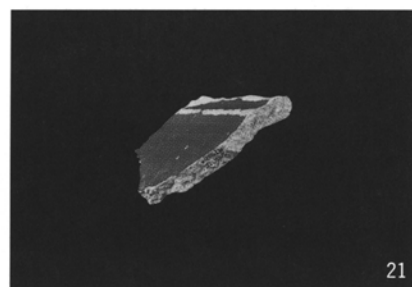
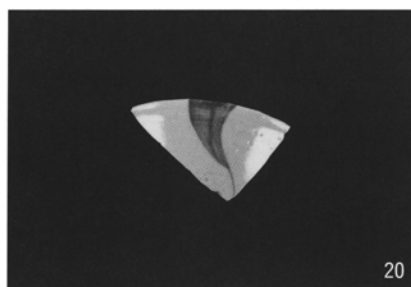
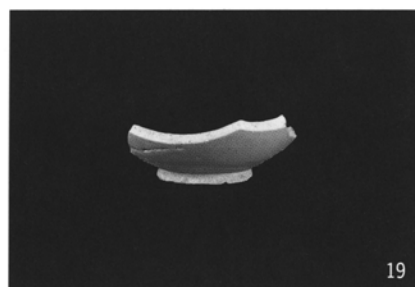
① SK29 人骨出土状況（北東より） ② SK61 人骨出土状況（東より）
③ 中央土抗群脇遺物出土状況（北西より） ④ 作業風景（西より） ⑤ 航空測量風景（東より）

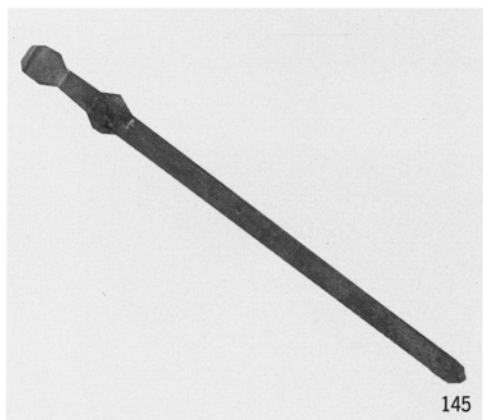
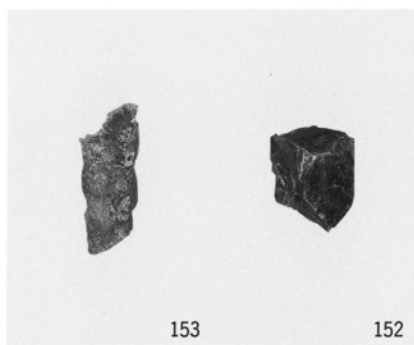
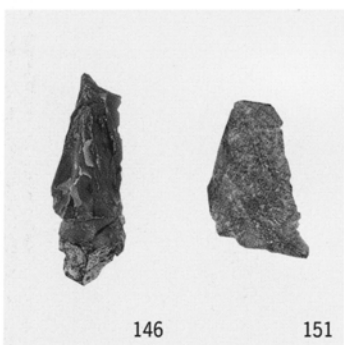
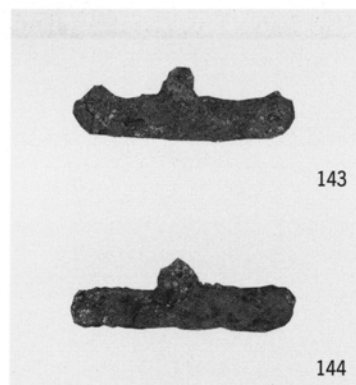
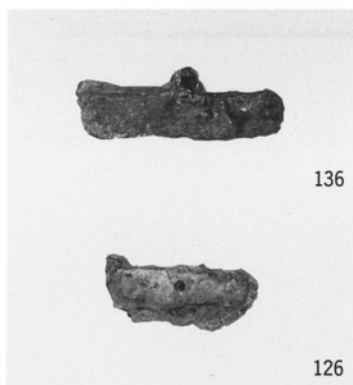
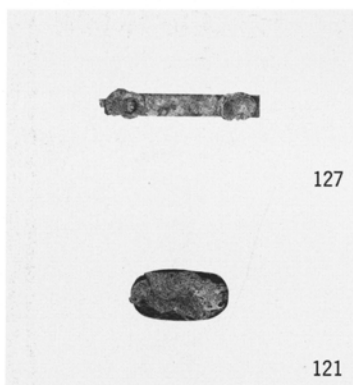
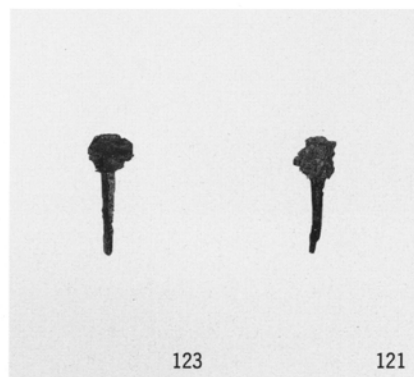
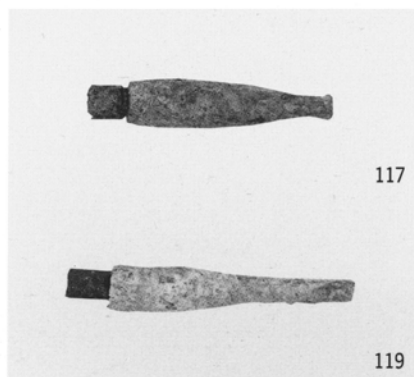
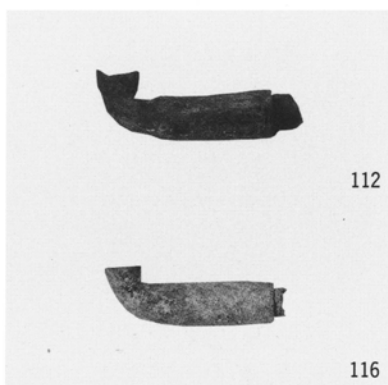


調査区全景（左が北）

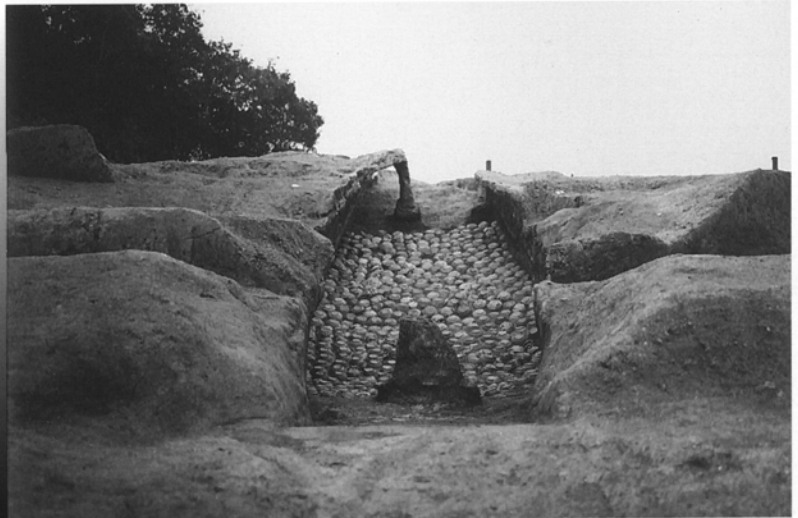


遺物写真(1)





NA335 号窯 I・II



例 言

1. 本編は愛知県名古屋市長区大高町高根山地内に所在する、NA 335 号窯の発掘調査報告書である。
2. 調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局による「第2 東海自動車道・伊勢湾岸道路」建設工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて建設省、日本道路公団から委託を受けて実施した。調査面積は平成7 年度が900 m²、平成8 年度が250 m²である。
3. 発掘調査は平成7 年8 月から11 月、平成8 年6 月から7 月にかけて実施した。さらに平成8 年度から9 年度には、調査報告書作成のため整理事業を実施した。
4. 現地における発掘調査は、多くの作業員の方々の参加を得て、平成7 年度は本センター水谷寛明（主査・現佐久島小学校）、松田訓（調査研究員）、加藤博紀（調査研究員）が担当し、伊藤羊子（発掘調査補助員）がこれを補佐した。また、大府市歴史民俗資料館の古田功治（主事）が研修として参加した。
平成8 年度発掘調査は、本センター坂倉澄夫（主査・現高浜中学校）、藤井孝之（調査研究員）、中野良法（調査研究員）が担当し、富田智恵（発掘調査補助員）がこれを補佐した。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、名古屋市教育委員会、大府市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本編の編集は松田訓が担当し、執筆分担は第IV 章を分析依頼したパレオ・ラボ株式会社が、第V 章第1 節第4 項を奥村勝信が担当し、それ以外を松田が担当した。
7. 遺物整理事業については松田 訓が担当し、次の方々の参加を得た。
奥村勝信、渡辺泰子、河合明美（調査研究補助員）、棚木えみ子、中西和子、加藤豊子、平野みどり、田中和子、野川佳江（整理補助員）
8. 本編に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第VII 系に準拠する。また、本編に示す海拔表記は、東京湾標準（T. P.）の数値である。
9. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として本文中に示した。
10. 調査記録は本センターにて保管する。
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
12. 本編の執筆にあたり檜崎彰一・藤澤良祐・中野晴久氏には、出土遺物の時期的解釈において多くの指導を得た。さらに本遺跡の調査・報告にあたって、つぎの諸氏、諸機関にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝したい。（五十音順、敬称略）

赤羽一郎 伊藤 厚 伊藤正人 尾野義裕 蟹江吉弘 金子健一 城ヶ谷和広 立松 宏
山崎純男 余合昭彦
愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 調査の概要

第1節	調査に至る経緯	……………(松田)	1
第2節	調査の経過	……………(松田)	1
第3節	遺跡の位置	……………(松田)	2
第4節	歴史的環境	……………(松田)	4

第Ⅱ章 遺構

第1節	基本層序	……………(松田)	6
第2節	第Ⅰ次調査区の遺構	……………(松田)	8
第3節	第Ⅱ次調査区の遺構	……………(松田)	27

第Ⅲ章 遺物

第1節	器種分類	……………(松田)	34
第2節	第Ⅰ次調査区の遺物	……………(松田)	36
第3節	第Ⅱ次調査区の遺物	……………(松田)	73

第Ⅳ章 自然科学的分析

窯跡焼土の熱残留磁化測定		……………(パレオ・ラボ株式会社)(藤根)	82
第1節	はじめに	……………	82
第2節	考古地磁気年代推定の原理	……………	82
第3節	試料採取と残留磁化測定および結果	……………	83

第Ⅴ章 補論

第1節	出土遺物の観察・計測法	……………(松田・奥村)	92
第2節	分類・計測の結果	……………(松田)	97
第3節	遺構・遺物の特徴	……………(松田)	106

挿図目次

第1図	遺跡位置図	2	第49図	遺物実測図⑤	76
第2図	遺跡周辺地形図	3	第50図	遺物実測図⑥	77
第3図	遺跡周辺位置図	5	第51図	遺物実測図⑦	78
第4図	調査区基本層序概念図	6	第52図	Shibuya (1980)による地磁気永年変化曲線	156
第5図	調査区I南北ベルト土層断面図(東より)	7	第53図	SY01 焼土(No. 04)の段階交流消磁測定結果	82
第6図	調査区遺構位置図(1/300)	9	第54図	SY02 焼土(No. 07)の段階交流消磁測定結果	84
第7図	SY01 平・断・立面及び見通し図(1/40)	10	第55図	SY03 焼土(No. 09)の段階交流消磁測定結果	84
第8図	SY02 平・側面図(1/40)	11	第56図	SY04 焼土(No. 01)の段階交流消磁測定結果	85
第9図	SY02断面図・床面下施設平面図(1/40)	12	第57図	SY05 焼土(No. 04)の段階交流消磁測定結果	85
第10図	SY03 平・側面図(1/40)	15	第58図	SY06 焼土(No. 07)の段階交流消磁測定結果	86
第11図	SY03 断面図(1/40)	16	第59図	SY07 焼土(No. 07)の段階交流消磁測定結果	87
第12図	SY04断面図・床面下施設平面図(1/40)	16	第60図	窯焼土の地磁気測定結果と永年変化曲線	90
第13図	SY04 平・側面図(1/40)	18	第61図	積分計算による容量1	95
第14図	SY05 平・側・断面図(1/40)	20	第62図	積分計算による容量2	96
第15図	SY05 床面下施設上段・下段平面図(1/40)	21	第63図	遺構別器種組成図	98
第16図	灰原 A1・2層平面図(1/100)	23	第64図	出土器種組成図	99
第17図	東西ベルト断面図(北より・1/40)	24	第65図	器種別器形組成図	99
第18図	灰原 B1~6層平面図(1/40)	25	第66図	器種別見込み部調整内訳	101
第19図	灰原 B層断面図	26	第67図	器種別付着痕内訳	101
第20図	第II次調査区平面図(1/300)	28	第68図	器種別底部調整内訳	102
第21図	SY06 平・断面図(1/40)	30	第69図	器種別焼成度組成図	102
第22図	SY07 断面図・床面下施設平面図(1/40)	32	第70図	出土地点別器種組成図	103
第23図	SY07 断面図(1/40)	33	第71図	碗の容量解式別組成図	104
第24図	器種分類図	35	第72図	碗の解式別容量分布	105
第25図	遺物実測図①	40	第73図	碗の容量別内訳	105
第26図	遺物実測図②	41	第74図	SY02~05 床面傾斜(1/40)	107
第27図	遺物実測図③	42	第75図	SY06・07 床面傾斜(1/40)	108
第28図	遺物実測図④	43			
第29図	遺物実測図⑤	44			
第30図	遺物実測図⑥	45			
第31図	遺物実測図⑦	46			
第32図	遺物実測図⑧	47			
第33図	遺物実測図⑨	48			
第34図	遺物実測図⑩	49			
第35図	遺物実測図⑪	50			
第36図	遺物実測図⑫	51			
第37図	遺物実測図⑬	52			
第38図	遺物実測図⑭	53			
第39図	遺物実測図⑮	54			
第40図	遺物実測図⑯	55			
第41図	遺物実測図⑰	56			
第42図	遺物実測図⑱	57			
第43図	遺物実測図⑲	58			
第44図	遺物実測図⑳	59			
第45図	遺物実測図㉑	60			
第46図	遺物実測図㉒	61			
第47図	遺物実測図㉓	74			
第48図	遺物実測図㉔	75			

表目次

第1表	調査工程	1
第2表	第I次調査区 遺物観察表①	62
第3表	第I次調査区 遺物観察表②	63
第4表	第I次調査区 遺物観察表③	64
第5表	第I次調査区 遺物観察表④	65
第6表	第I次調査区 遺物観察表⑤	66
第7表	第I次調査区 遺物観察表⑥	67
第8表	第I次調査区 遺物観察表⑦	68
第9表	第I次調査区 遺物観察表⑧	69
第10表	第I次調査区 遺物観察表⑨	70
第11表	第I次調査区 遺物観察表⑩	71
第12表	第I次調査区 遺物観察表⑪	72
第13表	第II次調査区 遺物観察表①	79
第14表	第II次調査区 遺物観察表②	80
第15表	第II次調査区 遺物観察表③	81
第16表	残留磁化測定(150 0e 消磁)と統計計算結果	88
第17表	残留磁化測定(150 0e 消磁)と統計計算結果	89
第18表	考古地磁気年代推定表	91
第19表	遺構別器形組成一覧表	100
第20表	器形別口縁形態組成表	100

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

NA 335 号窯は、愛知県名古屋市緑区大高町高根山地内に所在する。この地は、愛知県遺跡分布地図に滅失と記載された高根山古窯（遺跡番号 01-14132）の北西側に隣接しており、この地内に建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局によって、第2 東海自動車道・伊勢湾岸道路の建設工事が行われることとなった。このため愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会では、道路建設工事に先立ち、この地の埋蔵文化財の包蔵状況を確認するため試掘調査を行っており、複数の窯跡及び、山茶碗、小皿片などを確認した。これらの遺構、遺物検出地点は道路建設予定地内に入っており、事前に発掘調査が必要と判断された。この遺跡の名称は、試掘調査後、名古屋市遺跡分布地図に記載されたものである。

（財）愛知県埋蔵文化財センターではこのような事前協議を経て、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、名古屋市教育委員会の協力のもと、平成7 年8 月から11 月まで発掘調査（第Ⅰ次・900 m²）を実施した。さらにこの調査時に、調査区南西側の隣接地に窯跡が確認されたため、平成8 年6 月から8 月にかけてこの部分の発掘調査（第Ⅱ次・250 m²）を実施した。

第2節 調査の経過

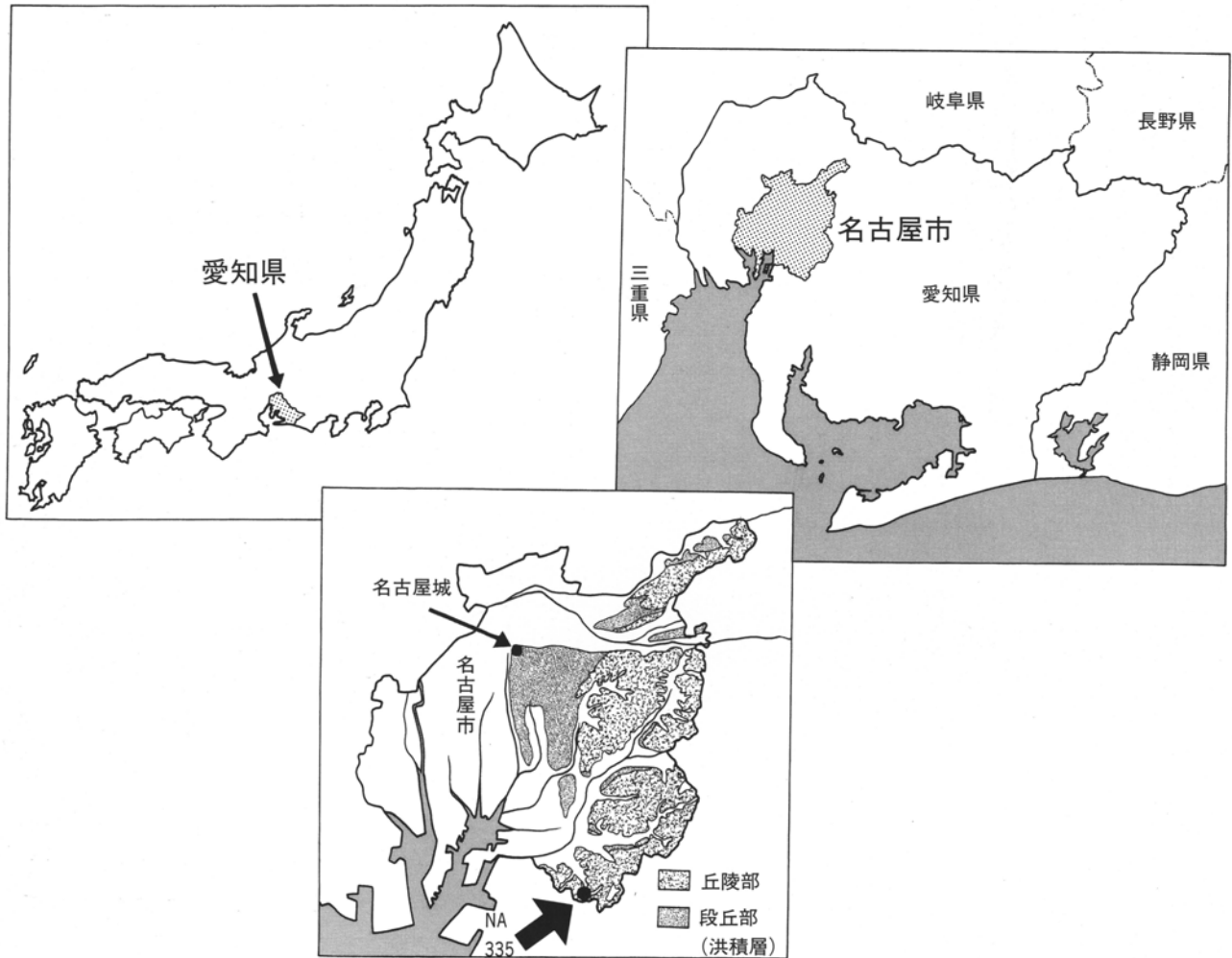
第Ⅰ次調査区は、道路建設予定地内の丘陵北西向き斜面に一括して設定した。この調査区に平成7 年7 月から資材搬入を行い、表土剥ぎを実施し、発掘作業を開始したのは8 月3 日であった。調査地の旧態は林及び畑地であり、調査期間は3 ヶ月強を要し、測図、写真撮影、補足調査を含めて11 月10 日に現地調査を終了した。第Ⅱ次調査は、前年度に遺構の位置が確認されていたため、平成8 年6 月10 日に資材搬入を行い、発掘作業を開始したのは6 月12 日であった。調査区の埋め戻し作業終了は、8 月2 日であった。

出土遺物の整理作業は、調査中及び調査終了後、洗浄・注記作業を現地事務所で行い、引き続き本センター三河事務所において、調査報告書作成までの作業を行った。

	H. 7	7	8	9	10	11	12	H. 8	1	2	3	4	5	6	7
第Ⅰ次調査	←				→										
第Ⅱ次調査														←	→

第1表 調査工程

第3節 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。NA 335 号窯の位置する名古屋市は、愛知県西部の伊勢湾岸最奥部に位置し、木曾三川（木曾・長良・揖斐）などによって形成された濃尾平野南端、名古屋台地、尾張丘陵などに市域を広げる、東海地方屈指の大都市である。

市域の中央部をめぐる低地は、縄文海進や河川による堆積物によって形成された沖積地である。市域の中央部は、この沖積地からは段丘状に高い面を形成しており、この名古屋台地のさらに東方に尾張丘陵が広がっている。

NA 335 号窯はこの尾張丘陵南西端、天白川と境川とに挟まれた丘陵上に立地しており、知多半島基部とも表現できる地で、名古屋市域では最南端にあたる。



第2図 遺跡周辺地形図(国土地理院 1/20 万地勢図「名古屋」部分)

第4節 歴史的環境

NA 335 号窯の位置する丘陵は、狭い谷が複雑に発達しており、変化に富んだ地形を形成している。こうした複雑な地形は、海に近いことも含めて豊かな動植物の生態系を生み、古くから人々が生活を営む場として利用されてきた。たとえば台地先端部分や段丘面、さらに低地に沿った部分には、各時代の人々の生活の痕跡が今も多く残されている。こうした遺跡の中で、調査地の所在する名古屋市南部域の窯跡を中心として、その歴史的環境を概観してみたい。

遺跡から北東に約 25 km の位置に、標高 629 m の猿投山がある。この山から南西側に広がる丘陵は、古代より焼き物生産を行うための窯が、その地形を利用して築かれてきた。この地は、古くは 5 世紀から 14 世紀に至るまで、わが国における当該期の一大窯業生産地として、煙を立ち昇らせ続けた。この丘陵上に分布する古窯は、その全域が猿投山西南麓古窯跡群（以下猿投窯と記す）と呼ばれ、遺跡の位置する場所はそのうちで、鳴海（N）地区、有松（A）支群にあたり、本遺跡を NA と称するのもこの鳴海地区有松支群の頭文字に由来する。この猿投窯内にあるこのほかの地区としては、東山（H）、岩崎（I）、折戸（O）、黒笹（K）などがあり、支群としては、同じ鳴海地区内に鳴海支群（NN）が存在する。

本遺跡の属する鳴海地区の範囲は、かつて名古屋市教育委員会、愛知県教育委員会が行った分布調査などでは、大枠での捉え方に差はないものの、それぞれが細部においていくらか異なった見解を示しており、特に鳴海・有松支群の境界は、研究者間でも統一見解が得られていなかった。この問題に対して尾野善裕は、1994 年に名古屋市教育委員会が発行した「NN 330 号窯発掘調査報告書」の中で、鳴海地区の範囲及び、この中の鳴海・有松支群の境界について再検討を行い、遺跡名称についても整理している。尾野の提示では、東海市北辺の窯跡が新たに有松支群に組み込まれており、この扱いを慎重にすべき点が気になる。しかし、その点を除けば尾野案は、猿投窯鳴海地区について明解な理由とともに境界が示され、遺跡名称も現時点でもっともわかりやすく整理が成されている。以上の理由から、ここでは、地区、支群の設定、窯名の整理において尾野案に依拠することとした。

NA 335 号窯は、鳴海地区有松支群の中では、分布の中心からやや南東側に位置する。有松支群は、かつて名古屋市教育委員会が 1976 年に窯名を整理した時点では、東海道本線の走る断層線以東とされており、この境界線における本遺跡は、有松支群外となる。愛知県教育委員会が 1980 年に行った分布調査報告では、有松支群の境界は明確に示されていない。こうしたそれぞれの扱いが、いくつかの混乱を招いているのである。

周辺の古窯に目を向けてみると、有松支群西端には、この支群中唯一確認されている須恵器生産の NA 11 号窯があるが、実態が把握されておらず、これに継ぐものは 10 世紀代と思われる灰釉陶器の NA 203・204 号窯が支群の北側で確認できる。しかし、この支群の中で圧倒的に多く分布するのは 12 世紀末～13 世紀代の山茶碗窯で、本遺跡や、隣接して確認される窯、周辺丘陵の窯跡も含めて、ほとんどこの時期のものである。



●=須恵器・灰釉陶器窯

■=山茶碗窯

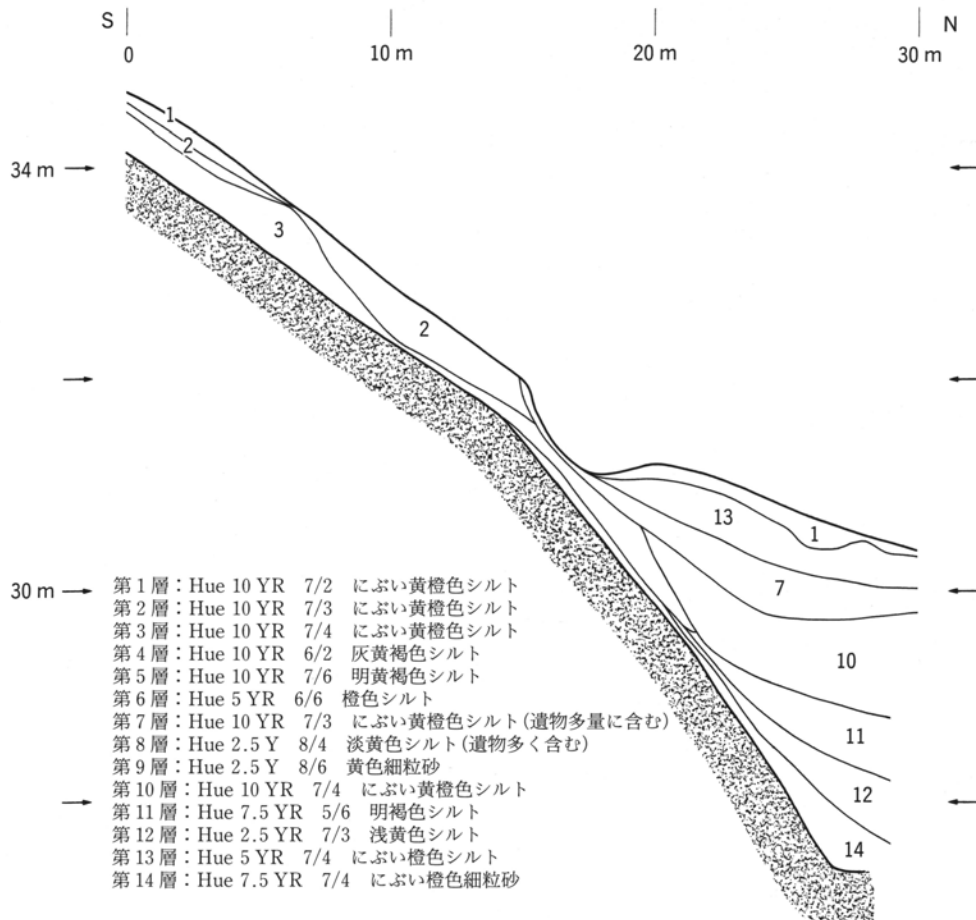
第3図 周辺遺跡位置図(国土地理院 1/5 万 地形図「名古屋南部」部分)

第II章 遺 構

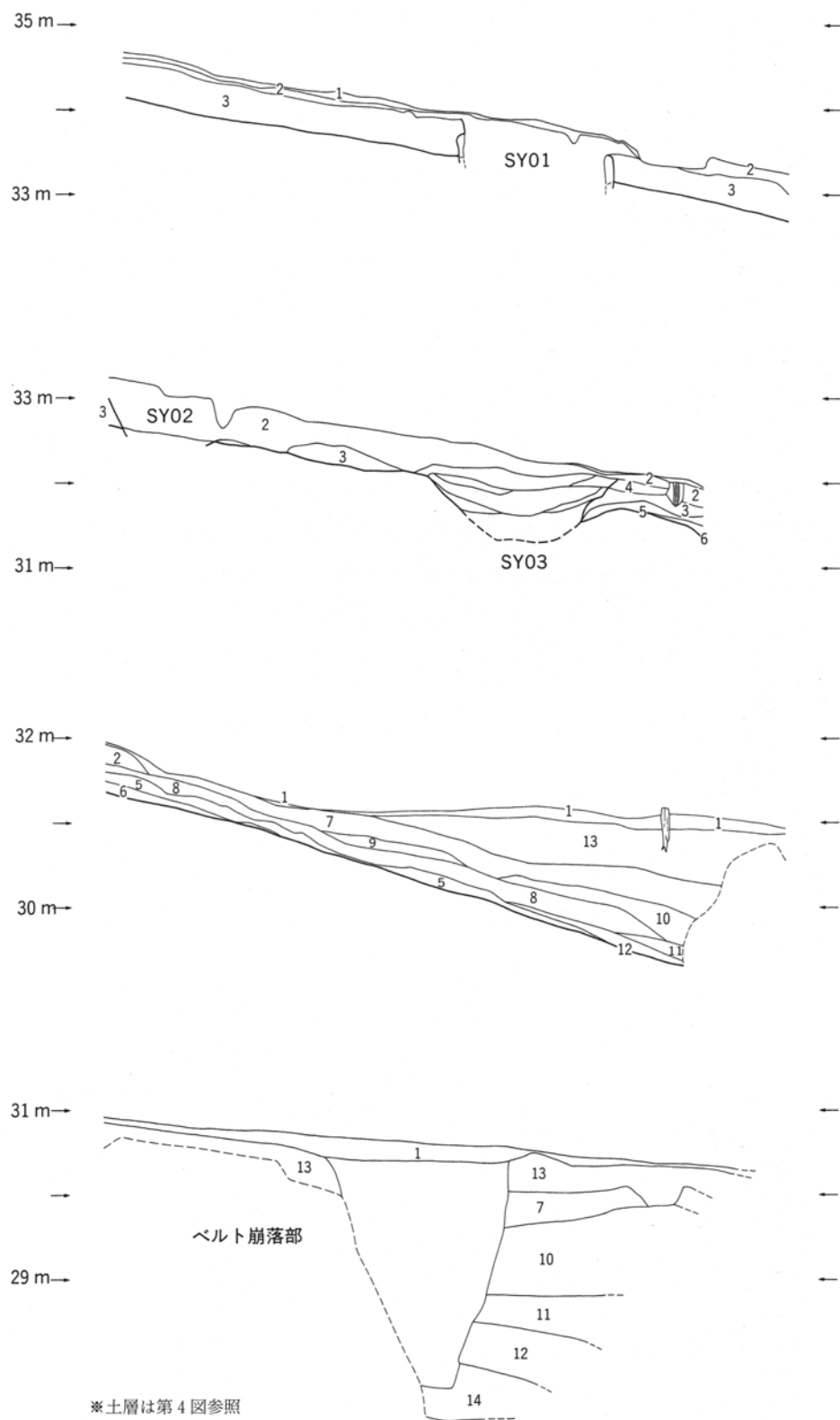
第1節 基本層序

NA 335 号窯の所在する地点の基本層序を概観してみると、第 4 図のような状況が確認できる。まず表土層として、10～20 cm の厚さでにぶい黄橙色シルトが堆積し、調査区上位面ではこの表土の下部堆積層も、地山に至るまで同様の土層が続く。SY01～03 は、この表土直下で窯壁が確認できる。調査区下位面に至ると、上位面では表土から地山までの平均が約 50 cm であったのに対し、厚いところで約 3 m の堆積が認められる。このうち、いわゆる「灰層」は上下 2 層認められ、地山までの堆積が厚くなり始める地点に始まり、上層は調査区外までのびるが、下層は地山の傾斜が急になり始める位置で、その範囲を留める。

傾斜地に位置する調査区内の標高は、最高位点で 35.08 m、最低位点で 27.38 m を地山面で測る。地形としては南側に最高位点があり、北側に最低位点がある北向きの斜面で、調査区(I)の中央攪乱部分には、南東から北西に向けて下る尾根筋が存在したようである。



第 4 図 調査区基本層序概念図



第5図 調査区(I)南北ベルト土層断面図(東より)

第2節 第I次調査区の遺構

第1項 概 要

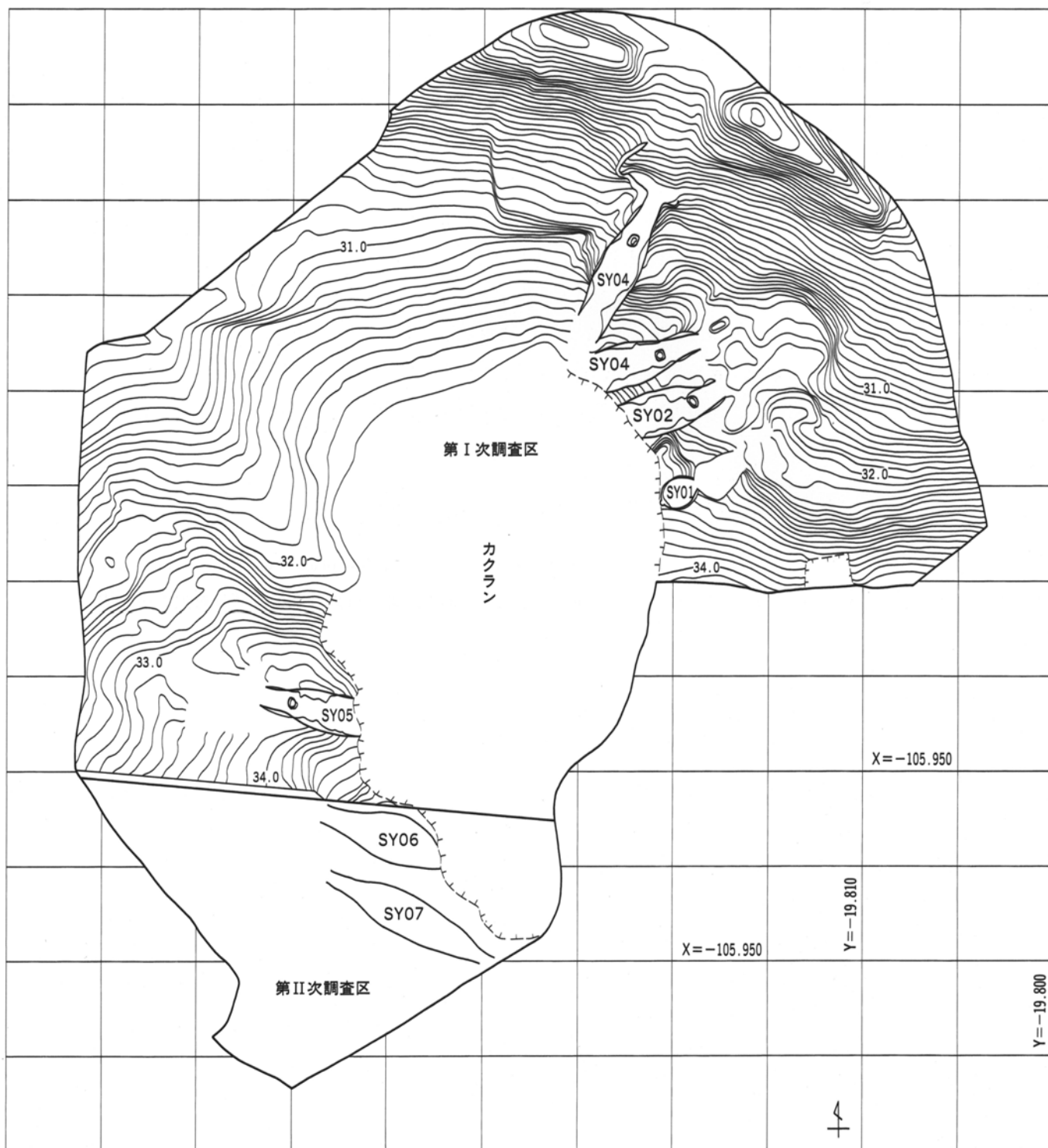
平成7年度に行った第I次調査で検出された遺構は、窯体5基と、これらに伴う灰層である。調査対象となった区域では、中央の攪乱部分をはさんで北東向きに下る斜面と、北西向きに下る斜面が存在したが、このうち北東向き斜面で4基、北西向き斜面で1基の窯体を検出した。これらの窯体の存在は、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会による試掘調査の時点では、北東向き斜面地点にてSY03、04の一部にあたる窯壁が確認されたのみであった。しかし、実際に調査に入り表土を除去してみると、北東向き斜面では既知の窯体の上位からさらに2基、北西向き斜面では3基の窯体が確認できた。この北西向き斜面で確認された3基のうち、上位2基は調査対象区域外であったため、この年度の調査ではその所在確認のみに留めた。この年度で未調査であった部分は、次年度に第II次として調査された。

第2項 SY01 窯体及び付帯構造

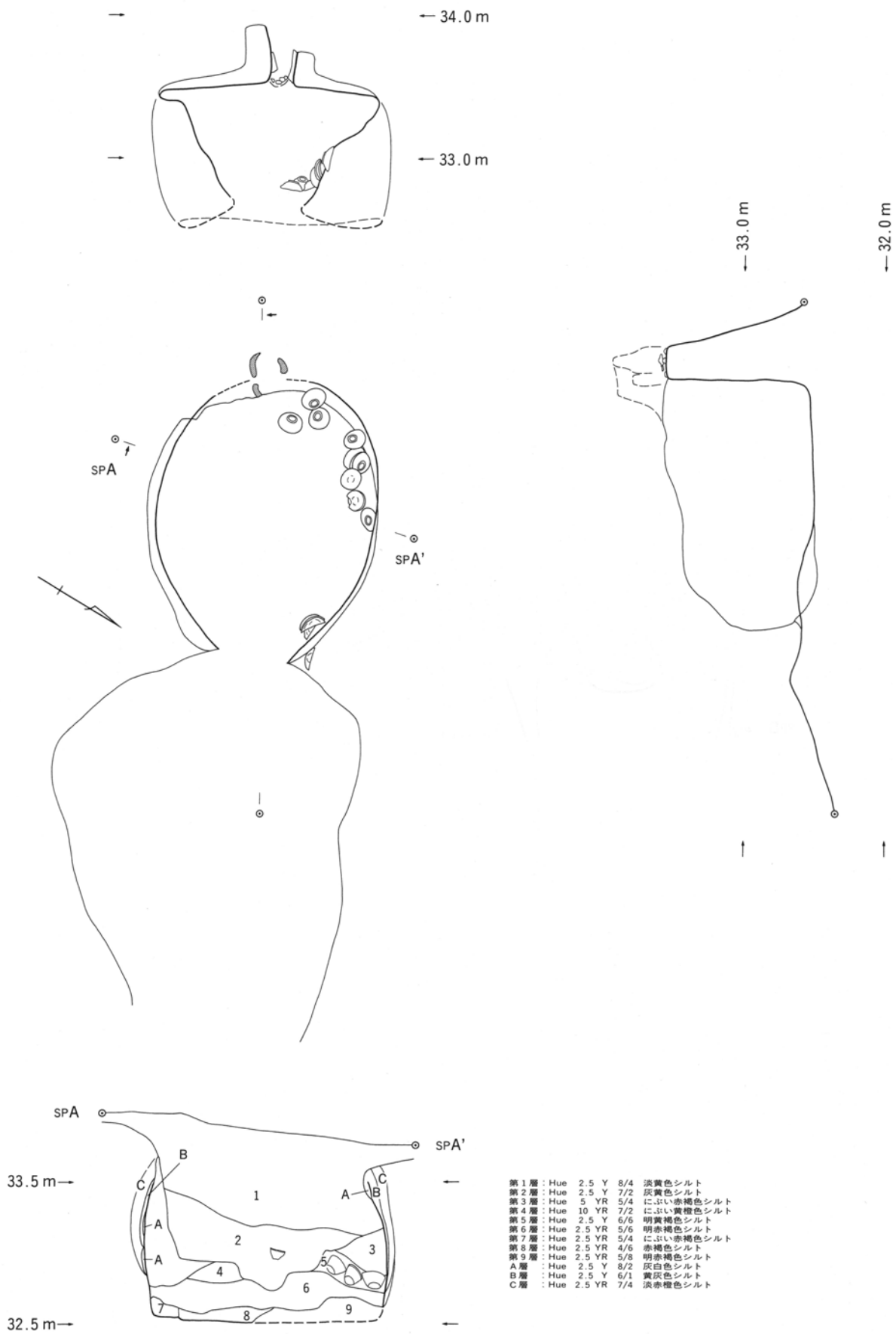
SY01は、北東向き斜面に存在する窯体4基中では最上部に位置する。平面形態は楕円形を呈し、床面は傾斜しないいわゆる「平窯」である。窯体は天井部の大部分を欠くが、煙道の一部と側壁は良好に遺存しており、焚口の前面には、斜面を掘り込んで平坦にした前庭部が設けられている。

窯体の規模は、長さ2.5m、幅1.94mを測り、断面形態においては、側壁はやや中太り気味ではあるがほぼ垂直に立ち上がる。焚口の幅は0.6mを測り、これに対する壁の中央最上部には、平面形態が楕円形の煙道が設けられている。この煙道は、長径0.32m、短径0.22m、残存高0.46mを測る。窯体の主軸は、S-58°-Wを測る。窯体の床面はほとんど残っていなかったが、下部埋土には完形品及びそれに近い遺存度の碗が含まれており、これはいわゆる「山茶碗」で、形態的に鎌倉時代初期のものと思われる。したがって、SY01廃窯の時期もこの山茶碗の時期から極端に下らないものと思われる。窯壁の被熱部分は厚く、白色の硬化が顕著で、かなり高温の焼成行為が行われたように思われ、焚口から窯壁にかけてはカーボン等の付着は観察できない。

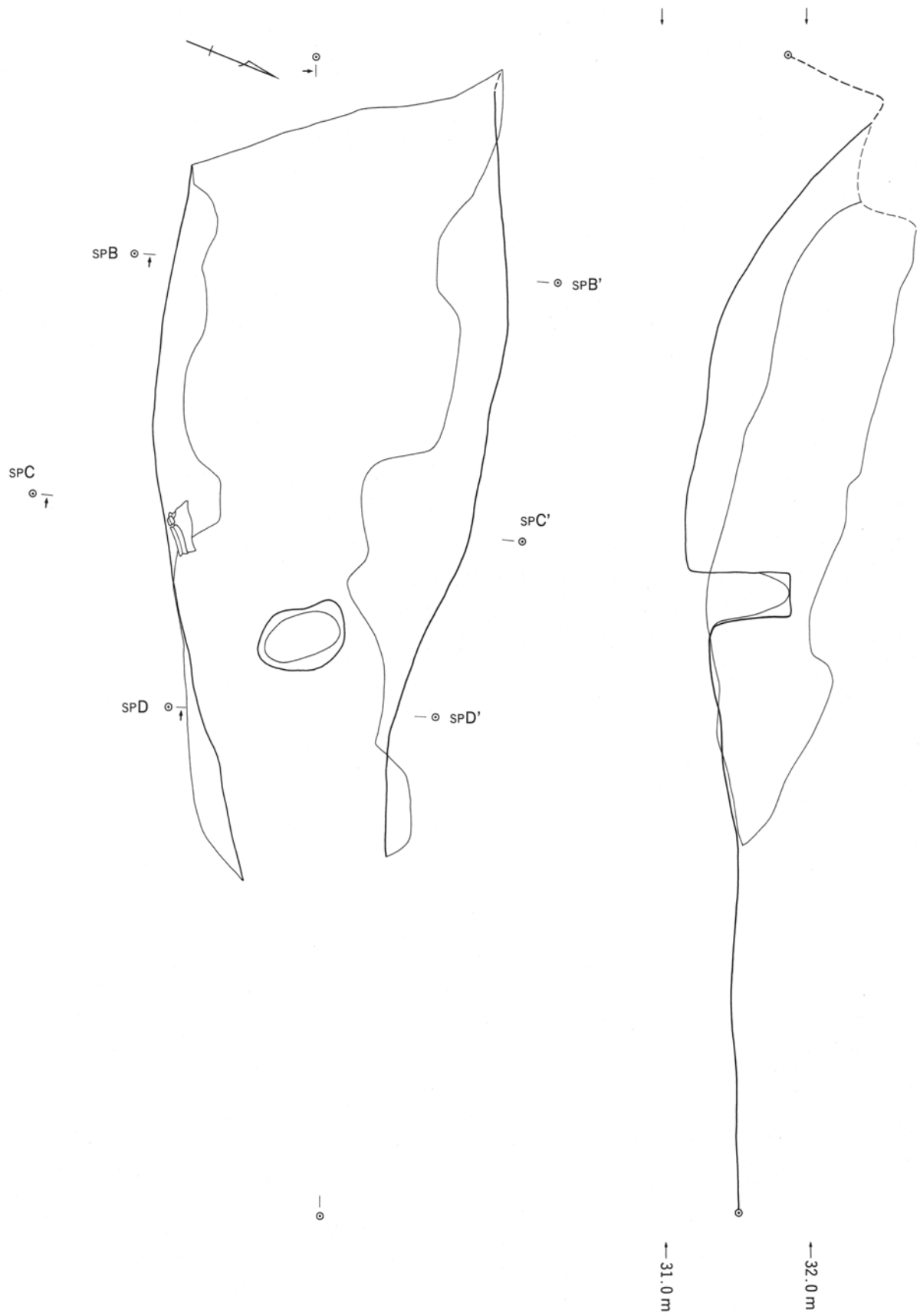
このSY01において焼成したであろう製品については、その特異な形態ながら決定的な判断材料が無く、いくつかの可能性を考えるに留まる。窯体の形態から推察すると、まず考えられるのは後世の炭焼き用窯である。しかし、窯体及びその周辺からは、不完全燃焼的工程を窺わせるカーボンの付着や散乱が見られない。窯壁の被熱部分は、極めて高温で被熱したように観察できるが、ロストル式施設などの痕跡も見られず、窯の構造から考えても温度をかなり高めるには無理があるため、埋土に含まれる山茶碗などを焼いたとは



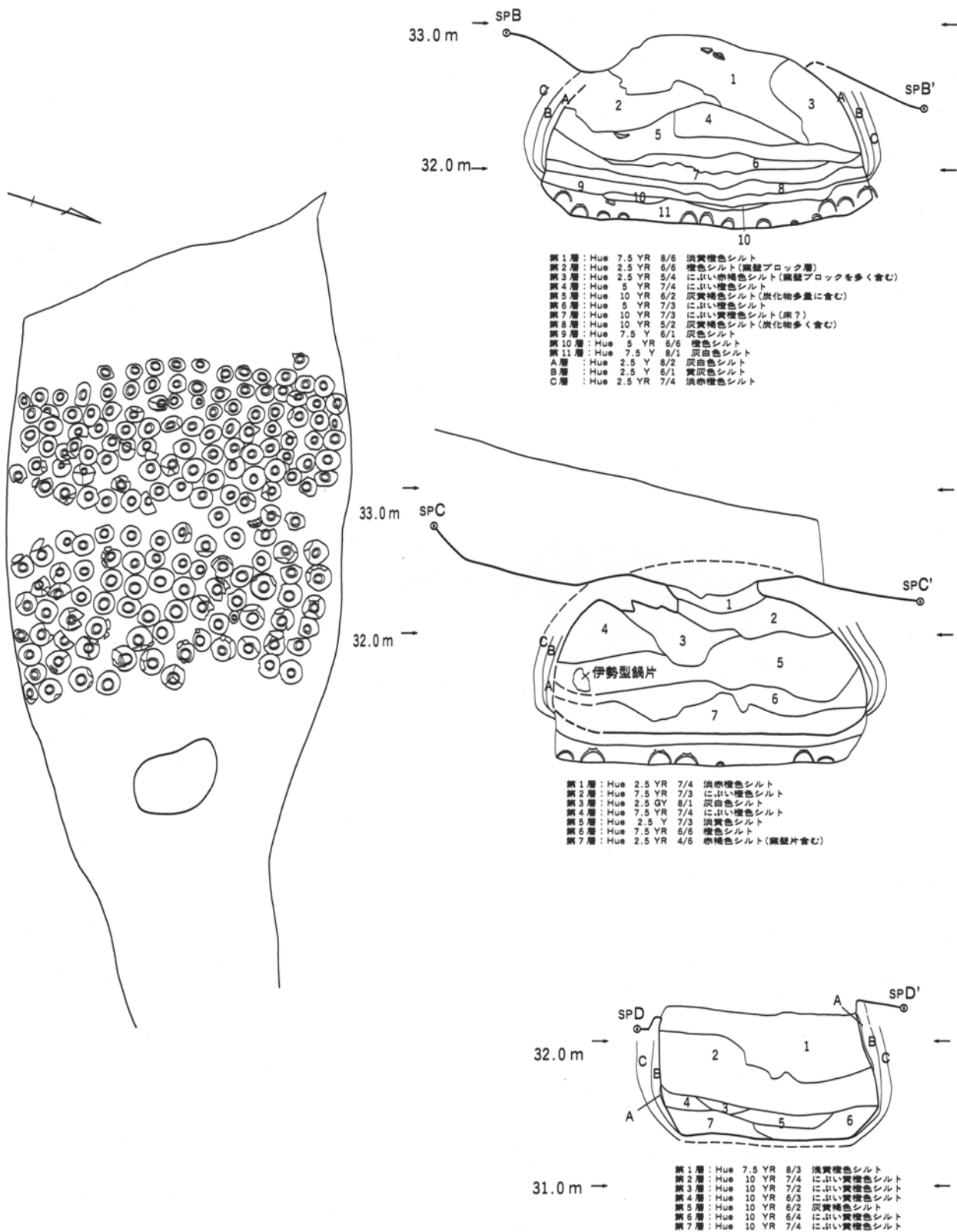
第6図 調査区遺構位置図(1/300)



第7図 SY01 平・断・立面及び見通し図(1/40)



第8図 SY02平・側面図(1/40)



第9図 SY02断面図・床面下施設平面図(1/40)

考えにくい。規模、形態や、時期的に近似する可能性がある類例を求めるとすれば、静岡県湖西市の湖西古窯群東笠子地区第 38 地点窯や、同県島田市の旗指古窯跡群第 4 地点Ⅱ地区第 24 号窯（いずれも静岡県教育委員会、1989、『静岡県の窯業遺跡』—静岡県文化財調査報告書第 42 集に所収）があげられる。どちらも焼成したであろう製品について言及するには至っていないが、こうした例の増加を待ち、判断材料としたい。

第 3 項 SY02 窯体及び付帯構造

SY02 は、北東向き斜面に並ぶ 4 基の窯体の中では上位から 2 番目に位置し、このうち床面が傾斜する 3 基の窯の中では、最上位に位置する。主軸は S-67°-W を測り、南方向に登る斜面に対して直登する方向に築かれておらず、傾斜角度調節のためか西側に振っている。焚口の前は、明確ではないが前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途から先端方向は、後世の土取りによる攪乱によって欠損する。窯体の残存長は 5.6 m を測り、分焰柱を有する。焼成室半ばまでの床面下には、椀を伏せた状態で敷き詰めた、いわゆる「床面下施設」が設けられていた。

・ 燃焼室

焚口から分焰柱中心部までの長さ、1.8 m を測る。床面の幅は焚口で 1.05 m を測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では 1.55 m を測る。この床面は、分焰柱に向かって緩やかに下る。

・ 分焰柱

分焰柱基部は、主軸方向の径 0.42 m、これと直交する径 0.63 m、残存高 0.72 m を測り、水平断面形態は不整楕円形を呈する。

・ 焼成室

残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって 3.9 m を測る。窯床の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅がしばられてゆくものと思われる。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で 1.95 m、そこから 1.9 m 進んだところで最大幅 2.4 m を測る。残存する焼成室での床面平均斜度は 27°であるが、床面下施設の最先端付近より煙道方向に向かって残存する床面は、急激に傾斜がきつくなっており、この部分のみでは 46°を測る。天井部は崩落により欠損していたが、窯壁は良好な状態で残っていた。

・ 床面下施設

SY02 の焼成室床面下には、椀が伏せて敷き詰められていた。こうした行為は、猿投窯では鳴海地区に類例が多く見られ、「床面下施設」などと呼ばれており、隣接する知多半島の同時期窯跡において、特に顕著である。これら床面下の施設は現在までに、大きく 2 種類に分けられることが確認されている。すなわち、焼成室一部に窯体幅と同様の面積を敷き詰めるものと、焼成室の一部に列状に椀を敷き、これに溝が伴うものである。SY02 は、これらのうち前者の、窯体幅全体に敷き詰めるタイプである。敷き詰められた範囲は、焚口

から分焰柱に向かって、柱の直後から窯体幅全体に長さ 2.3 m にわたる。この椀を敷き詰めるための掘り込みは、主軸に直交する断面図などから観察すると、窯壁及び地山の被熱部を断ち切っているため、これは築窯時に設けたものではなく、何度かの焼成行為の後に設けられたものと考えられる。床面と椀を敷いた層との間には、炭化物を多く含む層が確認できる。この施設に利用されていた椀は、歪んだものや、複数の椀が融着したものが多く見られ、不良品と判断されたものが使用されたことが窺える。

- ・前庭部

焚口の正面から斜面を登る方向である左脇にかけては、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。平坦部の高さは、焚口の床面レベルより 0.15 m 高く、幅 4.0 m、奥行き 2.5 m を測り、焚口に向かって横長に広がる。

第 4 項 SY03 窯体及び付帯構造

SY03 は、北東向き斜面に並ぶ 4 基の窯体の中では上位から 3 番目に位置し、このうち床面が傾斜する 3 基の窯の中では、中央に位置する。主軸は S-73°-W を測り、SY02 とは主軸を合わせるように、南方向に登る斜面に対して直登する方向に築かれておらず、西側に振っている。SY02 と 03 は近接するが、それぞれの焚口中央部間は、2.8 m を測り、床面の最も接近する地点では、その間隔 0.5 m を測る。焚口の正面は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途から先端方向は、後世の土取りによる攪乱によって欠損する。窯体の残存長は 6.5 m を測り、分焰柱を有する。窯壁は、SY02 など他の窯体と比べて、どの部分でも被熱の痕跡が弱く、実用化されていたとしてもわずかな使用で廃絶したものと思われる。

- ・燃烧室

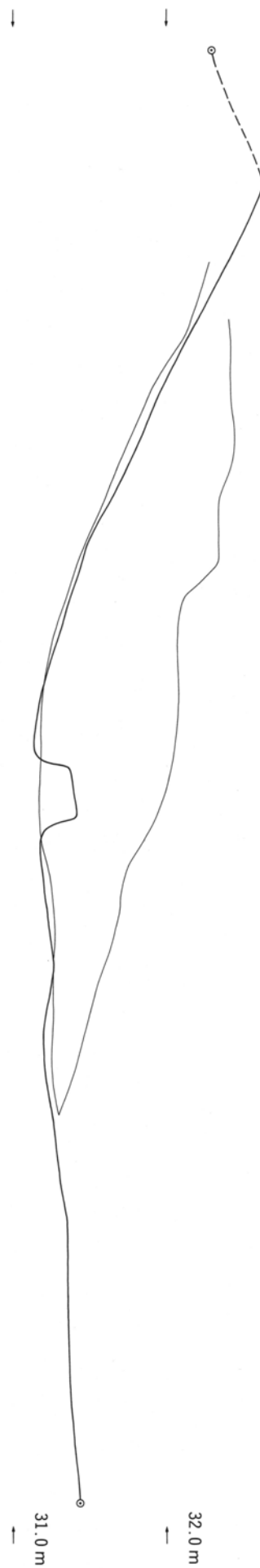
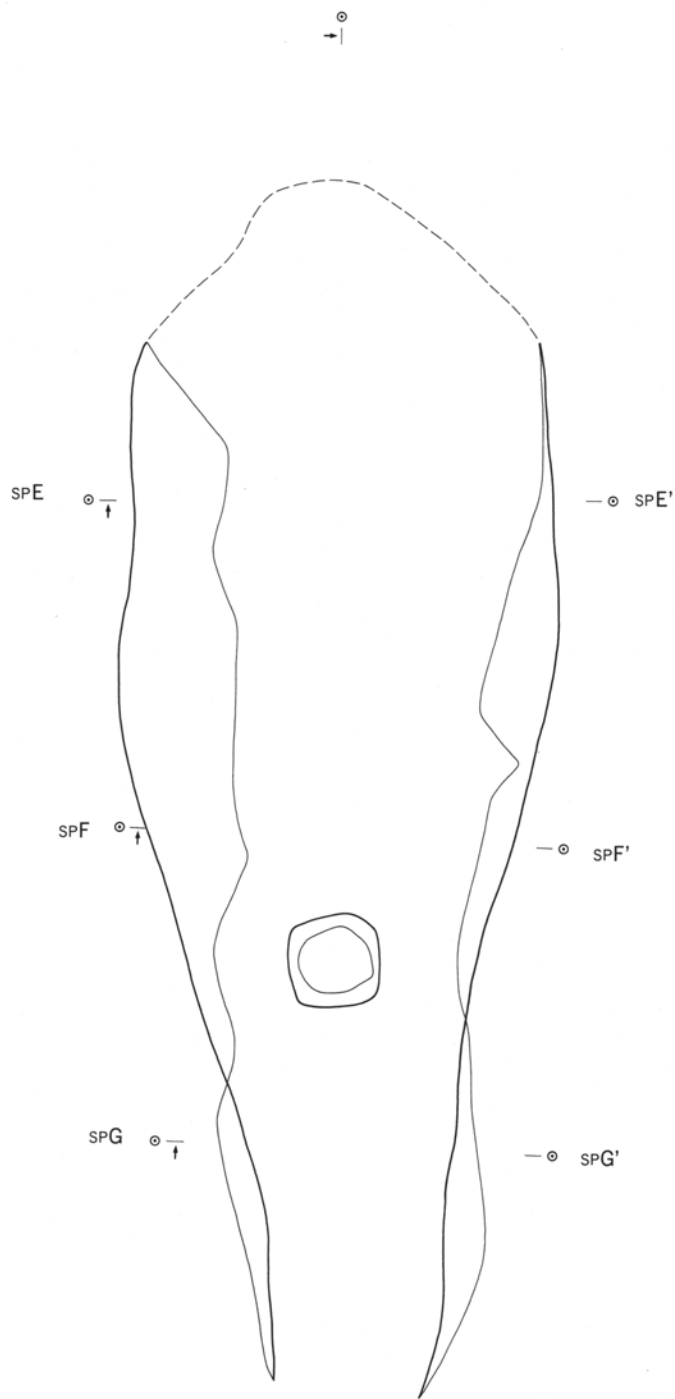
焚口から分焰柱中心部までの長さ、2.3 m を測る。床面の幅は焚口で 0.8 m を測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では 1.44 m を測る。燃烧室の床面はほぼ水平であるが、検出時点では、焚口から分焰柱に向かってわずかに下っている。

- ・分焰柱

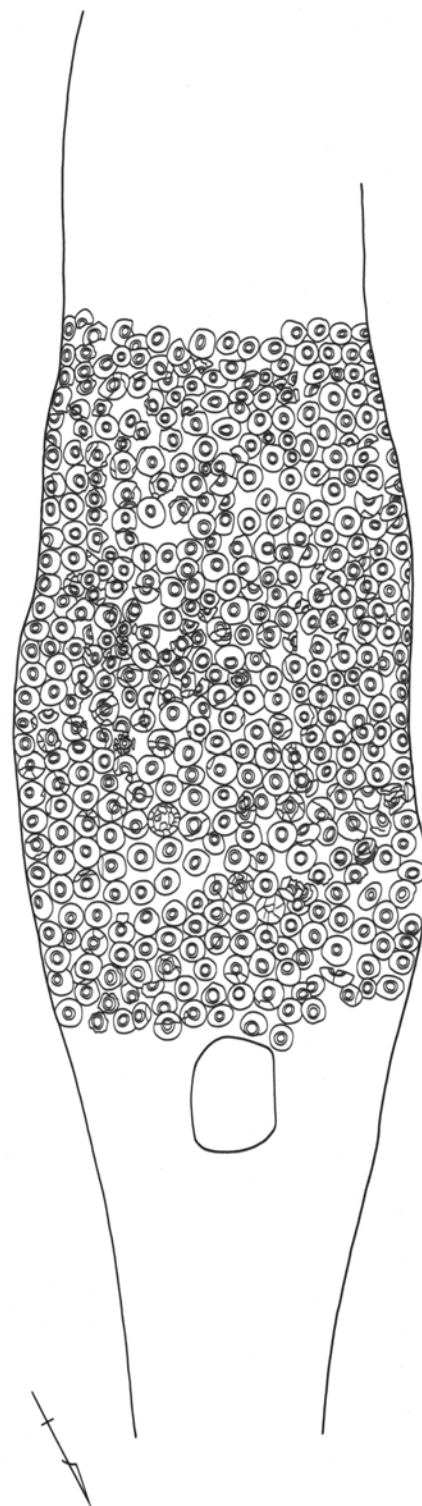
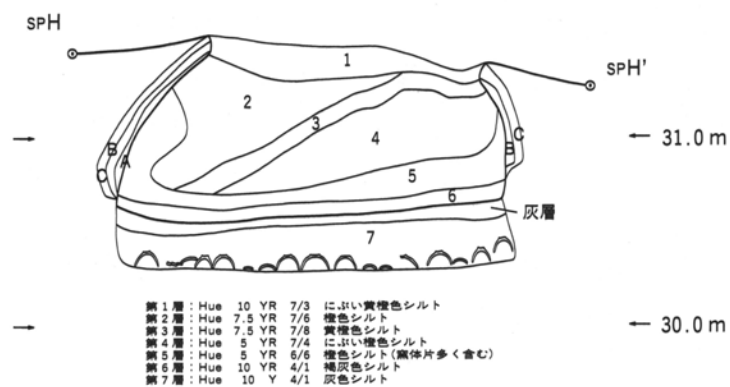
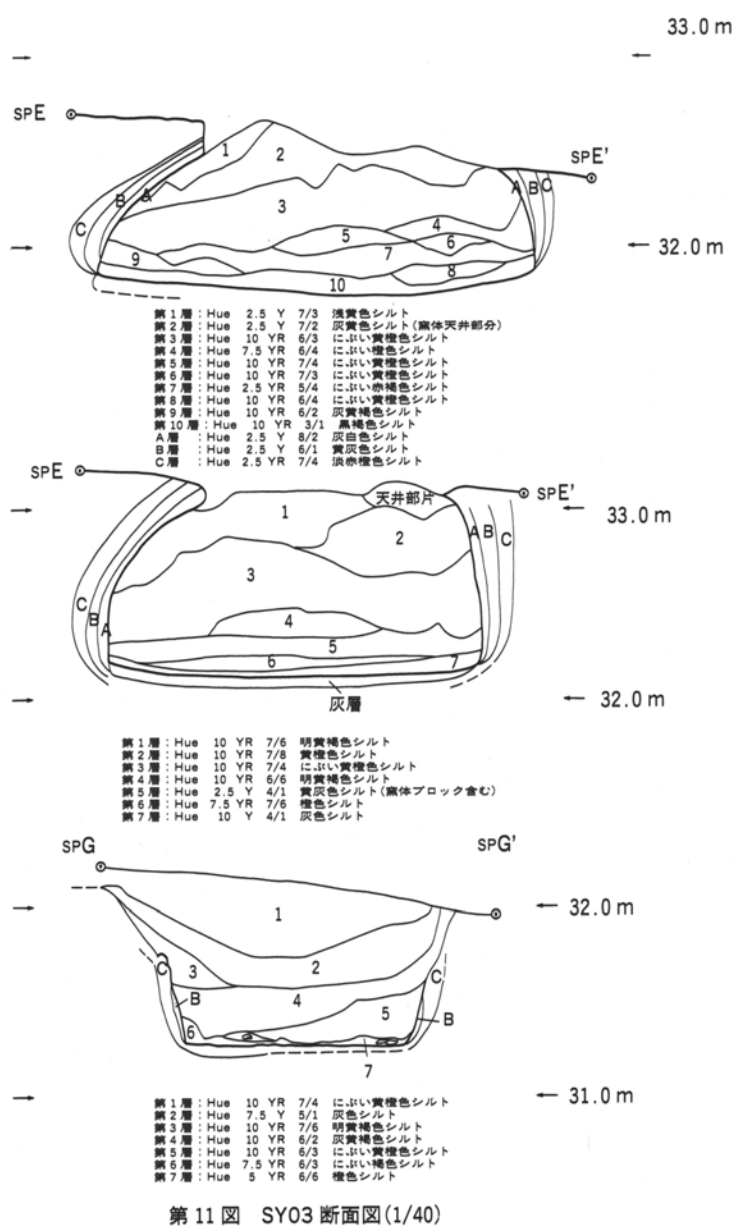
分焰柱基部は、主軸方向の径 0.5 m、これと直交する径 0.48 m、残存高 0.26 m を測り、水平断面形態は隅丸方形を呈する。完掘後の断ち割りでは、補修、補強などの痕跡は見られず、地山部分の掘り抜きが良好に残存していることが確認できた。

- ・焼成室

残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって 4.1 m を測る。窯床の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅がしぼられてゆくものと思われる。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で 1.7 m、さらにそこから 1.3 m 登ったところでは、最大幅 2.34 m を測る。残存する焼成室での床面平均斜度は、23°と SY02 よりも比較的緩やかで、残存床面内での急激な変化は認められないが、最大幅部分より先端方向は 27°とやや変化する。



第 10 図 SY03 平・側面図(1/40)



- ・前庭部

焚口の正面から斜面を登る方向である左脇にかけては、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。幅3.4m、奥行き3.0mを測り、焚口に向かってやや横長に広がる。

第5項 SY04 窯体及び付帯構造

SY04 は、北東向き斜面に並ぶ4基の窯体の中では最下部に位置する。主軸については、同一斜面の床面が傾斜する3基の中では、SY02 と 03 がほぼ方向を同じくして隣接しているのに対して、SY04 はこれらの方向から40°以上南側に振るS-27°-Wを測り、このラインは南方向に登る斜面に対して、ほぼ直登する方向である。このSY04 と 03 は、欠損部を先端方向に向かって復元すると交錯するため、窯体の先端部分で切り合い関係にあるものと思われるが、この部分が攪乱によって削平されているため、遺構の検出状況からそれぞれの新旧関係は窺い得ない。焚口の前は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途から先端方向は、後世の土取りによる攪乱によって欠損する。窯体の残存長は7.8mを測り、分焰柱を有する。焚口から分焰柱に向かって、柱の後側から焼成室半ば過ぎまでの床面下には、椀を伏せた状態で広範囲にわたって敷き詰めた、いわゆる「床面下施設」が設けられていた。

- ・燃焼室

焚口から分焰柱中心部までの長さ、2.4mを測る。床面の幅は焚口で1.0mを測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では1.5mを測る。燃焼室の床面はほぼ水平であるが、検出時点では、焚口から分焰柱に向かってわずかに下っている。

- ・分焰柱

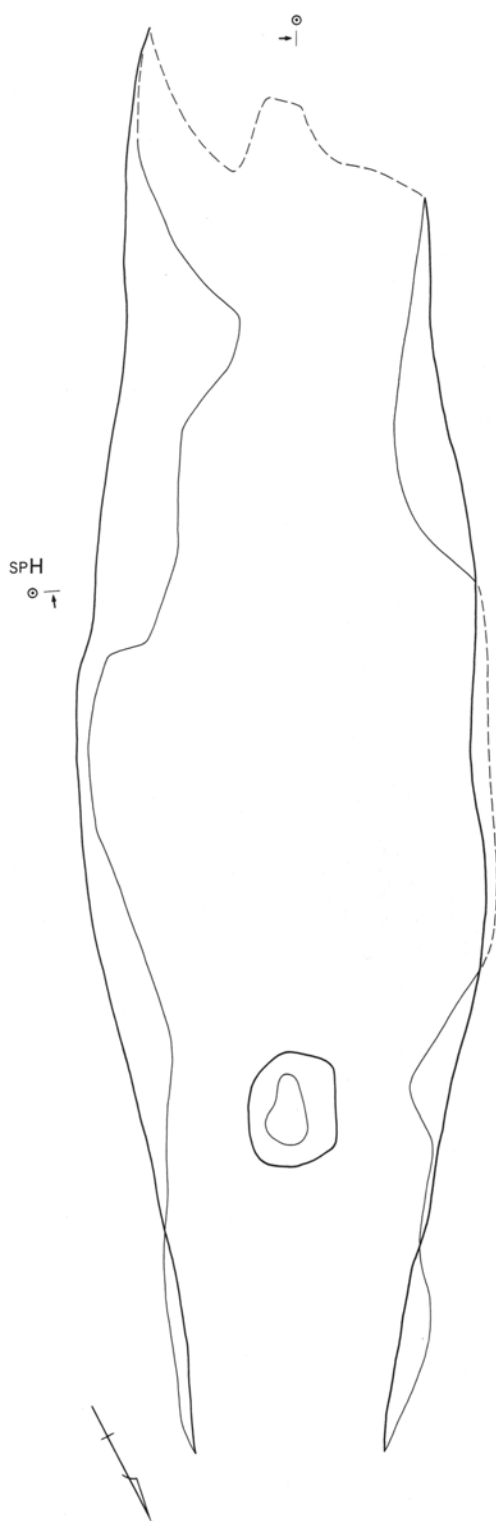
分焰柱基部は、主軸方向の径0.62m、これと直交する径0.47m、残存高0.57mを測り、水平断面形態は不整形を呈する。

- ・焼成室

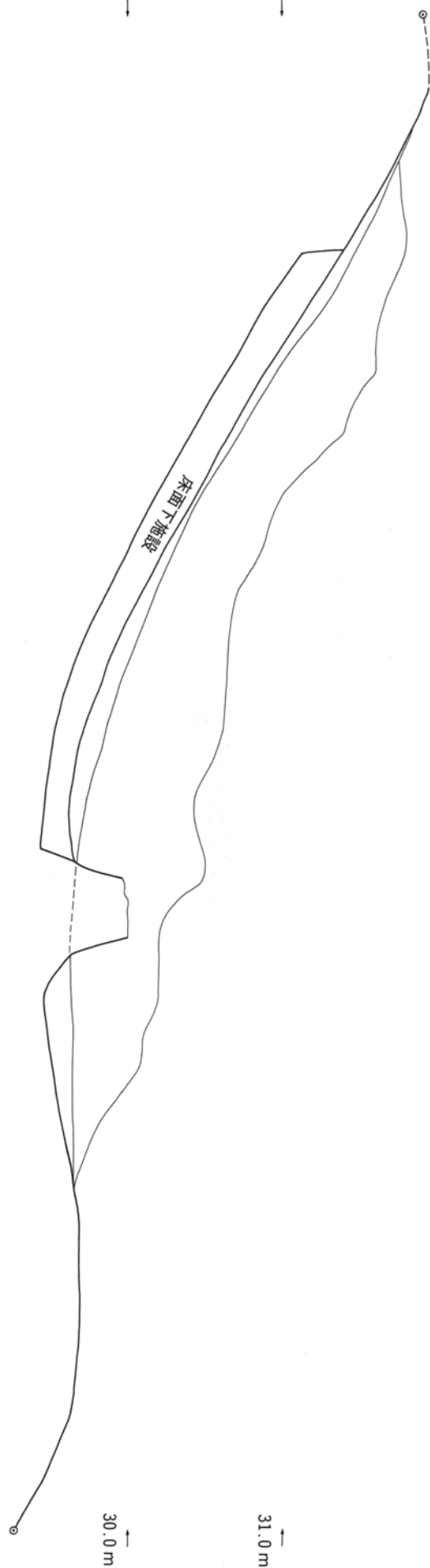
残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって5.34mを測る。窯床の平面形態は、分焰柱から上に向かってわずかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅がわずかにしぼられてゆくものと思われ、SY02・03などと比較して広がりはやや緩やかである。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で1.78m、さらにそこから1.26m登ったところでは、最大幅2.2mを測る。残存する焼成室での床面平均斜度は、30°とSY02・03よりもややきつく、残存床面内での急激な変化は認められないが、最大幅部分より先端方向は34°とやや変化する。

- ・床面下施設

SY04の床面下施設は、SY02と同様に窯体幅全体に敷き詰めるタイプで、伴う溝なども見られない。敷き詰められた範囲は、焚口から分焰柱に向かって、柱の直後から窯体幅全体に長さ4.0mにわたる。この椀を敷き詰めるための掘り込みは、これもSY02と同様に窯壁及び地山の被熱部を断ち切っているため、これは築窯時に設けたものではなく、何度



SPH'



第 13 図 SY04 平・側面図(1/40)

かの焼成行為の後に設けられたものと考えられる。床面と椀を敷いた層との間には、炭化物を多く含む層が確認できる。敷き詰められていた椀は、不良品と判断されたものが使用されたものと思われる。

- ・前庭部

焚口の正面には、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。規模は幅 3.8 m、奥行き 1.1 m を測り、焚口に向かって横長に広がる

第 6 項 SY05 窯体及び付帯構造

SY05 は、SY01～04 が並ぶ北東向き斜面から、攪乱部をはさんで約 20 m 程南西方向に離れた、北西向き斜面に位置する。この SY05 の位置には、平成 8 年度調査区が同一斜面で南接している。この斜面での検出窯体は、両調査区を合わせて合計 3 基で、この中では SY05 は最下部に位置する。この同一斜面 3 基の主軸は、ほぼ方向を同じくして隣接しており、SY05 は S-76°-E を測り、このラインは南東方向に登る斜面に対して、ほぼ直登する方向である。焚口の正面及び右側は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途から先端方向は、後世の土取りによる攪乱によって欠損する。窯体の残存長は 5.9 m を測り、分焰柱を有する。SY05 の特筆すべき点は、焚口から分焰柱に向かい、柱の後側から焼成室半ばまでの床面下に、椀を伏せた状態で敷き詰めた、いわゆる「床面下施設」が、上下に 2 段設けられていたことである。

- ・燃焼室

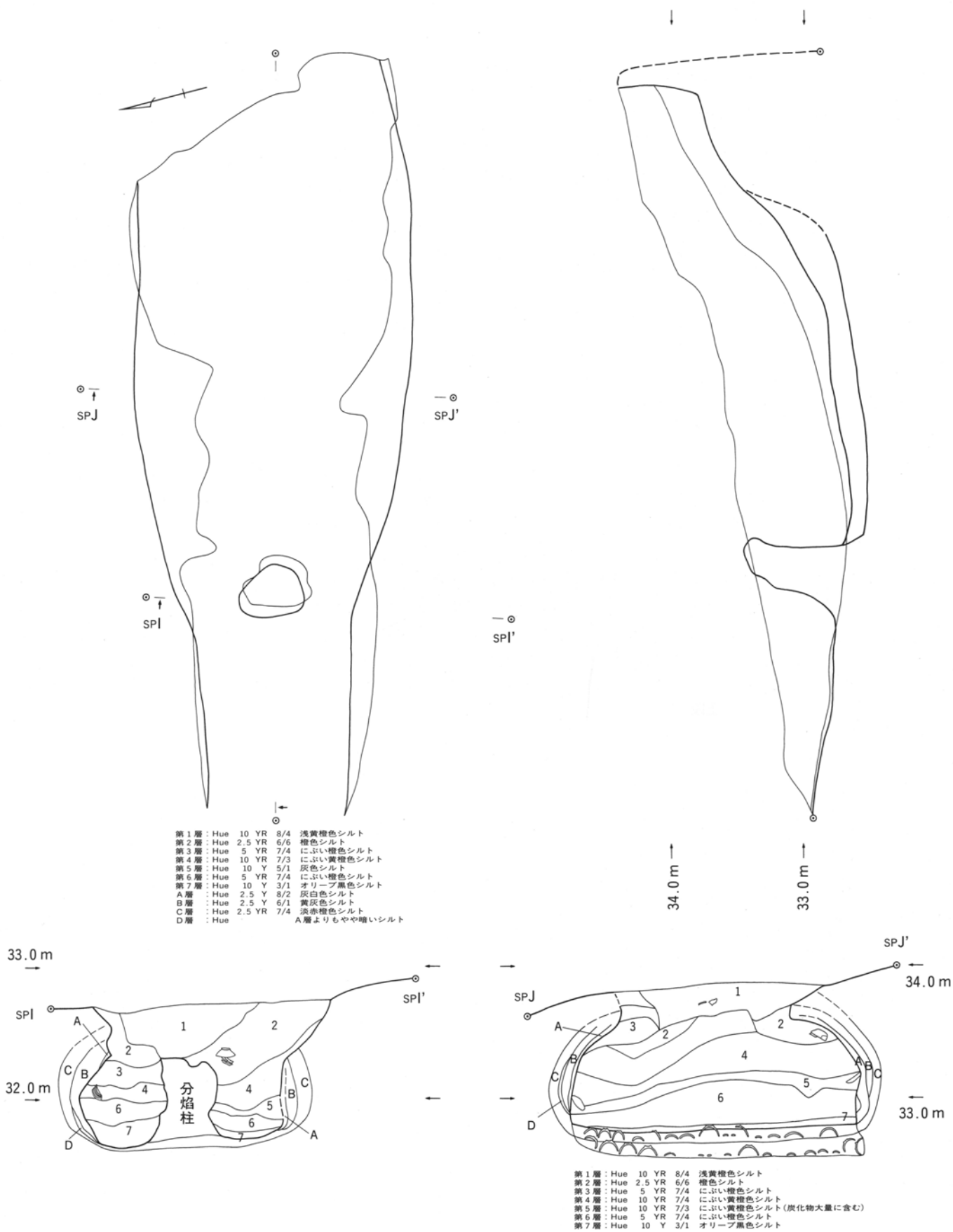
焚口から分焰柱中心部までの長さ、1.74 m を測る。床面の幅は焚口で 1.03 m を測るが、この幅がそれほど広がらず、分焰柱前面では 1.2 m を測る。燃焼室の床面はほぼ水平であるが、検出時点で、焚口から分焰柱に向かってやや下っている。

- ・分焰柱

分焰柱基部は、主軸方向の径 0.39 m、これと直交する径 0.5 m、残存高 0.93 m を測り、水平断面形態は、主軸とは直交する方向に長径が求められる不整楕円形を呈する。この分焰柱は地山を掘り抜いて作られたものと思われるが、その周囲を砂礫混じりの粘質土で補強している。分焰孔の最大幅は、焚口から分焰柱に向かって左側では 0.66 m、右側では 0.55 m を測る。

- ・焼成室

残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって 4.08 m を測る。窯床の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅がしぼられてゆくものと思われる。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で 1.52 m、さらにそこから 1.7 m 登ったところでは、最大幅 2.1 m を測る。残存する焼成室での床面平均斜度は、21°と SY02～04 よりも比較的緩やかだが、焼成室内の残存床面は角度が安定しておらず、最大幅部分より先端方向は 21°～45°～32°～18°と変化する。



第14図 SY05 平・側・断面図(1/40)

・床面下施設

SY05の床面下施設は、SY02・04などと同様に窯体幅全体に敷き詰めるタイプであるが、これがほぼ同じ部分で上下に2段設けられていた。敷き詰められた範囲は、焚口から分焰柱に向かって、柱の直後から窯体幅全体に上段で長さ2.2m、下段で長さ2.6mにわたる。この椀を敷き詰めるための掘り込みは、窯壁を断ち切っているため、これは築窯時に設けたものではなく、何度かの焼成行為の後に設けられたものと考えられる。床面と椀を敷いた層との間には、炭化物を多く含む層が確認できる。利用されていた椀は、SY02・04などのように歪んだものや、複数の椀が融着したものが多く見られ、不良品と判断されたものが使用されたことが窺える。

・前庭部

焚口の正面から右脇にかけては、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。幅4.8m、奥行き2.2mを測り、焚口に向かってやや横長に広がるが、右脇部分はさらにこれと直交する方向に、幅1.5m、長さ2.0mの規模で鈎の手状に曲がってのびる。この曲がり角の部分からは遺物が集中して出土しており、仮置きや選別などの行為が窺える。



第15図 SY05床面下施設上段・下段平面図 (1/40)

第7項 灰 原

平成7年度に調査した第Ⅰ次調査区では、北東斜面に並ぶ4基の窯の下方に上下2層が重なる灰原が認められ、これとは別に北西斜面におけるSY05の焚口正面から右脇、さらにその下方にあたる位置に、合計6層に分けて検出できた灰原が認められた。この2ヶ所に分かれた位置の灰原を、それぞれ北東斜面側が灰原A、北西斜面側が灰原Bと区別し、各層には番号を付加した。

・灰原A

北東斜面の下部に大きく広がるものを灰原A1層、その下にこれよりも小規模に展開しているものを灰原A2層として検出した。

灰原A1層は、斜面上部に向かって「凹」字状に広がり、その規模は、等高線方向の最大幅15.5m、傾斜方向の最大長9.8m、最も厚い部分で0.45mを測る。この灰原A1層はSY03・04の位置では、地山を削って設けられた焚口から前庭部の埋土のさらに上部を覆っており、SY02の前庭部にわずかにかかっている。したがって、灰原A1層は、SY03・04が廃絶した後、SY02に伴って形成された可能性が考えられる。

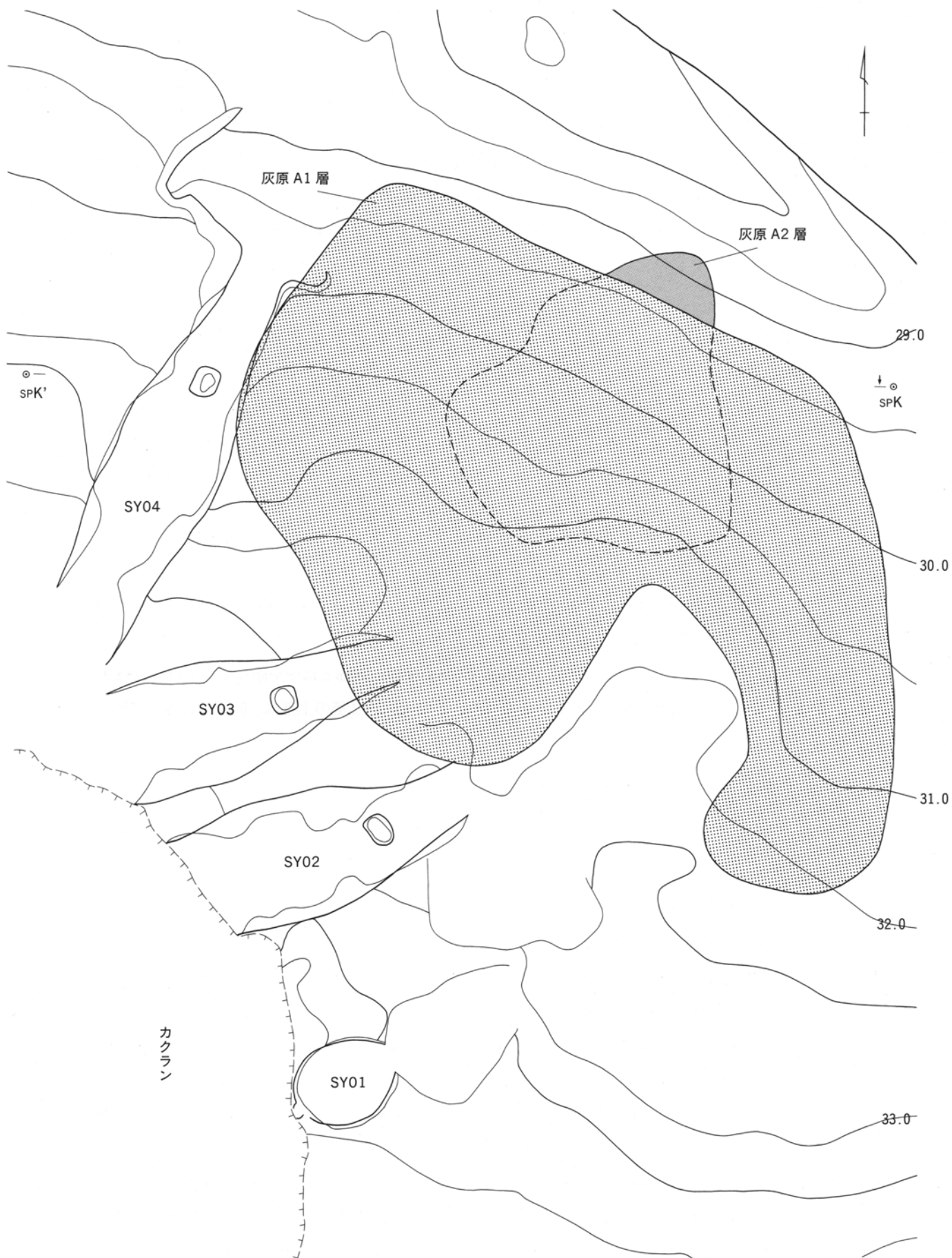
灰原A2層は、SY03の前庭部直下の斜面にA1層よりもかなり小規模に展開する。その規模は、等高線方向の最大幅5.5m、傾斜方向の最大長6.5m、最も厚い部分で0.32mを測る。この灰層は、SY03の直下に位置し、SY04の前庭部とはやや離れているため、SY03に伴って形成された可能性が考えられる。この灰原A2層の上部は、間層をはさんで灰原A1層がSY03ごと覆っているため、SY02と03の同時操業は不可能で、SY03と04は先端部分が切り合い関係にあるものと思われるため、これも同時操業は無理である。したがって、SY02～04の3基の窯は、斜面の下部に所在するSY04から、上部に向かってそれぞれ個別に築窯から廃窯を繰り返した可能性が考えられる。

・灰原B

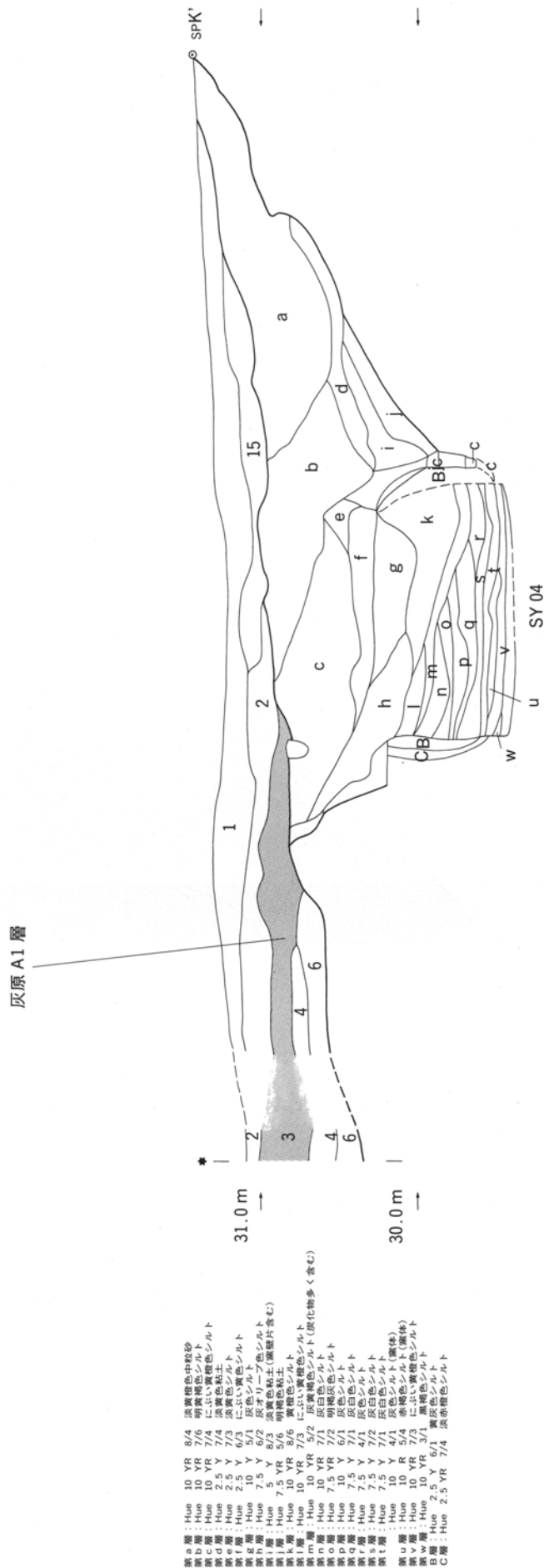
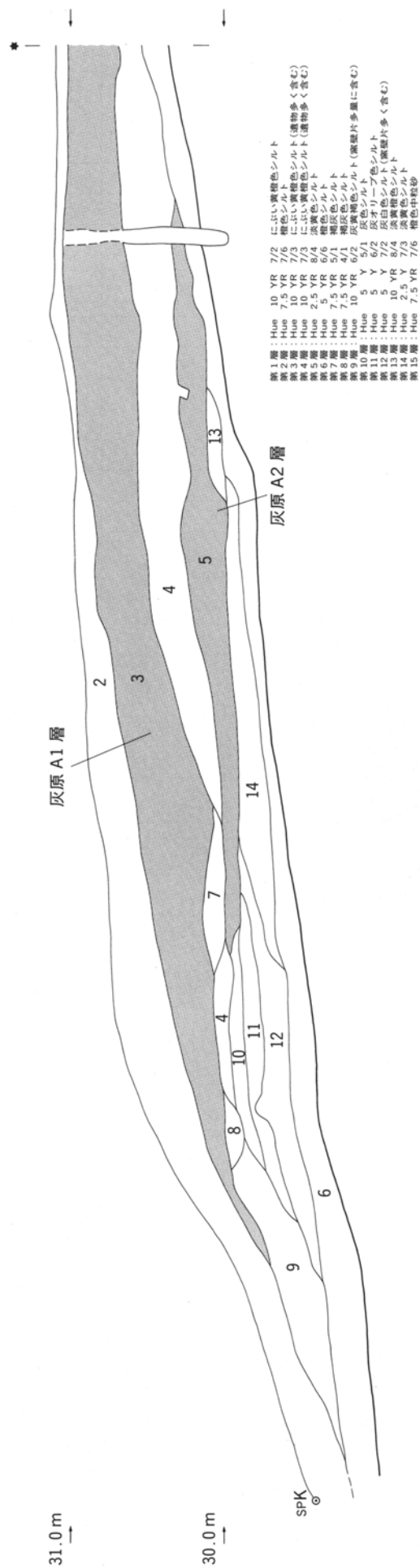
北西斜面において、SY05の前庭部と、その上下に広がる6層の灰層を、それぞれ灰原B1～6層として検出した。

灰原B1層は、第Ⅰ次調査区の南端、SY05の前庭部より上部にわずかな範囲を検出できた。この層の下には、灰原B2層が広がる。その規模は、傾斜方向で検出した最大長が5.2m、最も厚い部分で0.1mを測る。第Ⅱ次調査区側では検出されていないため、確認できた範囲以上には広がらず、小規模に灰原B2層の上部に重なるものと思われる。

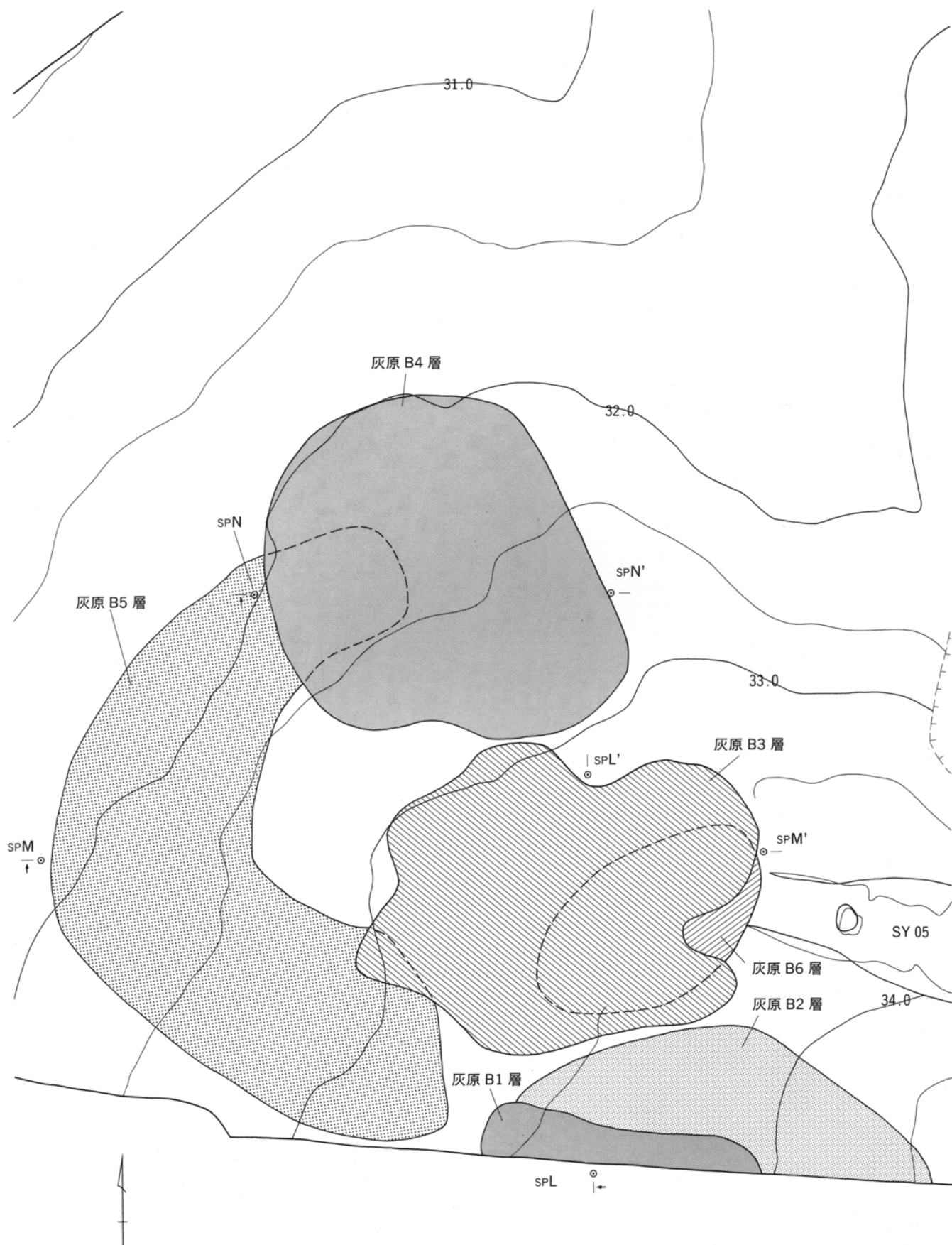
灰原B2層は、B1層と同様に第Ⅰ次調査区の南端で、SY05の前庭部より斜面上部で検出された。この層の上には、灰原B1層が重なる。その規模は、傾斜方向で検出した最大長が7.9m、最も厚い部分で0.16mを測る。この層は、B1層と同様に第Ⅱ次調査区側では検出されていないため、この調査区で確認できた範囲程度の規模で、灰原B1層の下部に展開するものと思われる。灰原B1・2層は、SY05の前庭部よりも斜面上部に位置する。そして、このさらに斜面上部には、第Ⅱ次調査区のSY06前庭部が位置するため、灰原B1・



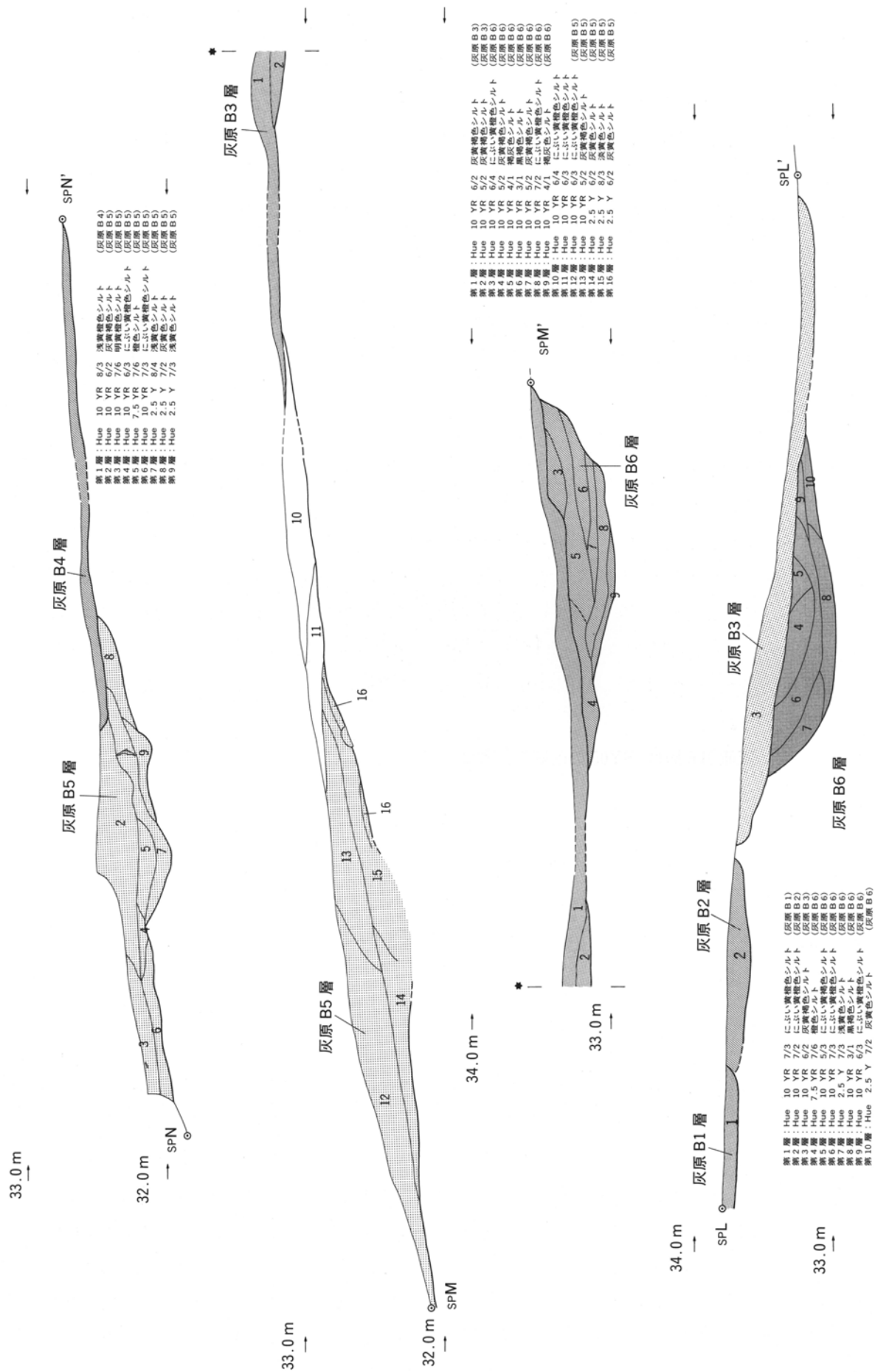
第 16 図 灰原 A1・2 層平面図(1/100)



第17図 東西ベルト断面図(北より・1/40)



第 18 図 灰原 B 1~6 層平面図(1/40)



第19図 灰原B層断面図(1/40)

2 層は、SY06 に伴って形成された可能性が窺える。

灰原 B 3 層は、SY05 の前庭部を全体的に覆うように展開する。この層の下には灰原 B 5 層がわずかな部分で重なり、灰原 B 6 層の大部分が重なる。その規模は、等高線方向の最大幅 7.8 m、傾斜方向の最大長 7.1 m、最も厚い部分で 0.22 m を測る。この灰層は、SY05 の前庭部及び、それに続く平坦面をほぼ全面的に覆っており、灰原 B 5・6 層をも覆っているため、SY05 に伴って形成された灰層の中でも、終盤の灰層である可能性が考えられる。

灰原 B 4 層は、SY05 の前庭部から斜面を北東方向にやや下った位置に展開する。この層の下には灰原 B 5 層が一部で重なり、灰原 B 3 層の北端部分と近接する。その規模は、等高線方向の最大幅 6.1 m、傾斜方向の最大長 7.4 m、最も厚い部分で 0.1 m を測る。この北西向き斜面では、第 I・II 次調査区合わせて 3 基の窯体が検出されているが、このうち SY05 は最も斜面下部に位置しており、これよりも下部に近接する窯体は見つかっていないため、灰原 B 4 層は、SY05 に伴って形成された可能性が考えられる。

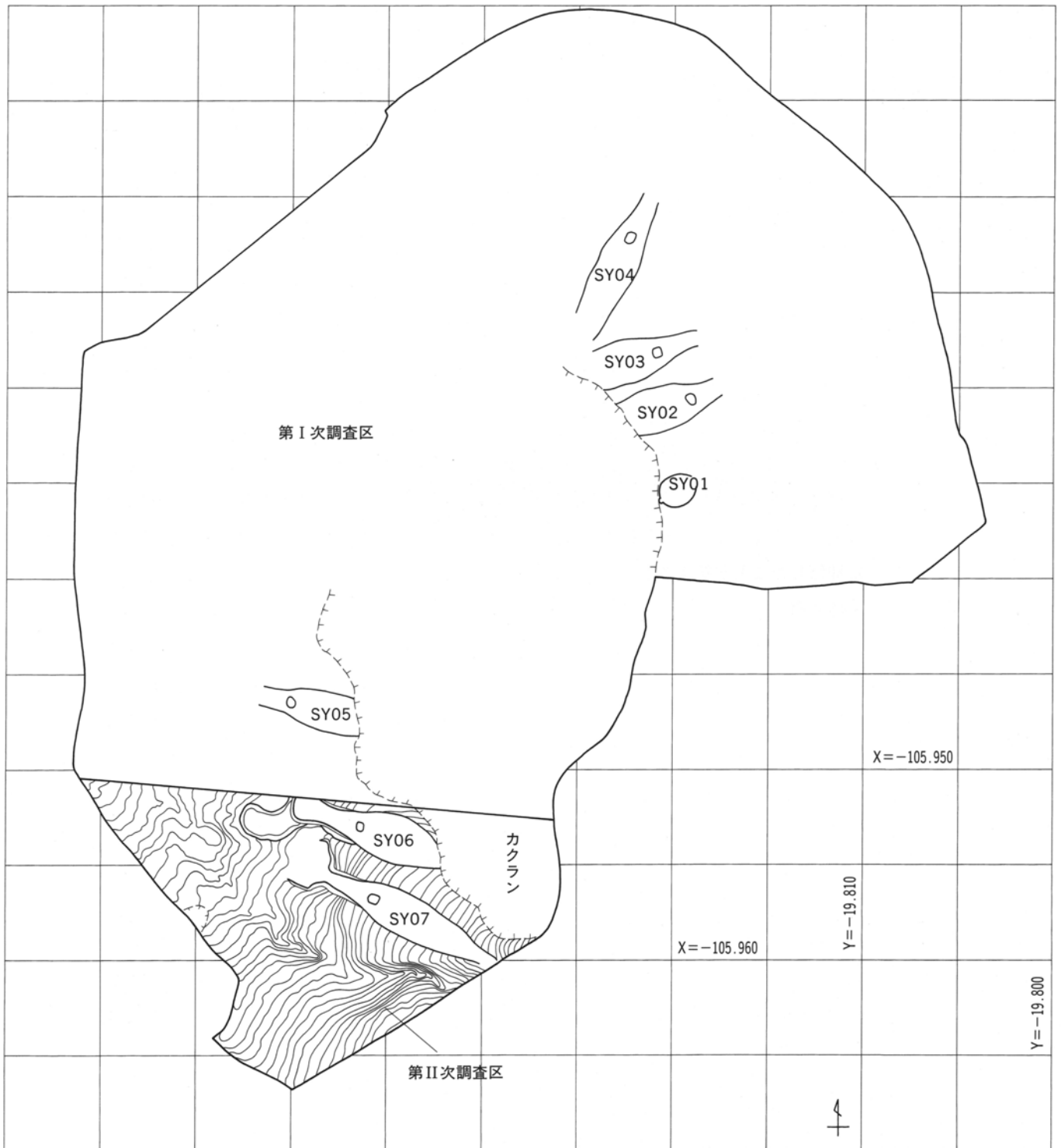
灰原 B 5 層は、SY05 の前庭部から斜面を北東方向にやや下った位置に、この前庭部を弧を描いて囲むように展開する。この層の上には灰原 B 3・4 層が一部で重なり、灰原 B 1・2 層の西端部分と近接する。その規模は、等高線方向の最大幅 9.6 m、傾斜方向の最大長 9.4 m、最も厚い部分で 0.44 m を測る。この B 5 層は、距離的には SY05 の前庭部からやや離れるが、これを囲むような展開の状況などから、SY05 に伴って形成された可能性が考えられる。

灰原 B 6 層は、SY05 の前庭部位置に小規模に展開する。この層は灰原 B 5 層にほとんどの部分が覆われており、灰原 B 2 層の北端部分と近接する。その規模は、等高線方向の最大幅 4.8 m、傾斜方向の最大長 2.8 m、最も厚い部分で 0.52 m を測る。SY05 の前庭部に展開していることから、この窯体に伴って形成されたものと思われる。

第 3 節 第 II 次調査区の遺構

第 1 項 概 要

平成 8 年度に行った第 II 次調査で検出された遺構は、窯体 2 基と、これらに伴うものと思われる灰層である。第 I 次調査区では、中央の攪乱部分をはさんで北東向きに下る斜面と、北西向きに下る斜面が存在したが、このうち北東向き斜面で 4 基、北西向き斜面で 1 基の窯体を検出した。これらの窯体の存在は、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会による試掘調査の時点では、北東向き斜面地点にて SY03、04 の一部にあたる窯壁が確認されたのみであった。しかし、実際に調査に入り表土を除去してみると、北西向き斜面では 3 基の窯体が確認できた。この北西向き斜面で確認された 3 基のうち、上位 2 基は調査対象区域外であったため、この年度の調査ではその所在確認のみに留めた。この年度で未調査であった部分は、次年度に第 II 次として調査された。



第20図 第II次調査区平面図(1/300)

第2項 SY06 窯体及び付帯構造

SY06 は、北西向き斜面に並ぶ3基の窯体の中では中央に位置する。主軸については、同一斜面の3基はいずれも似通った方向であり、SY06 は S-70°-E を測り、このラインは南東方向に登る斜面に対して、ほぼ直登する方向である。焚口の前は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途から先端方向は、後世の土取りによる攪乱によって欠損する。窯体の残存長は6.6 m を測り、分焰柱を有する。焚口から分焰柱に向かって、柱の後側から焼成室半ば過ぎまでの床面には、部分的に焼台が残っていた。

・ 燃焼室

焚口から分焰柱中心部までの長さ、1.9 m を測る。床面の幅は焚口で1.0 m を測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では1.5 m を測る。燃焼室の床面はほぼ水平であるが、検出時点では、焚口から分焰柱に向かってわずかに下っている。

・ 分焰柱

分焰柱基部は、主軸方向の径0.36 m、これと直交する径0.44 m を測り、水平断面形態は不整形を呈する。分焰孔は、焚口から分焰柱に向かって左側が幅0.52 m、高さ0.63 m を測り、右側が幅0.54 m、高さ0.62 m を測る。主軸と直交する断面を観察すると、地山を掘り抜いて作られた柱内部の被熱部が曲線的であるのに対し、柱の外郭線が直線的に立ち上がっているため、当初は左右分焰孔内側の断面形態が曲線的であったものを、直線的に補修したことが窺える。

・ 焼成室

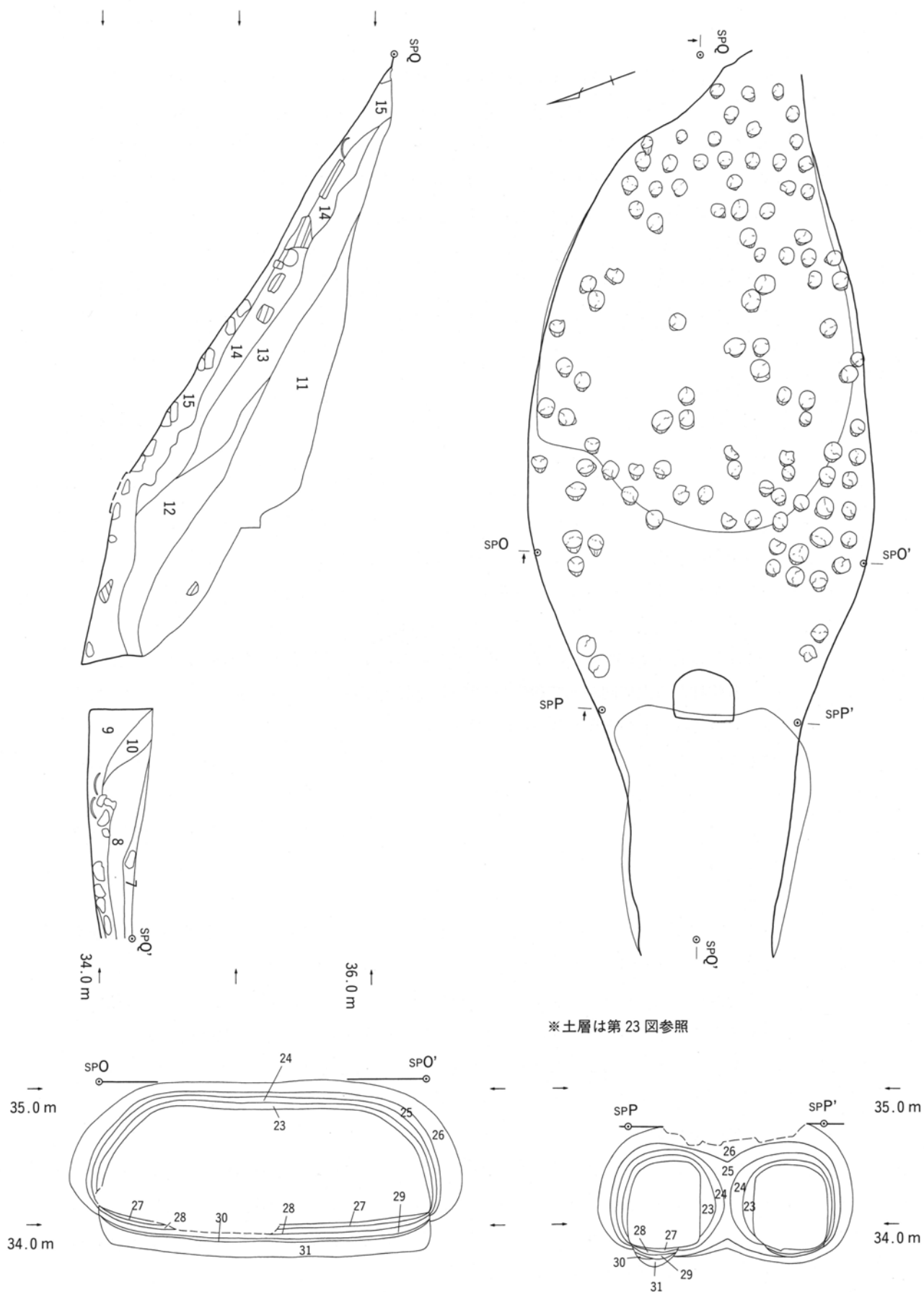
残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって4.75 m を測る。窯床の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅がしぼられてゆくものと思われ、第Ⅰ次調査区のSY02・03などと同様の平面形態を呈するものと思われるが、SY02・03と比較して広がりはやや激しい。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で1.76 m、さらにそこから1.15 m 登ったところでは、最大幅2.52 m を測る。残存する焼成室での床面平均斜度は27°で、残存床面内での急激な変化は認められないが、最大幅部分より先端方向は32°とやや変化する。

・ 前庭部及び灰層

焚口の正面から左脇にかけては、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。幅1.8 m、奥行き2.0 m を測り、焚口に向かってやや縦長に狭く設けられている。灰層は、この前庭部から北西方向に小規模に展開する。その規模は、等高線方向の最大幅2.8 m、傾斜方向の最大長1.5 m、最も厚い部分で0.2 m を測る。

第3項 SY07 窯体及び付帯構造

SY07 は、北西向き斜面に並ぶ3基の窯体の中では最上部に位置する。窯体の主軸は、S-62°-E を測り、このラインはSY05・06と同様に、南東方向に登る斜面に対してほぼ直登する方向である。北西向き斜面に並ぶ3基の窯体は、SY06と07は近接するが、第Ⅰ次調査



第21図 SY06 平・断面図(1/40)

区のSY05と中央に位置するSY06とはやや距離がある。焚口の前は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室の天井部一部と煙道部が欠損している以外は、遺存状態は良好であった。窯体の残存長は9.9mを測り、分焰柱を有するが、ダンパーは無かったものと思われる。焚口から分焰柱に向かって、柱の直後から焼成室中途までの床面下には、椀を伏せた状態で敷き詰めた、いわゆる「床面下施設」が設けられていた。

- ・ 燃焼室

焚口から分焰柱中心部までの長さ、2.5mを測る。床面の幅は焚口で1.1mを測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では1.5mを測る。燃焼室の床面はほぼ水平であるが、検出時点では、焚口から分焰柱に向かってわずかに下っている。

- ・ 分焰柱

分焰柱基部は、主軸方向の径0.58m、これと直交する径0.42mを測り、水平断面形態は長方形を呈する。分焰孔は、焚口から分焰柱に向かって左側が幅0.58m、高さ0.76mを測り、右側が幅0.59m、高さ0.72mを測る。主軸と直交する断面を観察すると、SY06と同様に、地山を掘り抜いて作られた柱内部の被熱部が曲線的であるのに対し、柱の外郭線が直線的に立ち上がっているため、当初は左右分焰孔内側の断面形態が曲線的であったものを、直線的に補修したことが窺える。

- ・ 焼成室

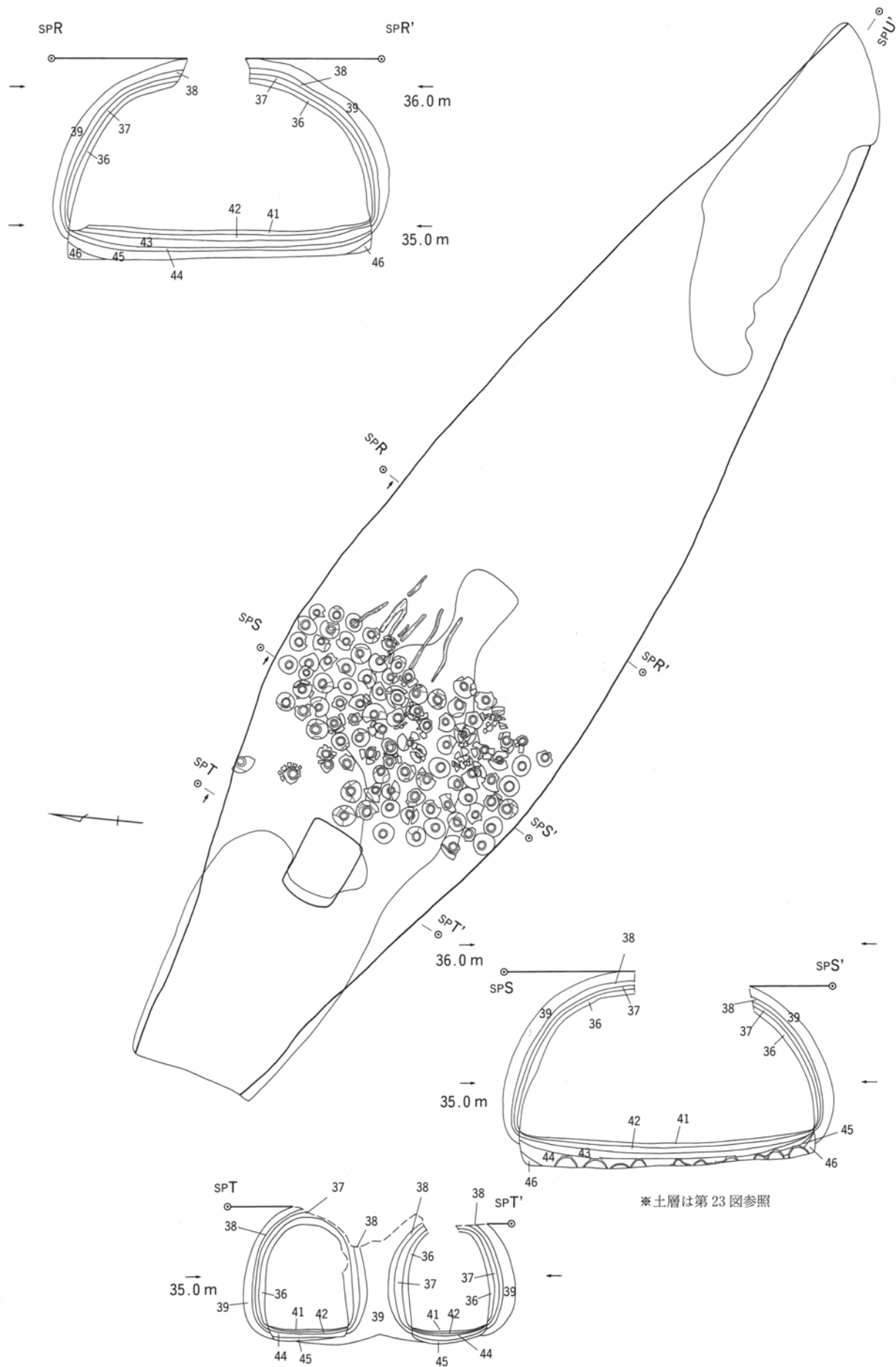
焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって6.88mを測る。窯床の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がる部分が短く続いた後、再び幅が緩やかに長くしぼられてゆくものと思われ、第I次調査区のSY04・05などと同様の平面形態を呈するものと思われる。SY05と比較してしぼられ方は、床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で1.75m、さらにそこから1.76m登ったところでは、最大幅2.15mを測る。焼成室での床面平均斜度は21°で、SY04と比較すると緩やかで、床面内での急激な変化は認められず、比較的安定している。

- ・ 床面下施設

SY07の床面下施設は、第I次調査区で検出されたものと同様に窯体幅全体に敷き詰めるタイプで、伴う溝なども見られない。敷き詰められた範囲は他のものよりも狭く、焚口から分焰柱に向かって、柱の直後から窯体幅全体に長さ約1mにすぎない。この椀を敷き詰めるための掘り込みは、前年度調査のものと同様に窯壁及び地山の被熱部を断ち切っているため、これは築窯時に設けたものではなく、何度かの焼成行為の後に設けられたものと考えられる。床面と椀を敷いた層との間には、炭化物を多く含む層が確認できる。

- ・ 前庭部及び灰層

焚口の正面には、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。幅2.9m、奥行き2.8mを測り、焚口に向かってやや横長に設けられている。灰層は、この前庭部とほぼ同じ範囲に小規模に展開する。その規模は、等高線方向の最大幅2.8m、傾斜方向における最大長1.7m、最も厚い部分で0.1mを測る。



第22図 SY07断面図・床面下施設平面図(1/40)

SPU



第Ⅲ章 遺 物

第1節 器 種 分 類

今回の調査で出土した遺物は、第Ⅰ・Ⅱ次調査区併せて、容量 27 リットルのコンテナで 390 箱である。器種の内訳は、製品としては伊勢型鍋 2 点を除くと碗及び皿に限られ、これに窯道具である焼台が加わる。これらはいわゆる「山茶碗・山皿」、または「行基焼き」と呼ばれたもので、主として中世に生産された無釉陶器である。

この出土遺物の個体識別については、碗、皿ともに底部を基準にした方法を用いた。すなわち、出土遺物の碗、皿の底部が 1/2 以上残存するものを 1 個体と数え、底部の遺存度が 1/2 以下のものについては、0 個体と数えた。以下に記述する個体数は、すべてこの方法を用いた数値である。第Ⅰ・Ⅱ次調査区を合わせた総出土個体数は、11944 点である。これらの器種別内訳は、碗=8182 点、皿=3762 点で、碗の全体に占める比率は 69% である。なお、この個体識別に合わせて、各個体から観察できる複数の情報をデータ化したが、この結果については別章で述べる。

調査区周辺にみられる時期の近似する窯跡では、壺、瓶、鉢、瓦などの生産も確認されているが、今回の調査地点ではみられなかった。この NA 335 号窯出土遺物については、以下に分類を行い、これに基づいて次節で説明、検討を行う。

碗、皿ともに、主として体部の断面形態をもとに分類を行い(大分類 1～)、これらをさらに口縁端部の断面形態によってそれぞれ分類(小分類 A～)した。口縁端部の分類は、碗、皿ともに共通して同一基準を採用した。

・ 碗大分類

今回の調査地点において出土した碗は、胎土に肉眼観察における客観的な差が明確には認められず、全体的な特徴としては若干の砂粒や小礫を含み、泥質に近い。ここでは、碗の断面形態をもとに、3 種類に大別した。

[碗 1 類]

体部から口縁部にかけての断面形態が、曲線的に立ち上がるもの

[碗 2 類]

体部から口縁部にかけての断面形態が、直線的に立ち上がるもの

[碗 3 類]

体部の断面形態は直線的であるが、口縁部付近では端反り風の丸みをもつもの

・皿大分類

皿の胎土については、椀同様の観察所見であった。ここでは主として断面形態の特徴から、4種類に大別した。

[皿1類]

体部の器壁に比べて底部の器壁が厚いもの

[皿2類]

体部・底部が、器壁の厚さに極端に差がないもの

[皿3類]

高台を有するもの

・共通小分類

[口縁A]

口縁端部が均等に丸みを帯びたもの

[口縁B]

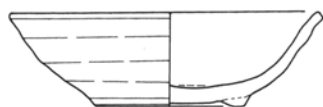
口縁端部が断面形態上角張り、端部内・外の曲点がそれぞれほぼ直角なもの

[口縁C]

断面形態上、口縁端部内側の曲点が、外側の曲点より大きく曲がるもの

[口縁D]

断面形態上、口縁端部内側の曲点が、外側の曲点より緩く曲がるもの



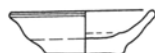
椀1類



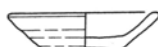
椀2類



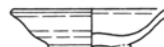
椀3類



皿1類



皿2類



皿3類



口縁A



口縁B



口縁C



口縁D

第24図 器種分類図

第2節 第I次調査区の遺物

第1項 概 要

第I次調査区で出土した遺物は、碗=7231点、皿=3546点、伊勢型鍋=2点である。この中で最も出土量の多かった窯体はSY04で、碗=668点、皿=90点を数える。反対に最も少なかったのはSY01で、碗=64点、皿=0点を数える。但し、最多のSY04の出土量は、SY05と比較して大きな差はなく、SY02の出土量がこれらの約半数である。最少のSY01の出土量は、SY03の総出土点数と同じである。こうした各窯体における出土量の二極化は、床面下施設の有無に原因が求められよう。すなわちSY02・04・05の出土遺物量は、床面下施設に使用された碗の数量が多くを占めており、SY01・03では出土量にこうした数値が反映されていないため、二極化傾向を示す結果となったものである。第I次調査区で検出した窯体5基は、各遺構の遺存度を無視して、窯内の出土点数に限って比較してみると、極端な数量差が認められなかった。

第2項 SY01に関する遺物

SY01は、遺構の項でも記述したように、特異な形態でありながら決定的な判断材料がなく、どのような製品を目的に焼成行為を行ったのか判断し得なかった。しかし、窯体内からは、碗=64個体が出土しているため、これについて説明を行う。

SY01は、狭い床面積や特異な形態ながら、窯内の出土量としては他の窯体と大きな差はなく、しかも各出土碗の遺存度が良好で、細片の出土が少ないことが特徴であった。出土した器種は碗のみであったが、これらはすべて窯内で検出された。この碗64個体のうち、分類可能なものは57個体で、その内訳は、碗1類=36、2類=9、3類=12個体であった。遺物番号1～19は、SY01出土遺物である。1～9が碗1類、10～13が碗2類、14～19が碗3類である。口縁部には、極端な種の偏りはみられない。

第3項 SY02に関する遺物

SY02に関する出土遺物の内訳は、窯内から碗=82個体、皿=58個体、伊勢型鍋=1個体、床面下施設から碗=231個体、皿=3個体である。さらに、この窯体に伴うものと思われる灰原A1層からは、碗=2338個体、皿=1485個体、伊勢型鍋=1個体が出土している。

SY02は床面下施設をもつため、調査区内での各窯体と比較すると、出土個体数は多いグループに入る。特に、SY02に伴うものと思われる灰原A1層は、圧倒的な出土数量であり、この窯体が安定した生産活動を行っていたことを示唆している。

窯内から検出された遺物のうち、分類可能なものは碗=66個体、皿=51個体である。これらの器形別内訳は、碗では1類=60、2類=3、3類=3個体、皿では1類=23、2類=

28 個体である。遺物番号 20～33・86～88 は、SY02 窯内出土遺物である。20～24 が碗 1 類、25 が碗 2 類、26・27 が碗 3 類で、28 が皿 1 類、29～33・87・88 が皿 2 類である。86 の伊勢型鍋は、焚口から分焰柱に向かって、焼成室に約 1 m 入った左壁側で出土している。球形の体部に外反する口縁部がつくもので、口縁端部は短く内側に折り返されて肥厚する。体部外面から口縁部内側までナデ調整が施され、体部内側はヘラケズリ調整が行われている。その形態的特徴などから、12 世紀後葉のものと思われる。

遺物番号 34～85 は、SY02 の床面下施設に使用されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは碗=220 個体、皿=1 個体である。これらの器形別内訳は、碗では 1 類=185、2 類=11、3 類=24 個体、皿では 2 類=3 個体である。34～74・84 が碗 1 類、75～78 が碗 2 類、79～83 が碗 3 類で、84・85 が皿 2 類である。84 の碗と皿が融着したものでは、碗の外側に多量に自然釉がかかっており、融着の痕跡などから、3 本の積み上げられた皿の列上部に、碗を渡すようにかぶせて窯入れしたことが窺える。これは、小径の皿を積み重ねたときに、生じる安定の悪さを補うための行為かもしれない。

遺物番号 389～400・431～477 は、灰原 A 1 層出土遺物である。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは碗=1630 個体、皿=1078 個体である。これらの器形別内訳は、碗では 1 類=1104、2 類=356、3 類=170 個体、皿では 1 類=408、2 類=669、3 類=1 個体である。389～393・431・440～451・458～460・472～484 が碗 1 類で、414・415・432・437～439・452～455・473・474 が碗 2 類、416・417・433・434・456・457 が碗 3 類である。395～397・418～423・462～465・476 が皿 1 類で、398～400・424～430・435・436・466～468・477 が皿 2 類で、469・470 が皿 3 類である。これらの碗・皿の他に、伊勢型鍋が 1 点出土している。471 は伊勢型鍋の口縁部片で、頸部、外反部ともに短く、端部は短く内側に折り返されて肥厚する。こうした形態的特徴から、SY02 の焼成室内から出土したものと同様、12 世紀後葉のものと思われる。458～460 は、焼台が融着したものを図示した。461 の焼台には、上面平坦部内側に靱痕が認められる。

第 4 項 SY03 に関する遺物

SY03 出土遺物の内訳は、窯内から碗=51 個体、皿=13 個体である。さらに、この窯体に伴うものと思われる灰原 A 2 層からは、碗=382 個体、皿=147 個体が出土している。

SY03 は床面下施設をもたないため、調査区内での各窯体と比較すると、出土個体数は少ない。SY03 の窯壁は、調査区内で同時に検出された他の窯壁と比較して被熱が脆弱であった。この窯体に伴うものと思われる灰原 A 2 層は、圧倒的な出土数量の灰原 A 1 層と比較すると、碗と皿を合わせた総出土個体数において 7 分の 1 にも満たない。したがって、この窯体は、窯壁の被熱や灰原の出土量から考えると、生産活動という点で、SY02 よりかなり低かったことを示唆している。

窯内から検出された遺物のうち、分類可能なものは碗=38 個体、皿=13 個体である。これらの器形別内訳は、碗では 1 類=29、2 類=6、3 類=3 個体、皿では 1 類=11、2 類=

2 個体である。遺物番号 89～100 は、SY03 窯内出土遺物である。89～91・98 が碗 1 類、92・93 が碗 2 類、94 が碗 3 類で、95～97・100 が皿 1 類、99 が皿 2 類である。

第 5 項 SY04 に関する遺物

SY04 に関する出土遺物の内訳は、窯内から碗=92 個体、皿=89 個体、床面下施設から碗=576 個体、皿=1 個体である。

SY04 は床面下施設をもつため、調査区内での各窯体で比較すると、出土個体数は多いグループに入る。また、この窯体の床面下施設は、焼成室内で分焰柱側からかなり広い面積で敷き詰められており、1 窯体の床面下施設に使用された個体数では、第 I・II 次調査区併せた中でも最多であった。

窯内から検出された遺物のうち、分類可能なものは碗=33 個体、皿=72 個体である。これらの器形別内訳は、碗では 1 類=28、2 類=2、3 類=3 個体、皿では 1 類=18、2 類=54 個体である。遺物番号 101～111・230～237 は、SY04 窯内出土遺物である。101・102 の 4 個体中 3 個体・103～105・230 が碗 1 類、106・107・231 が碗 3 類で、108・232 が皿 1 類、109～111・233～237 が皿 2 類である。

遺物番号 112～229 は、SY04 の床面下施設に使用されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは碗=502 個体、皿=1 個体である。これらの器形別内訳は、碗では 1 類=333、2 類=118、3 類=51 個体、皿では 2 類=1 個体である。112～183 が碗 1 類、184～211 が碗 2 類、212～223 が碗 3 類である。

第 6 項 SY05 に関する遺物

SY05 に関する出土遺物の内訳は、窯内から碗=134 個体、皿=15 個体、床面下施設上段から碗=159 個体、皿=5 個体である。床面下施設下段から碗=245 個体、皿=9 個体である。さらに、前庭部からは碗=36 個体、皿=101 個体、この窯体に伴うものと思われる灰原 B 1～6 層からは、各層合計で碗=586 個体、皿=385 個体が出土している。

SY05 は床面下施設をもち、さらにこれが上下 2 段構造になっているため、調査区内での各窯体で比較すると、出土個体数は多いグループに入る。また、この窯体の床面下施設は、焼成室内で 2 面にわたって敷き詰められており、1 窯体の床面下施設に使用された個体数では、第 I・II 次調査区併せた中でも SY04 に次ぐものであった。

窯内から検出された遺物のうち、分類可能なものは碗=101 個体、皿=10 個体である。これらの器形別内訳は、碗では 1 類=51、2 類=37、3 類=13 個体、皿では 1 類=5、2 類=4、3 類=1 個体である。遺物番号 238～260 は、SY05 の窯内出土遺物である。242～248・256 が碗 1 類、240・241・249～252・258～260 が碗 2 類で、238・239・253 が碗 3 類である。253・254 が皿 2 類である。

遺物番号 261～368 は、SY05 の床面下施設上下段に使用されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは碗=375 個体、皿=11 個体である。以下に器形別

内訳を、それぞれの段別に説明する。

床面下施設上段に使用されたものの器形別内訳は、椀では1類=115、2類=15、3類=15個体、皿では1類=2個体、2類=1個体である。261～292が椀1類、293・294が椀2類、295～302が椀3類で、303が皿1類、304・305が皿2類である。

床面下施設下段に使用されたものの器形別内訳は、椀では1類=164、2類=22、3類=44個体、皿では1類=3個体、2類=5個体である。306～350・367・368が椀1類で、351～355が椀2類、356～364が椀3類である。367の内1個体が皿1類、365・366・367の内1個体・368が皿2類である。367・368は、椀と皿が融着してしまったものを床面下施設に使用したもので、84と同様に椀の外側には自然釉が大量にかかっており、3本の積み重ねられた皿の列に、安定させるためか椀を渡すようにかぶせたことが窺える。

遺物番号 369～388 は、SY05 の前庭部で検出されたものである。このうち分類可能なものは椀=29個体、皿=66個体である。これらの器形別内訳は、椀では1類=22、2類=5、3類=2個体、皿では2類=66個体である。369～373・375が椀1類、374が椀2類、375～388が皿2類である。375・376は、84や367・368と同様に椀と皿が融着したもので、やはり3本の積み重ねられた皿の列に、安定させるためか、上から渡すようにかぶされたものである。

遺物番号 494～523 は、SY05 の生産活動に伴って形成されたと思われる、灰原 B 1～6 層から検出されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは、椀=383個体、皿=309個体である。各層の重複関係は、B 2 層の上に B 1 層が展開し、B 5 層の上には B 3・B 5 層がそれぞれ別地点で重なり、B 6 層の上には B 3 層が重なる。以下に器形別内訳を、それぞれの層別に説明する。

灰原 B 1 層で検出されたものの器形別内訳は、椀1類=5、2類=2個体のみで、全形を知り得る資料が少ないため図示していない。

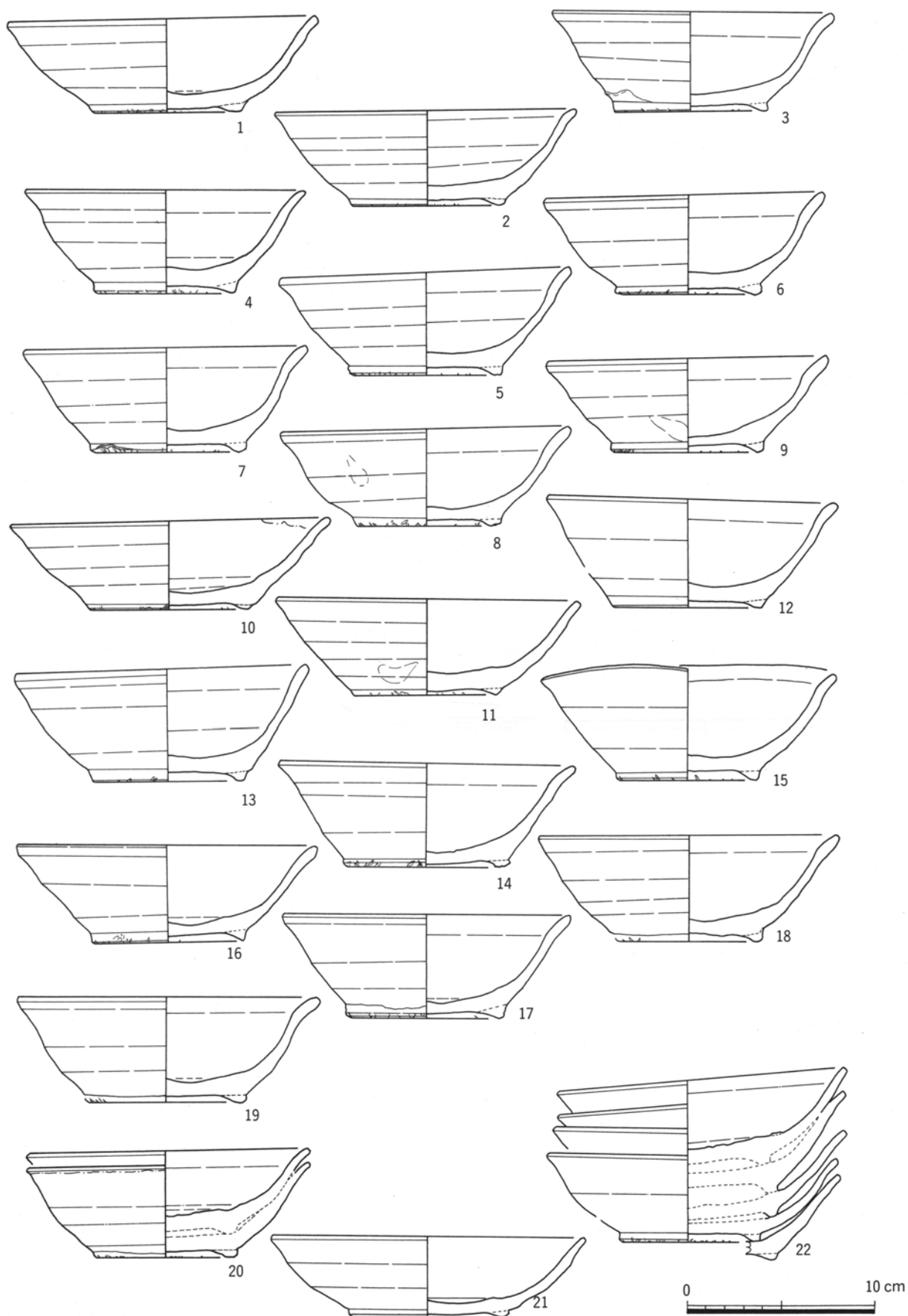
灰原 B 2 層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=10、2類=5、3類=9個体、皿では1類=7個体、2類=9個体である。494が椀1類で、495が皿1類、496が皿2類である。

灰原 B 3 層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=40、2類=62、3類=20個体、皿では1類=9、2類=76個体である。497が椀1類で、498～503が椀2類、504～506が皿2類である。507は、この層から出土した焼台で、上面平坦部内側には靱痕が認められる。

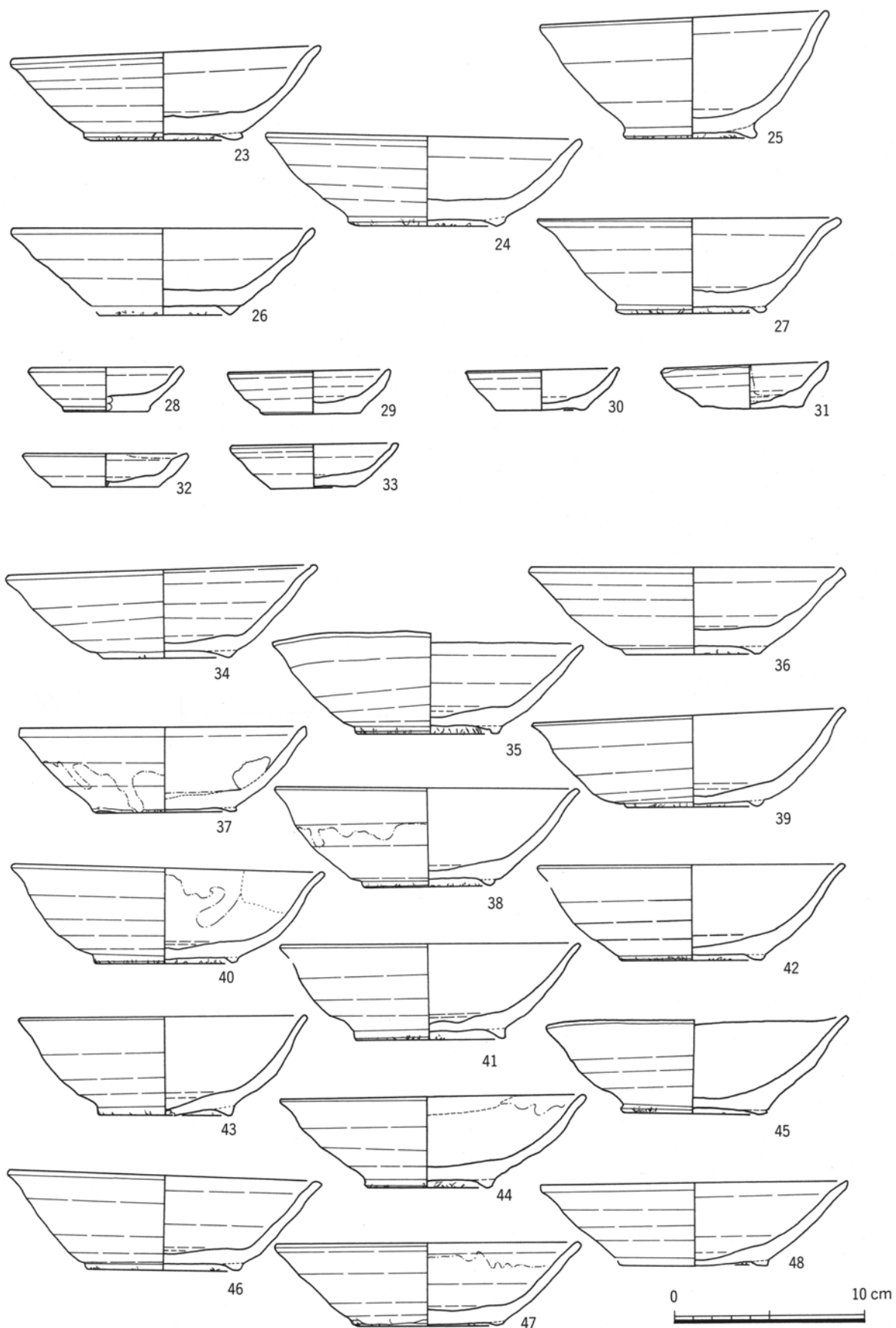
灰原 B 4 層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=56、2類=11、3類=3個体、皿では1類=6、2類=18個体である。508が椀1類で、509が皿2類である。

灰原 B 5 層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=87、2類=17、3類=30個体、皿では1類=47、2類=69、3類=1個体である。510～512が椀1類で、513・514が椀3類である。515・516が皿1類、517が皿2類である。

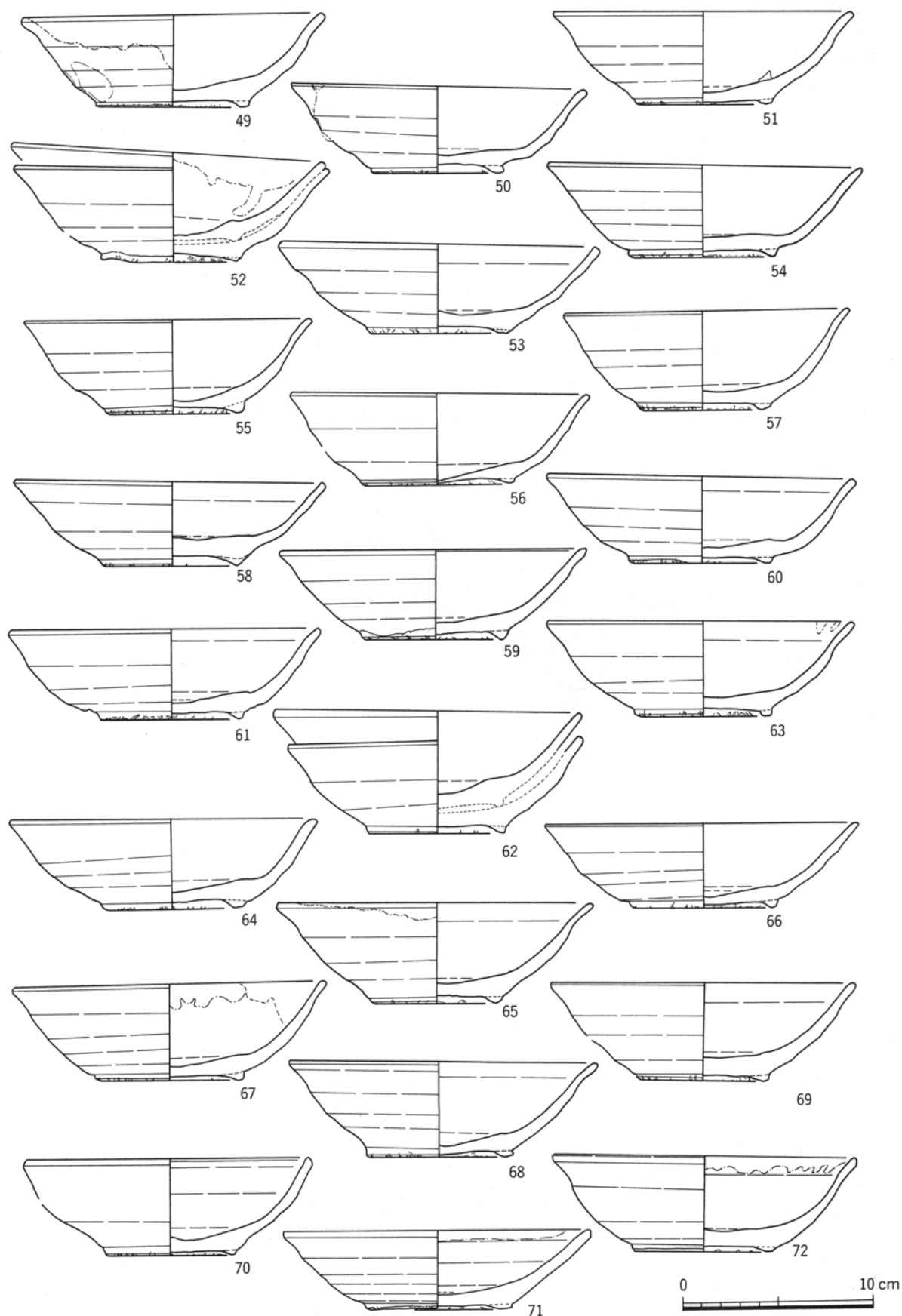
灰原 B 6 層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=11、2類=6、3類=9個体、皿では2類=20個体である。518～520が椀1類で、521が椀3類である。522・523が皿2類である。



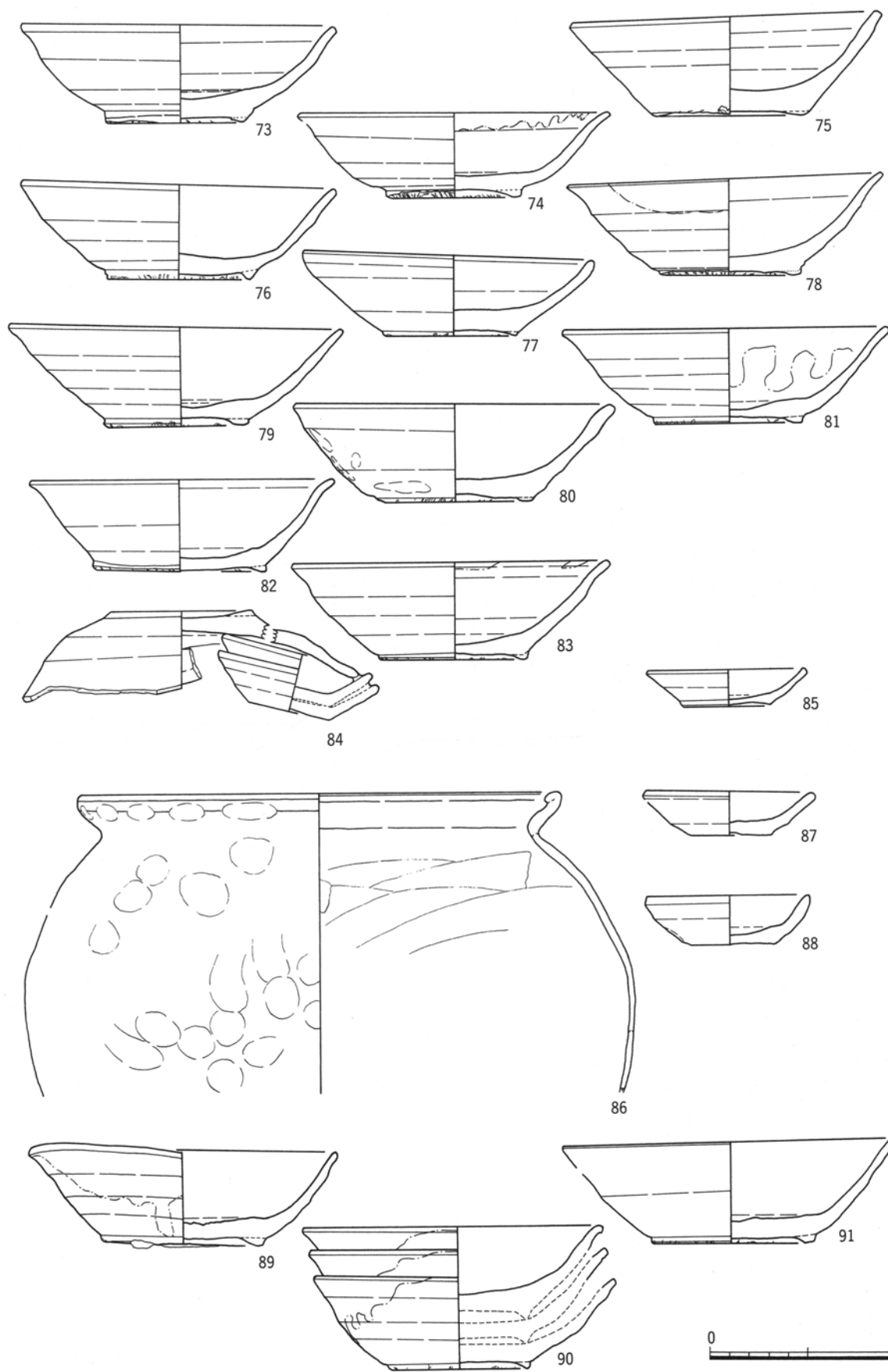
第 25 図 遺物実測図①



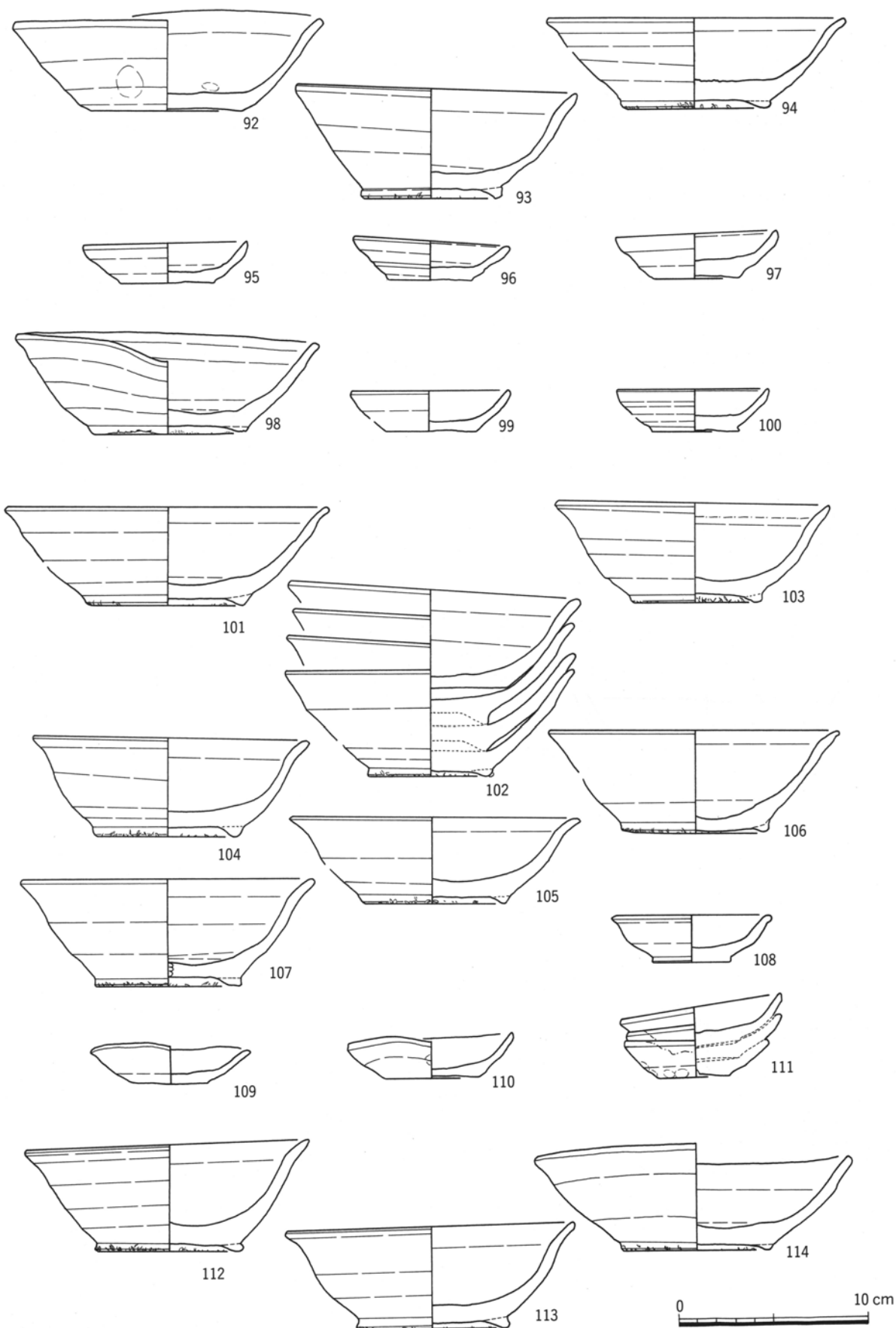
第 26 図 遺物実測図②



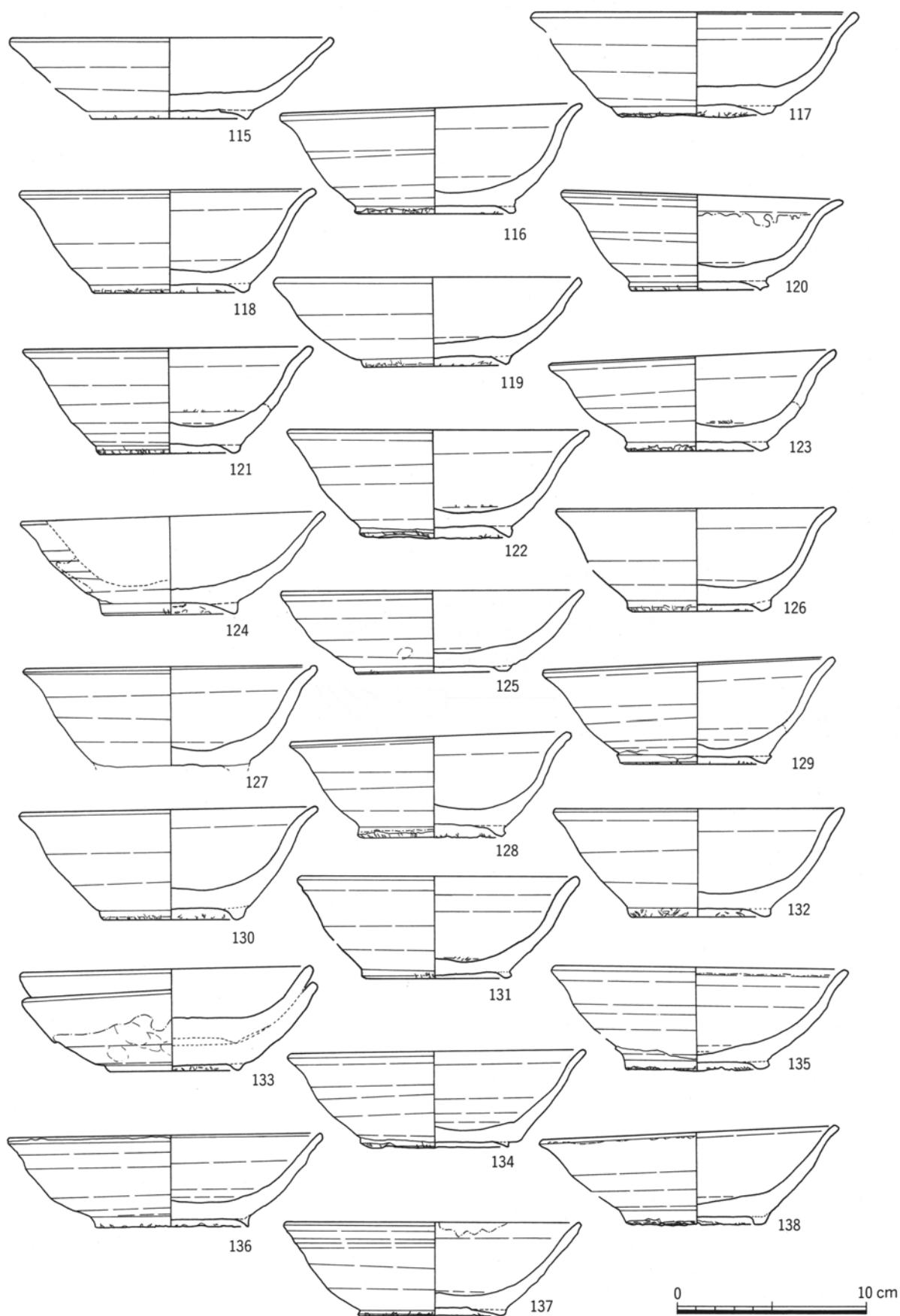
第 27 図 遺物実測図③



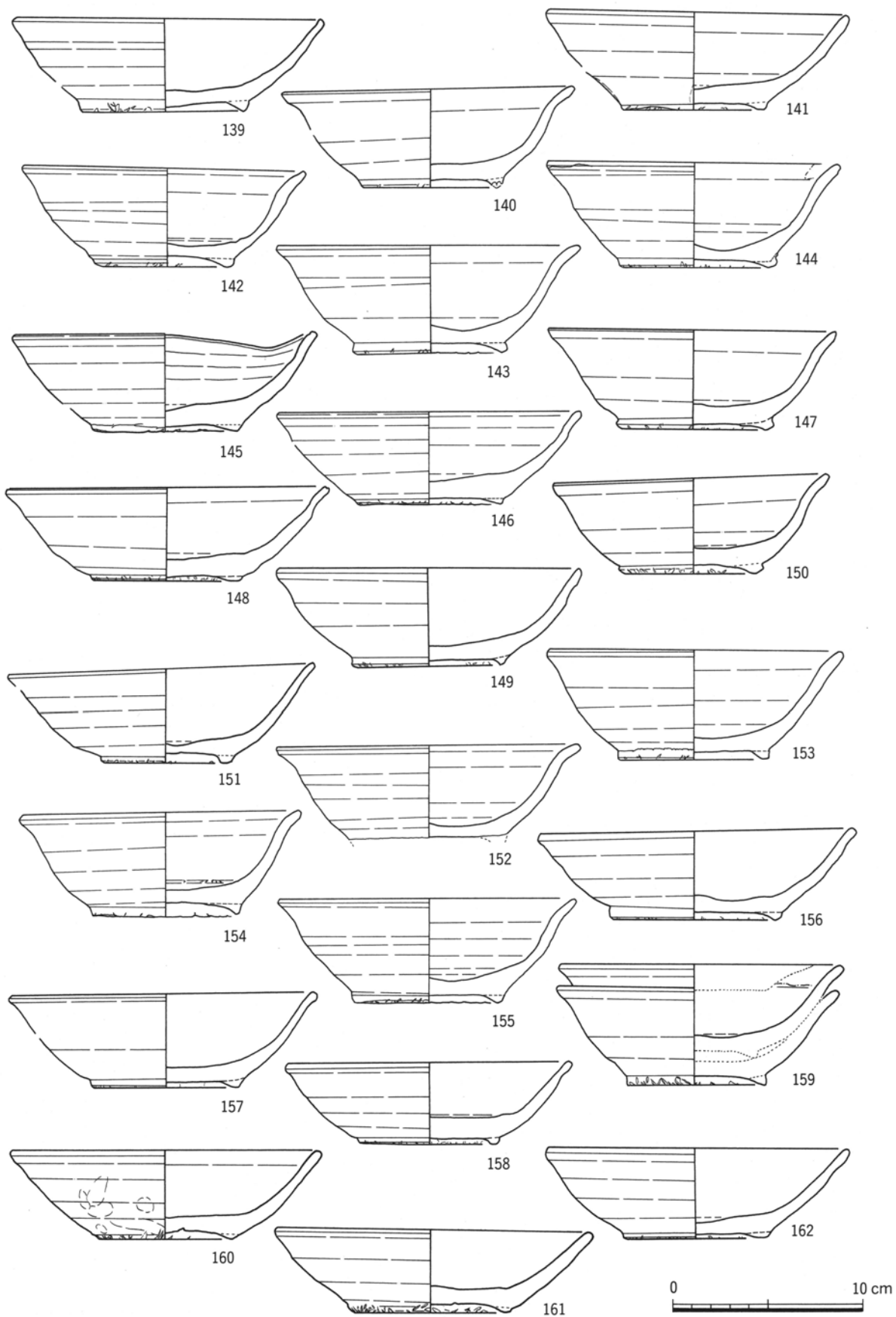
第 28 図 遺物実測図④



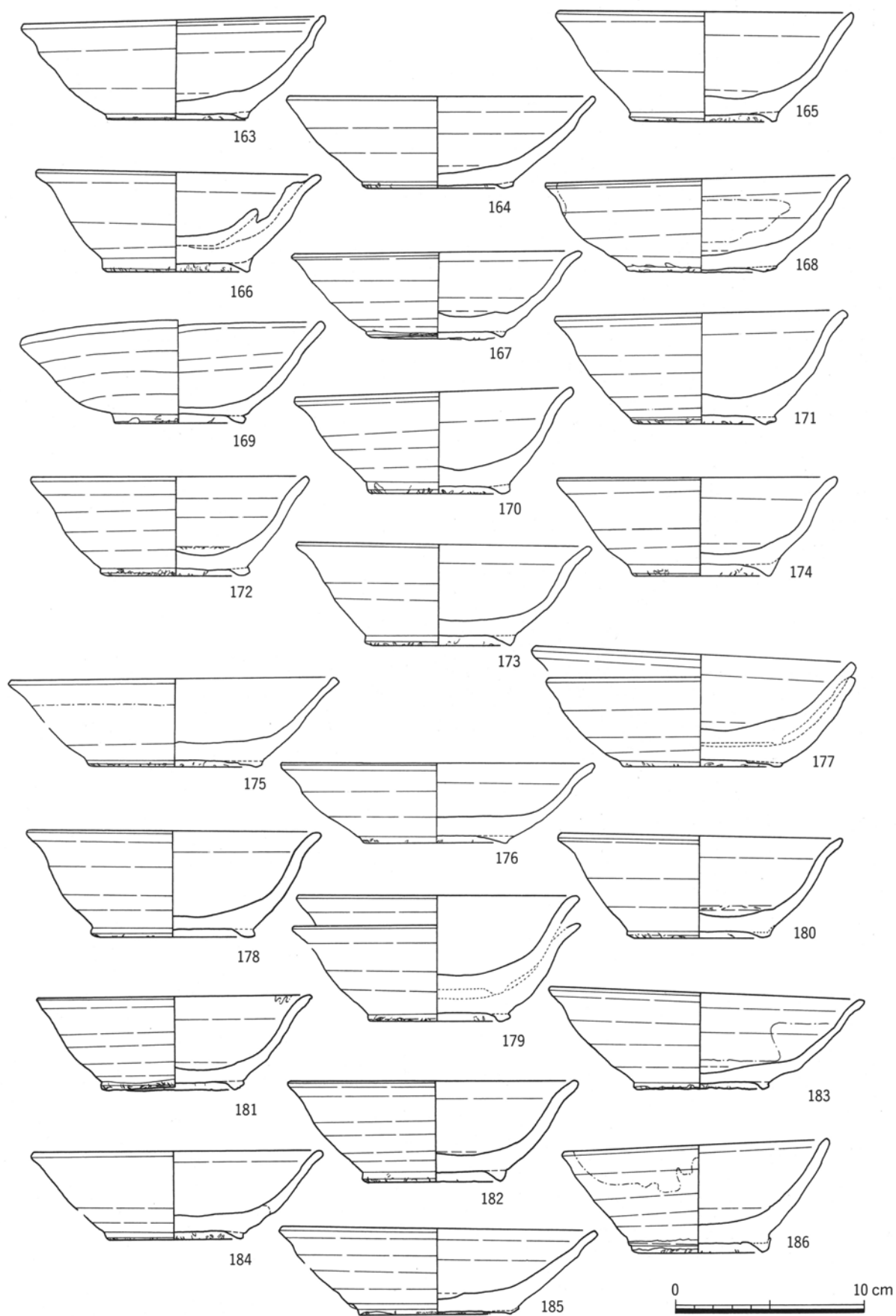
第 29 図 遺物実測図⑤



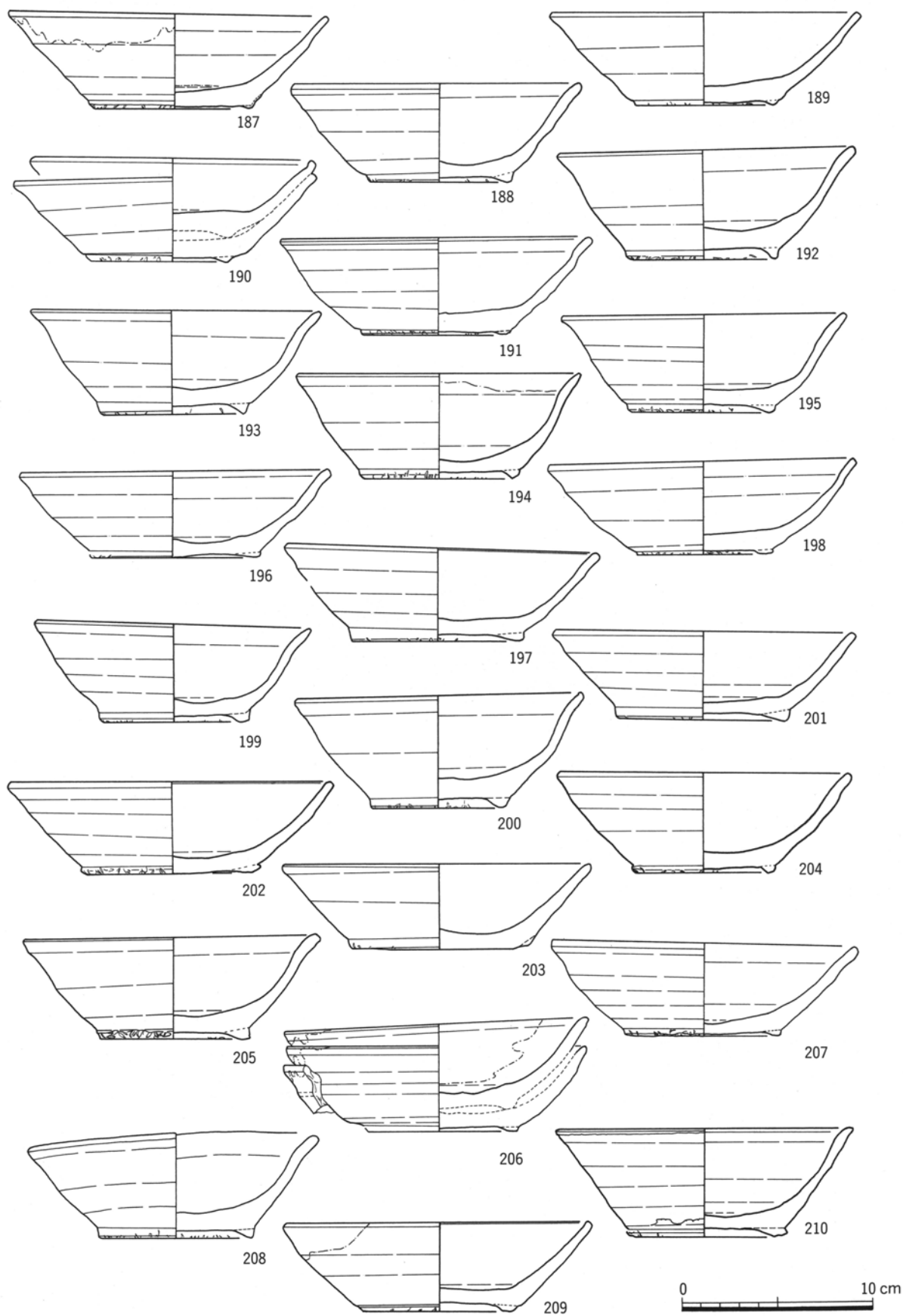
第 30 図 遺物実測図⑥



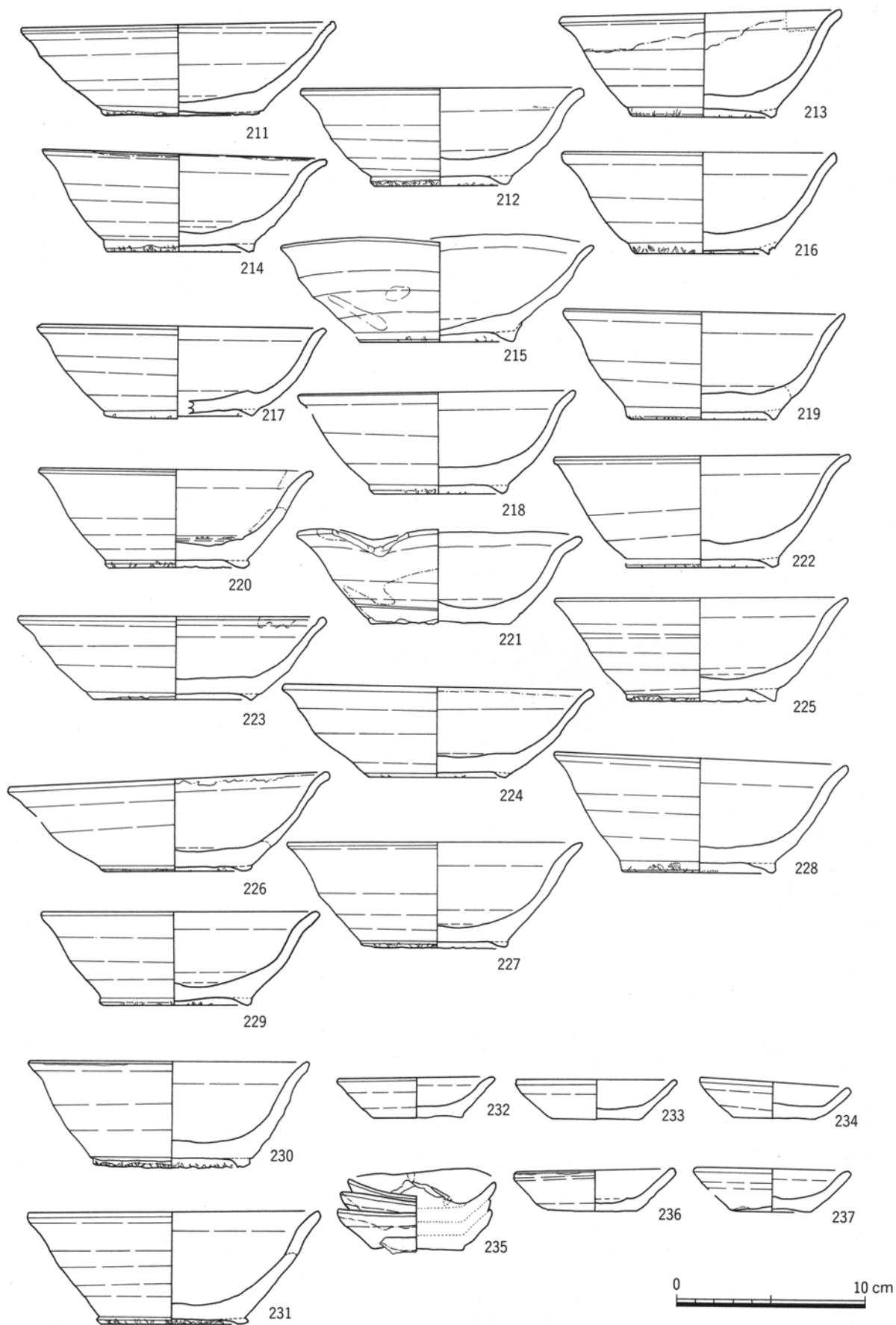
第 31 図 遺物実測図⑦



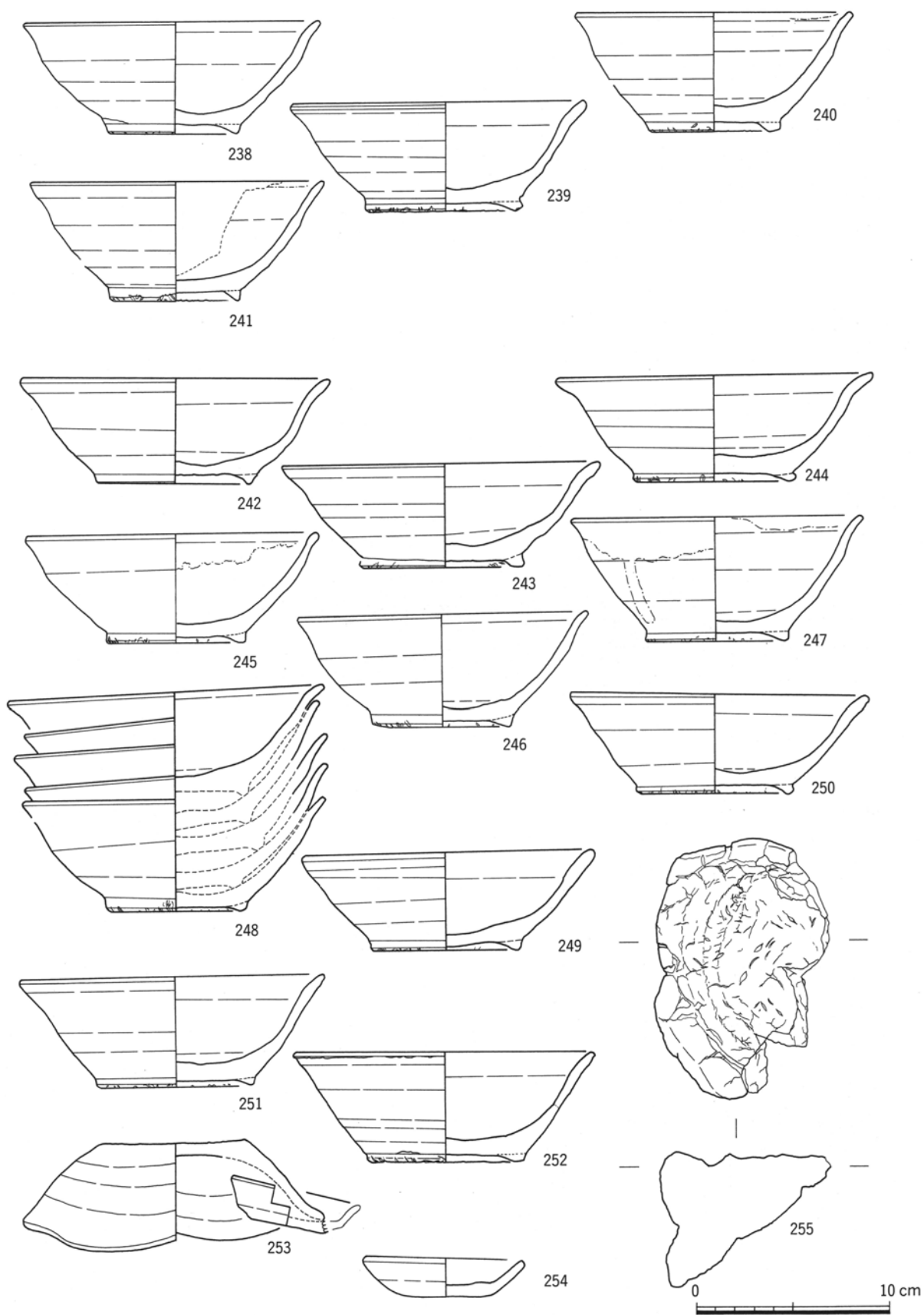
第 32 図 遺物実測図⑧



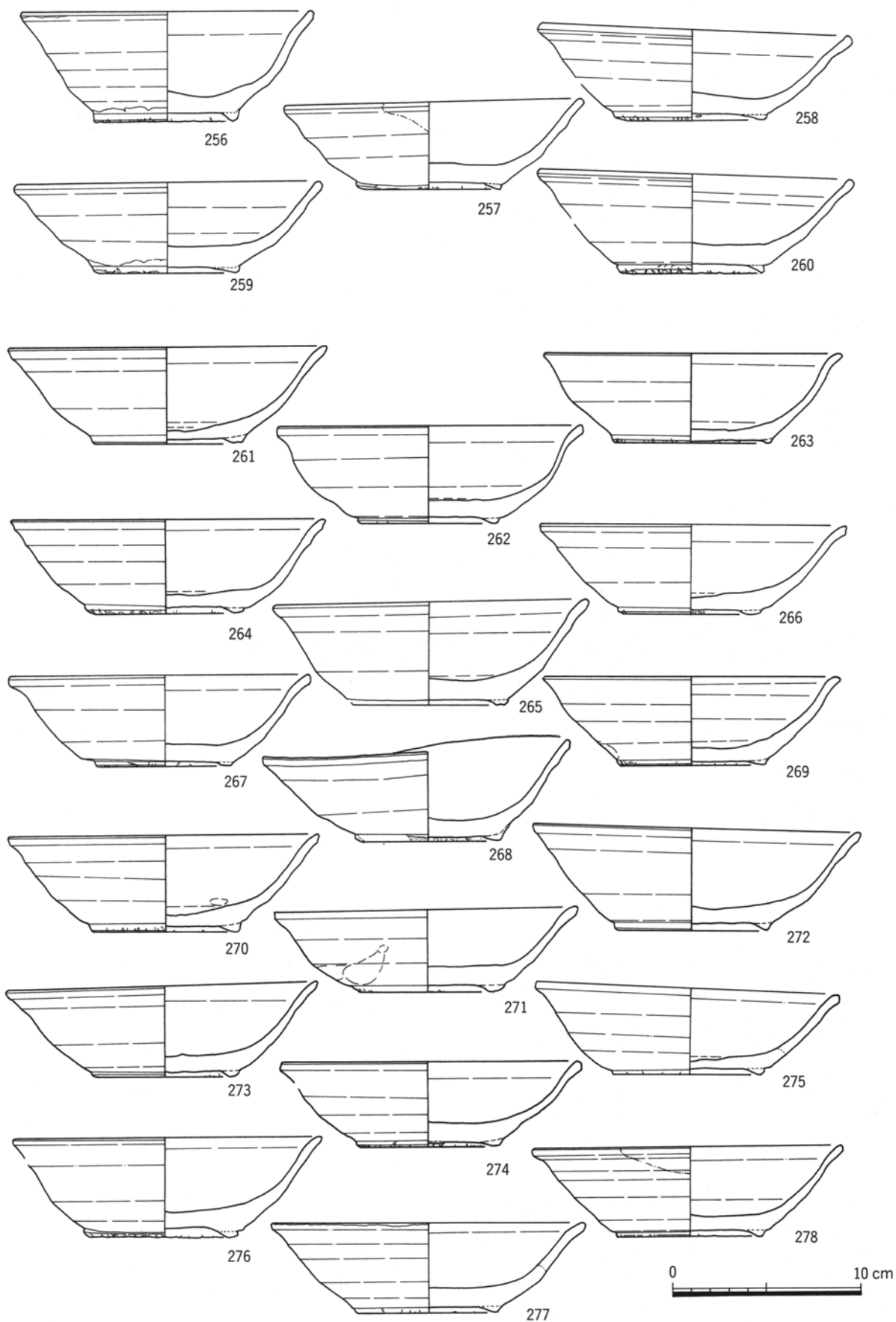
第 33 図 遺物実測図⑨



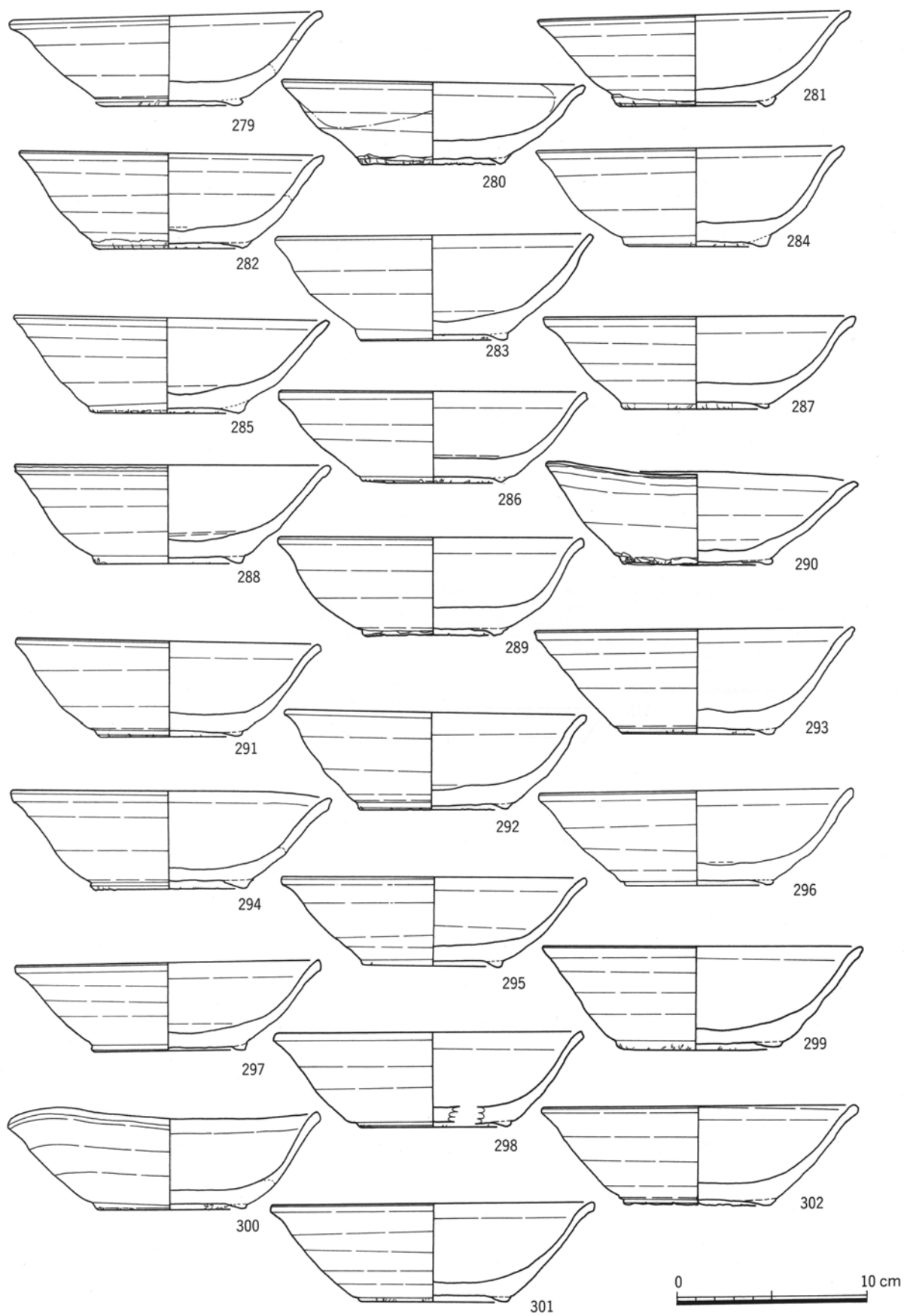
第 34 図 遺物実測図⑩



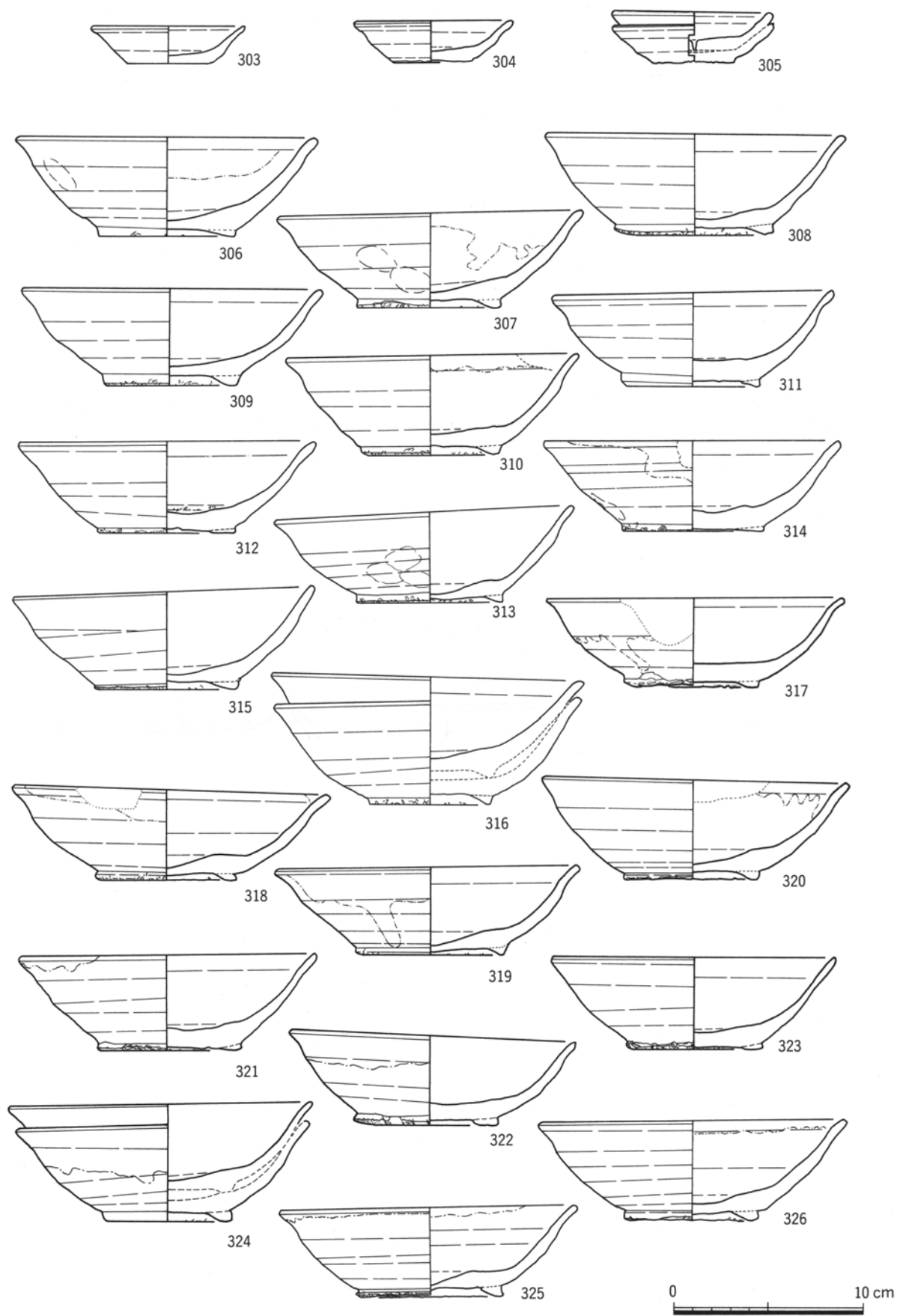
第 35 図 遺物実測図⑪



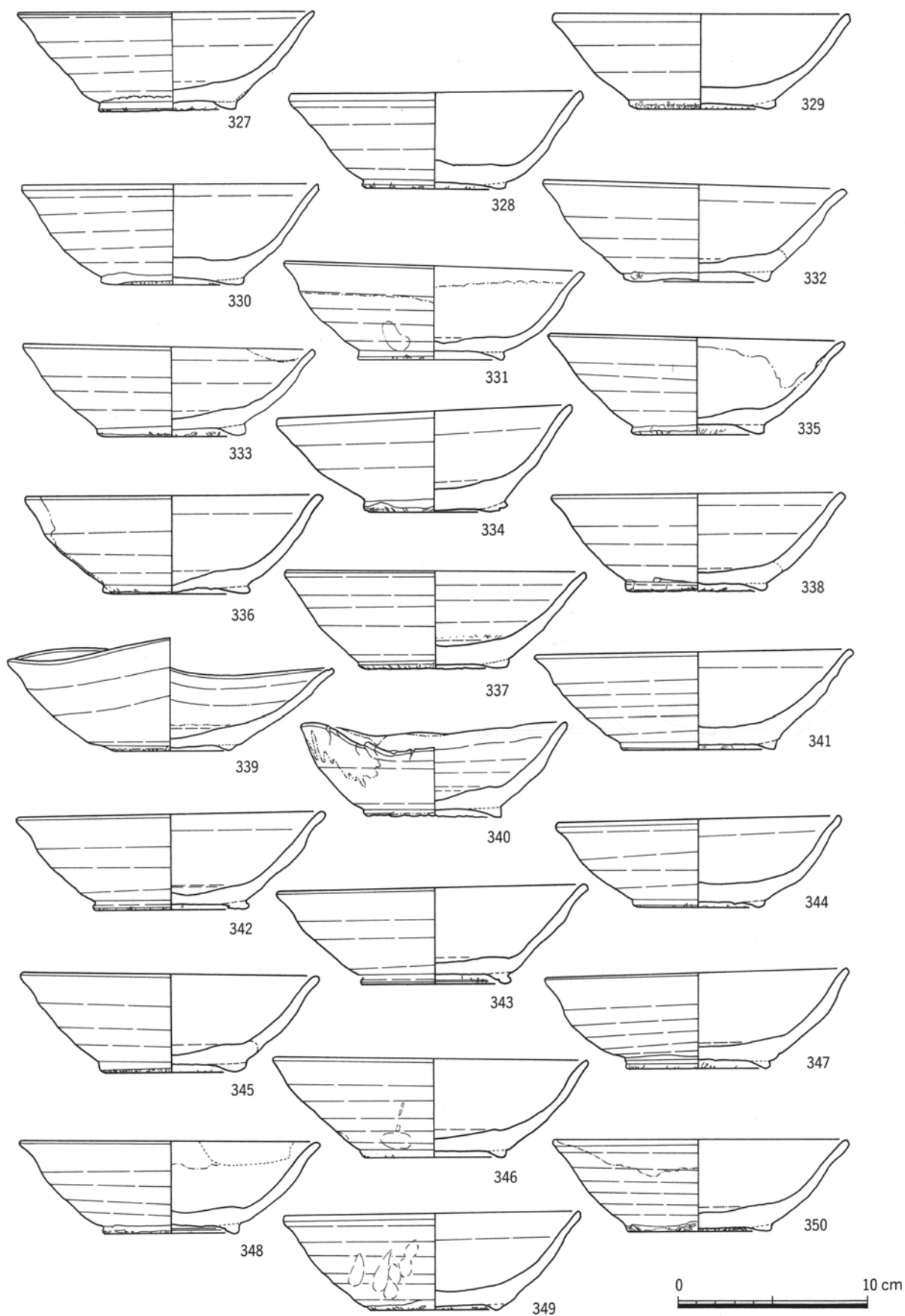
第 36 図 遺物実測図⑫



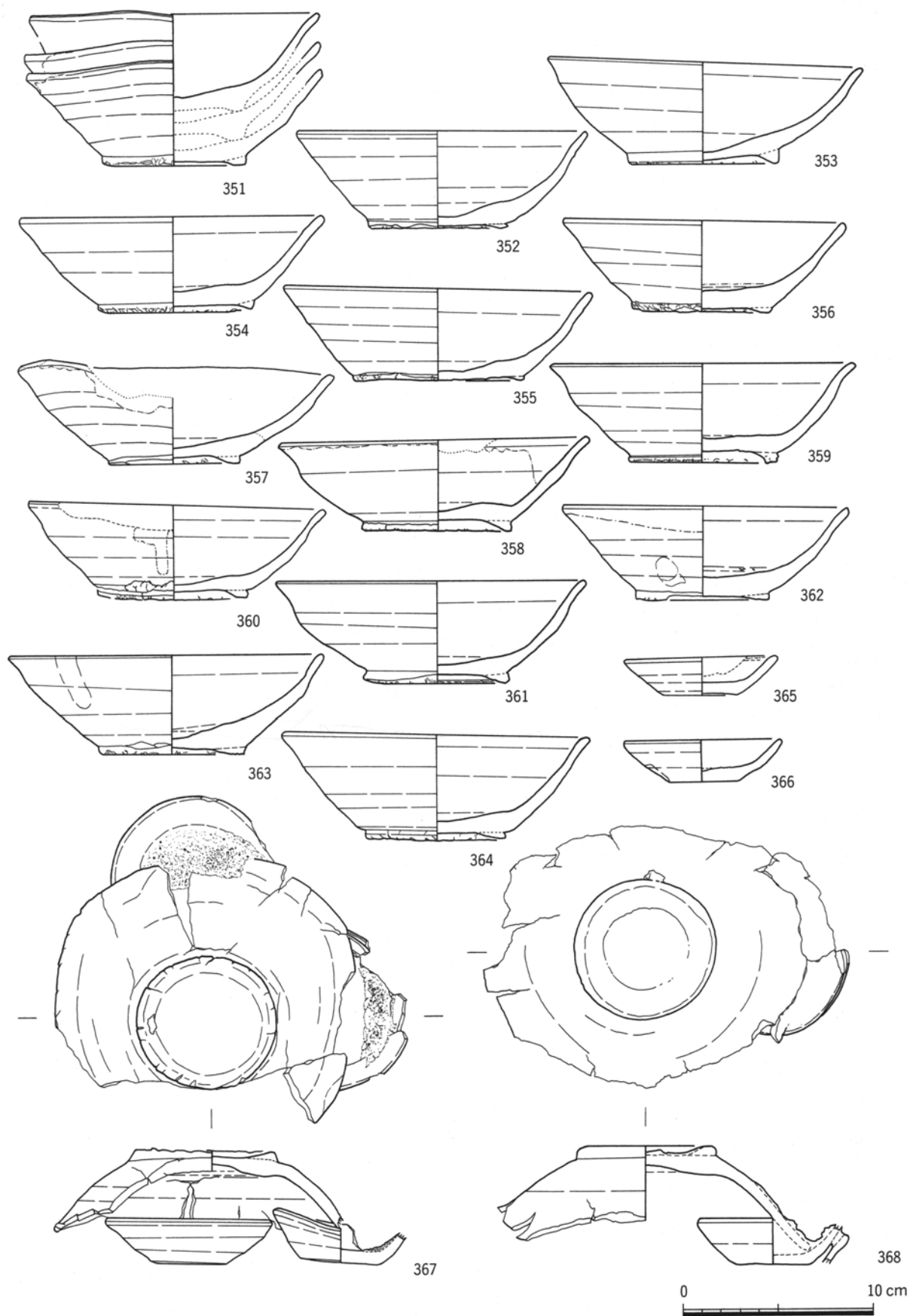
第 37 図 遺物実測図⑬



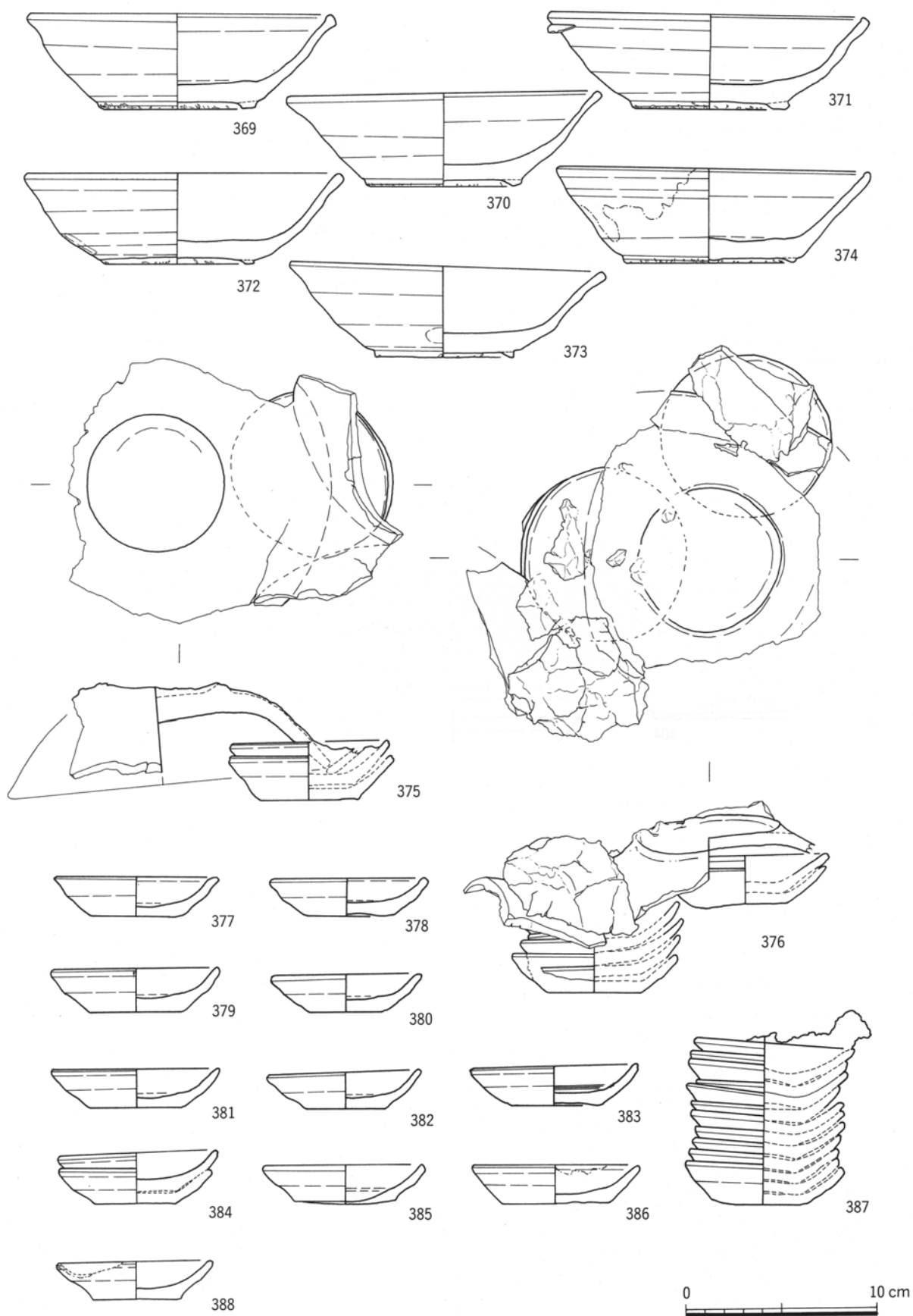
第 38 図 遺物実測図⑭



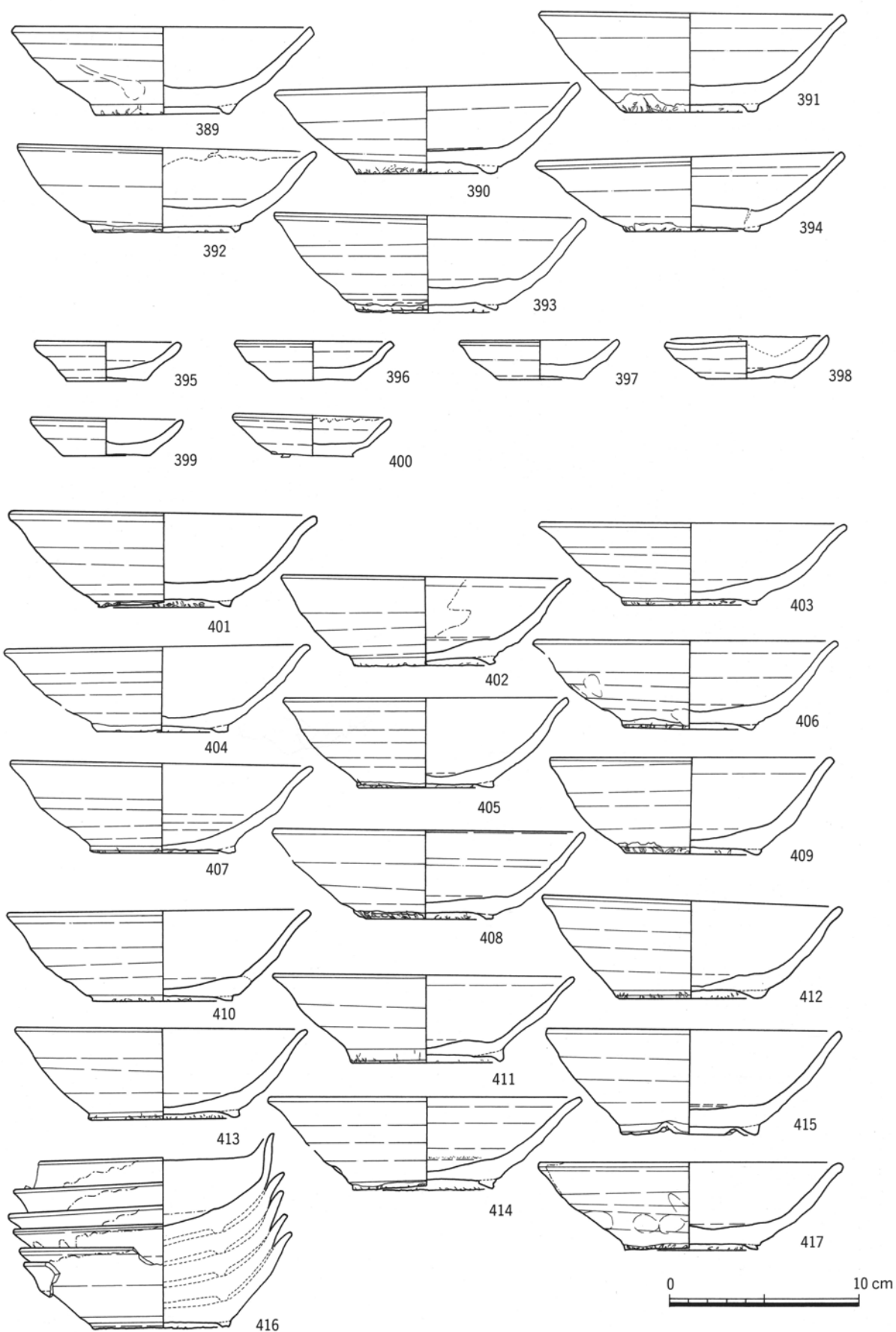
第 39 図 遺物実測図⑮



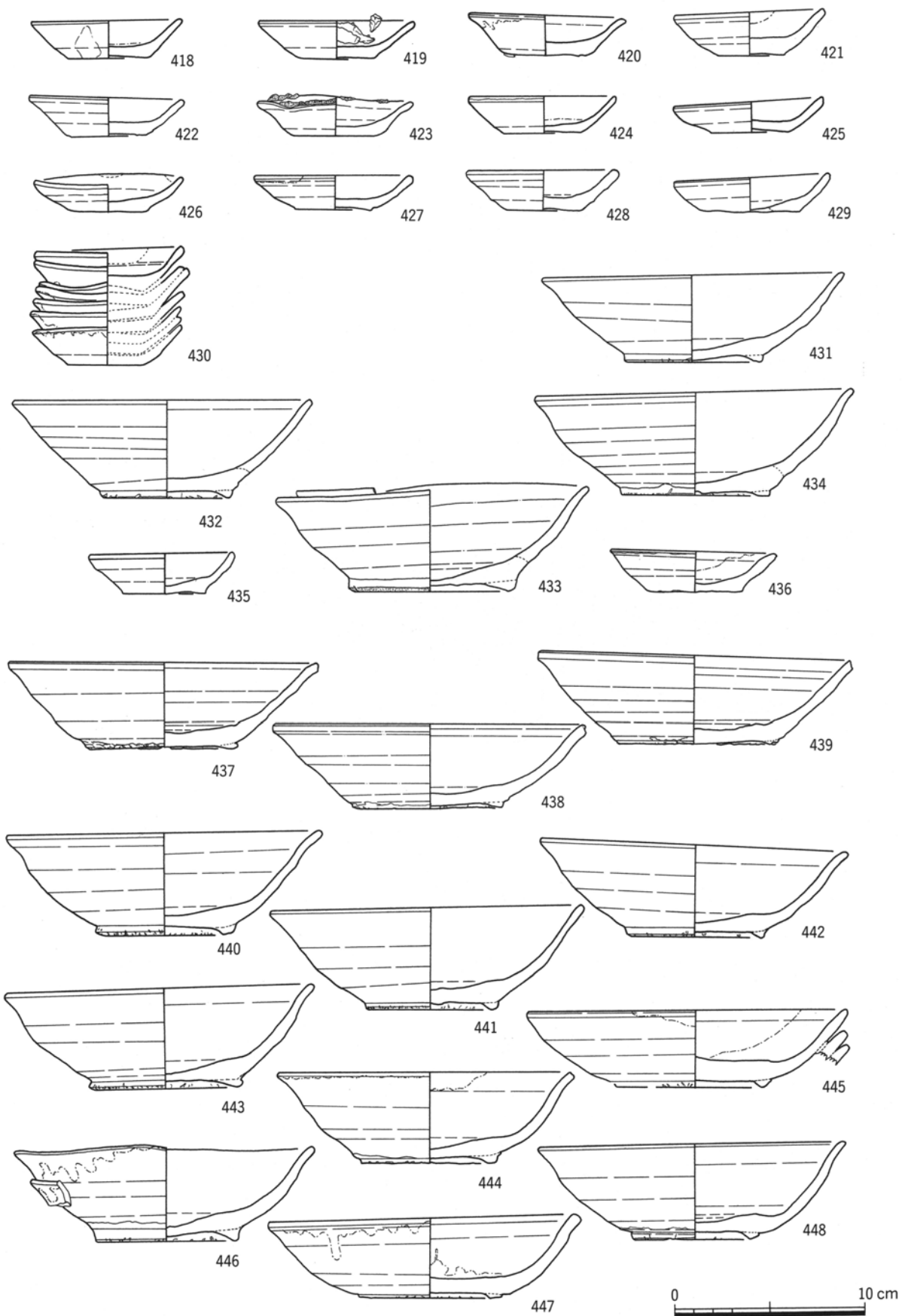
第40図 遺物実測図⑬



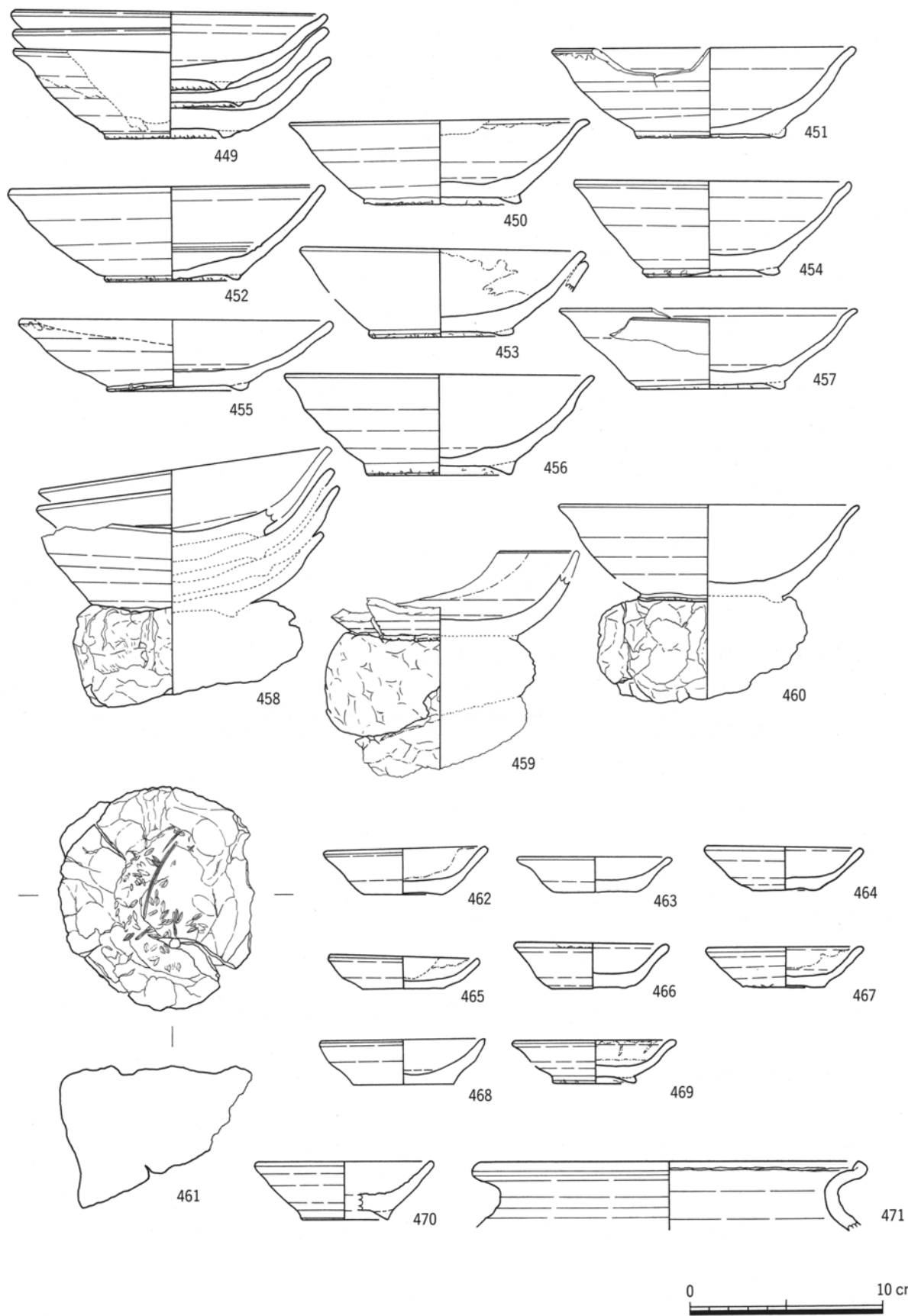
第 41 図 遺物実測図⑪



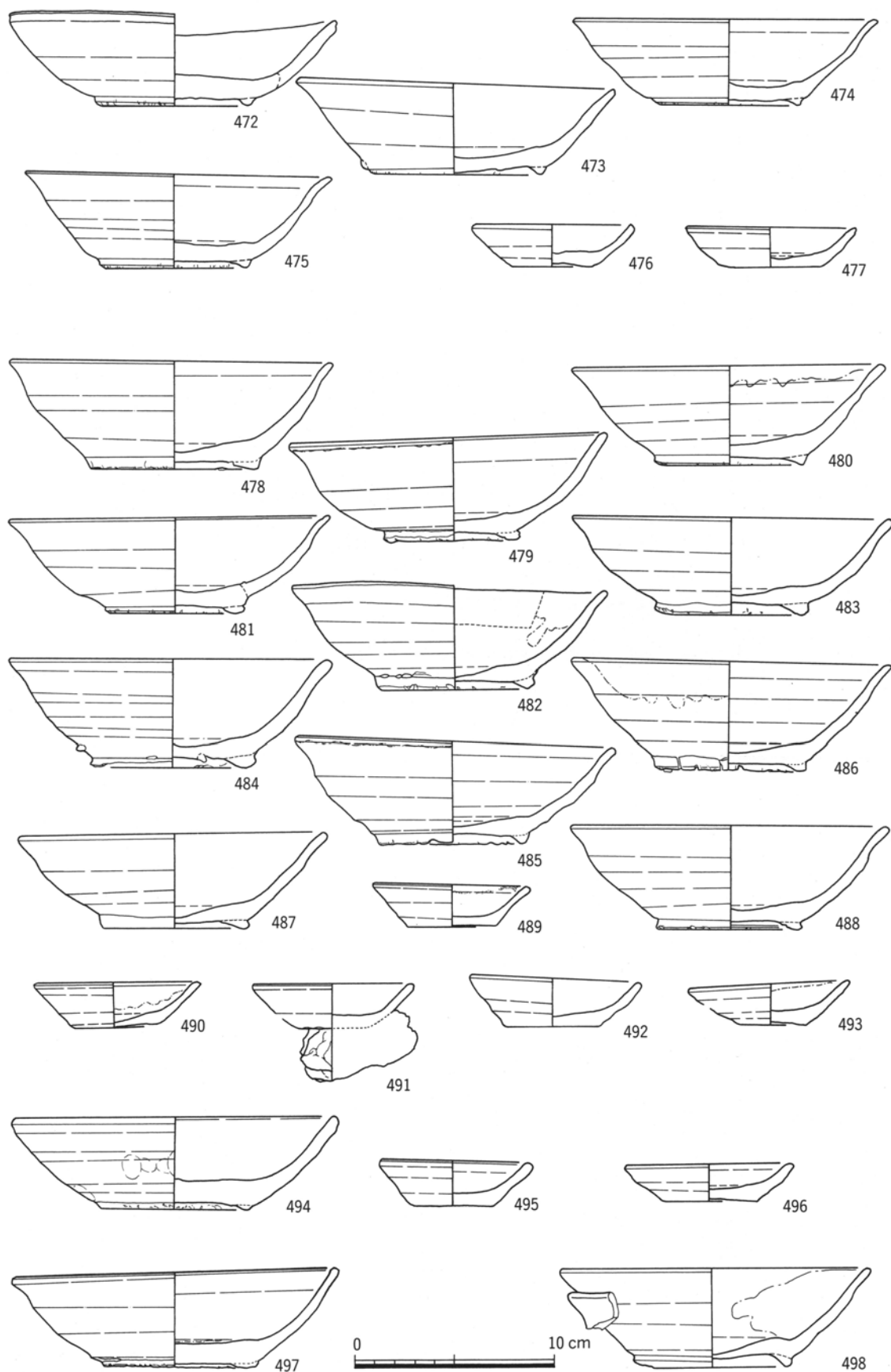
第 42 図 遺物実測図⑬



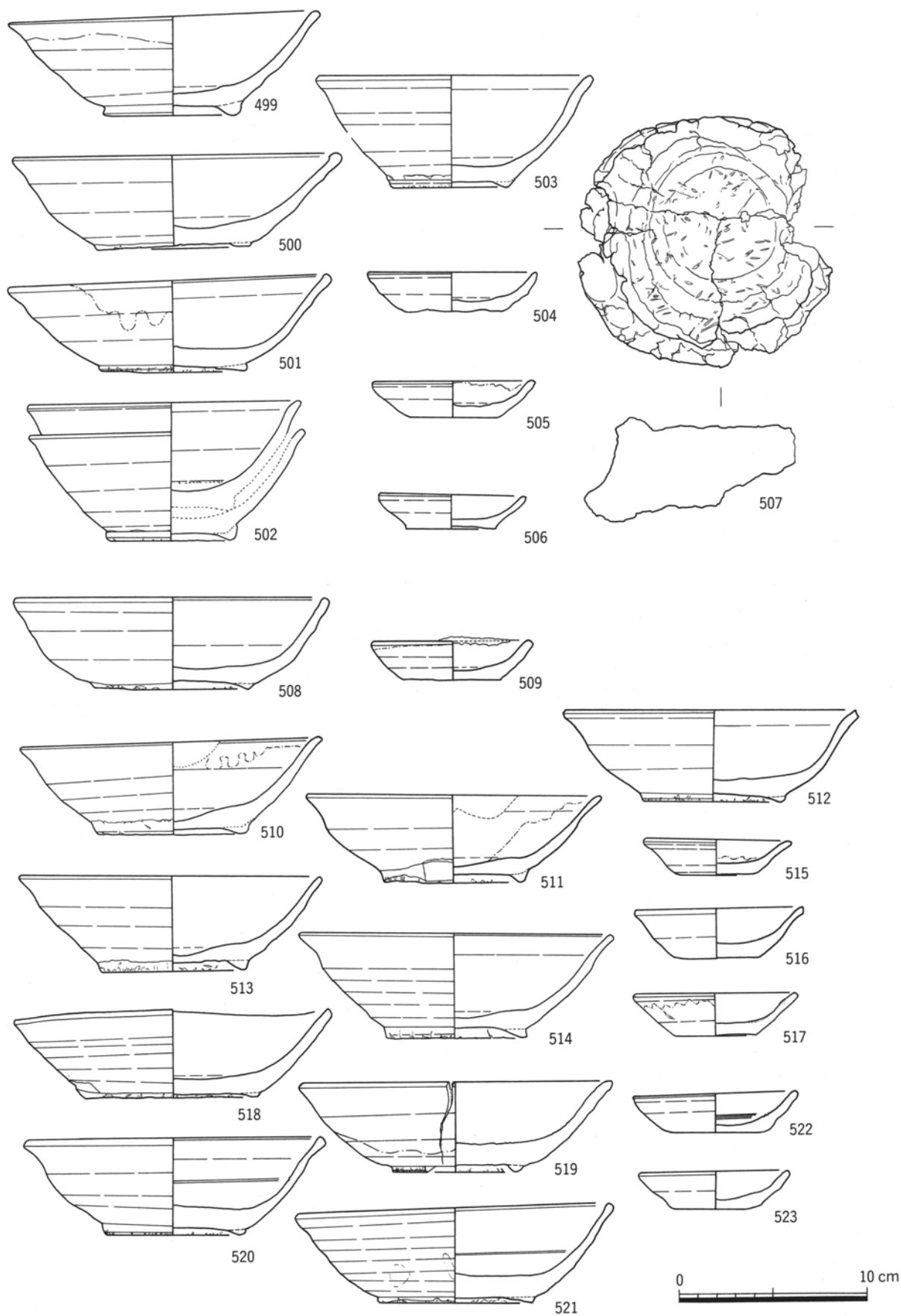
第 43 図 遺物実測図⑬



第 44 図 遺物実測図②



第 45 図 遺物実測図②①



第 46 図 遺物実測図②

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	根 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
1	SY01	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.7	16.3	4.8	3.9	V7	488.8		E-1
2	SY01	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.8	16.1	8.0	3.6	V3	441.5		E-2
3	SY01	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	8.1	14.8	7.0	4.3	V1	411.5		E-3
4	SY01	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.1	14.9	3.2	4.2	V6	421.9		E-4
5	SY01	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.8	15.2	4.0	4.3	V7	479.6		E-5
6	SY01	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	7.0	14.7	4.0	4.1	V6	409.8		E-6
7	SY01	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.6	15.0	9.0	3.5	V1	400.8		E-7
8	SY01	半焼	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.2	15.3	2.4	4.2	V6	434.4		E-8
9	SY01	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.5	14.8	8.0	3.2	V3	346.0		E-9
10	SY01	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	8.4	16.8	7.6	3.8	V3	486.3		E-10
11	SY01	良好	椀	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.6	15.9	7.0	3.8	V5	464.7		E-11
12	SY01	不良	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.8	15.1	4.0	4.6	V6	491.7		E-12
13	SY01	不良	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.9	7.6	15.4	4.8	4.7	V6	534.6		E-13
14	SY01	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	8.2	15.4	6.0	4.8	V1	448.3		E-14
15	SY01	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	(6.1)	7.3							E-15
16	SY01	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.8	15.8	7.2	4.0	V3	454.2		E-16
17	SY01	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.9	15.2	6.4	4.2	V4	448.6		E-17
18	SY01	半焼	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.7	(7.4)	15.7	2.0	4.6	V6	503.5		E-18
19	SY01	半焼	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	(8.0)	15.0	8.0	4.3	V1	454.9		E-19
20	SY02	良好	椀	1	B						14.7	6.8	3.4	V5	360.5		E-20
20	SY02	良好	椀	1	B		有	糸切後ナデ	4.9	7.5							E-20
21	SY02	半焼	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	7.9	16.5	7.8	3.3	V6	450.5		E-21
22	SY02	良好	椀	1	B	横ナデ											E-22
22	SY02	良好	椀	1	B		有	糸切後ナデ									E-22
22	SY02	良好	椀		B	回ナデ											E-22
22	SY02	良好	椀	1	B		有	糸切後ナデ	(4.6)	7.0							E-22
23	SY02	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.6	16.0	8.0	3.3	V5	424.1		E-23
24	SY02	半焼	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.3	16.5	7.2	3.3	V5	429.4		E-24
25	SY02	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.4	6.6	15.1	5.2	5.2	V3	487.5		E-25
26	SY02	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	6.7	15.6	8.0	3.2	V3	374.1		E-26
27	SY02	良好	椀	3	A		有	糸切後ナデ	5.0	7.2	15.8	6.6	3.9	V3	427.4		E-27
28	SY02	良好	皿	1	B	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.3	4.4	7.9	4.6	1.5	V2	47.1		E-28
29	SY02	半焼	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.3	5.2	8.3	1.2	1.7	V6	49.5		E-29
30	SY02	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切痕	2.1	4.7	7.6	3.6	1.4	V6	40.3		E-30
31	SY02	半焼	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.3	5.4	8.6	4.8	1.3	V2	47.1		E-31
32	SY02	良好	皿	2	D	回ナデ	無	糸切後ナデ	1.8	5.6	8.5	5.0	1.1	V2	40.2		E-32
33	SY02	良好	皿	2	E	回ナデ	無	糸切痕	2.3	4.5	8.5	5.6	1.3	V2	51.5		E-33
34	SY02 床下	不良	椀	1	E	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	6.7	16.1	8.2	3.4	V2	408.1		E-34
35	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.7	16.1	8.0	3.3	V2	390.5		E-35
36	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	7.1	16.2	7.6	3.2	V3	386.9		E-36
37	SY02 床下	良好	椀	1	C		有	糸切後ナデ	4.4	7.5	14.9	8.0	3.4	V3	371.3		E-37
38	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.6	15.7	8.0	3.7	V4	451.1		E-38
39	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切痕	4.8	6.8	16.2	8.4	3.4	V4	444.6		E-39
40	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.2	16.1	8.4	3.8	V5	506.5		E-40
41	SY02 床下	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.7	15.5	7.6	3.7	V5	446.3		E-41
42	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.3	15.8	6.6	3.7	V5	439.3		E-42
43	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.9	14.8	6.8	4.0	V6	450.2		E-43
44	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	6.3	15.8	7.2	3.2	V5	387.4		E-44
45	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.0	15.6	3.2	4.0	V6	431.9		E-45
46	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	8.0	16.1	8.4	3.8	V2	462.6		E-46
47	SY02 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	8.0	15.8	8.0	3.6	V3	429.1		E-47
48	SY02 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	7.8	16.1	7.4	3.3	V3	390.5		E-48
49	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.7	15.6	9.4	3.0	V4	390.8		E-49
50	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	6.5	15.3	9.0	3.3	V4	408.3		E-50
51	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	6.7	15.6	1.6	4.2	V6	444.4		E-51
52	SY02 床下	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ									E-52

第2表 第1次調査区 遺物観察表①

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	取 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
52	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	(4.9)	7.0							E-52
53	SY02 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.0	16.2	8.8	3.5	V4	467.1		E-53
54	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切痕	4.8	7.2	16.4	9.4	3.6	V2	482.1		E-54
55	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切痕	4.9	6.7	14.9	2.6	4.2	V6	416.1		E-55
56	SY02 床下	良好	椀	1	A		有	糸切痕	4.8	7.6	15.5	8.8	3.7	V4	461.6		E-56
57	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切痕	5.2	6.2	14.6	6.2	3.9	V7	431.9		E-57
58	SY02 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	6.9	16.1	8.4	2.8	V7	379.8		E-58
59	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.4	16.0	8.0	3.2	V3	388.7		E-59
60	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切痕	4.6	7.5	15.9	8.8	3.3	V5	437.4		E-60
61	SY02 床下	良好	椀	1	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.3	16.1	8.4	3.4	V4	440.3		E-61
62	SY02 床下	良好	椀	1	B						15.9	7.2	3.4	V4	406.8		E-62
62	SY02 床下	良好	椀	1	B		有	糸切後ナデ	4.9	7.2							E-62
63	SY02 床下	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.7	15.9	8.0	3.6	V4	447.9		E-63
64	SY02 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	6.6	15.9	8.8	3.2	V4	415.0		E-64
65	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	6.4	16.3	8.0	3.6	V3	449.9		E-65
66	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	7.3	16.2	7.2	3.3	V5	416.7		E-66
67	SY02 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.2	16.0	8.0	3.7	V6	491.5		E-67
68	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.2	15.9	6.8	3.9	V5	473.5		E-68
69	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	6.4	15.7	2.0	3.9	V6	414.7		E-69
70	SY02 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	6.6	14.7	2.0	4.2	V7	421.2		E-70
71	SY02 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.3	7.7	15.9	3.2	3.3	V6	359.7		E-71
72	SY02 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	5.0	7.3	15.8	2.0	3.9	V8	466.7	高台に砂付着	E-72
73	SY02 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.0	15.7	6.8	3.3	V7	407.6		E-73
74	SY02 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	6.8	15.5	8.0	3.1	V3	359.0		E-74
75	SY02 床下	良好	椀	2	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.7	15.2	5.2	3.8	V6	413.9		E-75
76	SY02 床下	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切痕	4.8	7.2	15.8	9.2	3.4	V2	426.9		E-76
77	SY02 床下	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.1	6.7	14.2	6.6	2.7	V7	275.4		E-77
78	SY02 床下	良好	椀	2	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.2	15.8	2.8	3.9	V6	425.4		E-78
79	SY02 床下	良好	椀	3	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.9	16.7	8.4	3.7	V2	474.4		E-79
80	SY02 床下	良好	椀	3	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.4	16.0	4.0	3.8	V6	434.6		E-80
81	SY02 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.3	16.4	8.0	3.6	V4	470.7		E-81
82	SY02 床下	良好	椀	3	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	8.8	15.2	8.0	3.4	V3	382.4		E-82
83	SY02 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.6	15.9	6.6	3.7	V4	430.6		E-83
84	SY02 床下	良好	椀	1		回ナデ				7.1							E-84
84	SY02 床下	良好	皿		C						7.8	3.4	1.7	V2	44.0		E-84
84	SY02 床下	良好	皿		C		無	糸切痕	2.2	4.2							E-84
85	SY02 床下	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切痕	2.9	4.4	7.8	3.6	1.5	V2	40.0		E-85
86	SY02	良好	鍋													窯内灰層	E-86
87	SY02	良好	皿	2	B	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.3	3.8	8.3	4.4	1.6	V2	52.3	窯内灰層	E-87
88	SY02	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切痕	2.5	4.6	8.3	0.0	2.0	V6	58.3	窯内灰層	E-88
89	SY03	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.5	15.4	7.6	3.4	V4	393.8		E-89
90	SY03	良好	椀	1	C	回ナデ			(4.3)		15.1	1.0	3.4	V6	326.3		E-90
90	SY03	良好	椀	1	B				(4.5)								E-90
90	SY03	良好	椀	1	C		有	糸切後ナデ	4.7	7.0							E-90
91	SY03	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.6	16.8	8.4	3.7	V4	512.6		E-91
92	SY03	半焼	椀	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.9	16.0	8.0	3.8	V3	461.6		E-92
93	SY03	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	6.9	14.5	5.0	4.4	V6	451.1		E-93
94	SY03	良好	椀	3	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	(4.8)	7.2	15.6	8.0	3.3	V4	398.3		E-94
95	SY03	良好	皿	1	C	横ナデ	無	糸切痕	2.1	4.9	8.5	5.6	1.2	V2	47.5		E-95
96	SY03	良好	皿	1	A	横ナデ	無	糸切後ナデ	2.0	4.4	8.1	4.6	1.4	V2	45.5		E-96
97	SY03	良好	皿	1	C	横ナデ	無	糸切後ナデ	2.3	4.4	8.4	5.2	1.4	V2	51.8		E-97
98	SY03	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	(5.0)	8.2						窯内灰層	E-98
99	SY03	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切痕	2.2	4.9	8.2	5.2	1.6	V2	57.4	窯内灰層	E-99
100	SY03	良好	皿	1	C	回ナデ	無	糸切痕	2.2	4.6	7.9	4.6	1.4	V2	43.9	窯内灰層	E-100
101	SY04	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	8.0	16.7	8.0	3.7	V4	498.2		E-101
102	SY04	良好	椀	1	C												E-102

第3表 第I次調査区 遺物観察表②

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	刳 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
102	SY04	良好	椀	1	A												E-102
102	SY04	良好	椀	1	A												E-102
102	SY04	良好	椀	2	B		有	糸切後ナデ	(5.6)	6.1							E-102
103	SY04	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.5	14.2	3.4	4.1	V7	397.4		E-103
104	SY04	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.1	14.3	8.0	3.8	V1	377.0		E-104
105	SY04	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	(4.6)	7.2	15.0	7.6	3.4	V1	348.3		E-105
106	SY04	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.5	15.1	4.4	4.6	V4	446.9		E-106
107	SY04	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	(5.6)	(7.5)	15.2	6.8	4.5	V1	440.1		E-107
108	SY04	良好	皿	1	D	回ナデ	無	糸切痕	2.5	4.0	8.1	4.0	1.5	V4	48.1		E-108
109	SY04	良好	皿	2	D	回ナデ	無	糸切痕	2.0	3.9	8.2	4.8	1.1	V2	37.3		E-109
110	SY04	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切痕	2.1	4.9	8.6	5.6	1.1	V2	44.2		E-110
111	SY04	良好	皿		C	回ナデ					8.5	5.2	1.3	V2	48.8		E-111
111	SY04	良好	皿		C												E-111
111	SY04	良好	皿		C		無	糸切痕	1.9	3.4							E-111
112	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	7.4	14.6	7.4	4.5	V1	436.8		E-112
113	SY04 床下	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.7	15.0	8.4	4.2	V1	458.7		E-113
114	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.6							E-114
115	SY04 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.3	8.1	16.7	9.8	2.8	V3	403.5		E-115
116	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	(8.5)	15.6	8.0	4.4	V1	491.2		E-116
117	SY04 床下	良好	椀	1	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	8.2	16.7	8.6	3.9	V5	555.9		E-117
118	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.8	15.3	8.0	4.3	V1	467.4		E-118
119	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.4	15.9	8.4	3.2	V7	432.1		E-119
120	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.3	14.5	8.0	3.6	V1	363.8		E-120
121	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	7.5	15.0	5.2	4.1	V6	441.9		E-121
122	SY04 床下	半焼	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	8.0	15.6	8.2	4.1	V1	464.8		E-122
123	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.6	14.8	8.0	3.5	V1	363.6		E-123
124	SY04 床下	良好	椀	1	B		有	糸切後ナデ	5.1	6.9	15.9	2.4	3.8	V6	414.6		E-124
125	SY04 床下	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.3	7.9	15.6	6.0	3.0	V8	376.9		E-125
126	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	6.8	14.5	7.2	4.0	V1	378.2		E-126
127	SY04 床下	半焼	椀	1	A	回ナデ		糸切後ナデ		8.2	15.2	7.6	3.9	V1	406.9		E-127
128	SY04 床下	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ	5.3	7.8	14.5	8.2	3.8	V1	390.4		E-128
129	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	7.7	15.2	6.2	4.0	V4	423.3		E-129
130	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.0	15.4	7.6	4.3	V1	456.9		E-130
131	SY04 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	(5.4)	7.4	14.5	2.8	4.5	V6	433.1		E-131
132	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.7	7.0	15.2	3.2	4.5	V6	474.1		E-132
133	SY04 床下	良好	椀		A						15.2	7.6	2.5	V9	328.1	融着	E-133
133	SY04 床下	良好	椀	1	B		有	糸切後ナデ	4.3	6.8						融着	E-133
134	SY04 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.8	15.3	7.2	4.1	V2	425.2		E-134
135	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.6	15.2	0.0	4.6	V6	468.3		E-135
136	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	8.1	16.4	6.4	3.4	V6	434.4		E-136
137	SY04 床下	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.8	15.3	6.3	3.9	V4	419.3		E-137
138	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.4	15.6	8.0	3.2	V3	374.1		E-138
139	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	(4.9)	8.5	15.9	7.6	3.6	V4	439.1		E-139
140	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	(5.2)	(6.9)	15.0	8.0	3.9	V1	412.6		E-140
141	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	(5.1)	7.4	15.7	7.6	3.6	V4	430.1		E-141
142	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.3	14.6	7.0	4.1	V1	384.9		E-142
143	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	9.1	15.7	6.8	4.4	V1	451.1		E-143
144	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	8.2	15.2	6.8	4.6	V1	449.9		E-144
145	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.6	15.7	8.4	3.8	V3	459.9		E-145
146	SY04 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.7	15.7	8.2	3.2	V4	394.2		E-146
147	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.6	15.0	3.6	4.0	V7	424.1		E-147
148	SY04 床下	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.6	16.6	8.0	3.4	V4	453.4		E-148
149	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.6	15.8	8.6	3.5	V6	467.2		E-149
150	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.9	14.3	7.6	3.7	V1	355.0		E-150
151	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	(4.9)	6.4	16.0	9.4	3.3	V3	436.9		E-151
152	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	無	糸切後ナデ			15.7	7.2	4.3	V1	455.0	高台剝離	E-152

第4表 第I次調査区 遺物観察表③

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	取 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
153	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.9	15.2	2.0	4.6	V6	475.5		E-153
154	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.7	14.5	7.2	4.0	V1	378.2		E-154
155	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.7	15.4	8.8	3.4	V1	396.8		E-155
156	SY04 床下	良好	椀	1	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	8.5	16.5	8.0	3.4	V4	449.0		E-156
157	SY04 床下	良好	椀	1	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.5	15.8	3.2	3.9	V7	444.6		E-157
158	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.3	7.0	14.7	8.8	2.9	V2	321.1		E-158
159	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ					14.8	2.8	3.8	V6	367.3	融着	E-159
159	SY04 床下	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ	5.1	7.1						融着	E-159
160	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	6.9	16.0	8.0	3.4	V3	413.0		E-160
161	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	8.0	16.3	7.4	3.1	V3	374.0		E-161
162	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.1	15.6	7.0	3.6	V4	413.3		E-162
163	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	7.3	15.8	7.2	3.7	V4	438.0		E-163
164	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.2	16.1	7.0	3.6	V4	435.7		E-164
165	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.5	15.5	3.6	4.6	V6	508.4		E-165
166	SY04 床下	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ	5.2	7.3						融着	E-166
166	SY04 床下	良好	皿	2	A		有	糸切痕								融着	E-166
167	SY04 床下	良好	椀	1	D	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.2	14.9	7.2	3.3	V3	342.1		E-167
168	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.9	15.8	7.6	3.5	V5	433.7		E-168
169	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	6.7							E-169
170	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.0	14.6	2.4	4.1	V6	388.6		E-170
171	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	6.7	15.2	3.2	4.4	V6	461.5		E-171
172	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.0	14.5	6.0	4.1	V4	396.5		E-172
173	SY04 床下	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	7.3	15.4	7.6	3.9	V1	414.4		E-173
174	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.1	14.6	9.9	2.9	V1	344.3		E-174
175	SY04 床下	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ (4.6)	8.6	17.0	9.6	3.3	V2	470.3		E-175	
176	SY04 床下	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.2	7.5	16.3	9.4	2.8	V3	380.6		E-176
177	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ (4.7)								融着	E-177
177	SY04 床下	良好	椀	1	B		有	糸切後ナデ	4.7	8.2						融着	E-177
178	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	7.8	15.4	9.2	3.6	V1	433.2		E-178
179	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ					14.8	7.6	3.6	V1	362.0	融着	E-179
179	SY04 床下	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ (5.1)	6.8							融着	E-179
180	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	6.8	14.7	7.6	3.9	V3	406.5		E-180
181	SY04 床下	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.6	14.3	2.8	3.9	V7	371.8		E-181
182	SY04 床下	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	7.5	15.0	2.8	4.0	V1	272.2		E-182
183	SY04 床下	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.1	16.4	8.4	3.6	V3	464.9		E-183
184	SY04 床下	良好	椀	2	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.0	15.1	7.6	3.4	V4	381.6		E-184
185	SY04 床下	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	8.5	16.5	7.6	3.2	V3	398.1		E-185
186	SY04 床下	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.7	7.3	13.9	2.0	4.2	V6	364.1		E-186
187	SY04 床下	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	8.4	16.4	7.6	3.7	V2	437.2		E-187
188	SY04 床下	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.2	14.8	6.4	4.2	V4	428.8		E-188
189	SY04 床下	良好	椀	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.1	16.0	7.2	3.4	V5	421.3		E-189
190	SY04 床下	良好	椀	2	B	回ナデ					14.5	8.6	2.7	V3	295.2		E-190
190	SY04 床下	良好	椀	2	C		有	糸切後ナデ	4.4	(7.2)							E-190
191	SY04 床下	良好	椀	2	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.4	16.1	9.0	3.4	V2	431.8		E-191
192	SY04 床下	良好	椀	2	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.7	7.4	15.4	3.6	4.2	V6	451.3		E-192
193	SY04 床下	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.3	15.0	3.2	4.1	V6	414.8		E-193
194	SY04 床下	良好	椀	2	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.7	14.7	9.4	3.4	V1	391.5		E-194
195	SY04 床下	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.2	14.7	7.8	3.9	V1	395.0		E-195
196	SY04 床下	良好	椀	2	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	4.6	(8.6)	16.1	7.0	3.7	V3	427.8	高台に砂付着	E-196
197	SY04 床下	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ (4.9)	8.7	16.1	8.8	3.6	V3	463.4		E-197	
198	SY04 床下	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	6.8	16.0	8.2	3.4	V4	431.6		E-198
199	SY04 床下	良好	椀	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.3	14.3	3.2	4.2	V6	393.0		E-199
200	SY04 床下	良好	椀	2	E	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.9	6.9	14.9	7.2	4.4	V3	456.1		E-200
201	SY04 床下	良好	椀	2	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	8.6	15.6	7.6	3.4	V4	402.0		E-201
202	SY04 床下	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	8.6	16.8	6.8	3.7	V5	490.5		E-202
203	SY04 床下	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	9.3	15.9	7.2	3.7	V2	406.0		E-203

第5表 第I次調査区 遺物観察表④

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	稜 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の種類	容量 (cc)	備考	登録番号
204	SY04 床下	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	6.8	15.1	4.0	4.1	V6	429.0		E-204
205	SY04 床下	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	7.5	15.2	3.0	4.1	V6	422.6		E-205
206	SY04 床下	良好	椀		A	回ナデ					15.4	3.6	3.6	V7	390.2	融着	E-206
206	SY04 床下	良好	椀	2	A		有	糸切後ナデ		(7.9)						融着	E-206
207	SY04 床下	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	8.2	15.8	6.8	3.7	V3	410.3		E-207
208	SY04 床下	良好	椀	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.8							E-208
209	SY04 床下	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.6	15.8	7.4	3.5	V2	386.1		E-209
210	SY04 床下	半焼	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.7	8.4	15.3	2.0	4.6	V6	481.1		E-210
211	SY04 床下	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	8.2	16.4	7.6	3.6	V3	443.6		E-211
212	SY04 床下	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.0	14.7	8.4	3.8	V1	404.1		E-212
213	SY04 床下	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.3	14.8	7.2	4.3	V1	418.4		E-213
214	SY04 床下	良好	椀	3	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.9	14.8	8.0	3.6	V1	374.0		E-214
215	SY04 床下	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	(8.1)							E-215
216	SY04 床下	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.0	14.2	2.0	4.3	V6	388.9		E-216
217	SY04 床下	良好	椀	3	D	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.8	15.0	8.4	3.6	V4	417.8		E-217
218	SY04 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	6.8	14.4	9.0	3.2	V1	347.7		E-218
219	SY04 床下	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.7	7.5	14.7	5.2	4.3	V5	431.4		E-219
220	SY04 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.6	14.3	4.8	4.0	V4	357.4		E-220
221	SY04 床下	良好	椀	3	C	回ナデ		糸切痕		7.5							E-221
222	SY04 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.9	(7.7)	15.5	7.6	4.6	V1	493.2		E-222
223	SY04 床下	良好	椀	3	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	8.4	16.1	7.8	3.3	V5	424.2		E-223
224	SY04 床下	良好	椀	3	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.3	16.2	8.4	3.4	V4	444.6		E-224
225	SY04 床下	良好	椀	3	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.9	15.4	7.2	4.2	V1	432.3		E-225
226	SY04 床下	良好	椀	3	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	(4.9)	7.5	16.8	8.6	3.6	V3	487.7		E-226
227	SY04 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	7.9	15.5	8.4	3.8	V1	433.7		E-227
228	SY04 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	無	糸切痕	6.0	7.9	15.4	1.8	4.6	V7	510.7		E-228
229	SY04 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.3	14.5	8.4	3.1	V1	323.7		E-229
230	SY04	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	8.3	14.6	3.2	4.2	V7	426.7	窯内灰層	E-230
231	SY04	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	6.0	7.2	15.3	6.0	5.0	V3	502.0	窯内灰層	E-231
232	SY04	良好	皿	1	B	回ナデ	無	糸切痕	2.1	4.6	8.4	4.6	1.5	V2	51.2		E-232
233	SY04	良好	皿	2	D			糸切痕	2.1	4.7	8.2	3.4	1.5	V3	44.2	窯内灰層	E-233
234	SY04	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切痕	1.9	4.0	7.9	5.4	1.2	V2	42.2		E-234
235	SY04	良好	皿	2	C											融着	E-235
235	SY04	良好	皿	2	C											融着	E-235
235	SY04	良好	皿	2	C		無	糸切後ナデ	1.9	4.8						融着	E-235
236	SY04	良好	皿	2	A		無	糸切後ナデ	2.2	4.7	8.2	4.4	1.5	V2	48.2	窯内灰層	E-236
237	SY04	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.3	4.3	8.0	1.6	1.4	V6	38.0	窯内灰層	E-237
238	SY05	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.7	6.6	14.9	6.0	4.6	V4	466.1		E-238
239	SY05	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	8.1	14.8	9.0	3.4	V2	385.6		E-239
240	SY05	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.1	6.7	14.0	5.2	4.8	V4	420.4		E-240
241	SY05	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.1	6.7	14.7	7.6	4.4	V3	458.7		E-241
242	SY05	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.8	15.7	2.6	4.4	V6	482.2		E-242
243	SY05	半焼	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	(8.1)	15.7	3.6	4.2	V6	466.7		E-243
244	SY05	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.8	16.1	7.4	4.2	V1	467.9		E-244
245	SY05	良好	椀	1	A	横ナデ		糸切痕	5.5	6.8	14.9	2.0	4.5	V6	447.1		E-245
246	SY05	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	6.9	14.8	5.8	4.7	V4	466.4		E-246
247	SY05	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.4	6.9	14.8	6.0	5.3	V3	504.0		E-247
248	SY05	良好	椀	1	C	横ナデ										融着	E-248
248	SY05	良好	椀	1	A											融着	E-248
248	SY05	良好	椀	1	A											融着	E-248
248	SY05	良好	椀	1	A											融着	E-248
248	SY05	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ	5.8	6.6						融着	E-248
249	SY05	良好	椀	2	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.5	14.8	0.0	4.2	V6	400.1		E-249
250	SY05	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.4	15.2	8.4	3.8	V2	427.1		E-250
251	SY05	半焼	椀	2	A		有	糸切後ナデ	5.6	7.7	15.4	5.6	4.5	V4	474.5		E-251
252	SY05	半焼	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.7	8.0	15.3	2.0	4.5	V6	468.5		E-252

第6表 第I次調査区 遺物観察表⑤

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	粗 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
253	SY05	良好	椀	3	B	回ナデ	無	糸切後ナデ	4.1	7.6						融着	E-253
253	SY05	良好	皿	2	A		無	糸切痕		3.8						融着	E-253
254	SY05	良好	皿	3	C	横ナデ	無	糸切後ナデ	2.0	4.6	8.0	4.6	1.4	V2	44.7		E-254
255	SY05		焼台													傾斜角38°	E-255
256	SY05	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.6	15.3	7.0	4.8	V1	481.7		E-256
257	SY05	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.7	15.6	7.6	3.3	V6	409.0		E-257
258	SY05	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	8.0	16.1	7.2	3.7	V4	452.0		E-258
259	SY05	良好	椀	2	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.7	15.9	7.8	3.4	V6	439.4		E-259
260	SY05	半焼	椀	2	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.6	16.4	7.4	3.7	V4	470.4		E-260
261	SY05 床下1	良好	椀	1	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	5.1	7.8	16.4	1.6	4.4	V6	513.8	高台に砂付着	E-261
262	SY05 床下1	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.0	16.0	9.0	3.9	V1	486.1		E-262
263	SY05 床下1	良好	椀	1	D	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	8.2	15.0	7.6	4.0	V4	444.2		E-263
264	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.4	15.9	9.6	3.8	V2	495.0		E-264
265	SY05 床下1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	(8.0)	16.4	4.0	4.0	V7	497.9		E-265
266	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	6.8	16.1	6.0	3.6	V4	417.3		E-266
267	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	6.9	15.7	7.6	3.6	V3	414.7		E-267
268	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.3							E-268
269	SY05 床下1	良好	椀	1	D	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.5	15.4	6.8	3.7	V4	411.8		E-269
270	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.6	16.3	2.4	4.1	V6	473.1		E-270
271	SY05 床下1	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.3	7.1	15.9	9.6	3.0	V2	390.8		E-271
272	SY05 床下1	良好	椀	1	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	5.4	7.9	17.2	4.0	4.1	V7	556.2	高台に砂付着	E-272
273	SY05 床下1	良好	椀	1	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	4.8	7.0	16.4	7.0	3.7	V4	462.0	高台に砂付着	E-273
274	SY05 床下1	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	7.1	15.5	8.4	3.2	V4	390.6		E-274
275	SY05 床下1	良好	椀	1	C		有	糸切後ナデ	4.6	7.7	15.9	6.4	3.6	V4	415.3		E-275
276	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	8.1	16.1	7.6	3.8	V4	473.0		E-276
277	SY05 床下1	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.5	16.3	6.2	3.4	V5	416.4		E-277
278	SY05 床下1	良好	椀	1	C		有	糸切後ナデ	4.8	7.2	16.1	8.4	3.7	V3	464.8		E-278
279	SY05 床下1	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.7	14.8	8.2	3.4	V1	359.0		E-279
280	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.3	7.6	15.7	5.2	3.1	V7	356.4		E-280
281	SY05 床下1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	8.3	16.2	0.0	3.9	V7	448.5		E-281
282	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	8.2	15.8	7.6	3.9	V3	453.6		E-282
283	SY05 床下1	良好	椀	1	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.6	16.4	1.2	4.5	V6	525.5		E-283
284	SY05 床下1	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.0	16.1	8.4	3.8	V3	477.4		E-284
285	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	5.0	7.6	16.4	2.6	4.0	V6	466.6	高台に砂付着	E-285
286	SY05 床下1	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.2	15.9	7.6	3.5	V4	426.9		E-286
287	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.4	16.3	7.6	3.5	V4	444.6		E-287
288	SY05 床下1	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.6	16.4	10.6	2.9	V2	421.5		E-288
289	SY05 床下1	良好	椀	1	C		無	糸切後ナデ	5.2	7.2	15.8	8.0	3.7	V5	469.0	高台に砂付着	E-289
290	SY05 床下1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.9	16.1	5.0	4.1	V4	457.6		E-290
291	SY05 床下1	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.6	15.8	8.0	3.9	V3	464.8		E-291
292	SY05 床下1	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.9	15.6	5.6	3.8	V7	453.0		E-292
293	SY05 床下1	良好	椀	2	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.6	16.7	6.6	4.3	V4	544.5		E-293
294	SY05 床下1	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	8.0	16.5	4.8	4.0	V6	497.4		E-294
295	SY05 床下1	良好	椀	3	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	4.7	7.0	16.0	3.6	3.6	V7	416.9		E-295
296	SY05 床下1	不良	椀	3	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	4.9	7.5	16.3	6.6	3.7	V7	489.1		E-296
297	SY05 床下1	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.8	15.9	6.6	3.7	V4	430.6		E-297
298	SY05 床下1	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.6	15.9	7.0	4.0	V5	490.8		E-298
299	SY05 床下1	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	8.0	16.6	2.6	4.3	V6	518.4		E-299
300	SY05 床下1	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.4	16.1	7.8	3.9	V4	490.2		E-300
301	SY05 床下1	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.8	16.9	4.6	4.1	V5	512.0		E-301
302	SY05 床下1	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.8	16.3	4.0	4.0	V7	492.7		E-302
303	SY05 床下1	良好	皿	1	C	回ナデ	無	糸切痕	2.0	4.6	7.9	3.8	1.5	V2	42.0		E-303
304	SY05 床下1	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.2	4.2	8.1	4.8	1.2	V2	40.1		E-304
305	SY05 床下1	良好	皿		C				(2.0)		8.2	5.0	1.2	V2	41.9	融着	E-305
305	SY05 床下1	良好	皿		C		無	糸切後ナデ	2.0	4.2						融着	E-305
306	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.1	15.6	1.0	4.4	V5	444.5		E-306

第7表 第1次調査区 遺物観察表⑥

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	靱 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
307	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.2	15.8	8.0	3.2	V4	394.1		E-307
308	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	7.7	15.6	7.0	3.9	V6	478.8		E-308
309	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	6.7	15.6	7.0	3.6	V4	413.3		E-309
310	SY05 床下2	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.7	15.2	8.8	3.5	V2	405.2		E-310
311	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	6.8	14.7	6.0	3.6	V4	356.4		E-311
312	SY05 床下2	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.0	15.5	2.4	3.8	V6	395.8		E-312
313	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.5	15.5	7.8	3.6	V3	411.7		E-313
314	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.3	15.5	2.4	3.7	V7	397.2		E-314
315	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.2	15.7	1.6	4.4	V5	452.6		E-315
316	SY05 床下2	良好	椀	1	D	横ナデ					16.1	0.0	4.2	V4	427.5	融着	E-316
316	SY05 床下2	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ	5.4	6.3						融着	E-316
317	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	4.7	7.0	15.6	8.4	3.5	V3	419.6	高台に砂付着	E-317
318	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.4	16.5	8.0	3.4	V3	432.9		E-318
319	SY05 床下2	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ	4.7	7.8	15.7	8.0	3.4	V2	388.2		E-319
320	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	7.1	15.8	8.0	3.7	V4	455.7		E-320
321	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.0	15.5	1.8	4.0	V6	416.0		E-321
322	SY05 床下2	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ	4.7	6.3	15.0	2.8	3.6	V7	365.8		E-322
323	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	6.4	14.9	0.8	4.0	V6	383.2		E-323
324	SY05 床下2	良好	椀	2	A						16.0	0.0	4.0	V7	452.4	融着	E-324
324	SY05 床下2	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ	5.1	6.4						融着	E-324
325	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.8	15.4	8.2	3.4	V2	383.4		E-325
326	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	7.1	15.9	8.0	3.5	V2	406.8		E-326
327	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.2	15.3	7.6	3.6	V3	398.6		E-327
328	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.0	15.3	8.8	3.8	V2	443.9		E-328
329	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.8	15.5	4.0	3.8	V7	425.5		E-329
330	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.9	15.5	7.2	3.8	V5	450.2		E-330
331	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.6	15.5	7.6	3.7	V5	446.3		E-331
332	SY05 床下2	良好	椀	1	D	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.0	15.8	8.0	3.6	V2	414.7		E-332
333	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.0	15.2	0.0	3.8	V7	387.9		E-333
334	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	6.5	15.4	6.4	3.5	V5	393.5		E-334
335	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	6.2	15.5	7.6	3.7	V2	402.8		E-335
336	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	(7.3)	14.8	7.0	3.9	V6	441.6		E-336
337	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.9	15.6	6.8	3.9	V3	423.8		E-337
338	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.4	15.1	6.4	4.1	V3	412.7		E-338
339	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ		6.5							E-339
340	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有			7.3							E-340
341	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	8.0	16.6	3.2	3.8	V7	469.6		E-341
342	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.9	16.0	7.8	3.7	V3	444.1		E-342
343	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	(7.6)	16.0	8.8	3.6	V2	447.0		E-343
344	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	6.6	14.9	4.0	3.4	V8	373.9		E-344
345	SY05 床下2	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.8	15.5	7.6	3.7	V3	417.9		E-345
346	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.2	16.5	7.6	3.8	V7	535.6		E-346
347	SY05 床下2	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.3	16.0	9.2	3.3	V4	441.4		E-347
348	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	6.8	15.6	8.0	3.6	V3	420.9		E-348
349	SY05 床下2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	6.6	15.4	3.2	4.1	V7	452.5		E-349
350	SY05 床下2	良好	椀	1	C		有	糸切後ナデ	4.8	7.3	15.5	8.0	3.4	V4	406.2		E-350
351	SY05 床下2	良好	椀		C	回ナデ											E-351
351	SY05 床下2	良好	椀	2	C												E-351
351	SY05 床下2	良好	椀	2	C		有	糸切後ナデ	5.0	6.3							E-351
352	SY05 床下2	良好	椀	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.3	15.0	6.0	3.8	V5	403.8		E-352
353	SY05 床下2	良好	椀	2	D	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.4	16.3	6.4	3.8	V6	486.3		E-353
354	SY05 床下2	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.4	15.7	7.2	3.6	V4	421.8		E-354
355	SY05 床下2	良好	椀	2	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	8.7	16.0	7.8	3.8	V5	487.2		E-355
356	SY05 床下2	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	6.6	14.7	7.2	3.3	V4	347.2		E-356
357	SY05 床下2	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	6.4	15.9	0.0	4.0	V6	430.6		E-357
358	SY05 床下2	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.9	16.0	8.4	3.4	V2	410.3		E-358

第8表 第I次調査区 遺物観察表⑦

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	取 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
359	SY05 床下2	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.2	15.7	8.0	3.7	V3	436.8		E-359
360	SY05 床下2	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	(7.7)	15.3	7.6	3.7	V3	409.7		E-360
361	SY05 床下2	良好	椀	3	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.4	16.0	2.0	4.4	V5	471.5		E-361
362	SY05 床下2	良好	椀	3	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	4.9	6.8	15.0	2.4	3.7	V7	375.1	高台に砂付着	E-362
363	SY05 床下2	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.4	16.3	5.6	3.5	V7	442.0		E-363
364	SY05 床下2	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	7.4	15.8	7.6	4.1	V3	476.9		E-364
365	SY05 床下2	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.0	3.9	7.8	4.2	1.3	V2	37.9		E-365
366	SY05 床下2	良好	皿	2	A		無	糸切痕	2.2	3.5	8.2	4.8	1.5	V2	50.9		E-366
367	SY05 床下2	良好	椀	1	A	回ナデ				7.3						融着	E-367
367	SY05 床下2	良好	皿		A		無	糸切痕	2.4	3.6						融着	E-367
367	SY05 床下2	良好	皿	1	A		無	糸切痕		4.1						融着	E-367
368	SY05 床下2	良好	椀	1	B	回ナデ				6.7						融着	E-368
368	SY05 床下2	良好	皿	2	A		無	糸切痕	2.4	3.7						融着	E-368
369	SY05 前庭部	良好	椀	1	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.6	15.7	7.8	3.6	V5	446.7		E-369
370	SY05 前庭部	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.6	16.1	5.6	3.6	V6	435.2		E-370
371	SY05 前庭部	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.7	16.3	4.8	3.6	V7	444.8		E-371
372	SY05 前庭部	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.6	16.1	8.4	3.5	V7	486.9		E-372
373	SY05 前庭部	良好	椀	1	C	回ナデ	無	糸切痕	4.7	7.2	16.3	8.8	3.4	V2	433.1		E-373
374	SY05 前庭部	良好	椀	2	C		有	糸切後ナデ	4.9	8.7	16.1	9.2	3.6	V2	463.7		E-374
375	SY05 前庭部	良好	椀		B	回ナデ										融着	E-375
375	SY05 前庭部	良好	皿		C											融着	E-375
375	SY05 前庭部	良好	皿		C		無	糸切痕	2.0	5.1						融着	E-375
376		良好	椀		回ナデ					7.6						融着	E-376
376		良好	皿		C											融着	E-376
376		良好	皿	2	C		無	糸切痕								融着	E-376
376		良好	皿	2	D											融着	E-376
376		良好	皿	2	C		無	糸切痕								融着	E-376
376		良好	皿	2	C	回ナデ			2.0	5.0						融着	E-376
376		良好	皿		A											融着	E-376
376		良好	皿		D		無	糸切痕	1.9	4.8						融着	E-376
377	SY05 前庭部	良好	皿	2	D	回ナデ	無	糸切痕	2.0	4.8	8.4	3.6	1.5	V6	51.0		E-377
378	SY05 前庭部	良好	皿	2	A	横ナデ	無	糸切痕	2.0	4.7	7.9	5.0	1.0	V3	33.8		E-378
379	SY05 前庭部	良好	皿	2	C		無	糸切痕	2.3	4.8	8.5	5.6	1.4	V4	57.0		E-379
380	SY05 前庭部	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.0	4.2	7.5	4.4	1.1	V4	32.7		E-380
381	SY05 前庭部	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.0	4.8	8.5	5.4	1.2	V2	46.3		E-381
382	SY05 前庭部	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	1.9	4.3	7.8	5.2	1.0	V2	33.6		E-382
383	SY05 前庭部	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.1	4.8	8.5	3.6	1.4	V4	46.8		E-383
384	SY05 前庭部	良好	皿		C	横ナデ					8.1	3.6	1.4	V6	44.6	融着	E-384
384	SY05 前庭部	良好	皿		A		無	糸切痕	1.9	4.0						融着	E-384
385	SY05 前庭部	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.1	5.3	8.2	0.8	1.9	V6	54.2		E-385
386	SY05 前庭部	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.0	5.4	8.6	5.6	1.2	V2	48.2		E-386
387	SY05 前庭部	良好	皿		B											融着	E-387
387	SY05 前庭部	良好	皿		A											融着	E-387
387	SY05 前庭部	良好	皿		A											融着	E-387
387	SY05 前庭部	良好	皿		A											融着	E-387
387	SY05 前庭部	良好	皿		A											融着	E-387
387	SY05 前庭部	良好	皿		A											融着	E-387
387	SY05 前庭部	良好	皿		A											融着	E-387
387	SY05 前庭部	良好	皿		A											融着	E-387
387	SY05 前庭部	良好	皿		A											融着	E-387
387	SY05 前庭部	良好	皿		A		無	糸切痕	2.1	4.7						融着	E-387
388	SY05 前庭部	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.0	4.4	7.9	2.0	1.5	V6	40.9		E-388
389	灰原 A1 ベルト	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.0	15.6	8.4	3.2	V2	372.8		E-389
390	灰原 A1 ベルト	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.2	15.7	7.6	3.3	V3	380.1		E-390
391	灰原 A1 ベルト	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.8	15.9	6.8	3.8	V4	446.3		E-391

第9表 第I次調査区 遺物観察表⑧

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	刳 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
392	灰原 A1 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	7.7	15.4	8.0	3.0	V4	354.8		E-392
393	灰原 A1 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.5	16.1	9.2	3.4	V3	448.5		E-393
394	灰原 A1 ベルト	良好	椀	3	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.0	6.9	16.1	7.0	2.8	V4	338.9		E-394
395	灰原 A1 ベルト	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切痕	2.1	4.1	7.5	5.0	1.0	V2	31.1		E-395
396	灰原 A1 ベルト	良好	皿	1	C	横ナデ	無	糸切痕	2.1	4.3	8.1	4.0	1.4	V4	44.9		E-396
397	灰原 A1 ベルト	良好	皿	1	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.1	4.3	8.3	3.8	1.3	V4	42.5		E-397
398	灰原 A1 ベルト	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.1	4.5	8.5	0.0	1.7	V7	52.1		E-398
399	灰原 A1 ベルト	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切痕	2.0	4.4	7.9	5.0	1.2	V2	39.9		E-399
400	灰原 A1 ベルト	良好	皿	2	A	横ナデ	無	糸切後ナデ	2.2	4.4	8.0	5.2	1.4	V2	48.6		E-400
401	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.0	16.0	7.2	3.6	V4	435.2		E-401
402	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.4	15.1	7.6	3.3	V3	358.2		E-402
403	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.3	6.8	16.0	6.2	3.0	V5	353.9		E-403
404	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	6.7	15.3	8.6	3.1	V6	390.6		E-404
405	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	(4.7)	(6.9)	14.9	1.6	4.1	V6	397.7		E-405
406	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	6.7	15.8	6.6	3.4	V5	401.8		E-406
407	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.0	15.8	0.0	4.3	V4	421.5		E-407
408	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	6.8	16.2	8.4	3.4	V2	417.5		E-408
409	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.0	14.8	8.8	3.3	V2	368.7		E-409
410	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.3	15.8	8.0	3.5	V2	403.2		E-410
411	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.8	15.8	7.6	3.4	V2	380.5		E-411
412	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.4	15.5	6.8	3.9	V5	454.3		E-412
413	灰原 A2 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.5	14.8	0.0	4.1	V6	388.8		E-413
414	灰原 A2 ベルト	良好	椀	2	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.4	16.3	7.2	3.3	V2	375.7		E-414
415	灰原 A2 ベルト	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.1	15.4	7.2	4.0	V4	454.0		E-415
416	灰原 A2 ベルト	良好	椀	3	A	回ナデ										融着	E-416
416	灰原 A2 ベルト	良好	椀	3	A											融着	E-416
416	灰原 A2 ベルト	良好	椀	3	A											融着	E-416
416	灰原 A2 ベルト	良好	椀	3	A											融着	E-416
416	灰原 A2 ベルト	良好	椀	3	C		有	糸切後ナデ	4.4	7.2						融着	E-416
417	灰原 A2 ベルト	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.0	15.9	7.8	3.2	V3	380.4		E-417
418	灰原 A2 ベルト	良好	皿	1	C	回ナデ	無	糸切痕	2.0	4.3	7.8	3.0	1.4	V4	38.4		E-418
419	灰原 A2 ベルト	良好	皿	1	C		無	糸切後ナデ	2.0	3.7	8.1	4.0	1.3	V2	38.8		E-419
420	灰原 A2 ベルト	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.1	4.3	8.0	4.0	1.4	V3	42.5		E-420
421	灰原 A2 ベルト	良好	皿	1	C	横ナデ	無	糸切後ナデ	2.3	3.6	7.8	4.4	1.3	V2	39.0		E-421
422	灰原 A2 ベルト	良好	皿	1	C	回ナデ	無	糸切痕	2.0	3.9	8.0	4.4	1.3	V2	40.4		E-422
423	灰原 A2 ベルト	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	1.8	4.3	8.0	4.6	0.9	V2	28.7		E-423
424	灰原 A2 ベルト	良好	皿	2	C		無	糸切痕	2.9	4.1	7.6	4.6	1.3	V2	38.8		E-424
425	灰原 A2 ベルト	良好	皿	2	A	横ナデ	無	糸切痕	1.6	4.0	7.8	3.6	1.1	V4	31.9		E-425
426	灰原 A2 ベルト	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	1.7	4.3	7.7	1.3	1.2	V6	29.6		E-426
427	灰原 A2 ベルト	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	1.8	4.1	8.1	4.0	1.2	V4	38.5		E-427
428	灰原 A2 ベルト	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.1	4.9	7.7	3.6	1.2	V3	32.7		E-428
429	灰原 A2 ベルト	良好	皿	2	C	横ナデ	無	糸切後ナデ	1.8	5.0	8.1	3.8	1.3	V4	40.9		E-429
430	灰原 A2 ベルト	良好	皿		B						7.6	4.4	1.2	V4	36.3	融着	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	皿		C											融着	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	皿		C											融着	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	皿		C											融着	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	皿		C											融着	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	皿		C											融着	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	皿		B		無	糸切後ナデ	2.0	4.2						融着	E-430
431	灰原 A1 ベルト	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.0	15.8	7.0	3.3	V6	405.8		E-431
432	灰原 A1 ベルト	半焼	椀	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	6.5	15.6	2.4	4.1	V6	437.2		E-432
433	灰原 A1 ベルト	良好	椀	3	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	5.2	8.1	16.3	7.4	3.8	V4	478.2	高台に砂付着	E-433
434	灰原 A1 ベルト	半焼	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.6	16.5	0.0	4.7	V6	556.8		E-434
435	灰原 A2 ベルト	良好	皿	2	C	横ナデ	無	糸切痕	2.1	4.3	7.4	5.2	1.2	V4	38.5		E-435
436	灰原 A2 ベルト	良好	皿	2	D	回ナデ	無	糸切痕	2.2	5.0	8.5	2.2	1.7	V6	54.0		E-436
437	灰原 A1 ベルト	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	8.0	16.1	8.0	3.3	V3	404.7		E-437

第10表 第Ⅰ次調査区 遺物観察表⑨

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	刳 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
438	灰原 A1 ベルト	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	7.9	16.1	7.2	3.2	V4	390.9		E-438
439	灰原 A1 ベルト	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	8.4	16.2	7.2	3.5	V4	432.0		E-439
440	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	6.2	16.3	8.2	3.8	V3	480.5		E-440
441	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	6.4	16.2	7.8	3.8	V6	511.1		E-441
442	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	6.8	15.9	6.4	3.6	V5	427.5		E-442
443	灰原 A1	良好	椀	1	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.3	15.8	8.4	3.8	V3	464.2		E-443
444	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.1	15.3	8.4	3.3	V3	384.5		E-444
445	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.0	(7.7)	16.4	8.4	2.6	V8	385.0		E-445
446	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.2	15.4	6.0	3.3	V6	372.8		E-446
447	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.2	7.5	16.0	7.6	3.2	V7	420.0		E-447
448	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.1	15.8	8.4	3.7	V3	452.0		E-448
449	灰原 A1	良好	椀	1	B		有	糸切後ナデ	4.0	(5.7)	15.8	8.0	2.5	V3	298.0	融着	E-449
449	灰原 A1	良好	椀	1	A		有	糸切後ナデ	4.0	(7.0)	15.9	8.2	2.7	V4	339.3	融着	E-449
449	灰原 A1	良好	椀	1	C		有	糸切後ナデ	4.3	6.5	15.8	8.4	2.8	V3	342.0	融着	E-449
450	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	7.9	15.0	7.2	3.3	V3	345.6		E-450
451	灰原 A1	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.7	15.3	0.0	4.1	V6	413.0		E-451
452	灰原 A1	良好	椀	2	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	6.8	16.1	6.8	3.6	V5	444.0		E-452
453	灰原 A1	良好	椀	2	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	6.8	14.3	0.0	3.5	V6	303.5		E-453
454	灰原 A1	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	6.4	14.2	6.2	3.8	V3	342.3		E-454
455	灰原 A1	良好	椀	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	3.7	6.9	16.1	7.8	2.7	V2	315.0		E-455
456	灰原 A1	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.3	15.8	0.0	4.2	V6	450.5		E-456
457	灰原 A1	良好	椀	3	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.2	7.4	15.3	7.0	3.2	V3	341.3		E-457
458	灰原 A1	良好	椀		A	回ナデ										融着	E-458
458	灰原 A1	良好	椀		A											融着	E-458
458	灰原 A1	良好	椀	1	A											融着	E-458
458	灰原 A1	良好	椀	1	A											融着	E-458
458	灰原 A1	良好	焼台													傾斜角14°	E-458
459	灰原 A1	良好	椀	1	B	回ナデ	有		4.6	8.3							E-459
459	灰原 A1	良好	焼台													傾斜角15°	E-459
460	灰原 A1	良好	椀	1	A	横ナデ			5.0	(7.1)	15.3	6.0	3.8	V4	403.0		E-460
460	灰原 A1	良好	焼台													傾斜角29°	E-460
461	灰原 A1		焼台													傾斜角38°	E-461
462	灰原 A1	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切痕	2.4	4.1	8.3	5.4	1.3	V2	48.6		E-462
463	灰原 A1	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切痕	1.9	4.3	7.8	2.8	1.2	V4	32.4		E-463
464	灰原 A1	良好	皿	1	A		無	糸切痕	2.3	3.5	7.9	3.6	1.6	V4	47.4		E-464
465	灰原 A1	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切痕	1.7	4.1	7.6	3.2	1.2	V4	32.0		E-465
466	灰原 A1	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.3	4.3	7.7	4.4	1.6	V2	47.1		E-466
467	灰原 A1	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.1	4.3	7.8	4.6	1.4	V2	43.2		E-467
468	灰原 A1	良好	皿	2	D	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.3	5.2	8.5	2.0	1.8	V6	57.0		E-468
469	灰原 A1	良好	皿	3	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	2.2	4.3	8.2	4.2	1.3	V4	43.3	高台付	E-469
470	灰原 A1	良好	皿	3		横ナデ	無	糸切後ナデ	(3.0)	(4.4)	9.0	5.0	1.6	V2	63.3	高台付	E-470
471	灰原 A1	良好	鍋													伊勢型鍋	E-471
472	灰原 A1	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.4							E-472
473	灰原 A1	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	8.4	15.7	8.8	3.2	V2	387.1		E-473
474	灰原 A1	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.3	7.0	15.0	5.2	3.4	V6	357.1		E-474
475	灰原 A1	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.0	15.1	7.6	3.5	V3	379.9		E-475
476	灰原 A1	良好	皿	1	B	回ナデ	無	糸切痕	2.1	4.0	7.8	4.2	1.4	V4	43.1		E-476
477	灰原 A1	良好	皿	2	D	回ナデ	無	糸切痕	2.0	5.1	8.3	4.6	1.3	V3	44.8		E-477
478	灰原 A2	良好	椀	1	B	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	8.5	15.9	8.0	3.8	V3	457.2		E-478
479	灰原 A2	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.9	15.6	6.8	3.8	V6	460.9		E-479
480	灰原 A2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	6.9	15.3	8.0	3.7	V2	407.3		E-480
481	灰原 A2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	6.2	15.8	6.8	3.4	V7	425.9		E-481
482	灰原 A2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.3	15.5	7.2	3.7	V3	407.7		E-482
483	灰原 A2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	6.9	15.8	8.0	3.4	V3	405.2		E-483
484	灰原 A2	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	(7.5)	15.8	7.6	3.8	V3	442.0		E-484
485	灰原 A2	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.4	15.6	7.6	3.8	V3	433.4		E-485

第11表 第Ⅰ次調査区 遺物観察表⑩

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	刳 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
486	灰原 A2	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.6	15.5	7.6	4.0	V3	451.8		E-486
487	灰原 A2	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.2	15.1	8.0	3.3	V2	356.6		E-487
488	灰原 A2	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.9	15.7	7.6	3.7	V3	426.2		E-488
489	灰原 A2	良好	皿	1	C	回ナデ	無	糸切痕	2.1	4.4	7.5	3.8	1.6	V2	41.5		E-489
490	灰原 A2	良好	皿	1	C	横ナデ	無	糸切後ナデ	2.2	4.1	8.0	3.2	1.6	V4	46.6		E-490
491	灰原 A2	良好	皿	1	C	横ナデ			2.2	3.5	7.9	4.4	1.6	V2	48.8		E-491
491	灰原 A2	良好	焼台													傾斜角22°	E-491
492	灰原 A2	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.4	4.9	8.3	4.4	1.6	V6	57.6		E-492
493	灰原 A2	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	(2.0)	3.2	7.9	2.8	1.3	V4	35.9		E-493
494	灰原 B2	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.3	16.0	8.6	3.1	V4	401.7		E-494
495	灰原 B2	良好	皿	1	C	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.3	3.9	7.4	2.4	1.6	V4	38.0		E-495
496	灰原 B2	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	1.9	4.8	8.3	3.8	1.0	V4	32.7		E-496
497	灰原 B3	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.6	15.9	8.4	3.3	V6	437.9		E-497
498	灰原 B3	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.3	15.3	8.0	3.6	V2	396.3		E-498
499	灰原 B3	良好	椀	2	A		有	糸切後ナデ	5.3	6.6	16.2	6.8	3.7	V6	475.0		E-499
500	灰原 B3	良好	椀	2	E	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.9	16.6	9.4	3.3	V6	490.4		E-500
501	灰原 B3	良好	椀	2	E	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.4	16.5	7.2	3.6	V7	494.8		E-501
502	灰原 B3	良好	椀	2	A	回ナデ					14.3	6.0	4.7	V4	443.9	融着	E-502
502	灰原 B3	良好	椀	2	A		有	糸切後ナデ	5.7	6.9						融着	E-502
503	灰原 B3	良好	椀	2	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	6.0	6.3	14.2	6.4	4.8	V4	457.3		E-503
504	灰原 B3	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.1	5.3	8.8	4.6	1.3	V5	50.9		E-504
505	灰原 B3	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	1.9	4.8	8.4	4.4	1.2	V4	42.4		E-505
506	灰原 B3	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	1.8	4.8	7.6	3.2	1.3	V4	34.7		E-506
507	灰原 B3	良好	焼台													傾斜角18.5°	E-507
508	灰原 B4	良好	椀	1	E	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	8.1	16.0	8.4	3.6	V8	517.6		E-508
509	灰原 B4	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切痕	2.1	5.1	8.3	6.0	0.9	V2	36.4		E-509
510	灰原 B5	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	8.0	15.7	8.8	3.1	V2	375.0		E-510
511	灰原 B5	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.2	15.4	6.8	3.4	V4	378.4		E-511
512	灰原 B5	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.4	15.4	9.2	3.4	V1	409.1		E-512
513	灰原 B5	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.4	15.9	7.2	3.5	V6	441.2		E-513
514	灰原 B5	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	7.5	16.4	7.6	4.1	V4	526.0		E-514
515	灰原 B5	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.9	3.9	7.5	4.6	1.0	V2	29.3		E-515
516	灰原 B5	良好	皿	1	C	横ナデ	無	糸切痕	2.6	4.5	8.8	4.4	1.6	V3	58.8		E-516
517	灰原 B5	良好	皿	2	A		無	糸切痕	2.3	4.2	8.4	3.2	1.6	V4	50.8		E-517
518	灰原 B6	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.4	9.0	16.6	7.6	3.4	V4	445.0		E-518
519	灰原 B6	良好	椀	1	C		有	糸切後ナデ	4.8	6.6	16.3	6.8	3.2	V5	400.6		E-519
520	灰原 B6	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.0	15.6	8.4	3.8	V3	455.6		E-520
521	灰原 B6	良好	椀	3	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	8.0	16.5	8.0	3.6	V7	512.0		E-521
522	灰原 B6	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	2.1	5.5	8.5	2.0	1.6	V6	50.1		E-522
523	灰原 B6	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.0	4.7	7.8	4.6	1.0	V2	30.9		E-523

第12表 第Ⅰ次調査区 遺物観察表⑪

第3節 第II次調査区の遺物

第1項 概 要

第II次調査区で出土した遺物は、椀=523点、皿=142点である。この中で出土量を比較してみると、SY06は、椀=81点、皿=33点を数え、SY07は、椀=145点、皿=21点を数える。この両窯体では、SY07は床面下施設を有し、SY06には床面下施設が施されておらず、こうした点が出土量の差として数値に反映している。但し、SY07の床面下施設は、第I次調査区で検出された各窯体の床面下施設よりも、施されている面積がかなり小規模である。

第2項 SY06に関する遺物

SY06に関する出土遺物の内訳は、椀=81個体、皿=33個体である。この窯体に伴うものと思われる灰原01層からは、椀=204個体、皿=65個体が出土している。SY06は床面下施設をもたず、第I次調査区内の各窯体と比較すると、出土個体数は少ないグループに入る。但し、窯内からの出土量として各窯体と比較すると、ほぼ同量である。

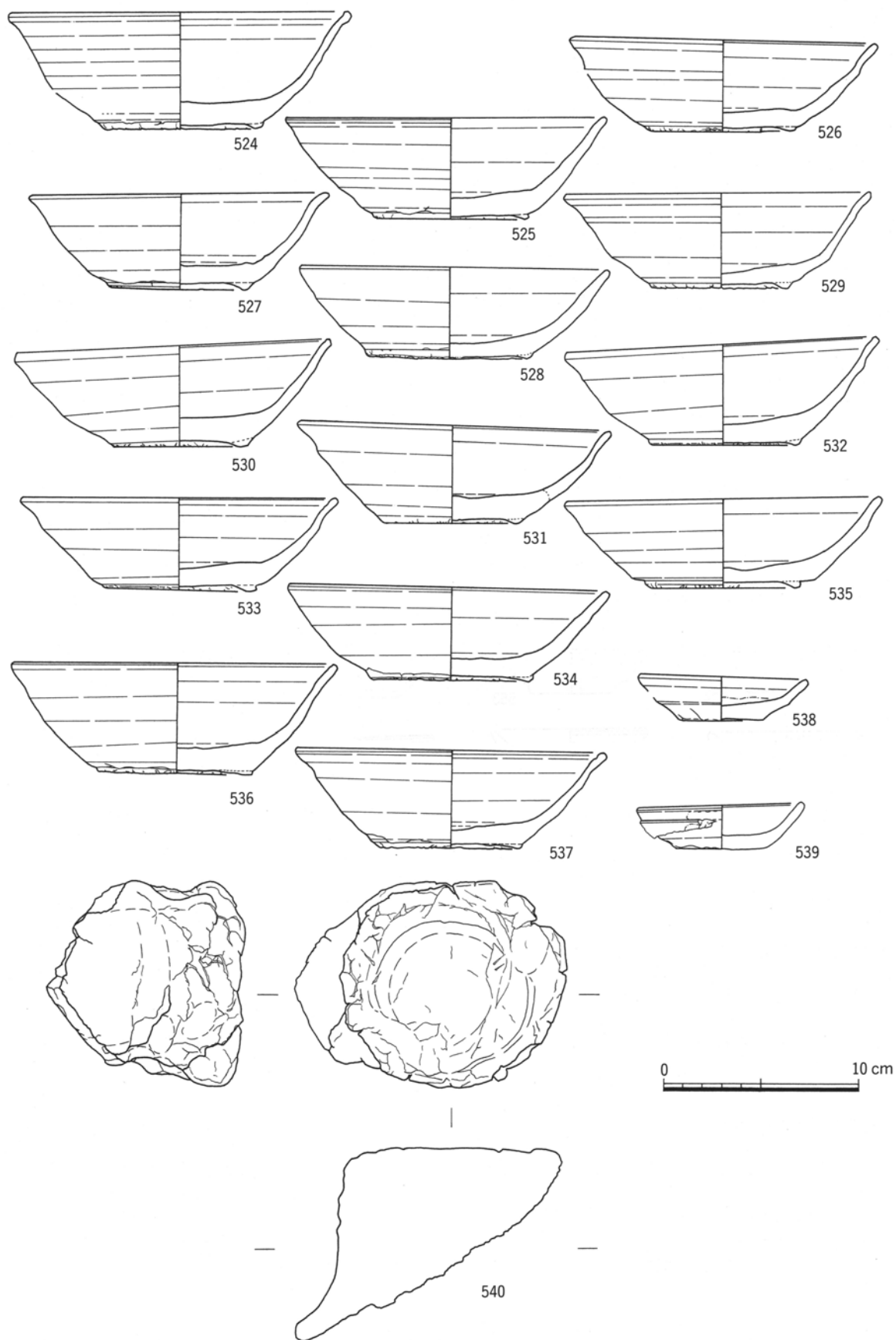
窯内から検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=72個体、皿=28個体である。これらの器形別内訳は、椀では1類=37、2類=13、3類=22個体、皿では1類=13、2類=15個体である。遺物番号524～563は、SY06の窯内出土遺物である。このうちで、524～540が焼成室出土遺物、541～563が燃焼室出土遺物である。524～534・541～544が椀1類、535・536・545・546・548が椀2類、537・547・549～551が椀3類である。538・539・552・553が皿1類、554～563が皿2類である。

遺物番号613～629は、SY06の生産活動に伴って形成されたと思われる、灰原01層から検出されたものである。ここで検出された遺物のうち、分類可能なものは、椀=154個体、皿=47個体である。灰原01層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=72、2類=32、3類=50個体、皿では1類=30、2類=17個体である。613～618が椀1類で、619が椀2類、620～622が椀3類である。623～626が皿1類、627～629が皿2類である。

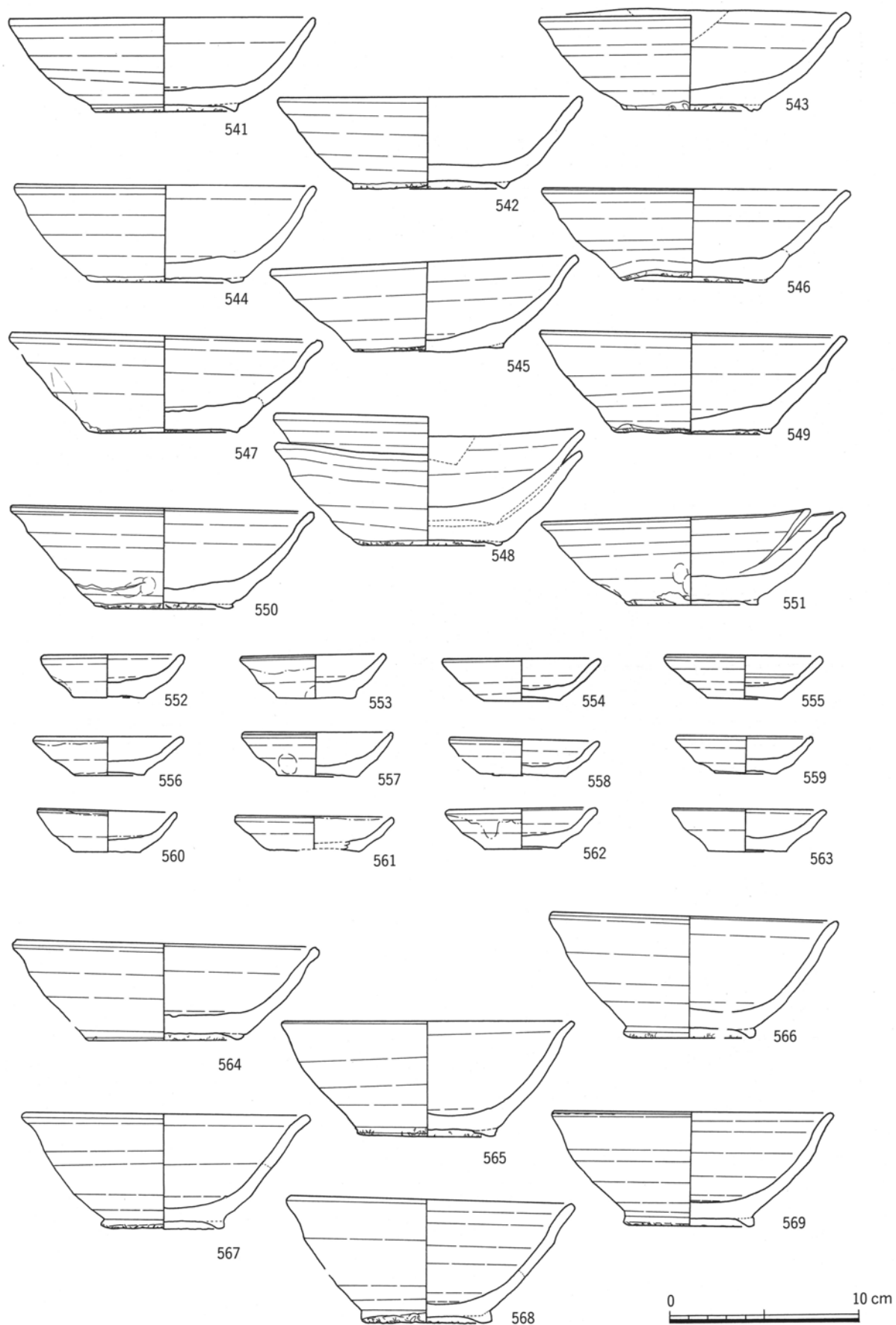
第3項 SY07に関する遺物

SY07に関する出土遺物の内訳は、窯内から椀=46個体、皿=21個体、床面下施設から椀=99個体である。この窯体に伴うものと思われる灰原02層からは、椀=9個体、皿=3個体が出土している。

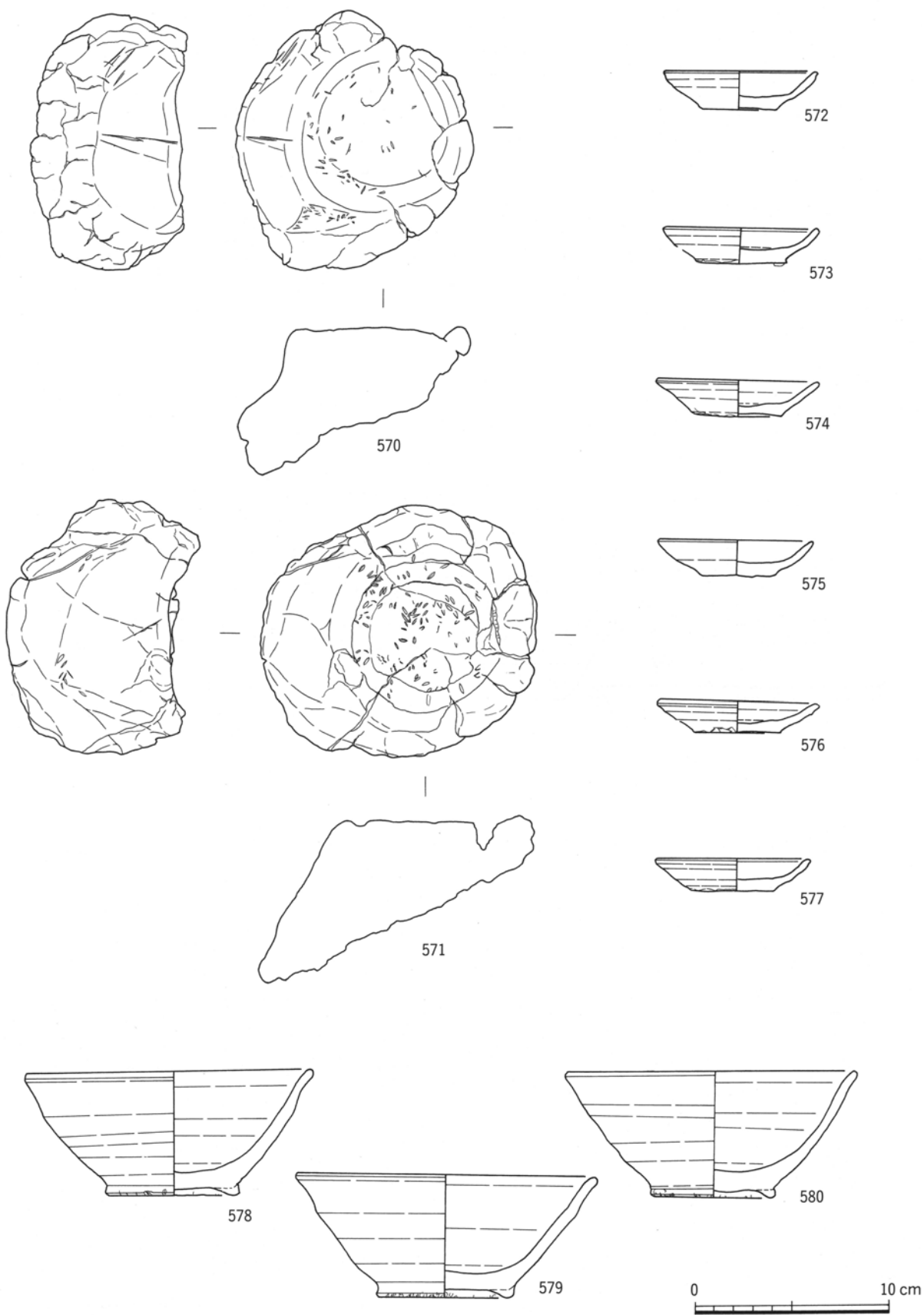
SY07は床面下施設を有し、窯体の遺存度もI・II次調査区を通じて最も良好であるが、調査区内での各窯体と比較すると、出土個体数は少ないグループに入る。また、この窯体の床面下施設は、焼成室内で小さい面積で設けられており、1窯体の床面下施設に使用さ



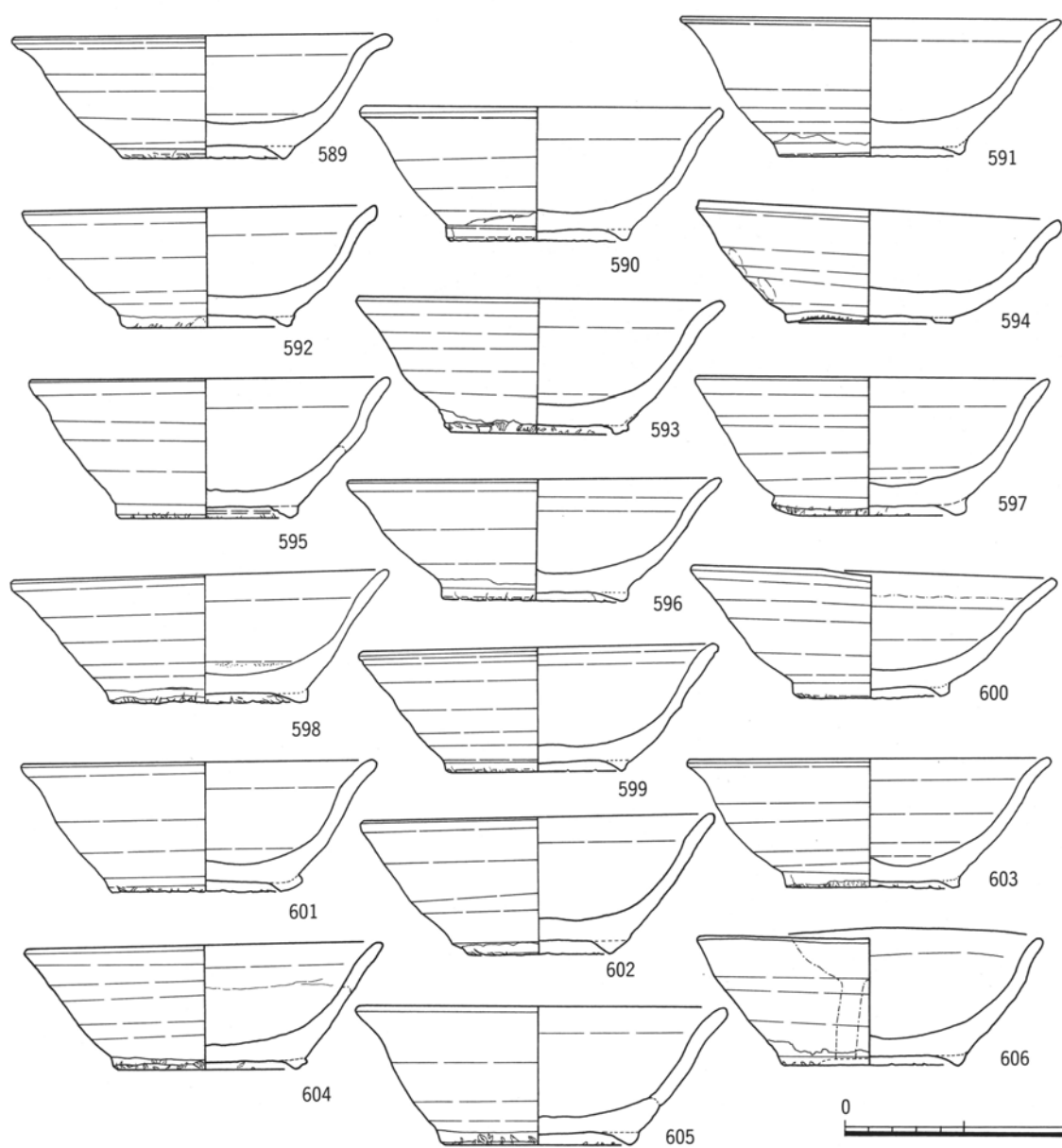
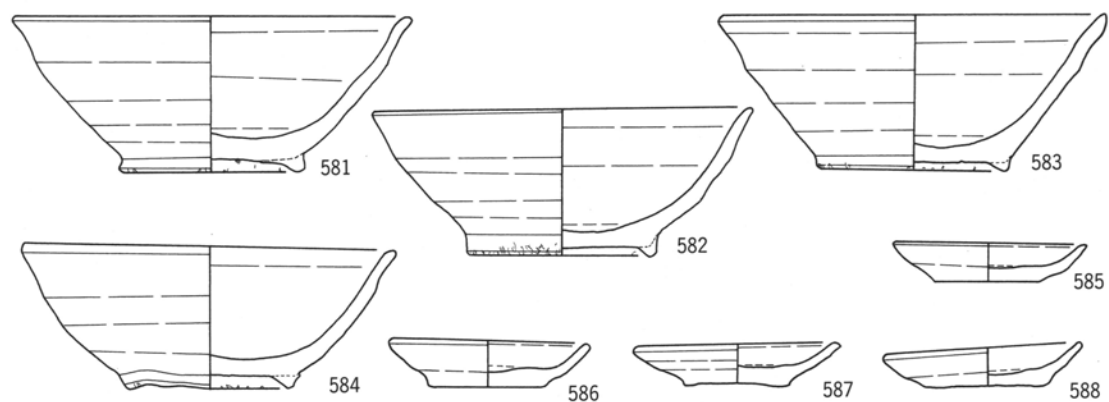
第 47 図 遺物実測図②



第 48 図 遺物実測図②④

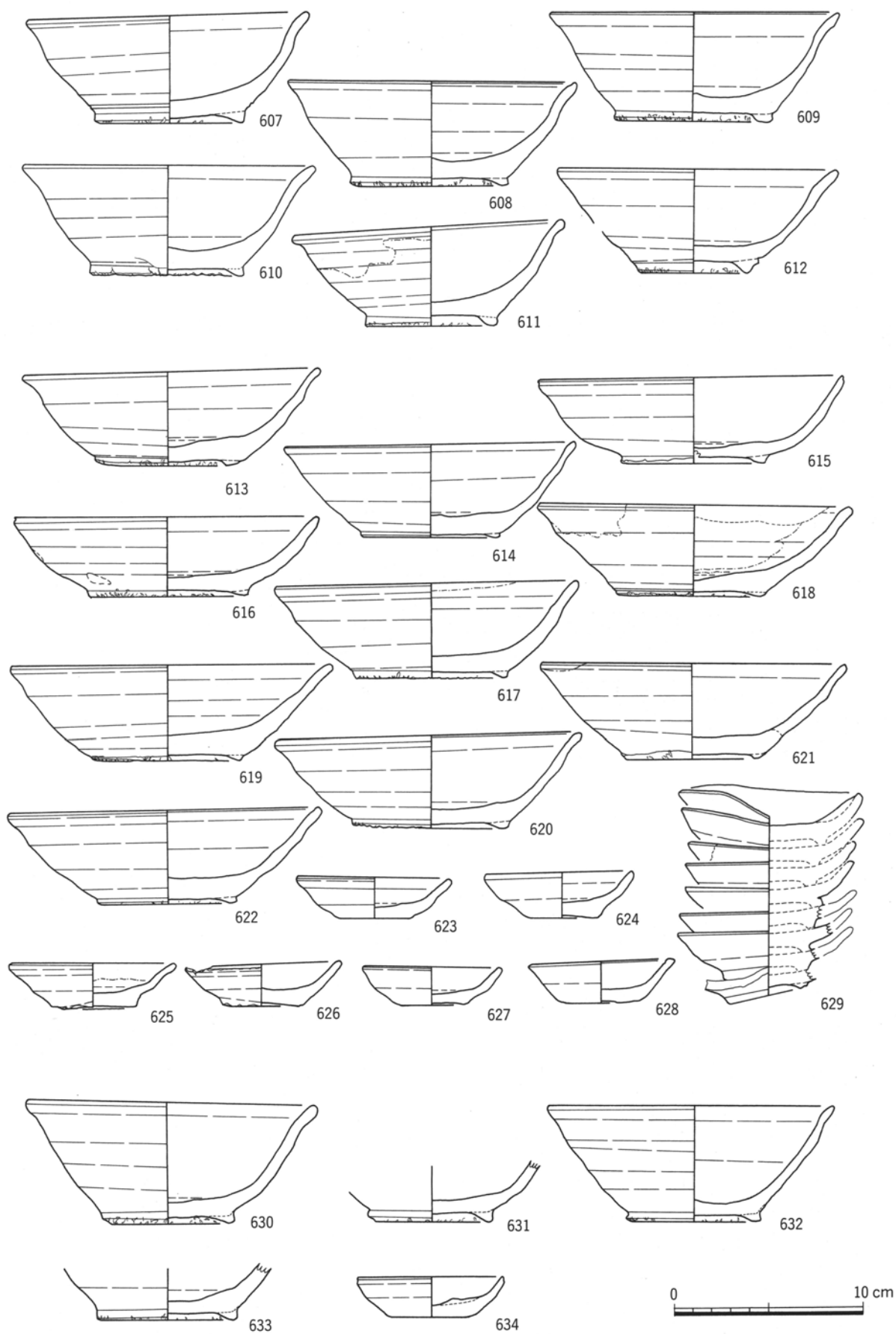


第 49 图 遺物実測図②⑤



0 10 cm

第 50 図 遺物実測図²⁶



第 51 図 遺物実測図②⑦

れた個体数では、第Ⅰ・Ⅱ次調査区併せた中でも最少であった。

窯内から検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=31 個体、皿=21 個体である。これらの器形別内訳は、椀では1 類= 5、2 類=23、3 類= 3 個体、皿では1 類=10、2 類= 11 個体である。遺物番号 564～588 は、SY07 窯内出土遺物である。このうちで、564～577 が焼成室出土遺物、578～588 が燃焼室出土遺物である。564～569・578～584 が椀2 類で、572～574・585～587 が皿1 類、575～577・588 が皿2 類である。570・571 は焼台で、上面平坦部内側には靱痕が認められる。

遺物番号 589～612 は、SY07 の床面下施設に使用されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=96 個体である。これらの器形別内訳は、椀1 類=34、2 類=24、3 類=38 個体である。589～596 が椀1 類、597～600・611・612 が椀2 類、601～610 が椀3 類である。

遺物番号 630～634 は、SY07 の生産活動に伴って形成されたと思われる、灰原 02 層から検出されたものである。ここで検出された遺物のうち、分類可能なものは、椀= 4 個体、皿= 3 個体である。灰原 02 層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1 類= 2、3 類= 2 個体、皿では1 類= 2、2 類= 1 個体である。631 が椀1 類で、630～632 が椀3 類である。632 が皿2 類である。

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器形	口縁	見込	靱痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
524	SY06	不良	椀	1	C		有	糸切後ナデ	6.0	8.0						焼成室	E-524
525	SY06	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	8.0	16.1	8.4	3.6	V2	438.3	焼成室	E-525
526	SY06	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.5	15.2	8.0	3.6	V3	404.9	燃焼室床上	E-526
527	SY06	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.2	14.9	7.4	3.6	V3	378.0	燃焼室床上	E-527
528	SY06	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	8.5	15.7	6.8	3.5	V4	402.3	燃焼室床上	E-528
529	SY06	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.1	15.5	9.8	3.2	V2	409.0	焼成室	E-529
530	SY06	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.3	16.0	9.0	3.6	V2	453.3	燃焼室床上	E-530
531	SY06	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.9	15.9	7.6	3.4	V5	425.0	燃焼室床上	E-531
532	SY06	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.4	15.8	8.0	3.6	V6	467.8	燃焼室床上	E-532
533	SY06	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.4	15.9	7.8	3.3	V4	406.5	燃焼室床上	E-533
534	SY06	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	8.3	16.2	8.4	3.6	V2	442.1	燃焼室床上	E-534
535	SY06	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	7.4	15.9	6.4	3.3	V7	408.9	燃焼室床上	E-535
536	SY06	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	7.8	16.4	8.8	4.0	V3	529.0	分焰柱脇床直	E-536
537	SY06	良好	椀	3	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.3	15.4	8.0	3.7	V3	424.3	焼成室	E-537
538	SY06	良好	皿	1	C	横ナデ	無	糸切痕	2.3	4.3	8.4	6.2	1.0	V2	42.2	分焰柱脇床直	E-538
539	SY06	良好	皿	1	A	横ナデ	無	糸切後ナデ	2.3	4.6	8.3	3.4	1.6	V4	50.5	分焰柱脇	E-539
541	SY06	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.4	16.1	7.6	3.6	V6	472.5	燃焼室床上	E-541
540	SY06		焼台													焼成室・傾斜34°	E-546
542	SY06	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	8.0	15.9	7.2	3.6	V6	455.1	燃焼室床上	E-542
543	SY06	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.8	16.2	8.8	3.1	V3	402.6	燃焼室	E-543
544	SY06	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	(5.1)	(7.3)	15.8	7.4	3.8	V6	483.0	燃焼室	E-544
545	SY06	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	7.9	16.1	8.0	3.2	V4	406.2	燃焼室	E-545
546	SY06	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.4	16.1	7.6	3.6	V3	431.1	燃焼室	E-546
547	SY06	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	(5.0)	7.8	16.2	8.4	3.4	V3	431.1	燃焼室床上	E-547
548	SY06	良好	椀	2	C	横ナデ										燃焼室	E-548
548	SY06	良好	椀	2	C		有	糸切後ナデ	5.2	7.1						燃焼室	E-548
549	SY06	良好	椀	3	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	8.2	15.6	8.0	3.6	V2	407.3	燃焼室床上	E-549
550	SY06	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	6.6	15.8	7.2	3.7	V4	438.0	燃焼室	E-550

第13表 第Ⅱ次調査区 遺物観察表①

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	粗 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
551	SY06	良好	碗	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.6	6.8	15.9	8.0	3.2	V2	372.0	燃焼室	E-551
552	SY06	良好	皿	1	A	横ナデ	無	糸切痕	2.2	3.7	7.5	3.2	1.1	V6	29.4	燃焼室床上	E-552
553	SY06	良好	皿	1	B	回ナデ	無	糸切後ナデ	2.3	3.9	7.5	1.6	1.4	V6	33.8	燃焼室床直	E-553
554	SY06	良好	皿	2	B	回ナデ	無	糸切痕	2.2	4.0	8.2	3.8	1.4	V4	44.9	燃焼室床上	E-554
555	SY06	良好	皿	2	B	横ナデ	無	糸切痕	2.3	3.8	8.2	5.4	1.1	V2	40.5	燃焼室床上	E-555
556	SY06	良好	皿	2	C		無	糸切痕	2.1	3.6	7.7	4.4	1.0	V2	29.5	燃焼室	E-556
557	SY06	良好	皿	2	B	横ナデ	無	糸切痕	2.3	4.1	7.8	0.4	1.8	V6	46.2	燃焼室	E-557
558	SY06	良好	皿	2	C	回ナデ	無	糸切痕	(1.9)	4.5	7.8	5.2	1.1	V2	37.0	燃焼室	E-558
559	SY06	良好	皿	2	B	横ナデ	無	糸切後ナデ	2.0	3.3	7.1	2.8	1.2	V6	28.4	燃焼室	E-559
560	SY06	良好	皿	2	B	回ナデ	無	糸切痕	2.2	3.5	7.2	4.4	1.4	V2	37.7	燃焼室	E-560
561	SY06	良好	皿	2	C		無	糸切後ナデ	1.9	4.7	8.2	5.2	1.2	V2	43.0	燃焼室	E-561
562	SY06	良好	皿	2	C	横ナデ	無	糸切痕	2.1	3.8	7.8	4.8	1.1	V2	34.9	燃焼室	E-562
563	SY06	良好	皿	2	A	横ナデ	無	糸切痕	2.2	4.1	7.9	5.2	0.9	V2	30.8	燃焼室	E-563
564	SY07	良好	碗	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	8.0	15.8	8.0	3.6	V4	443.4	焼成室	E-564
565	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.1	6.8	15.1	5.4	5.0	V4	505.0	焼成室床直	E-565
566	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.4	6.3	15.0	6.4	5.0	V3	498.0	焼成室	E-566
567	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.1	6.5	14.8	5.6	5.0	V3	464.0	分焰柱脇	E-567
568	SY07	良好	碗	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.6	6.9	14.8	5.4	5.5	V4	536.1	分焰柱脇	E-568
569	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.1	6.9	14.6	2.0	4.7	V6	455.2	焼成室床直	E-569
570	SY07		焼台													傾斜角33°	E-570
571	SY07		焼台													傾斜角30°	E-571
572	SY07	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切痕	2.0	4.0	7.8	5.0	1.1	V2	34.3	焼成室床直	E-572
573	SY07	良好	皿	1	D	回ナデ	無	糸切後ナデ	1.9	4.7	7.8	3.6	1.1	V5	32.2	分焰柱脇床直	E-573
574	SY07	良好	皿	1	B	回ナデ	無	糸切痕	1.9	4.4	8.1	4.8	1.2	V2	40.1	燃焼室	E-574
575	SY07	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	1.9	3.9	7.8	4.8	1.1	V2	34.9	焼成室床上	E-575
576	SY07	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切後ナデ	1.7	4.3	7.7	3.8	1.0	V4	29.0	分焰柱脇床直	E-576
577	SY07	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	1.7	4.5	8.0	1.4	1.1	V6	29.2	分焰柱脇床直	E-577
578	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.4	6.9	14.5	5.6	5.2	V3	466.4	燃焼室炭層	E-578
579	SY07	良好	碗	2	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	6.3	6.6	15.3	6.0	5.1	V3	512.1	燃焼室炭層	E-579
580	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.5	6.0	14.8	5.6	5.1	V4	501.5	燃焼室炭層	E-580
581	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.1	6.9	15.5	2.8	4.8	V6	525.5	燃焼室炭層	E-581
582	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.1	14.3	2.0	4.8	V6	450.9	燃焼室炭層	E-582
583	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.1	7.3	15.0	5.6	5.2	V3	493.4	燃焼室炭層	E-583
584	SY07	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	6.3	14.0	4.6	4.4	V6	419.8	燃焼室	E-584
585	SY07	良好	皿	1	A		無	糸切痕	1.5	4.1	7.4	4.0	0.9	V4	25.0	燃焼室	E-585
586	SY07	良好	皿	1	A	横ナデ	無	糸切痕	1.8	4.7	7.6	5.2	1.1	V2	34.2	燃焼室	E-586
587	SY07	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切痕	1.6	4.2	7.9	5.0	0.8	V2	26.6	燃焼室炭層	E-587
588	SY07	良好	皿	2	A	回ナデ	無	糸切痕	1.5	4.8	7.7	3.6	0.8	V4	22.7	燃焼室	E-588
589	SY07 床下	良好	碗	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.9	15.5	7.8	3.6	V1	392.1		E-589
590	SY07 床下	良好	碗	1		回ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	7.6	14.8	6.4	4.4	V4	449.2		E-590
591	SY07 床下	良好	碗	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.8	15.7	7.6	4.4	V1	480.4		E-591
592	SY07 床下	良好	碗	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	6.9	14.8	4.4	3.7	V7	386.2		E-592
593	SY07 床下	良好	碗	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	6.9	15.1	6.4	4.4	V1	412.4		E-593
594	SY07 床下	良好	碗	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.7	6.8	15.1	7.2	3.3	V4	362.7		E-594
595	SY07 床下	良好	碗	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.1	14.8	5.8	4.6	V4	456.4		E-595
596	SY07 床下	良好	碗	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.1	7.8	15.4	2.0	3.9	V7	415.9		E-596
597	SY07 床下	良好	碗	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.2	14.6	8.6	4.0	V1	428.4		E-597
598	SY07 床下	良好	碗	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	8.3	15.6	3.6	4.2	V7	480.9		E-598

第14表 第Ⅱ次調査区 遺物観察表②

遺物 番号	遺構	焼成	器種	器 形	口 縁	見込	刳 痕	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号
599	SY07 床下	良好	椀	2	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.5	14.7	6.4	4.1	V4	413.9		E-599
600	SY07 床下	良好	椀	2	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.3	6.5	15.1	6.2	3.8	V3	377.9		E-600
601	SY07 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.9	14.6	6.8	4.2	V1	387.7		E-601
602	SY07 床下	良好	椀	3	A		有	糸切後ナデ	5.7	6.1	14.5	6.0	4.2	V4	406.1		E-602
603	SY07 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.4	7.4	15.0	6.0	4.5	V3	437.4		E-603
604	SY07 床下	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	7.5	14.8	2.8	4.2	V6	413.0		E-604
605	SY07 床下	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	7.7	14.8	6.8	4.6	V3	459.9		E-605
606	SY07 床下	良好	椀	3	A		有	糸切後ナデ	5.3	7.3	14.2	2.2	4.2	V6	379.3		E-606
607	SY07 床下	良好	椀	3	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.6	7.5	14.7	0.0	4.5	V6	429.6		E-607
608	SY07 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	7.6	15.1	2.2	4.1	V7	429.0		E-608
609	SY07 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	8.0	15.1	6.6	4.4	V4	469.2		E-609
610	SY07 床下	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.8	8.2	15.3	6.8	4.5	V1	444.3		E-610
611	SY07 床下	良好	椀	2	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.2	6.7	14.1	0.0	4.0	V7	362.6		E-611
612	SY07 床下	良好	椀	2	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.5	5.5	14.6	6.0	4.1	V4	401.2		E-612
613	灰原01	良好	椀	1	B	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.7	15.4	7.6	3.4	V4	393.8		E-613
614	灰原01	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.0	15.3	8.0	3.8	V2	418.3		E-614
615	灰原01	良好	椀	1	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.5	7.2	16.0	7.4	3.4	V8	470.0		E-615
616	灰原01	良好	椀	1	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.2	8.2	16.0	7.4	2.9	V7	373.1		E-616
617	灰原01	良好	椀	1	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.9	15.8	8.4	3.4	V3	415.3		E-617
618	灰原01	良好	椀	1	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	4.8	7.8	16.5	8.0	3.3	V3	420.1		E-618
619	灰原01	良好	椀	2	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	7.9	16.7	8.4	3.2	V2	410.3		E-619
620	灰原01	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	4.9	7.8	16.0	7.2	3.4	V5	421.3		E-620
621	灰原01	良好	椀	3	C	横ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.9	16.0	8.0	3.8	V2	445.7		E-621
622	灰原01	良好	椀	3	C	回ナデ	有	糸切後ナデ	5.0	6.8	16.4	7.6	3.6	V3	443.6		E-622
623	灰原01	良好	皿	1	A	横ナデ	無	糸切痕	2.2	3.8	8.0	3.0	1.4	V5	40.9		E-623
624	灰原01	良好	皿	1	A	回ナデ	無	糸切痕	1.9	3.8	7.7	5.4	1.1	V2	37.4		E-624
625	灰原01	良好	皿	1	B	回ナデ	無	糸切痕	2.4	4.5	8.5	4.2	1.2	V3	40.9		E-625
626	灰原01	良好	皿	1	C	回ナデ	無	糸切痕	2.2	4.2	8.1	3.8	1.2	V6	38.6		E-626
627	灰原01	良好	皿	2	C	横ナデ	無	糸切痕	2.0	3.7	7.1	4.6	1.1	V2	30.0		E-627
628	灰原01	良好	皿	2	E		無	糸切後ナデ	2.2	4.2	7.4	4.4	1.2	V2	33.5		E-628
629	灰原01	良好	皿		A						9.3	4.8	1.6	V4	68.8	高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿		A											高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿		A											高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿		A											高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿		A											高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿		C											高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿		A											高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿				有	糸切後ナデ		(4.8)						高台付皿	E-629
630	灰原02	良好	椀	3	A	横ナデ	有	糸切後ナデ	6.4	6.3	15.1	7.2	4.6	V1	460.4		E-630
631	灰原02	良好	椀	1		横ナデ	有	糸切後ナデ		6.0							E-631
632	灰原02	良好	椀	3	A	回ナデ	有	糸切後ナデ	6.1	6.5	14.9	6.4	5.1	V3	502.6		E-632
633	灰原02	良好	椀			回ナデ	有	糸切後ナデ		7.0							E-633
634	灰原02	良好	皿	2	C		無	糸切痕	2.1	4.2	7.6	5.0	1.1	V6	36.4		E-634

第15表 第Ⅱ次調査区 遺物観察表③

第Ⅳ章 自然科学的分析

— 窯跡焼土の熱残留磁化測定 —

パレオ・ラボ株式会社 (藤 根 久)

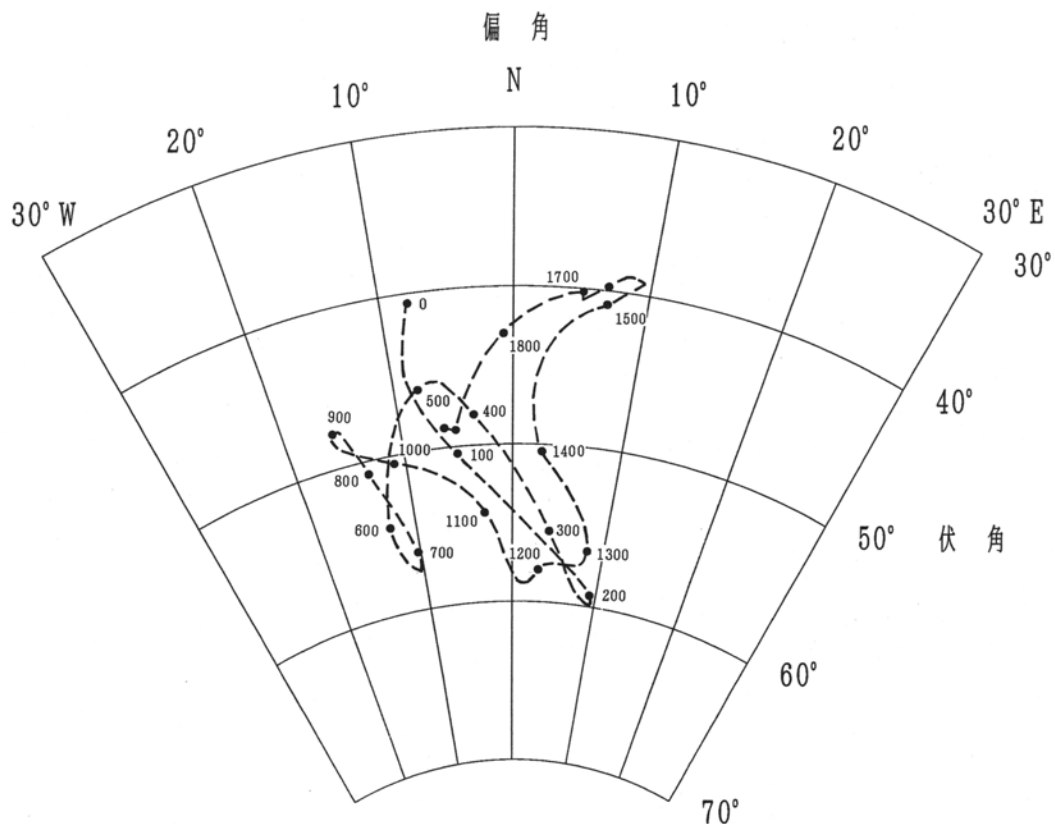
第1節 はじめに

NA 335 号窯は、名古屋市緑区大高町地内に位置する。遺跡からは、12 世紀末～13 世紀初頭と推定される窯跡 7 基が検出されている。

ここでは、これら窯跡 7 基の焼土の熱残留磁化を測定し、当時の磁化方向からその焼成年代を推定する。

第2節 考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁



第 52 図 Shibuya (1980) による地磁気永年変化曲線

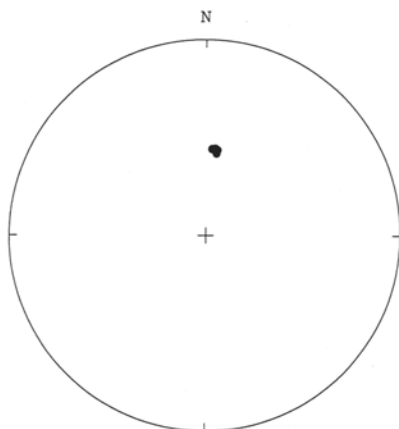
北)は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在の遺跡付近の偏角は約 6.81° 、伏角は約 48.23° 、全磁力(水平分力)は約 $30935.9(\text{nT})$ である(理科年表、1993;いずれも1990年値)。これら地磁気の三要素(偏角・伏角・全磁力)は、観測する地点によって異なった値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物(磁石になれる鉱物)はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化(熱残留磁化)が、焼かれた当時の地磁気の方角を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方角は少しずつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年間については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化の測定から、その変化が詳しく調べられている(広岡、1977、Shibuya、1980;図1)。また、湖や浅海における堆積物の堆積残留磁化を測定し、過去11,500年間の地磁気変化曲線も求められている(Hyodoほか、1993)。

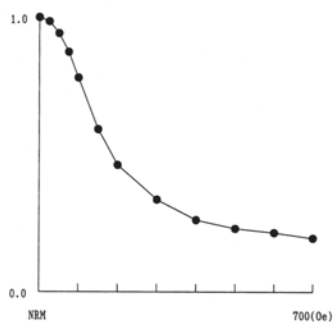
年代のよく分かっている遺跡の焼土や火山岩の熱残留磁化測定あるいは堆積物の堆積残留磁化から地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土の残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較すると、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯焼土についても、遺物とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、 C^{14} 年代測定法などの他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いずれを採用するかは、土器等による推定年代が参考となる。

第3節 試料採取と残留磁化測定および結果

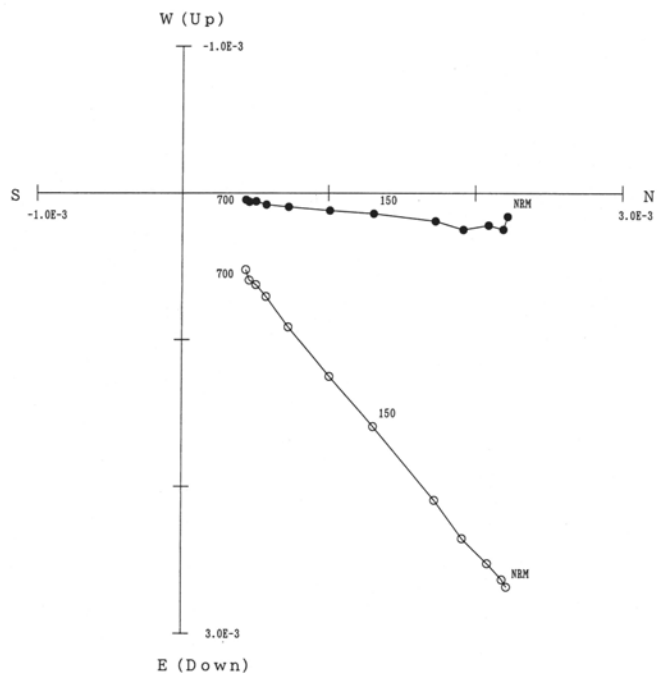
考古地磁気による年代推定は、a)測定用試料の採取および整形、b)残留磁化測定および統計計算を行い、c)地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成時の年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認・検討するために、段階交流消磁も行った。



●: 下向き ○: 上向き
[a. シュミット・ネット投影図]

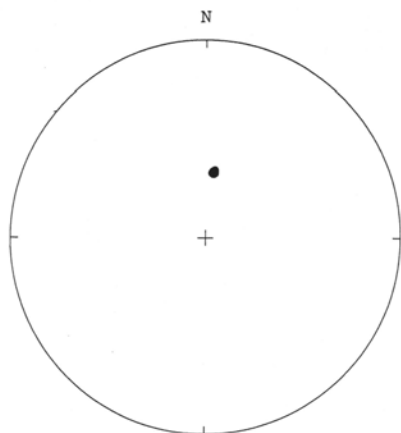


[b. 残留磁化の相対強度]

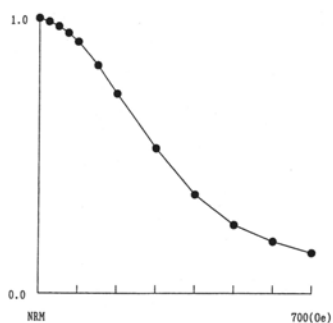


座標系 → ●: N・S-E・W ○: N・S-Up・Down
消磁レベル (Oe) : NRM- 25- 50- 75-100-150-200-300-400-500-600-700
[c. ジダーベルト図 (単位: emu)]

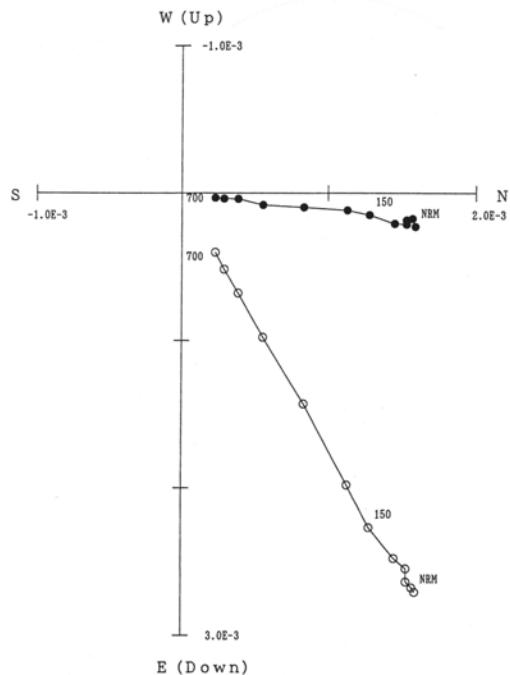
第 53 図 SY01 焼土 (No. 04) の段階交流消磁測定結果



●: 下向き ○: 上向き
[a. シュミット・ネット投影図]

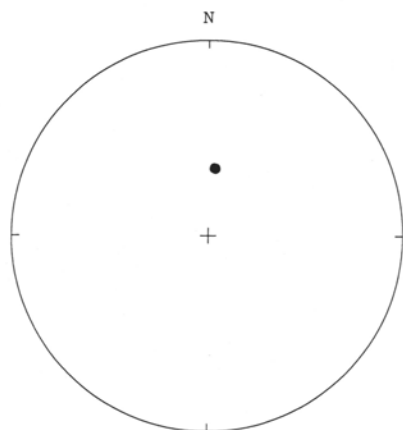


[b. 残留磁化の相対強度]

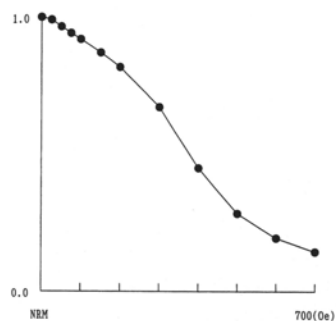


座標系 → ●: N・S-E・W ○: N・S-Up・Down
消磁レベル (Oe) : NRM- 25- 50- 75-100-150-200-300-400-500-600-700
[c. ジダーベルト図 (単位: emu)]

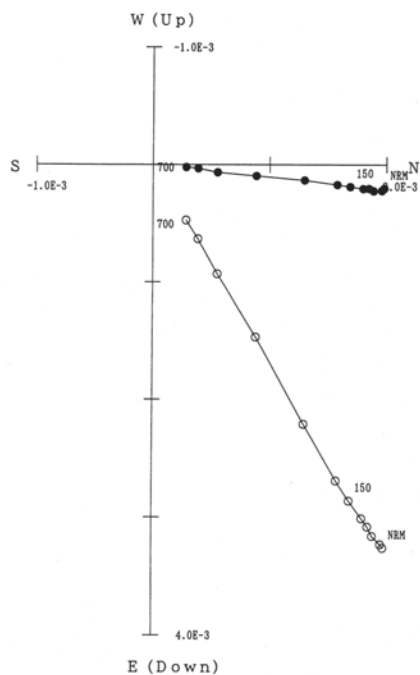
第 54 図 SY02 焼土 (No. 07) の段階交流消磁測定結果



●: 下向き ○: 上向き
[a. シュミット・ネット投影図]

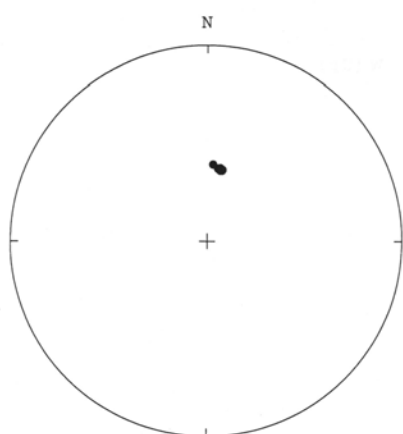


[b. 残留磁化の相対強度]

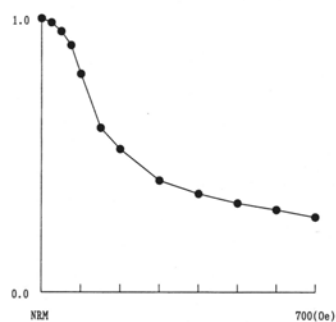


座標系 → ●: N・S-E・W ○: N・S-Up・Down
消磁レベル (Oe) : NRM- 25- 50- 75-100-150-200-300-400-500-600-700
[c. ジダーベルト図 (単位: emu)]

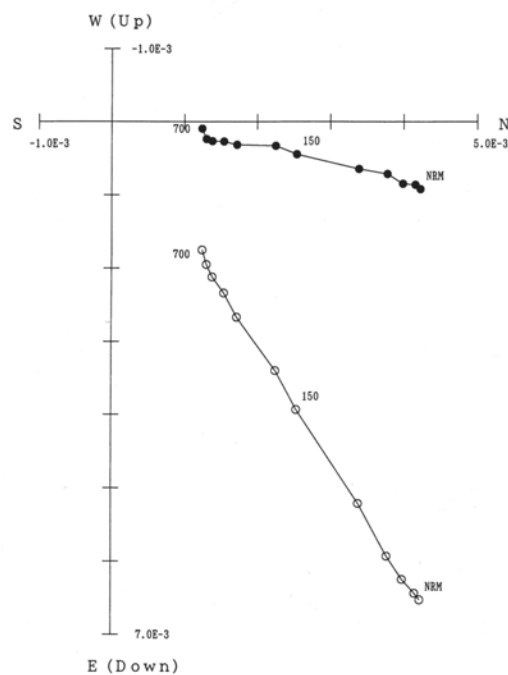
第 55 図 SY03 焼土(No. 09)の段階交流消磁測定結果



●: 下向き ○: 上向き
[a. シュミット・ネット投影図]

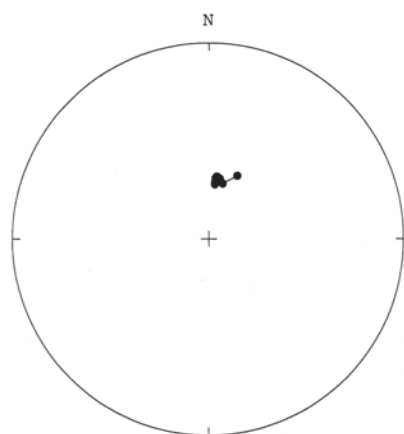


[b. 残留磁化の相対強度]

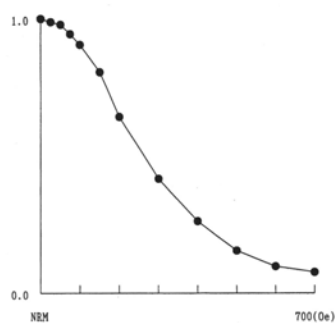


座標系 → ●: N・S-E・W ○: N・S-Up・Down
消磁レベル (Oe) : NRM- 25- 50- 75-100-150-200-300-400-500-600-700
[c. ジダーベルト図 (単位: emu)]

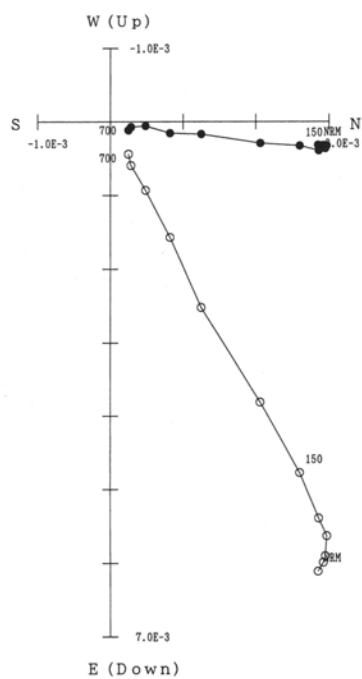
第 56 図 SY04 焼土(No. 01)の段階交流消磁測定結果



●: 下向き ○: 上向き
[a. シュミット・ネット投影図]

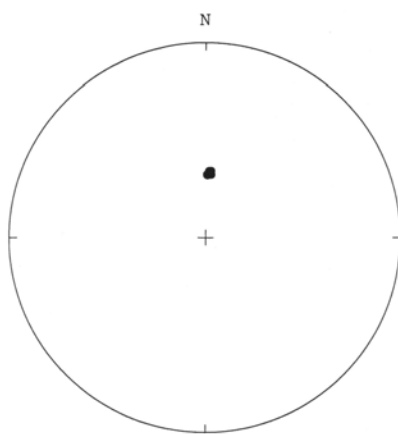


[b. 残留磁化の相対強度]

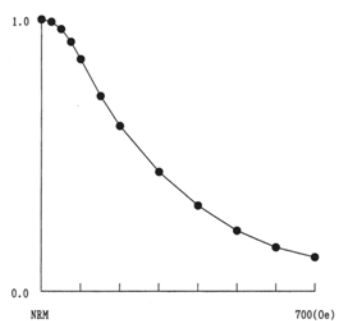


座標系 → ●: N・S-E・W ○: N・S-Up・Down
消磁レベル (Oe) : NRM- 25- 50- 75-100-150-200-300-400-500-600-700
[c. ジダーベルト図 (単位: emu)]

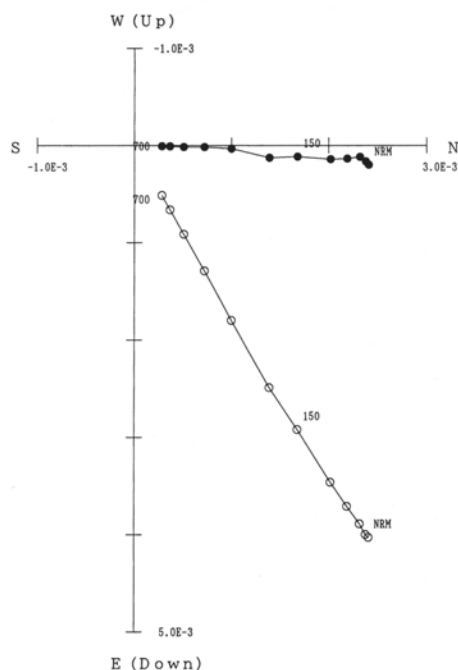
第 57 図 SY05 焼土 (No. 04) の段階交流消磁測定結果



●: 下向き ○: 上向き
[a. シュミット・ネット投影図]



[b. 残留磁化の相対強度]



座標系 → ●: N・S-E・W ○: N・S-Up・Down
消磁レベル (Oe) : NRM- 25- 50- 75-100-150-200-300-400-500-600-700
[c. ジダーベルト図 (単位: emu)]

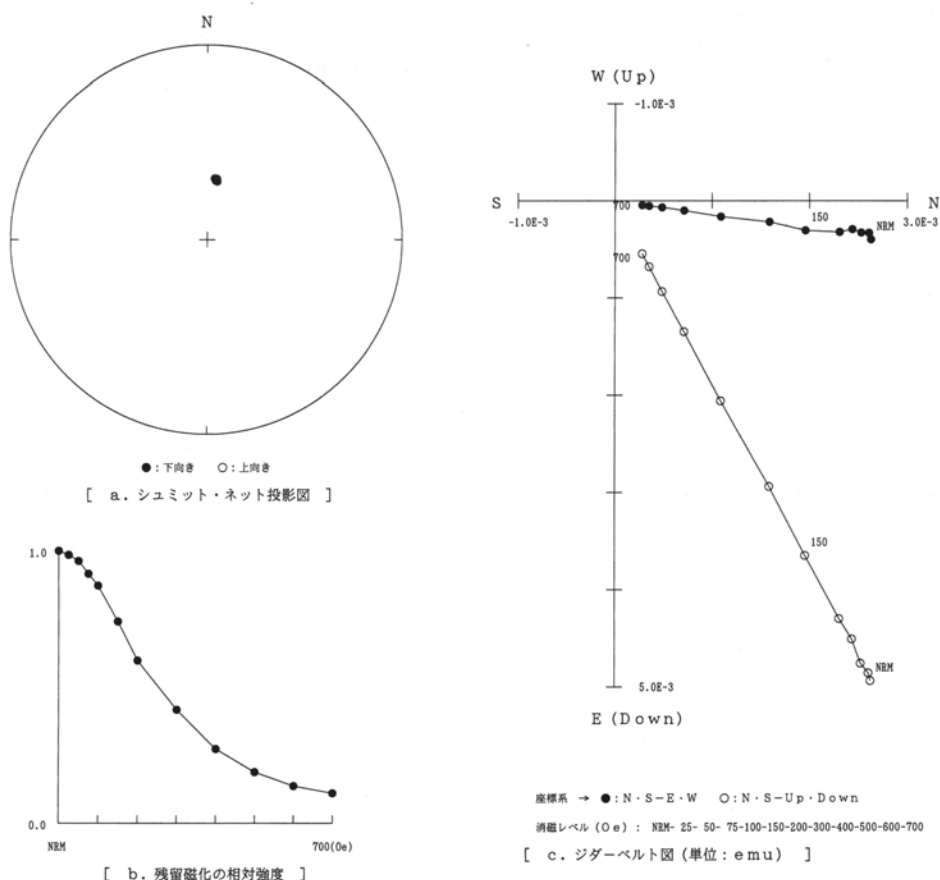
第 58 図 SY06 焼土 (No. 07) の段階交流消磁測定結果

a. 測定用試料の採取および整形

熱残留磁化測定を行った試料は、窯跡7基 (SY01～07) の床面焼土である。試料は、焼土面において、①一辺数 cm の立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分 (良く焼けた部分) の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや堅め (練りハミガキ程度) の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺 5 cm の正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス (考古地磁気用に改良したクリノメータ) で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺 3.5 cm・厚さ 2.5 cm の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、SY01 が 10 個 (1 個破損)、SY02 が 10 個 (1 個破損)、SY03 が 11 個 (1 個破損)、SY04 が 13 個、SY05 が 9 個 (3 個破損)、SY06 が 14 個、SY07 が 10 個 (2 個破損) である。

b. 段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算

試料の熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計 (SMM-85: ㈱夏原技研製)



第 59 図 SY07 焼土 (No. 07) の段階交流消磁測定結果

(補正前)

遺 構	試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	強度 ($\times 10^{-3}$)	備 考	統計処理項目	統計値
SY01 (150 Oe 消磁後)	01	116.2	48.0	0.351		試料数 (n)	10
	02	59.0	48.3	0.853			
	03	39.2	65.0	2.200		平均偏角, Dm (°E)	10.15
	04	6.0	50.2	3.280	段階交流消磁		
	05				破損	平均伏角, Im (°)	60.82
	06	-49.1	29.1	1.960		誤差角(δD) (°)	40.26
	07	-32.7	40.3	1.800			
	08	-4.2	57.6	2.830		誤差角(δI) (°)	19.63
	09	35.6	71.4	1.930			
	10	34.3	51.5	2.250		信頼度係数 (k)	7.01
	11	-15.5	47.6	1.130			
	12					平均磁化強度 ($\times 10^{-3}$ emu)	1.86
	13						
	14						
SY02 (150 Oe 消磁後)	01	5.3	60.6	2.880		試料数 (n)	10
	02	7.0	58.6	2.100			
	03	8.6	60.5	2.290		平均偏角, Dm (°E)	7.29
	04	7.1	59.4	1.760		平均伏角, Im (°)	59.95
	05	8.1	60.7	2.090			
	06	5.9	61.1	2.250		誤差角(δD) (°)	1.66
	07	6.6	60.3	2.610	段階交流消磁	誤差角(δI) (°)	0.83
	08	7.1	58.4	1.410			
	09	9.9	61.7	1.650		信頼度係数 (k)	3367.42
	10				破損		
	11	7.4	58.1	1.600		平均磁化強度 ($\times 10^{-3}$ emu)	2.06
	12						
	13						
	14						
SY03 (150 Oe 消磁後)	01	7.2	59.4	3.840		試料数 (n)	11
	02	4.8	59.6	2.680			
	03	5.8	59.1	1.650		平均偏角, Dm (°E)	6.73
	04	7.7	60.9	0.398		平均伏角, Im (°)	60.09
	05	6.6	60.8	2.400			
	06				破損	誤差角(δD) (°)	1.56
	07	7.2	61.1	1.370		誤差角(δI) (°)	0.78
	08	6.8	61.0	3.870			
	09	6.4	59.2	3.320	段階交流消磁	信頼度係数 (k)	3437.64
	10	3.7	58.6	2.990			
	11	6.4	59.9	2.240		平均磁化強度 ($\times 10^{-3}$ emu)	2.31
	12	11.8	61.2	0.640			
	13						
	14						
SY04 (150 Oe 消磁後)	01	12.3	56.5	7.840	段階交流消磁	試料数 (n)	10
	02	26.6	56.4	4.620	計算から除外		
	03	5.6	60.0	2.720		平均偏角, Dm (°E)	9.65
	04	11.8	60.0	12.700		平均伏角, Im (°)	57.28
	05	8.8	56.3	7.910			
	06	1.1	49.2	5.360		誤差角(δD) (°)	5.7
	07	12.9	60.5	4.980		誤差角(δI) (°)	3.08
	08	2.3	34.9	22.300	計算から除外		
	09	11.8	59.4	5.690		信頼度係数 (k)	246.93
	10	18.8	50.3	6.410			
	11	2.2	59.6	13.700		平均磁化強度 ($\times 10^{-3}$ emu)	7.41
	12	11.2	59.8	6.800			
	13	15.8	41.7	1.390	計算から除外		
	14						

第16表 残留磁化測定(150 Oe 消磁)と統計計算結果

を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料 (SY01 No. 04、SY02 No. 07、SY03 No. 09、SY04 No. 01、SY05 No. 04、SY06 No. 07、SY07 No. 07) について交流消磁装置 (DEM-8601: ㈱夏原技研製) を用いて段階的に消磁し、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した (図2～8)。その結果、磁化強度は10-3 emu 前後と強く、磁化保持力は150 Oe(エルステッド)においてNRM(自然残留磁化)のSY01 No. 04が約59%、SY02 No. 07が約87%、SY03 No. 07が約82%、SY04 No. 01が約60%、SY05 No. 04が約79%、SY06 No. 07が約72%、SY07 No. 07が約74%を示し、SY01はやや低いものの、いずれの窯も保持力が高

(補正前)

遺 構	試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	強度 (x10E-3)	備 考	統計処理項目	統計値
SY05 (150 Oe 消磁後)	01				破損	試料数 (n)	6
	02	-24.3	21.8	3.510	計算から除外	平均偏角, Dm (°E)	2.57
	03	3.1	59.8	7.470			
	04	7.2	61.2	5.450	段階交流消磁	平均伏角, Im (°)	60.13
	05	0.5	57.8	6.320			
	06	-4.1	58.7	15.000		誤差角(δD) (°)	4.28
	07				破損	誤差角(δI) (°)	2.13
	08	15.1	58.6	17.400	計算から除外	信頼度係数 (k)	992.08
	09	-19.5	54.5	2.980	計算から除外		
	10	4.9	62.0	4.070		平均磁化強度 (x10E-3 emu)	7.42
	11				破損		
	12	4.6	61.0	6.220			
	13						
	14						
SY06 (150 Oe 消磁後)	01	7.3	55.9	4.960		試料数 (n)	14
	02	5.0	61.1	3.990		平均偏角, Dm (°E)	3.74
	03	1.8	61.3	3.340			
	04	3.0	56.2	5.210		平均伏角, Im (°)	59.87
	05	2.8	60.0	4.820			
	06	3.6	60.3	5.250		誤差角(δD) (°)	1.87
	07	3.9	60.0	3.370	段階交流消磁	誤差角(δI) (°)	0.94
	08	3.6	60.3	4.350		信頼度係数 (k)	1804.41
	09	0.3	60.2	2.790			
	10	3.6	61.2	3.740		平均磁化強度 (x10E-3 emu)	4.04
	11	5.4	60.3	2.670			
	12	4.8	61.0	2.650			
	13	5.0	59.8	3.870			
	14	1.8	60.4	5.590			
SY07 (150 Oe 消磁後)	01	11.3	59.7	6.310		試料数 (n)	10
	02				破損	平均偏角, Dm (°E)	10.13
	03	6.3	61.5	6.520			
	04	16.9	61.1	4.670		平均伏角, Im (°)	60.61
	05	13.6	57.5	4.550			
	06				破損	誤差角(δD) (°)	2.71
	07	8.9	61.5	4.150	段階交流消磁	誤差角(δI) (°)	1.33
	08	7.5	59.8	3.020		信頼度係数 (k)	1327.44
	09	10.2	61.9	1.870			
	10	6.7	62.0	2.790		平均磁化強度 (x10E-3 emu)	4.2
	11	8.4	58.9	4.170			
	12	11.2	61.8	3.910			
	13						
	14						

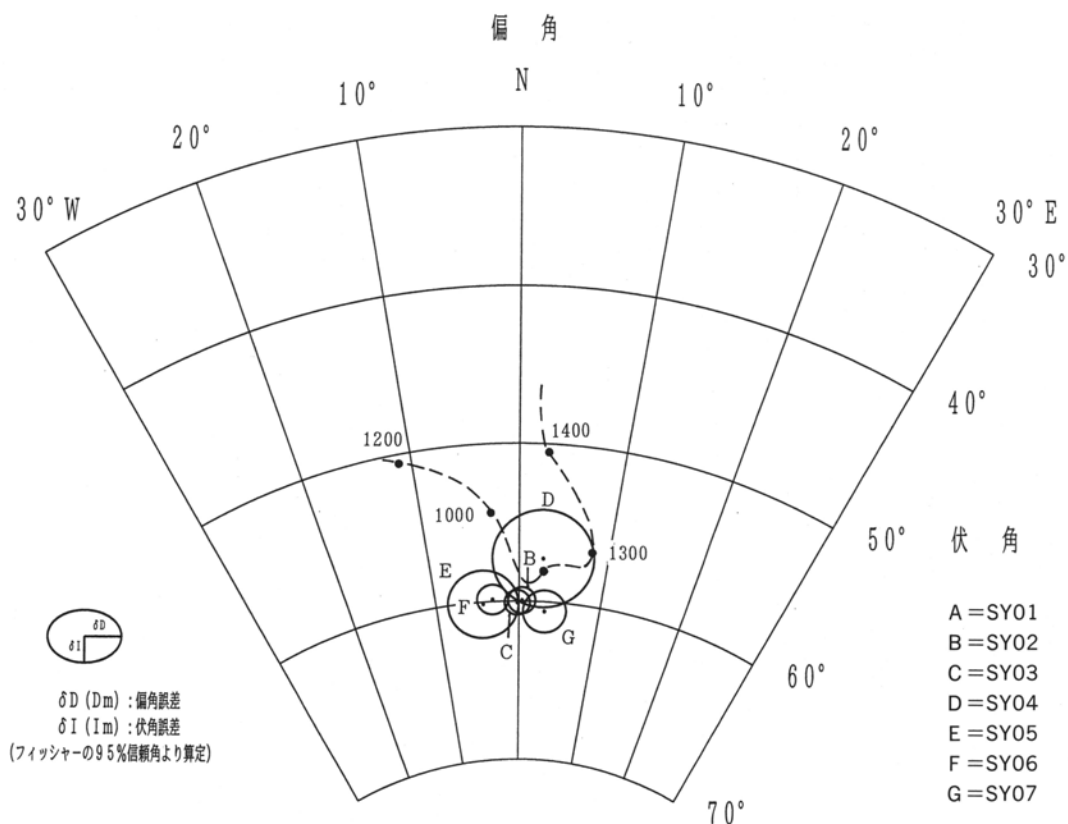
第17表 残留磁化測定(150 Oe 消磁)と統計計算結果

いことが理解される (b. 残留磁化の相対強度)。また、磁化方向も、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録している (c. ジダーベルト図)。

以上のことから、150 Oe で消磁した際の残留磁化方向は、当時の地磁気の方角としても問題ない。これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、150 Oe で消磁した後に残留磁化を測定し、各試料の磁化方向とした。

こうした複数試料の測定から得た偏角 (D_i)、伏角 (I_i) を用いて、Fisher (1953) の統計法により平均値 (D_m 、 I_m) を求めた (表 1 および表 2、ただし、試料のうち大きく外れる試料は計算から除外した)。計算した結果は、SY01 以外はいずれも誤差が小さく、信頼度係数 (k) は SY02 が 3367.42、SY03 が 3437.64、SY04 が 246.93、SY05 が 992.08、SY06 が 1804.41、SY07 が 1327.44 と高い数値を示している。なお、SY01 は、10 個の磁化方向がいずれも異なった方向を示しており、また赤化部分がブロック状であることから、当時の焼土ではなく、側壁部分が落下したものと考えられる。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の 1990.0 年の磁気偏角近似式から計算した 6.81° W を使用した。その結果は、Shibuya (1980) による地磁気変化曲線とともにプロットした (図 9)。図中測定点に示した楕円は、フッシャー (1953) の 95% 信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。



第 60 図 窯焼土の地磁気測定結果と永年変化曲線 (Shibuya, 1980 の一部)

c. 窯跡の焼成年代

図9には、Shibuya (1980) による地磁気永年変化曲線の一部とともに各窯跡の磁化方向を示した。これによると、各窯跡の磁化方向は、地磁気永年変化曲線の1,100～1,300年に近い位置にある。磁化方向の中心を最も近い曲線上に移動し、その年代を推定すると、SY02が $1,180 \pm 15$ 年、SY03が $1,175 \pm 15$ 年、SY04が $1,200 + 100 - 70$ 年(他に $280 + 45 - 60$ 年、 165 ± 25 年)、SY05が $1,170 + 50 - 30$ 年、SY06が $1,170 \pm 15$ 年、SY07が $1,185 \pm 25$ 年と推定される。なお、SY01は、前述したように、磁化方向がいずれも異なり側壁の焼土が崩落したものと考えられる。

遺 構	出土遺物による年代	考古地磁気推定年代(A. D.)
SY01	12世紀後葉～13世紀前葉	不能
SY02	12世紀後葉～13世紀前葉	$1,180 \pm 15$
SY03	12世紀後葉～13世紀前葉	$1,175 \pm 15$
SY04	12世紀後葉～13世紀前葉	$1,200^{+100}_{-70}$ (280^{+45}_{-60} , 165 ± 25)
SY05	12世紀後葉～13世紀前葉	$1,170^{+50}_{-30}$
SY06	12世紀後葉～13世紀前葉	$1,170 \pm 15$
SY07	12世紀後葉～13世紀前葉	$1,185 \pm 25$

第18表 考古地磁気年代推定表

引用文献

- Fisher, R. A. (1953) Disparison on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, p. 295-305.
- 広岡公夫(1977)考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15、200-203
- Hyodo, M., C. Itota and K. Yaskawa (1993) Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetizations of Wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan, J. Geomag. Geoelectr., 45, 669-696.
- 理科年表 (1993) 国立天文台編、丸善、p. 952.
- Shibuya, H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2, 000years by means of archaeomagnetism.大阪大学基礎工学部修士論文、54 p

第V章 補 論

第1節 出土遺物の観察・計測法

第1項 概 要

第Ⅰ・Ⅱ次調査区から出土した遺物は、時期的なばらつきは認められず、その形態的特徴などを現在までの研究成果に照合すると、概ね12世紀後葉～13世紀前葉のものと判断できる。出土遺物の器種は、いわゆる「山茶碗・山皿」がほとんどであり、その他では、わずかに伊勢型鍋、焼台が出土しただけであった。したがって、膨大な量にのぼる同時期、同器種の遺物を整理することが、本遺跡の報告書作成作業となった。こうした場合多く行われてきたのは、出土遺物の内容が単純であるがゆえに、代表的なもののみわずかな点数を選択し、「以下同様に～」と、まとめて扱って報告を終了してしまう方法である。しかし、こうした時期・器種にばらつきのない膨大な出土遺物に対しては、個々のもたらすミクロ的な情報を、マクロ的な情報としてまとめることが必要と判断した。このため出土遺物に分類・観察・計測基準を設定し、統計処理を行って、識別できる個体すべてに目を向けることにした。以下にその方法を説明する。

第2項 基準設定

個々の遺物がもたらす情報は、視点によってさまざまであるが、その中で各情報をどのように取捨選択するかが問題となる。換言すれば、何を目的に分類するかあらかじめテーマ設定し、それに応じた基準を設定する必要が生じる。なぜならば、基準の設定に関しては、思いつくままの目的をすべて盛り込むことは不可能で、全体の作業量の中で、現実的に実行可能なものにする必要があるからである。

今回の調査で出土した遺物は、時期的に大きな幅を持たず、ほぼ同時期といっても良い一群であった。したがって、出土遺物の分類にあたっては、第Ⅲ章で行ったように器形を基準にし、これがより単純に階層化できるよう努めた。さらに、遺物観察基準の設定にあたっては、これらの限られた時期に製作された遺物は、この期間の中で製作技法に一定の傾向が認められるのか、一つの技法の中にもさまざまな種類が認められるのかを判断することを目的とした。そして、観察の対象は、識別できたすべての個体とし、これに対して項目別に記録し、統計処理を行うことにした。しかし、調査報告書を作成する作業は、分類・計測作業のみを行えばよいわけではない。したがって、作業の進行方法は、調査報告書作成期間の中で、分類・計測作業に費やす期間、消化可能な処理量をあらかじめ算定し、分類方法の選択まで含んで予定を組まなければならなかった。

分類・計測の作業は、「山茶碗・皿」を底部計測によって個体識別したため、この方法で識別できた個体を対象とした。この個体識別は第Ⅲ章でも述べたように、第Ⅰ・Ⅱ次調査区から出土した遺物の内で、底部が1/2以上残存するものを1個体とし、1/2以下のものは0個体とする方法で、したがって底部1/2以上残存のものについて、記録を取った。

情報の収集は、各遺構ごとに接合作業を行った後に、底部1/2以上残存のものを選び出し、設定した項目別にその破片についての情報を記録した。この各記録対象遺物の情報は、パーソナル・コンピュータで表計算ソフトを用いて入力し、これを集計した。

各破片の記録用紙は、まず記録用紙ごとに調査区・グリッド・遺構名・コンテナ番号を枠外に記入し、情報項目としては①計測番号(コンテナ別)、②器種、③器形、④口縁端部形態、⑤見込み部の調整、⑥底部付着痕、⑦底部調整、⑧焼成、⑨備考を設定した。各項目への記入にあたっては、⑨備考を除いたその他すべての欄に、あらかじめ番号・記号別で内容を設定しておき、その番号・記号のみを記入することにした。各項目の内容は以下の通りである。なお、器種、器形などについては、第Ⅲ章で説明を行ったため図示しないが、記録の手順をわかりやすく示すために、項目とその特徴について、重複することになるが記述する。

第3項 項目内容

①計測番号

観察・計測作業にあたっては、分類・計測後に対象遺物と情報が照合できるように、各計測破片に色付きシールを貼り、コンテナごとに1から順にシール内へ記入した。本項目の番号は、このシール内に記入した数字にあたる。

②器種

- 1 = 碗 … 当調査地点では、この項目はすべて「山茶碗」である。
- 2 = 皿 … 当調査地点では、この項目はすべて「山皿」である。

③器形

[碗]

- 1 = 体部から口縁部にかけての断面形態が、曲線的に立ち上がるもの
- 2 = 体部から口縁部にかけての断面形態が、直線的に立ち上がるもの
- 3 = 体部の断面形態は直線的であるが、口縁部付近では端反り風の丸みをもつもの

[皿]

- 1 = 体部の器壁に比べて底部の器壁が厚いもの
- 2 = 体部・底部が、器壁の厚さに極端に差がないもの
- 3 = 高台を有するもの

④口縁端部形態

A＝口縁端部が均等に丸みを帯びたもの

B＝口縁端部が断面形態上角張り、端部内・外の曲点がそれぞれほぼ直角なもの

C＝断面形態上、口縁端部内側の曲点が、外側の曲点より大きく曲がるもの

D＝断面形態上、口縁端部内側の曲点が、外側の曲点より緩く曲がるもの

⑤見込み部の調整

1＝指で円状にナデ調整されているもの

2＝指で横方向にナデ調整されているもの

⑥底部付着痕

1＝靱の付着痕を有するもの

2＝靱の付着痕が認められないもの

3＝靱の付着紺は認められないが、砂粒の付着または、付着痕を有するもの

⑦底部調整

1＝回転糸切り痕（調整なし）

2＝指ナデ整形しているもの

⑧焼成

1＝良好

2＝やや不良

3＝不良

⑨備考

分類・計測項目に該当しない特記事項を記入した。

さらに容量の計測方法に関しては、一般に行われている水や粟粒を用いる方法ではなくすでに実験的に行われていた積分計算による方法を採用した。この計算の基準設定に関しては、従来の基準を設定した担当者がこの基準をさらに発展させているので、新設定の基準及び方法を本節の第4項において掲載し、これを採用した。従来の方法の場合、完形品またはそれに近いものでないと容量の計測ができなかったが、積分による計算の場合、断面形態がすべて測図できるものであれば容量の算出が可能なことが、この方法を採用した理由である。

第4項 容量の計測法

—奥村勝信—

(1) 水による計測

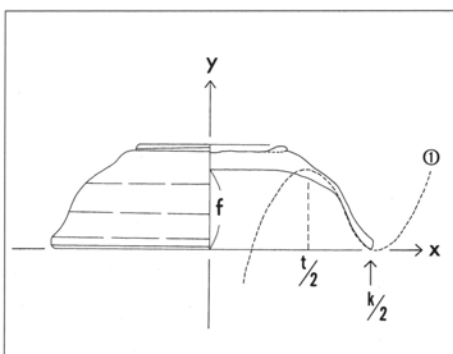
この方法は、土師質の器の場合、計測前に水に良く浸して、これ以上水を吸わない状態にしなければならない。また山茶碗類は、口縁が変形して高低に差があるものが多いので、口縁を水平になるよう調整しながら、その内の低い部分の表面張力が破れる寸前まで水を注意深く注げば、多少の高低の差は相殺され、他のサンプルとの比較になる。

(2) 粟粒・細砂による計測

碗形の物を量るには非常に不向きな方法で、これは粒と粒の隙間の絶対量が、碗と形の違うメスシリンダーなどでは、大きく異なることから起こる。また粒を入れる勢いの強弱や振動を与えたりしてもその値が変化する。この誤差は、形が皿に近づくほど大きく、反対に天目形の碗などは小さい。つまり形が円筒状に近づくほど信頼性の高い数値が得られる。(但しその場合も、撒くように粒を入れ、メスシリンダーに移す際もゆっくりと、なるだけ振動させないという条件の時のみ)

(3) 積分計算による計測

この方法は、内部の微妙な器面の変化を読み取れないという欠点があるが、それもいくつかの式を設定することで、その誤差を小さく抑えることはできる。今回の容量値は、その誤差を見るために水を入れて量った21点を含め、全て計算により出した近似値である。かつて『黒笹G2号古窯跡』⁽¹⁾ で使用した式は二つで十分であった(他に木地碗を計算した式が一つ)が、このNA335号窯の場合は、形態にあまりにもヴァリエティがあり、また容量自体も大きいことから、誤差を5%に抑えるために、かつての3式に修正・加筆して10の式を用意した。以下それらの式について敷衍してみたい。



第61図 積分計算による容量 1

外反の著しい端反りの碗については、3次関数

① $y = a(x+b)(x^2+cx+d)$ の $t/2 \sim k/2$ ま
でを y 軸を中心に回転させた時の体積を
その近似値とした。

$$② \quad v = 2\pi \int_{t/2}^{k/2} xa(x+b)(x^2+cx+d)dx + \frac{t^2}{4}\pi f$$

②の不明な数値 a, b, c, d をあたえられた k

(口径) t (内底径) f (深さ) で表すと

$$③ \quad v = 2\pi \int_{t/2}^{k/2} x \frac{16f}{(k-t)^3} \left(x + \frac{k-3t}{4}\right) \left(x^2 - kx + \frac{k^2}{4}\right) dx + \frac{t^2}{4}\pi f \quad \text{これを解いて}$$

$$④ \quad v = f\pi \left(\frac{3k^2 + 3t^2 + 4kt}{40}\right) = \pi f \left(\frac{3(k-t)^2 + 10kt}{40}\right)$$

以下同様に残りの9式は次頁に解式だけ記す。

V₁ 3次曲線

$$V = \pi f \left[\frac{3(k \cdot t)^2 + 10kt}{40} \right]$$

V₂ 直線

$$V = \pi f \left[\frac{(k \cdot t)^2 + 3kt}{12} \right]$$

V₃

$$V = \pi f \left[\frac{5(k \cdot t)^2 + 12kt}{48} \right]$$

V₄ 放物線

$$V = \pi f \left[\frac{(k \cdot t)^2 + 2kt}{8} \right]$$

V₅

$$V = \pi f \left[\frac{(k \cdot t)^2 + 2kt}{8} + \frac{1}{12} f^2 \right]$$

V₆ 円

$$V = \pi f \left[\frac{(k \cdot t)^2 + 2kt}{8} + \frac{1}{6} f^2 \right]$$

V₇

$$V = \pi f \left[\frac{(k \cdot t)^2 + 2kt}{8} + \frac{1}{4} f^2 \right]$$

V₈

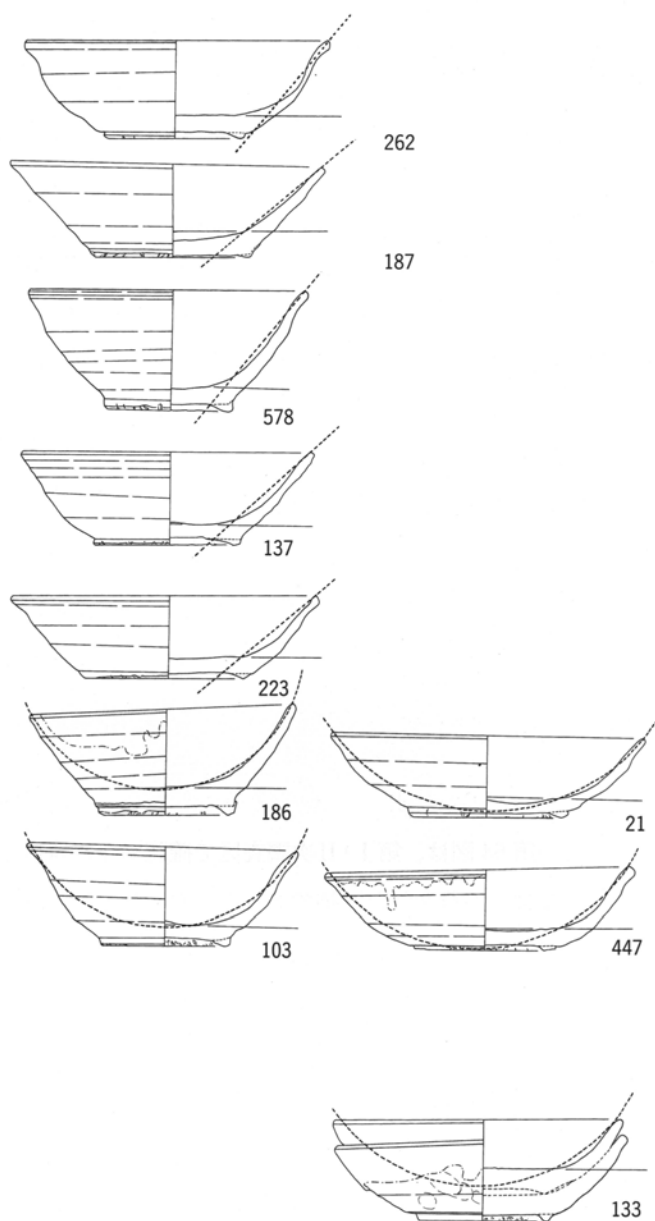
$$V = \pi f \left[\frac{7(k \cdot t)^2 + 14kt}{48} - \frac{1}{24} t^2 + \frac{1}{12} f^2 \right]$$

V₉

$$V = \pi f \left[\frac{5(k \cdot t)^2 + 10kt}{32} - \frac{1}{16} t^2 + \frac{1}{24} f^2 \right]$$

V₁₀ 楕円

$$V = \pi f \left[\frac{(k \cdot t)^2 + 2kt}{6} - \frac{1}{12} t^2 \right]$$



第 62 図 積分計算による容量 2

上図のうち左列の碗に対して、右列は比較的浅い碗と言える。文献にてむりやりその名称を探すとしたら、「浅鉢（さはち）」や木地碗で言うところの「平皿」があてられるかもしれない。また V₆ や V₇ の式は、もともと木地碗を量るために用意した式で、これらの式で表される碗が、思いの外あったこともこの古窯の一つの特徴として挙げられる。

注

※上記の碗の計算値、水による測定値は、遺物観察表参照

(1) 奥村勝信（分担）1994『黒笹 40・89 号古窯跡 黒笹 G 2 号古窯跡 立楠古窯跡』（財愛知県埋蔵文化財センター）

第2節 分類・計測の結果

第1項 概 要

今回分類・計測したデータ数（底部破片数）の総計は、第Ⅰ・Ⅱ次両調査区を合わせると、11442点にのぼった。分類・計測作業の後には、データの入力、入力内容の校正、データの統計処理の手順を踏んだ。基礎データの集計は、まず器種、器形ごとに組成を確認し、その後に各分類項目にしたがってそれぞれの組成を確認した。これらの計測した個体数を、遺構別に振り分けたグラフが第63図である。各遺構によって遺存度の違いがあるため出土量の単純比較はできないが、窯内から検出される遺物は少なく、床面下施設の有無やその内容に、出土量が大きく影響する傾向がみられる。また、各床面下施設においては融着・混入品などを除いて皿が使用されていないため、碗・皿の器種組成に極端な差がついた。次項では、統計処理によって明らかになった各項目別の組成について説明する。

第2項 全体組成

①出土器種組成

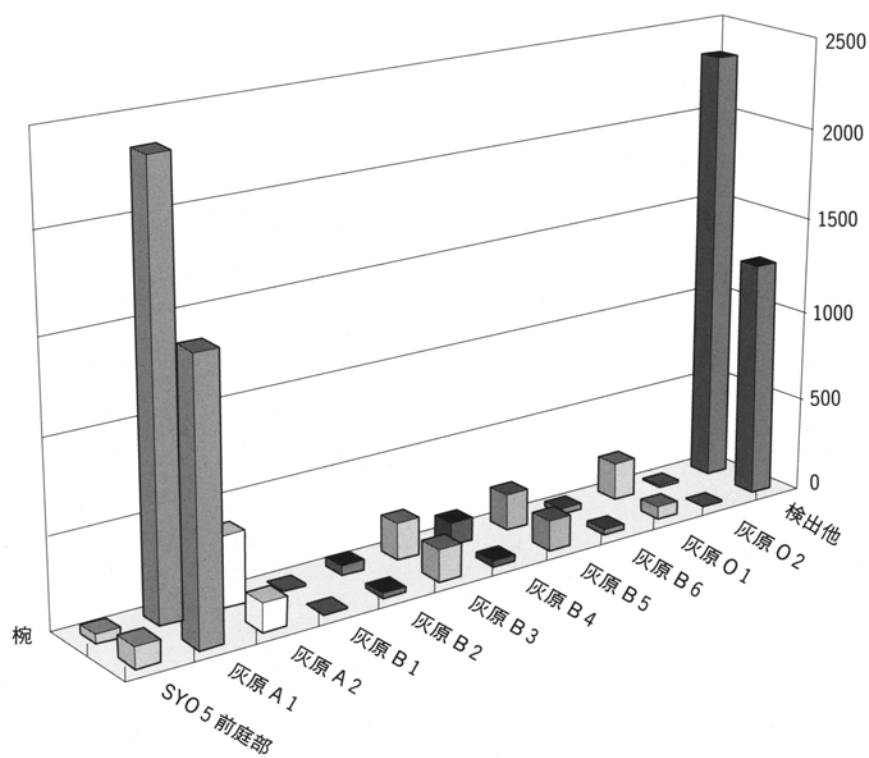
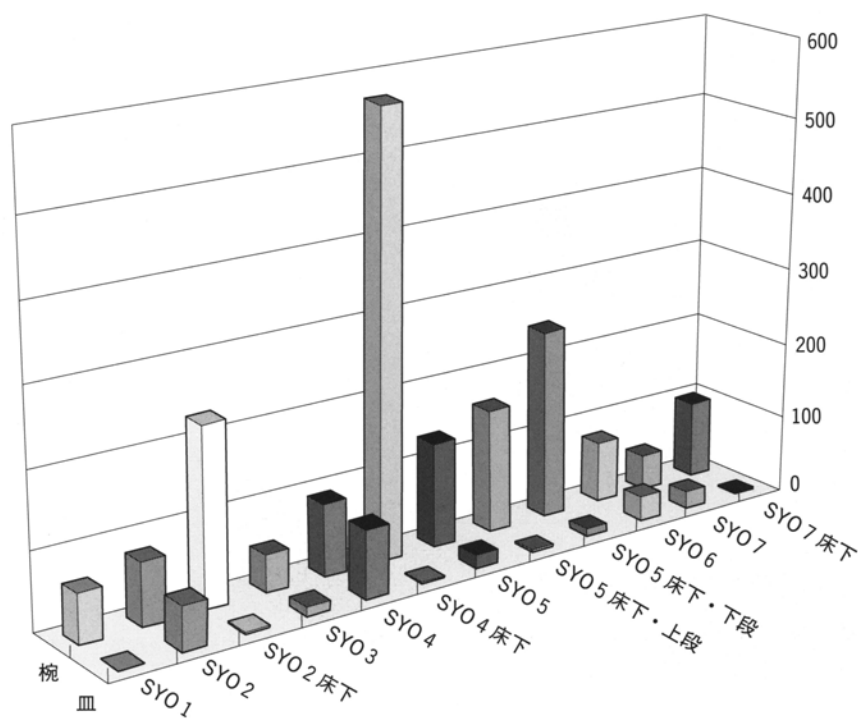
第64図は、第Ⅰ・Ⅱ次調査区で確認できた器種と、その個体数の比率である。鍋については、消費された遺物であって、本遺跡の窯で生産された製品ではないと思われる。したがって、本来であれば性格を異にする遺物として、分けて扱うべきであろう。しかし、この時期の窯跡の調査では、膨大な碗・皿とともに、わずかな伊勢型鍋が伴う類例も確認されるため、この意味が問われる機会を考え、あえて生産址の出土器種組成に組み入れた。全体の器種組成は、碗が約7割、皿が約3割で、これに2点（0.02%）の伊勢型鍋が加わる。

②器種別器形組成

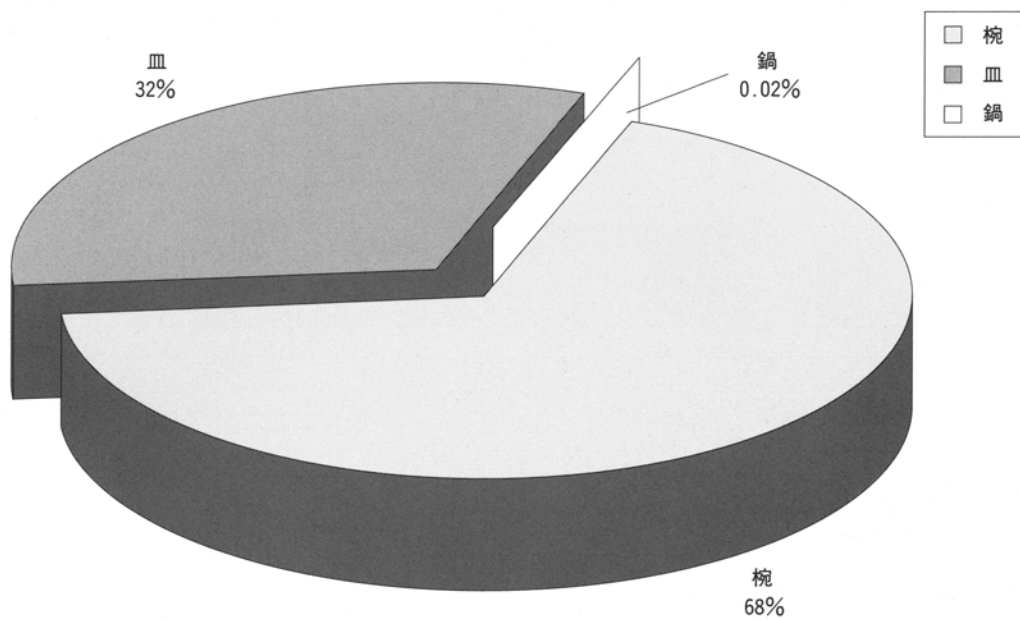
第65図は、第Ⅰ・Ⅱ次調査区で確認できた碗・皿別に、今回の調査で分類設定した器形組成を示したものである。

碗の器形組成では、曲線的に体部が立ち上がる1類が最も多く、66%を占める。直線的に体部が立ち上がる2・3類は、合わせても34%にとどまり、全体の傾向としては曲線的に立ち上がる碗が多く認められた。しかし、この1類の中には曲線的な体部をもちながら、器高が高い（深い）もの、低い（浅い）ものが混在しており、この細分まで行えなかった点が分類の精度を落とした。したがって、1類とカウントされたもの全てが、特定の時期に限定される形態的特徴を併せもつわけではない。

皿の器形組成では、器壁の厚さに特に差がない2類が最も多く64%を占め、底部の器壁が厚い1類は36%、高台を有する3類は、調査区全体で4個体のみ確認できた。

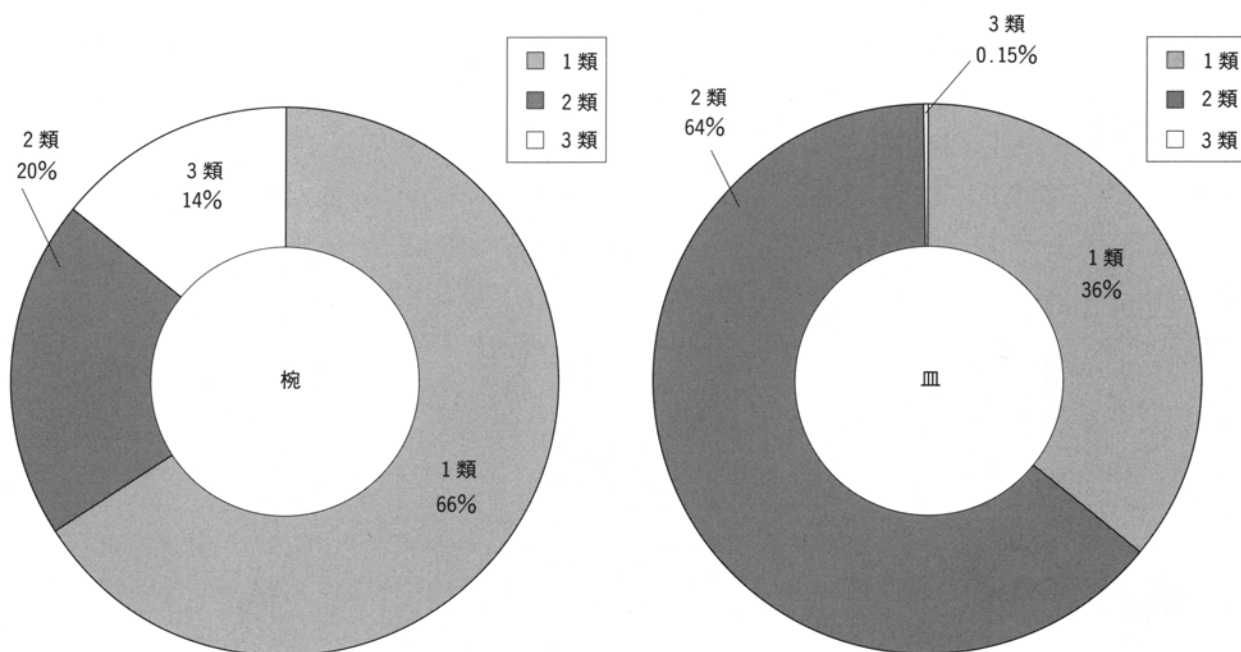


第 63 図 遺構別器種組成図



* 鍋をあえて組み入れた理由は本文参照

第 64 図 出土器種組成図



第 65 図 器種別器形組成図

遺構	器形				皿の器形				遺構別 総計
	1	2	3	合計	1	2	3	合計	
SY01	36	9	12	57	0	0	0	0	67
SY02	60	3	3	66	23	28	0	51	117
SY02 床下	185	11	24	220	0	1	0	1	221
SY03	29	6	3	38	11	2	0	13	51
SY04	28	2	3	33	18	54	0	72	105
SY04 床下	333	118	51	502	0	1	0	1	503
SY05	51	37	13	101	5	4	1	10	111
SY05 床下 1	115	15	15	145	2	1	0	3	148
SY05 床下 2	164	22	44	230	3	5	0	8	238
SY05 前庭部	22	5	2	29	0	66	0	66	95
SY06	37	13	22	72	13	15	0	28	100
SY07	5	23	3	31	10	11	0	21	52
SY07 床下	34	24	38	96	0	0	0	0	96
灰原 A1	1104	356	170	1630	408	669	1	1078	2708
灰原 A2	165	67	62	294	23	45	0	68	362
灰原 B1	5	2	0	7	0	0	0	0	7
灰原 B2	10	5	9	24	7	9	0	16	40
灰原 B3	40	62	20	122	9	76	0	85	207
灰原 B4	56	11	3	70	6	18	0	24	94
灰原 B5	87	17	30	134	47	69	1	117	251
灰原 B6	11	6	9	26	0	20	0	20	46
灰原 01	72	32	50	154	30	17	0	47	201
灰原 02	2	0	2	4	2	1	0	3	7
検出他	933	214	169	1316	347	583	1	931	2247
器形別総計	3584	1060	757	5401	964	1695	4	2663	8064

第 19 表 遺構別器形組成一覧表

第 19 表は、椀・皿別に器形が分類できた個体の内訳を、各遺構別で示したものである。したがって、底部の遺存度により個体は確認でき、総出土個体数には含まれるものの、器形が確認できる残存状態ではないものは、この中に含まれていない。

③器形別口縁形態組成

第 20 表は、椀、皿ごとに分類した各器形の中で、今回の調査で分類設定した口縁形態の

椀	1 類	2 類	3 類	総計
A	1538	440	414	2392
B	752	188	126	1066
C	636	234	153	1023
D	53	16	40	109
総計	2979	878	733	4590

皿	1 類	2 類	3 類	総計
A	472	980	3	1455
B	120	104	0	224
C	261	296	1	558
D	19	55	0	74
総計	872	1435	4	2312

第 20 表 器形別口縁形態組成表

組成を、数値表示したものである。椀、皿の各器形ともに、端部が均等に丸みを帯びた口縁Aが多く、端部内側の曲点より外側の曲点がきつく曲がる口縁Dが少ないことが、共通した特徴であった。

④見込み調整の組成

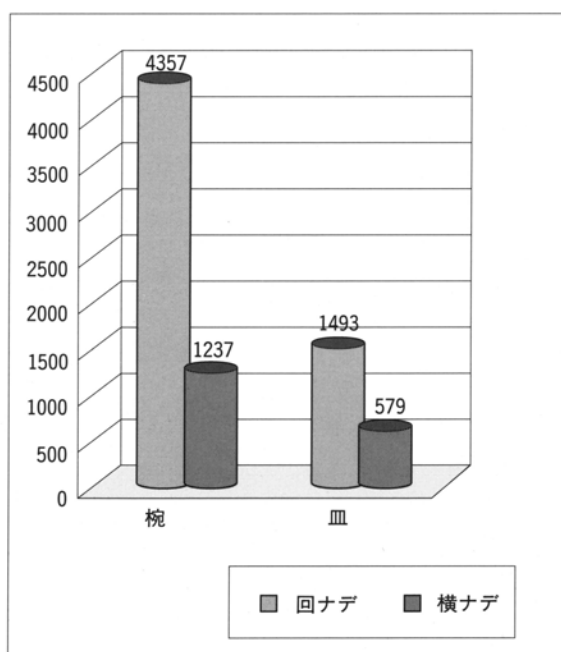
第66図は、椀、皿ごとに、それぞれにみられる見込み部の調整痕を統計処理し、その比率を図示したものである。椀、皿ともに、指で円状にナデ調整されたものの方が、横方向にナデ調整されたものを大きく上回っている。

⑤底部付着痕の組成

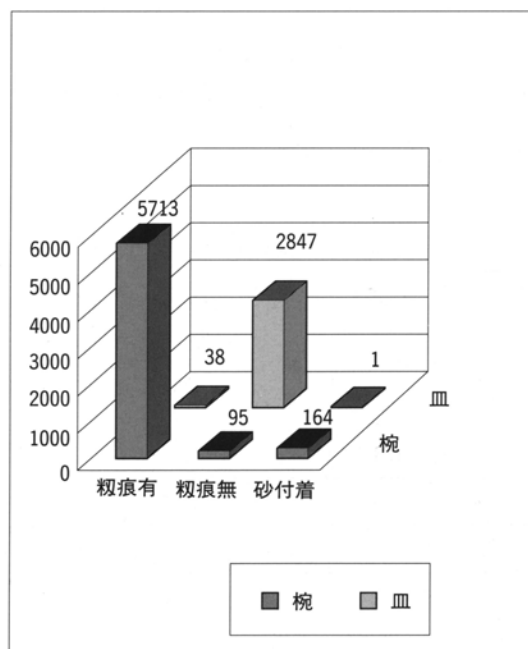
第67図は、椀、皿ごとに、底部または高台にみられる靱、砂などの付着痕を観察した結果を図示したものである。椀の底部では、靱痕が認められるものが大多数を占め、わずかに靱痕のみられないものや、砂の付着しているものがみられる。これとは対照的に、皿の底部では、靱痕が認められるものはほとんどみられない。

⑥底部調整の組成

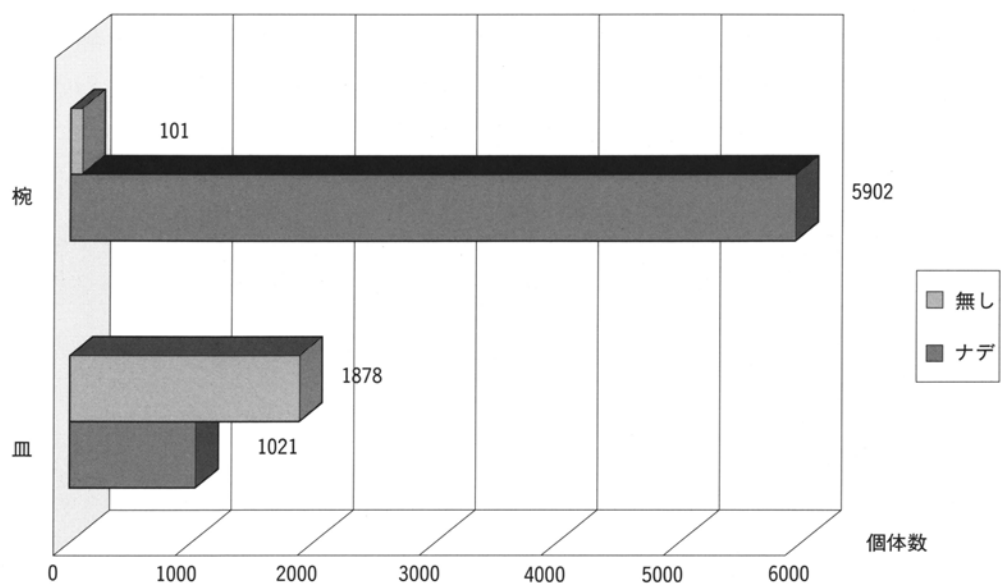
第68図は、椀、皿ごとに、底部調整の有無を観察した結果を図示したものである。椀では、回転糸切り痕のみで未調整のものはわずかで、高台内を回転糸切り痕が目立たない程度まで、指でナデ調整しているものが圧倒的に多くみられた。皿では逆に、わずかでもナデ調整が底部に施されているものの方が、少ない。



第66図 器種別見込み部調整内訳



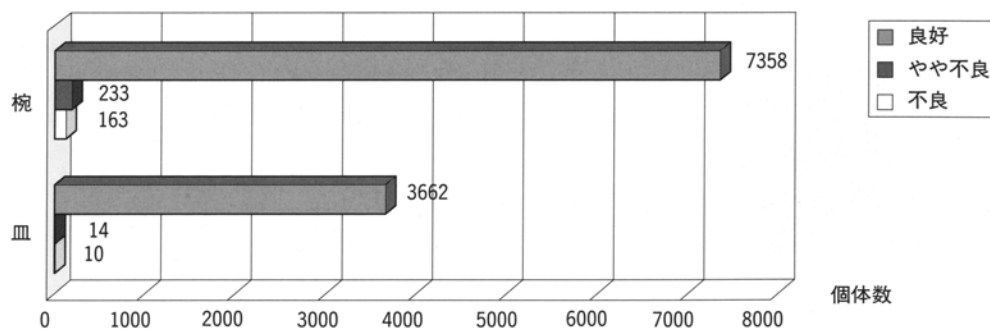
第67図 器種別付着痕内訳



第 68 図 器種別底部調整内訳

⑦焼成度の組成

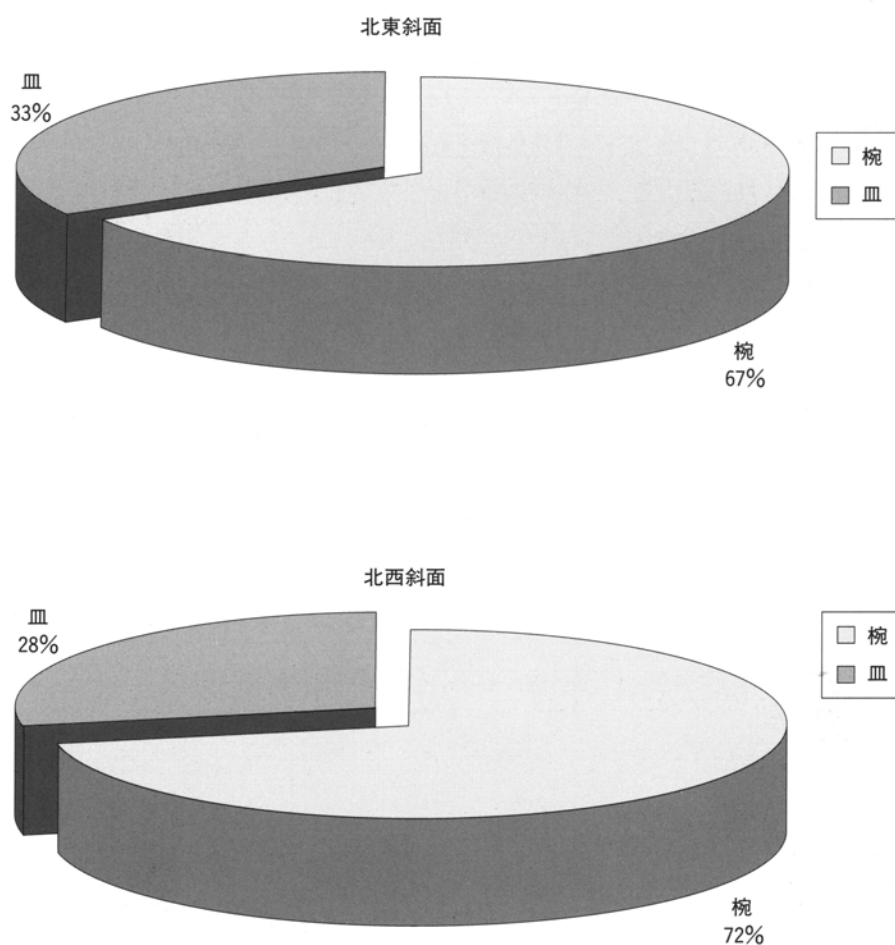
第 69 図は、碗、皿ごとにそれぞれの焼成度を観察し、その結果を表示したものである。碗では、焼成がやや不良なもの、不良なものを合わせると、全体の中で焼きがあまいものの比率は 5.1%である。皿における焼きがあまいものの占める割合は、碗に比してかなり少なく、0.65%である。



第 69 図 器種別焼成度組成図

⑧地点別組成

第Ⅰ・Ⅱ次調査区は、両調査区を合体した地の中央に位置する尾根で斜面の向く方向が分かれており、北東向き斜面に SY01～04、北西向き斜面に SY05～07 が並び、この下方にこれらに伴うものと思われる灰層などがみられた。この両調査区で出土した遺物を、調査区ごとに分けるのではなく、遺構と同様斜面ごとに捉え、それぞれの地点別に器種組成を図示したものが第 70 図である。各窯体ごとに器種の組成を観察すると比率にばらつきが出るものの、これらを斜面ごとにまとめてみると、それぞれの組成はほぼ近似値を示した。



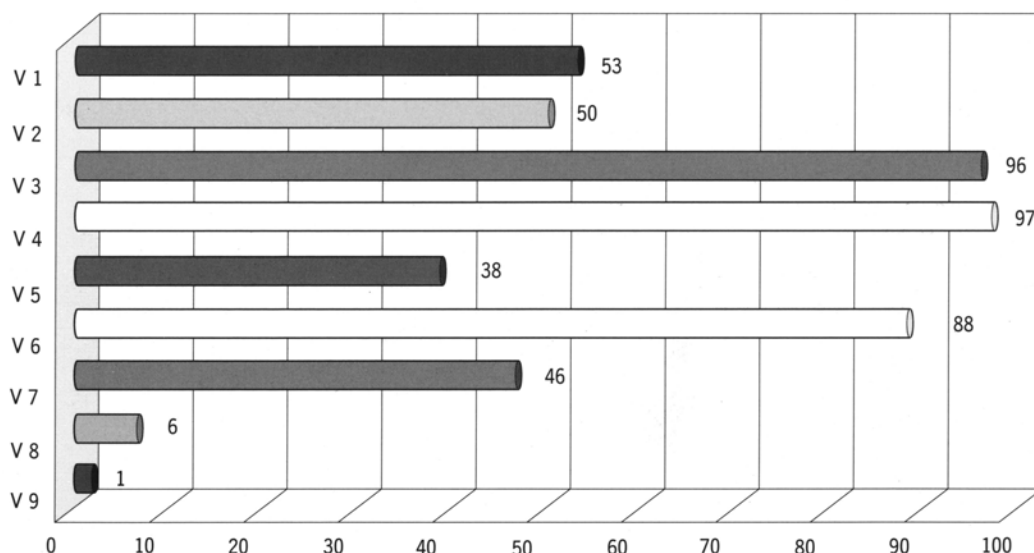
第 70 図 出土地点別器種組成図

⑨ 碗の容量組成

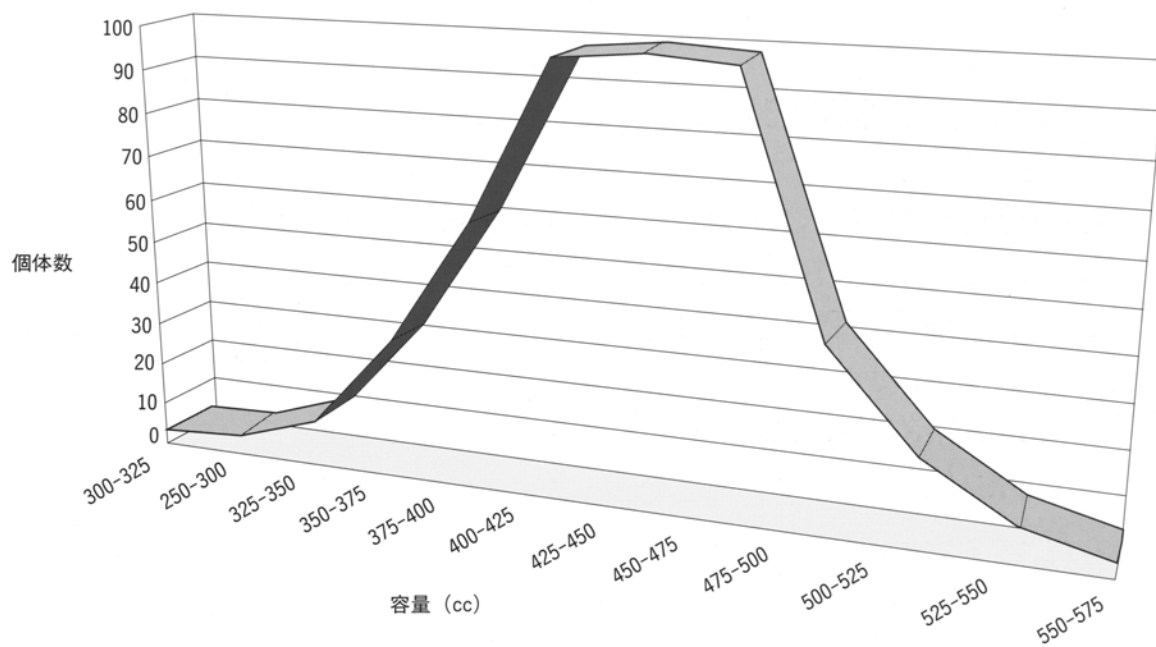
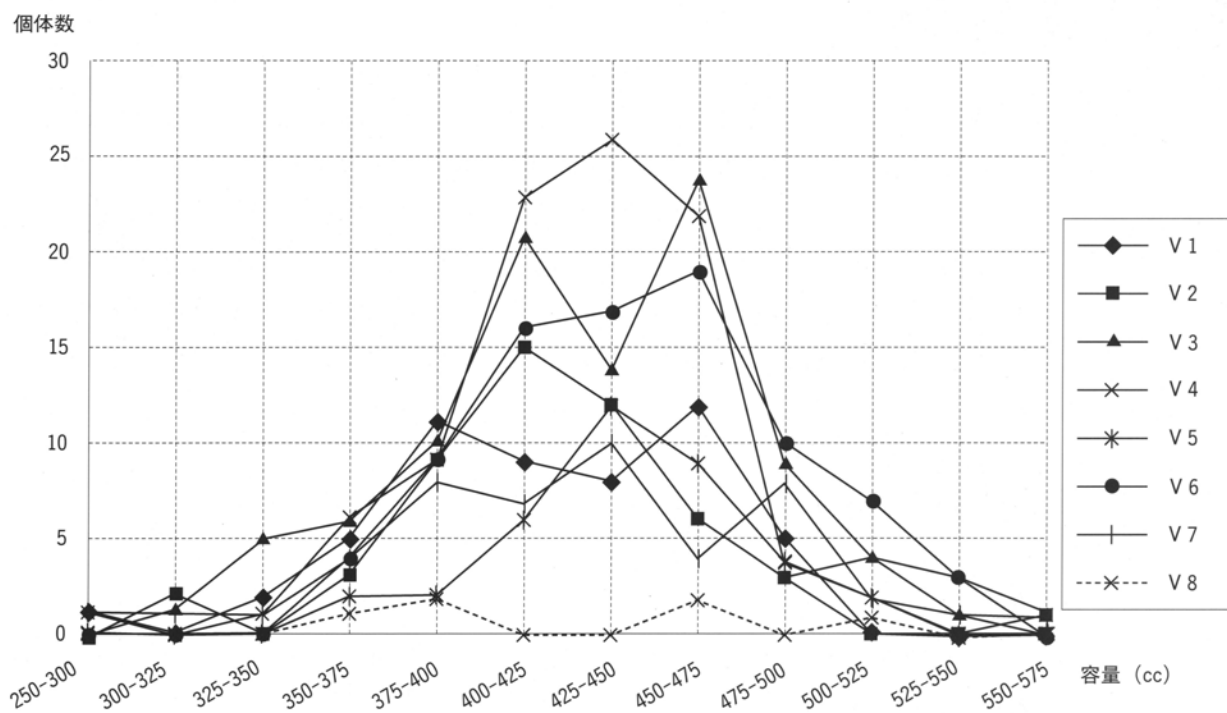
前節では、碗の容量解式を断面形態別に 10 種設定した。第 71 図は、この 10 種の解式のうちで、木地碗用の V 10 を除いた V 1～9 に当てはめた碗の個体数を、解式ごとに図示したものである。今回の調査で、容量を計算によって求めた総個体数は、解式の性格上、断面形態が底部から口縁部まで完全に図化できたものに限られるため、475 点である。数値の上で極端に差がみられたのは、断面形態が浅い円状を呈する V 8・V 9 にあたる碗が、他の解式に比べてかなり少なかったことである。逆に比較的多くみられたのは、やや浅い天目碗状を呈する V 3、断面形態がやや深い放物線状を呈する V 4、断面形態が深い円状を呈する V 6 であった。こうした傾向は、図化用を選んだ碗の中で、さらに遺存度の良好な、いわば限定されたものの中での傾向であり、出土遺物全体の傾向を表すものではない。

第 72 図は、各解式ごとの容量差を図示したものである。V 9 については 328 cc 1 点のみであるため、これを除いた。各解式では、450 cc 前後に集中する傾向はあるものの、どの解式においても短い範囲に極端に集中するまでには至っていない。したがって、解式の差すなわち断面形態の差が、そのまま容量の差を表すような判断材料は、この解式別容量分布からはうかがえない。

第 73 図は、計算によって割り出した碗全体の容量別内訳図である。この容量別内訳の中では、400～475 cc のものが全体の 60% を占める。したがって、つくり手の意識の中では、この程度の容量を仕上がり具合の目安として想定していたのかもしれない。



第 71 図 碗の容量解式別組成図



第3節 遺構・遺物の特徴

第1項 窯体構造の特質

今回の調査で検出できた窯体の特質は、床面下施設を有するものが半数以上（4基）を占めたことで、このうちの1基（SY05）はほぼ同じ面積、位置に上下2面検出されたことが注目される。床面下施設については、それがどのような目的を持って施されたものか諸説あり、完全には解明されていないのが現状である。発掘調査によって現在まで確認されている床面下施設は、面状に施されるもの、列状に施されるものなどに分類される。NA 335号窯における床面下施設は、こうした分類においてはいずれも面状に施されたものに属する。さらにこの施設には、溝を伴うものと、伴わないものとがみられるが、本窯で検出された床面下施設には、いずれにも溝は確認できなかった。この施設が施されている位置は、現在まで報告されている事例では焼成室下部が圧倒的に多い。NA 335号窯では、SY07の床面下施設は焼成室下部に位置するが、SY02・04・05においてはSY07に比べて設置面積が広く、焼成室下部～中央にかけて位置する。

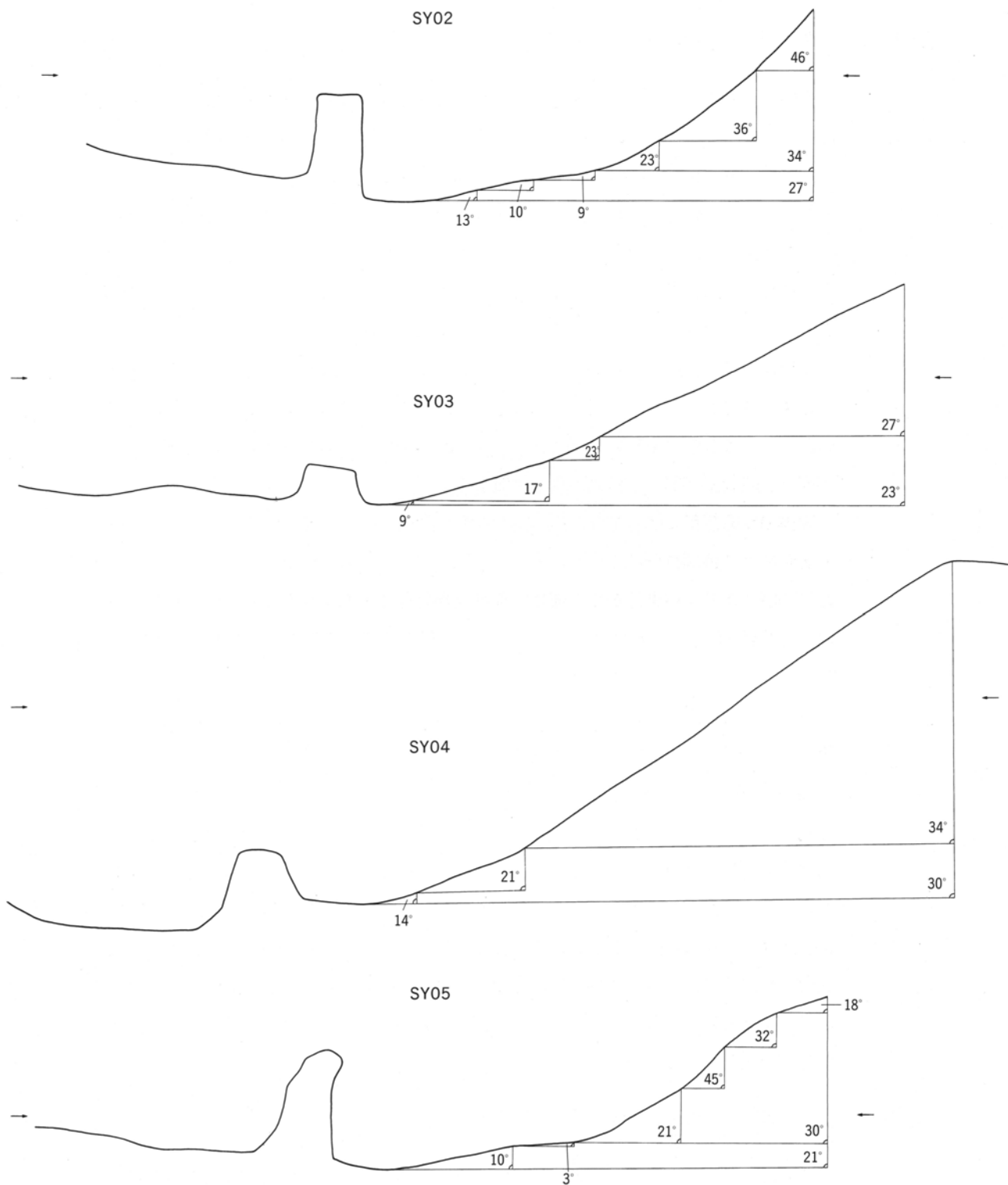
窯体の床面傾斜に関しては、第74・75図に示したように各窯体に若干の差違がみられ、大まかには2種類に分類できる。まず、SY02・05～07では、焼成室下部においては傾斜が比較的緩やかで、中央部から上部に向う最大幅付近で下部よりも明らかに傾斜がきつく変化し、断面形態がわずかに波状を呈しながら傾斜の角度が変化する。これに比べてSY03・04は、焼成室下部～上部に向かって傾斜角度が比較的安定したままのぼっている。

窯体の断面形態では、これも大まかには2種類に分類できる。すなわち、焼成室側の分焰柱基部床面が、燃焼室側の分焰柱基部床面に比べて若干低い、SY02・03・05・06と、若干高いSY04・07に分かれる。

第75図の（ ）内に示した角度は、焼成室床面に融着していた焼台において、器を乗せた面と床面に張り付けた面で生じた角度を、その断面図から計算式によって算出したものである。この算出した焼台の角度は、焼台の残っていた地点の床面傾斜角度と同じであれば、計算上はほぼ垂直に器を置いたことになる。しかし、SY06・07で確認された大半の焼台の算出角度は、その地点での床面傾斜角度を上回っていた。したがって、SY06・07の最終窯焚きで焼台に設置された器は、床面の傾斜角度よりも煙道方向に向かって前傾させた角度で置かれたことが、計算上は推定できる。

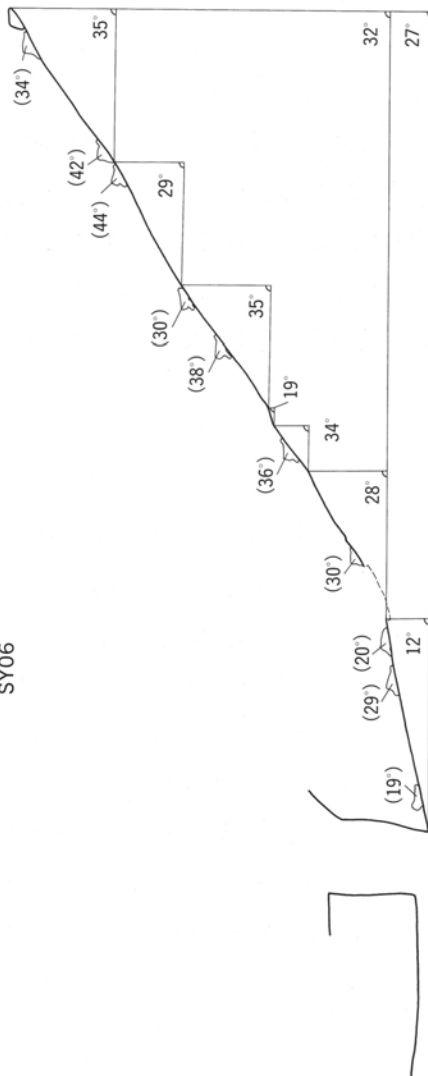
第2項 出土遺物からみた時間的位置づけ

今回の調査で出土した遺物は、先述したようにいわゆる「山茶碗・山皿」、および「伊勢型鍋」である。このうち、伊勢型鍋については、第Ⅲ章2-1においてその形態的特徴から、12世紀後葉のものと判断した。山茶碗・皿については、本章の前節などにおいて統計処理



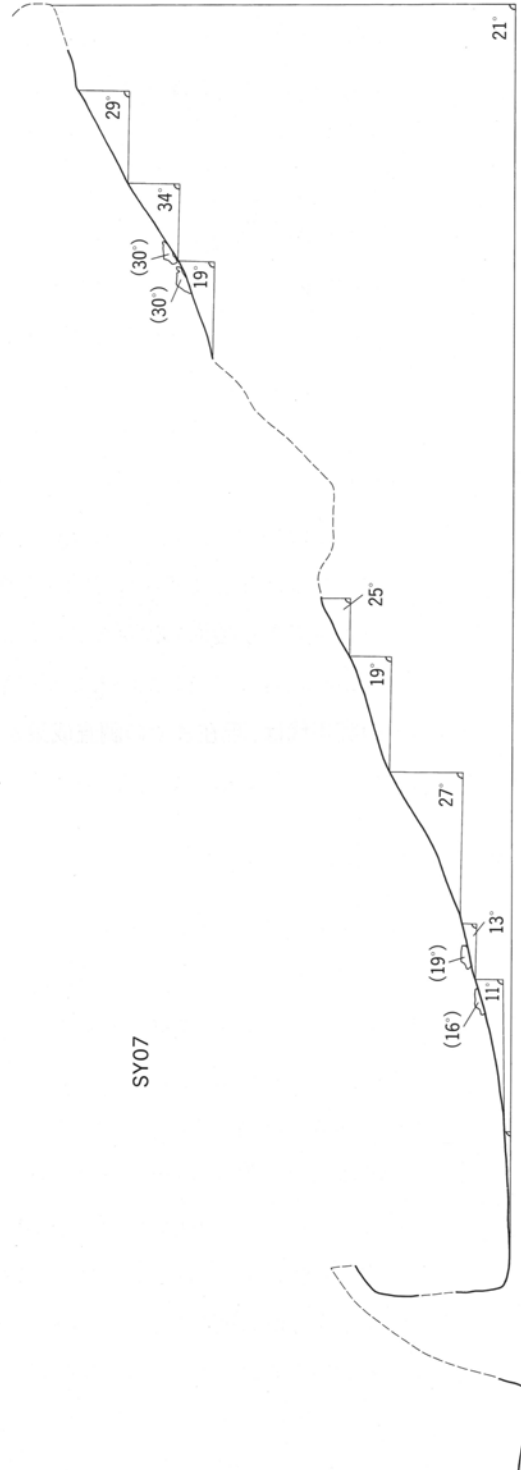
第 74 図 SY02~05 床面傾斜(1/40)

SY06



() 内の数値は焼台傾斜角度

SY07



第 75 図 SY06・07 床面傾斜(1/40)

を行い、その結果を図示した。山茶碗の編年に関しては、本窯の所在する猿投山西南麓古窯跡群では、藤澤良祐氏によるもの（藤澤 1982）が整えられている。さらに隣接する知多古窯址群では、中野晴久氏によってシンポジウムで「赤羽・中野編年」として発表され、さらにこの内容が活字化（永原 1995）されている。今回の調査区は、両古窯址群の境界にも近い。したがって、ここでは藤澤、中野両氏のいずれの編年区分も提示し、統計処理した結果観察できた各種組成をもとに、時間的位置づけを行う。

はじめに、第Ⅰ・Ⅱ次調査で出土した遺物の特徴を、観察できた組成を参考に順を追って確認する。

全体の器種組成は、前節でも述べたように碗が約 7 割、皿が約 3 割である。この比率は、調査区内の異なった方向に傾斜する斜面別にみても、近似値を示した。

碗の器形は、体部が曲線的に立ち上がるものが最も多く（66%）、高台には大半のものに刳痕が認められ（95%）、容量は 400～475 cc のものが多く（60%以上）認められた。

皿の器形は、体部、底部における器壁の厚さが極端に変わらないものが多く（64%）、高台を有するもの 4 点以外は無高台で（99.85%）、扁平化は認められない。

上記の特徴は、遺構別に比較した場合、特に差違が認められることもなく、どの遺構においてもある程度共通した結果であったため、遺構間による明確な時期差が、出土遺物から判断できる結果には至らなかった。したがって上記の特徴から導き出される時期は、藤澤案の 5 型式、中野案の第 3 及び第 4 型式にあたるものと考えられる。これらの編年区分の実年代は、現在までの調査成果から 12 世紀末～13 世紀初頭と考えられている。この年代は、第Ⅳ章で示した熱残留磁化測定結果とも一致する。

第 3 項 まとめにかえて

名古屋市緑区大高町に所在する NA 335 号窯は、いわゆる「山茶碗・山皿」を焼成した窯業址で、第Ⅰ・Ⅱ次調査区合わせて 7 基の窯体が確認された。7 基の窯体は、形態の特殊な SY01 を除いて、碗・皿を生産したことは明白で、出土遺物の形態的特徴や、科学的分析結果が示すように、12 世紀後葉～13 世紀前葉に操業したものと思われる。

推察した実年代の時期は、平安時代が終わり、鎌倉時代が始まった時期である。この支配体制の変化は、窯業に携わった当時の人々に対し、直接的にも、間接的にも影響したことであろう。この地域の研究動向では、当該期と考えられる調査事例の増加と、それに対する分析により、鎌倉時代初期における窯業生産体制の変化が指摘されつつある。この窯業生産体制の変化は、国を支配する体制が変化したことに、どの程度影響されての結果なのであろうか。窯業生産体制の変化を分析、研究することは、ほとんど未解明な当地における鎌倉時代初期の在地系領主、工人集団について、光をあてることにもつながる。調査する側では、単に事例を蓄積する行為に留まらず、この時代に窯業生産に関わった人々が、何を目的として、何の必要から窯業生産活動を行っていたのか、考えてゆく必要があるであろう。

参考文献

- 藤澤良祐 1983 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館
- 赤羽一郎 1984 『考古学ライブラリー23 常滑焼』ニュー・サイエンス社
- 中野晴久・坂野俊哉編 1985 『鎗場・御林古窯址群』常滑市教育委員会
- 内田智久 1986 「12世紀の幸田窯」『マージナル6』考古学談話会
- 磯部幸男・奥川弘成編 1987 『下別曾古窯址群』武豊町教育委員会
- 斉藤孝正 1988 「中世猿投窯の研究」『名古屋大学文学部研究論集C1 史学34』
- 奥川弘成 1990 「中田池古窯が提起する問題」『研究紀要4』武豊町歴史民俗資料館
- 池本正明 1990 「猿投窯の「山茶碗」」『マージナル10』愛知考古学談話会
- 磯部幸男・奥川弘成編 1992 『中田池古窯址群その2』愛知県企業庁・武豊町教育委員会
- 野口泰子 1992 『NA 320号窯群調査報告書』名古屋市教育委員会
- 城ヶ谷和広 1992 『小田妻古窯跡群』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 尾野善裕 1994 『NN 330号窯発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
- 中野晴久 1994 「知多古窯址群の研究(2)」『知多古文化研究8』知多古文化研究会
- 余合昭彦 1995 『刀池古窯跡群』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 永原慶二編 1995 『常滑焼と中世社会』小学館

図 版

平成 7 年度調査区(Ⅰ)

目次

平成7年度調査区(I)

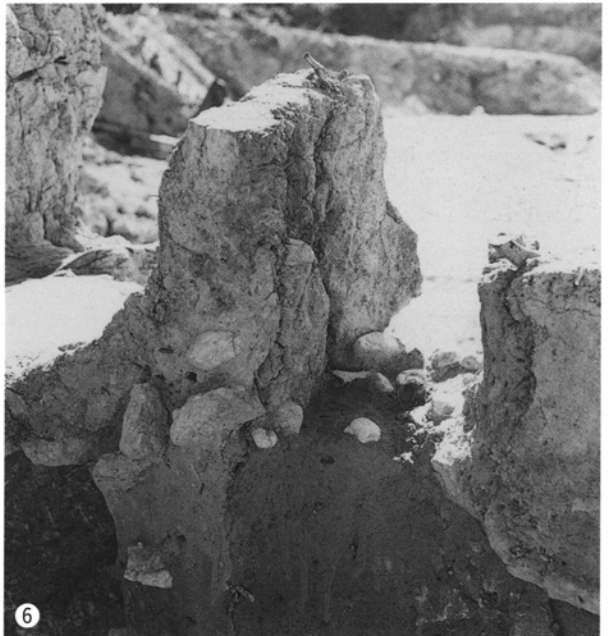
- 図版1 ①調査前風景（西より）
②表土剥ぎ（東より）
- 図版2 ①灰原A検出状況（東より）
②灰原A検出状況（南より）
③灰原A検出状況（北西より）
④灰原A東西ベルト断面（北より）
⑤灰原A東西ベルト部分断面（北より）
- 図版3 ①灰原B検出状況（南西より）
②灰原B東西ベルト断面（南西より）
③灰原B遺物出土状況（南西より）
④SY01（北東より）
⑤SY01埋土断面（北東より）
⑥SY01煙道部（北東より）
- 図版4 ①SY02埋土断面（東より）
②SY02床面下施設検出状況（西より）
③SY02床面下施設検出状況（東より）
④SY03（東より）
⑤SY03（西より）
- 図版5 ①SY04（北東より）
②SY04（南西より）
③SY04埋土断面（北東より）
④SY04床面下施設検出状況（南西より）
⑤SY04床面下施設検出状況（北東より）
- 図版6 ①SY05（西より）
②SY05上段床面下施設検出状況（東より）
③SY05上段床面下施設検出状況（西より）
④SY05下段床面下施設近影（西より）
⑤SY05下段床面下施設検出状況（西より）
- 図版7 ①調査区全景（北西より）
②航空測量風景（西より）
- 図版8 遺物写真(1)
- 図版9 遺物写真(2)
- 図版10 遺物写真(3)
- 図版11 遺物写真(4)
- 図版12 遺物写真(5)
- 図版13 遺物写真(6)
- 図版14 遺物写真(7)



①調査前風景（西より） ②表土剥ぎ（東より）



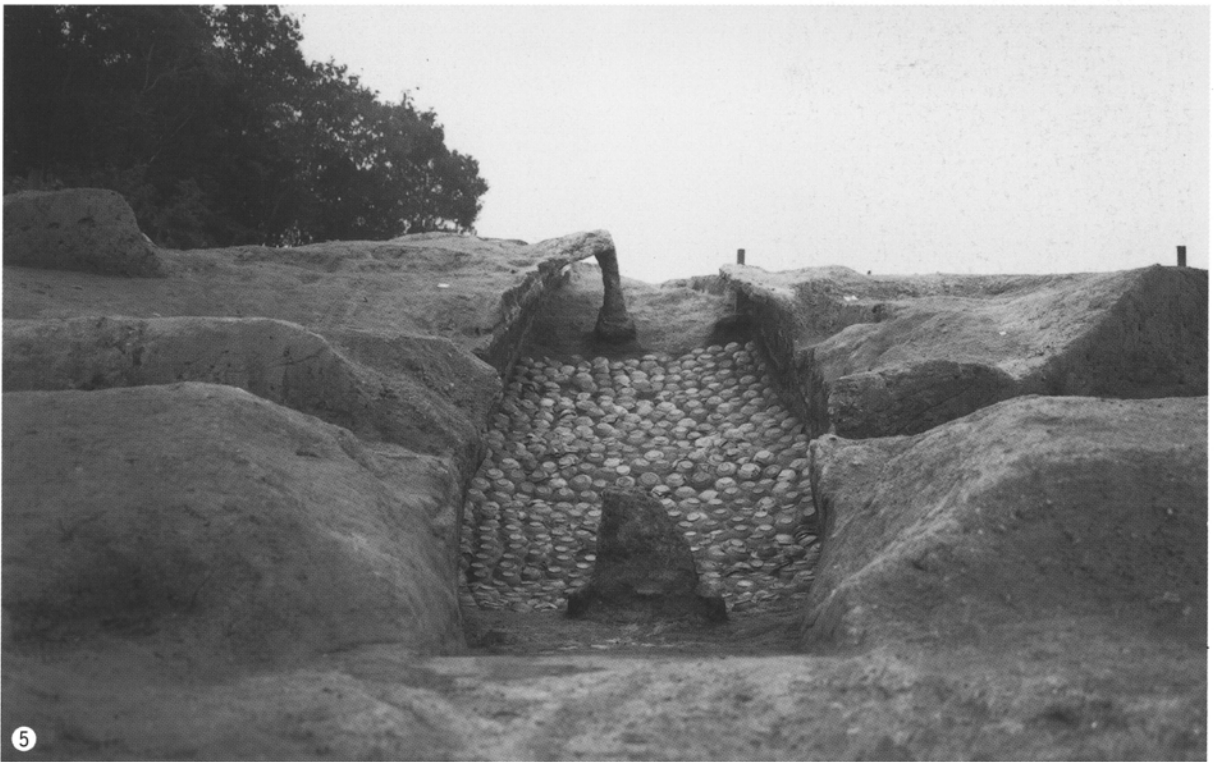
①灰原A 検出状況（東より） ②灰原A 検出状況（南より） ③灰原A 検出状況（北西より）
④灰原A 東西ベルト断面（北より） ⑤灰原A 東西ベルト部分断面（北より）



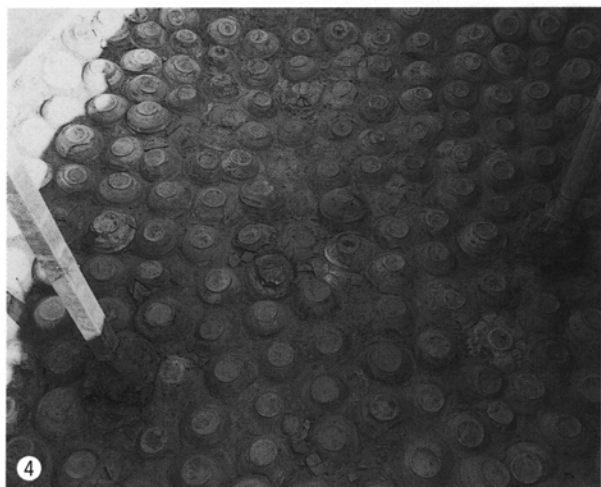
①灰原B検出状況（南西より） ②灰原B東西ベルト断面（南西より） ③灰原B遺物出土状況（南西より）
④SY01（北東より） ⑤SY01埋土断面（北東より） ⑥SY01煙道部（北東より）



① SY02 埋土断面（東より） ② SY02 床面下施設検出状況（西より） ③ SY02 床面下施設検出状況（東より）
④ SY03（東より） ⑤ SY03（西より）



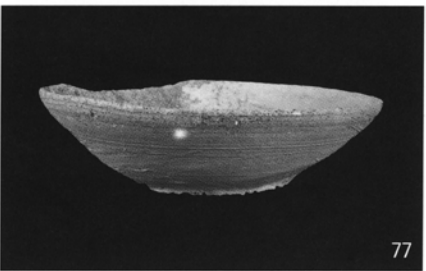
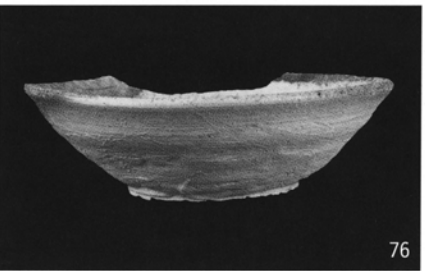
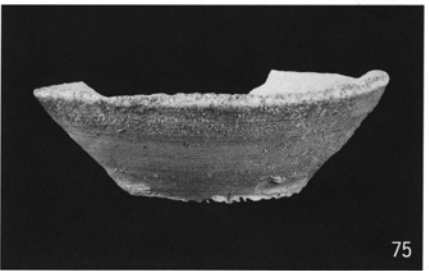
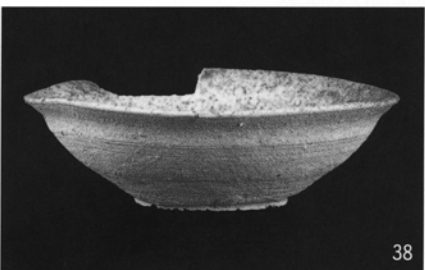
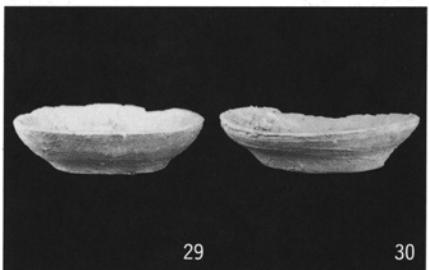
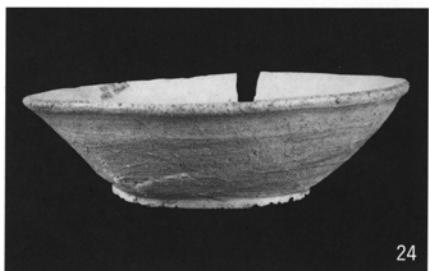
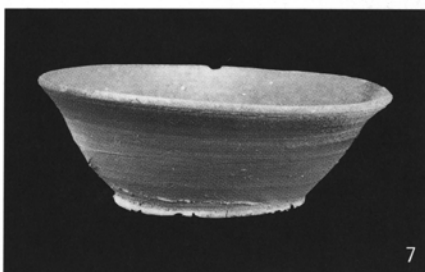
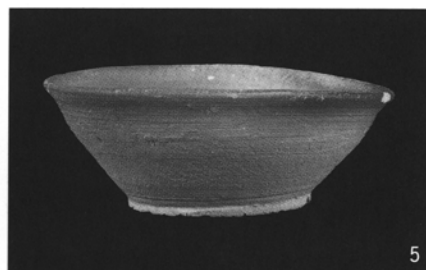
① SY04 (北東より) ② SY04 (南西より) ③ SY04 埋土断面 (北東より)
④ SY04 床面下施設検出状況 (南西より) ⑤ SY04 床面下施設検出状況 (北東より)

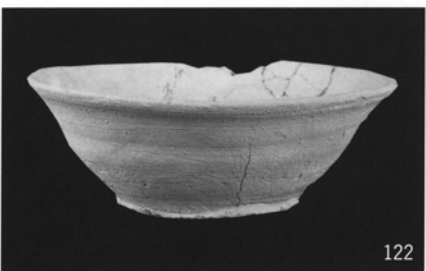
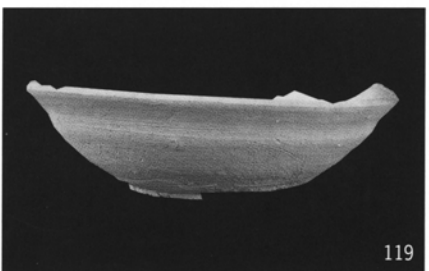
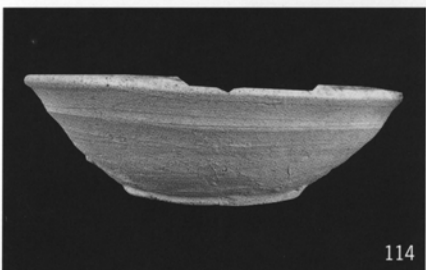
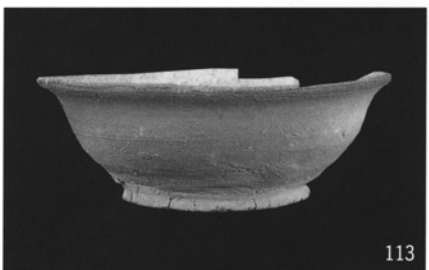
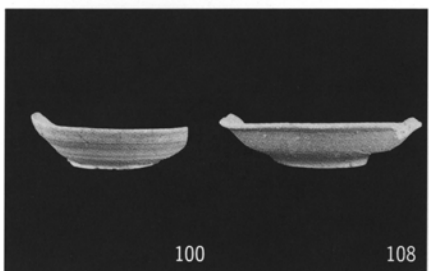
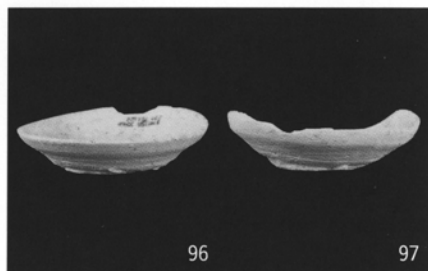
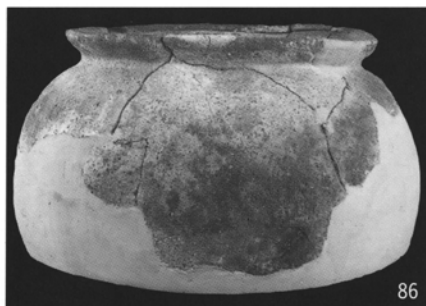


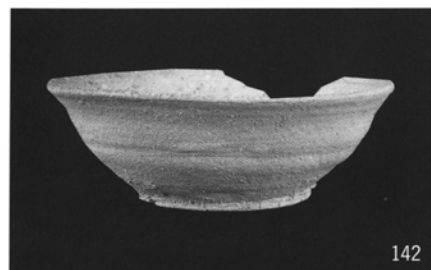
① SY05 (西より) ② SY05 上段床面下施設検出状況 (東より) ③ SY05 上段床面下施設検出状況 (西より)
④ SY05 下段床面下施設近影 (西より) ⑤ SY05 下段床面下施設検出状況 (西より)



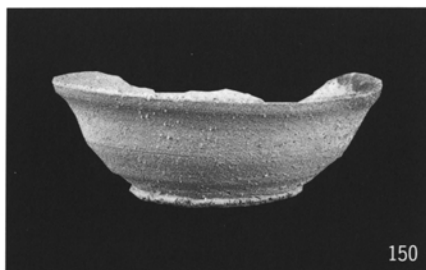
①調査区全景（北西より） ②航空測量風景（西より）



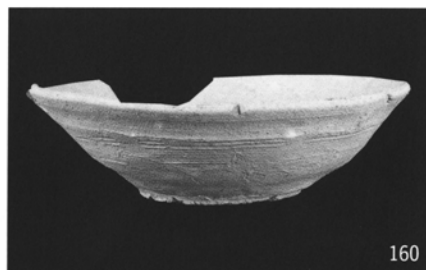




142



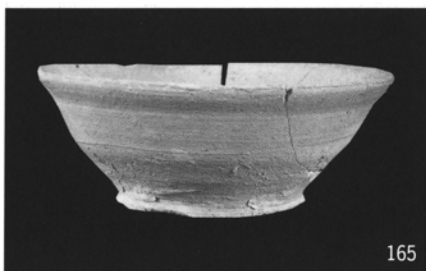
150



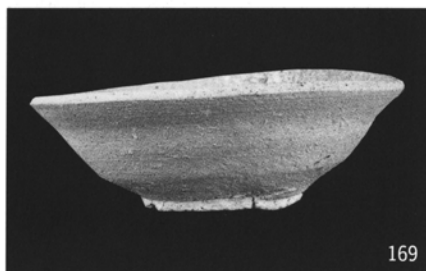
160



161



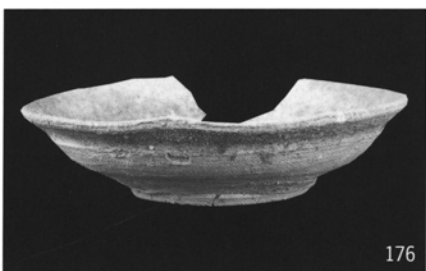
165



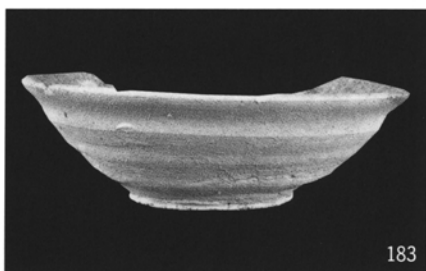
169



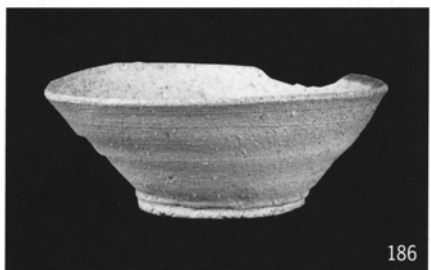
171



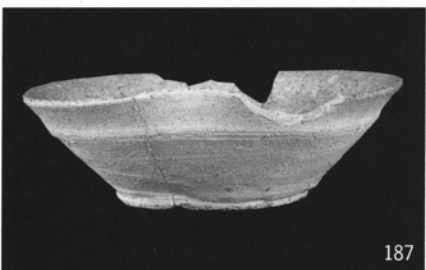
176



183



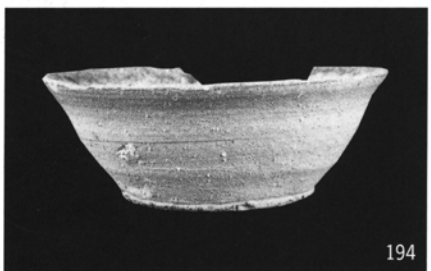
186



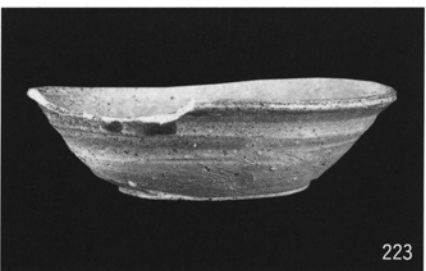
187



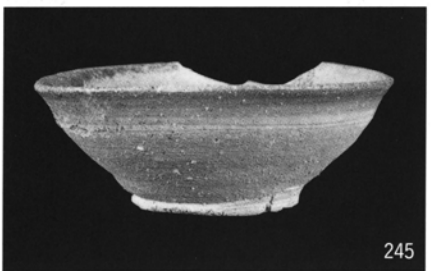
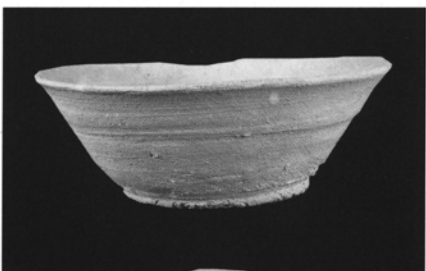
191



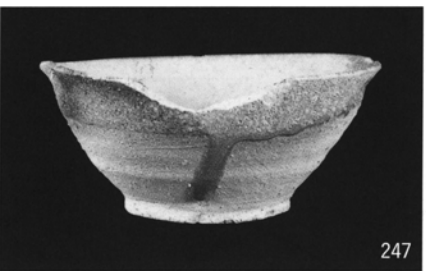
194



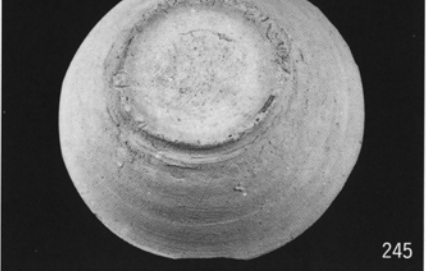
223



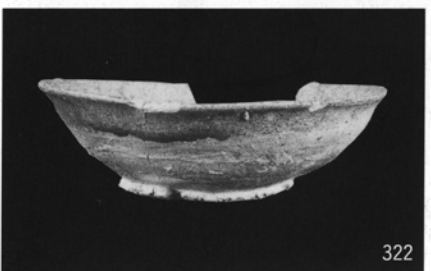
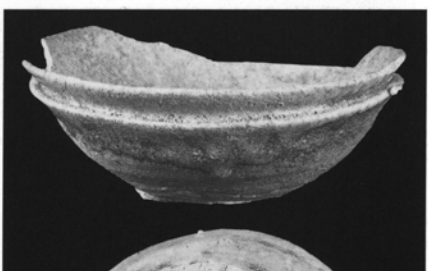
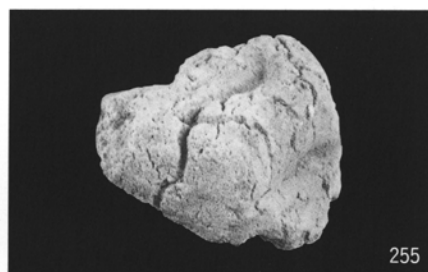
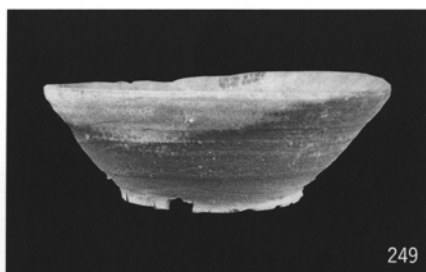
245



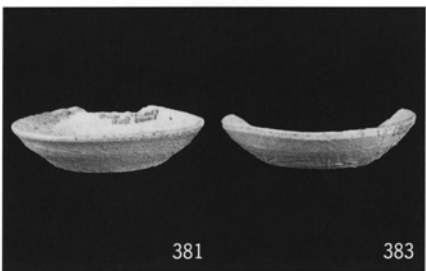
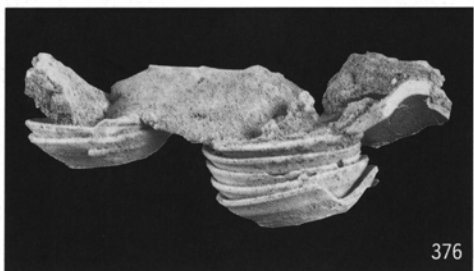
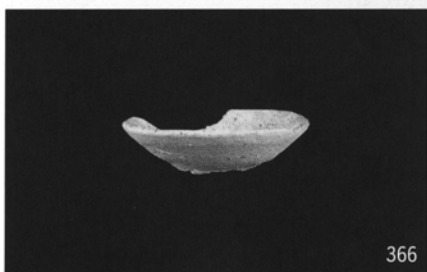
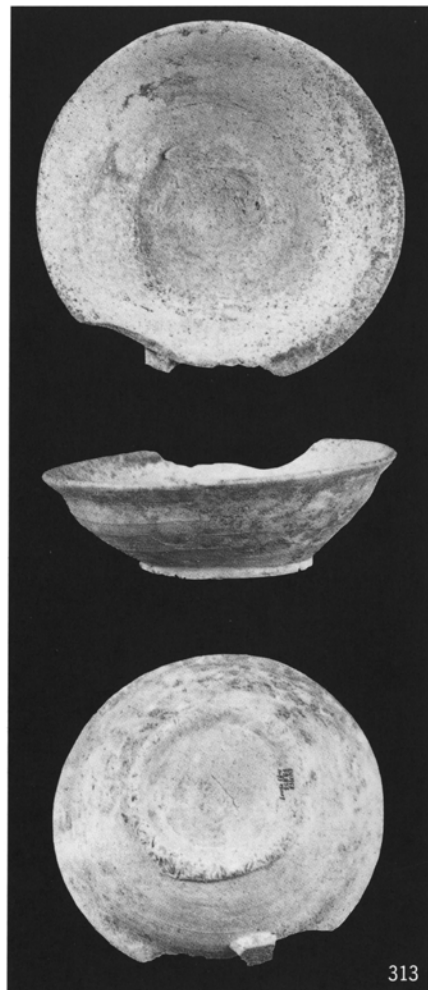
247

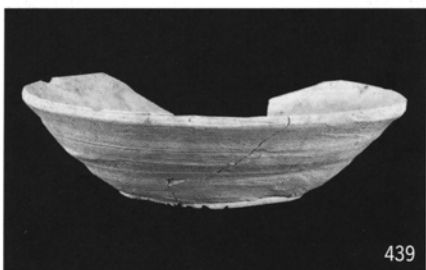
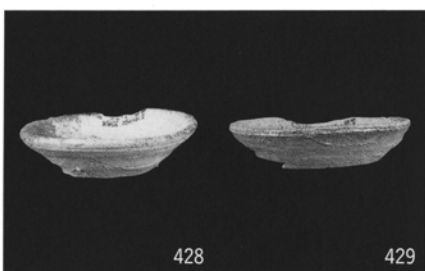
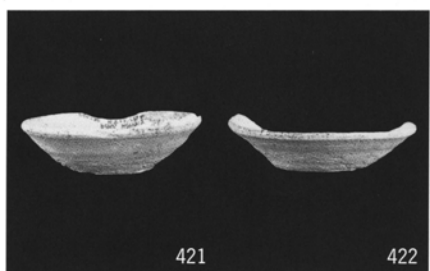
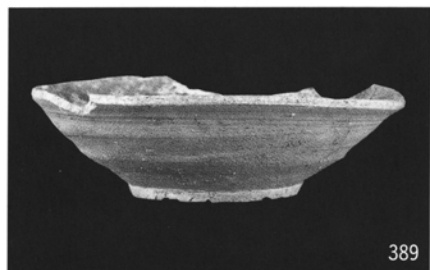


245



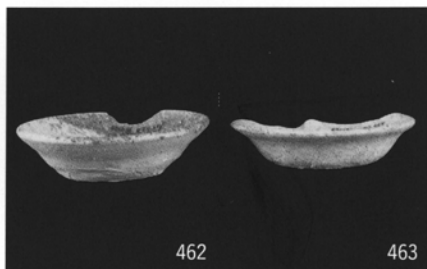
遺物写真(4)



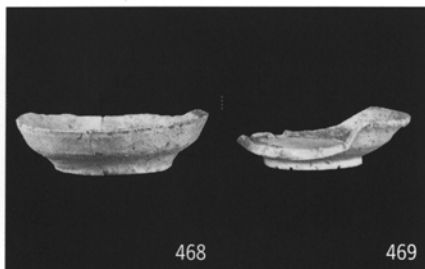




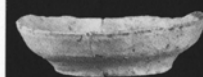
460



462



463



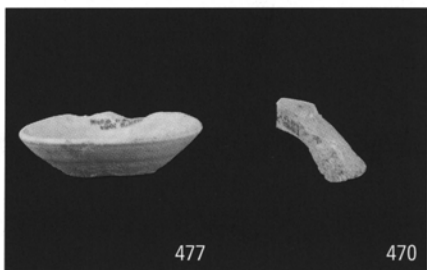
468



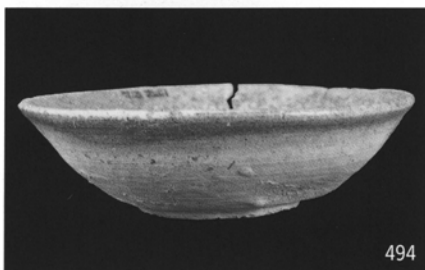
469



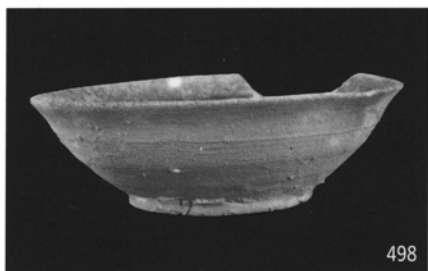
471



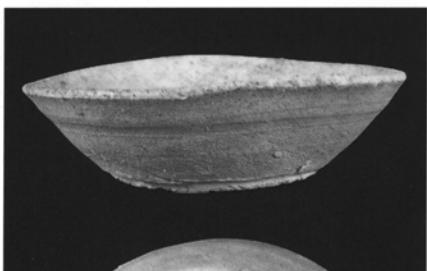
477



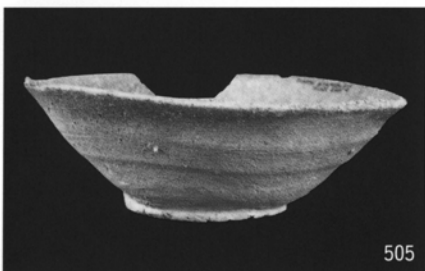
494



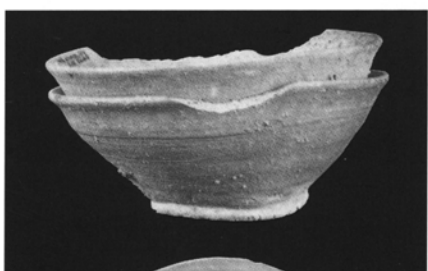
498



500



505



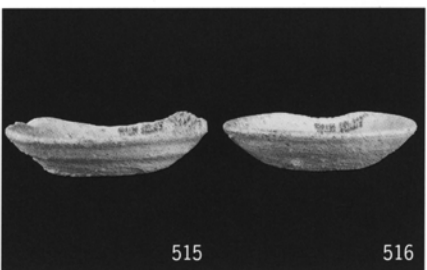
509



510



515



516



523

図 版

平成 8 年度調査区(Ⅱ)

■ 図版目次

平成 8 年度調査区(II)

- 図版15 ①調査前風景（西より）
②灰原01検出状況（西より）
③灰原01断面（北より）
④灰原02断面（東より）
⑤灰原02断面（東より）

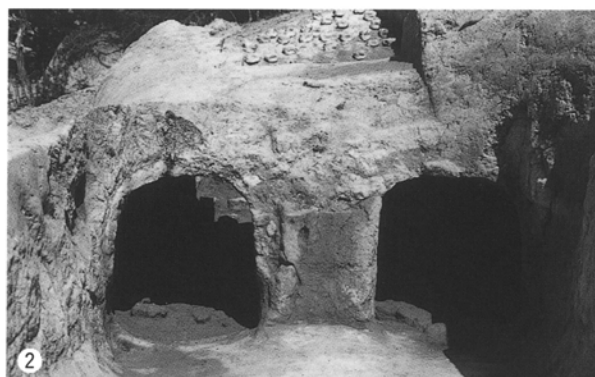
- 図版16 ①SY06, 07（西より）
②SY06 分焰柱（西より）
③SY06（東より）
④SY06 焼成室床（北より）
⑤SY06 分焰柱断面（西より）
⑥SY06 分焰柱断面（南西より）
⑦SY06 分焰柱断面（東より）

- 図版17 ①SY07 分焰柱（東より）
②SY07 床面下施設（東より）
③SY07 窯壁（南より）
④SY07 分焰柱断面（東より）
⑤SY07 分焰柱断面（南東より）

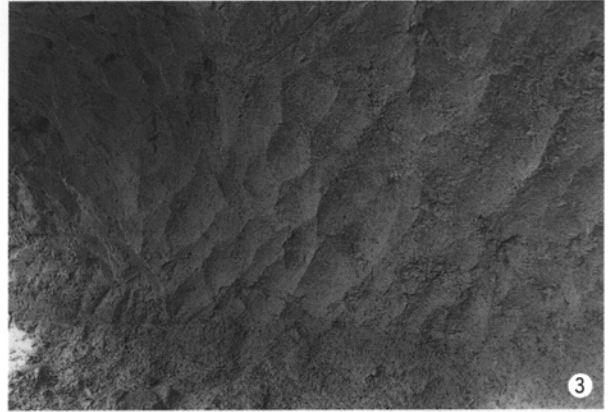
- 図版18 遺物写真(8)



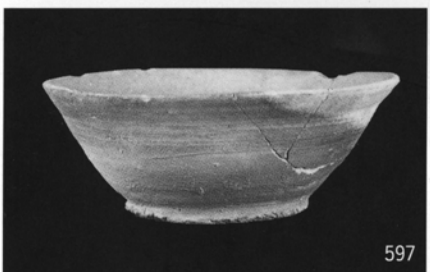
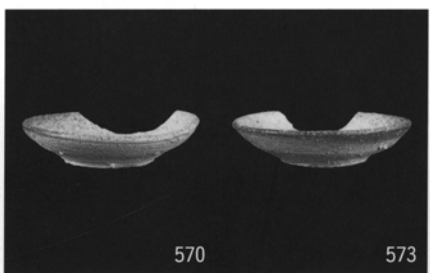
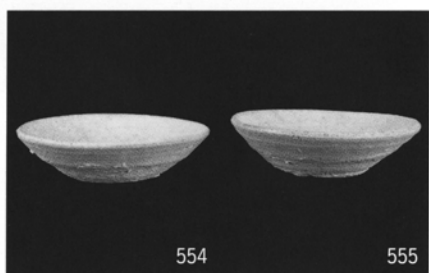
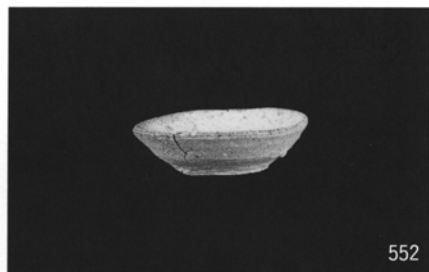
①調査前風景（西より） ②灰原 01 検出状況（西より） ③灰原 01 断面（北より）
④灰原 02 断面（東より） ⑤灰原 02 断面（東より）



① SY06, 07 (西より) ② SY06 分焰柱 (西より) ③ SY06 (東より) ④ SY06 焼成室床 (北より)
⑤ SY06 分焰柱断面 (西より) ⑥ SY06 分焰柱断面 (南西より) ⑦ SY06 分焰柱断面 (東より)



① SY07 分焰柱（東より） ② SY07 床面下施設（東より） ③ SY07 窯壁（南より）
④ SY07 分焰柱断面（東より） ⑤ SY07 分焰柱断面（南東より）



遺物写真(8)

報告書抄録

ふりがな	えんつうじこぼ・NA335ごうようⅠ・Ⅱ
書名	円通寺古墓・NA335号窯Ⅰ・Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第75集
編著者名	松田 訓・堀木真美子・奥村勝信・藤根 久
編集機関	財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年	西暦1998年 8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えんつうじこぼ 円通寺古墓	おおぶしきやうわちやう 大府市共和町	23223		35度 2分 36秒	136度 56分 15秒	95年度 19950418～ 19950801	1500㎡	道路建設
NA335号窯Ⅰ	なごやしきどりくおお 名古屋市緑区大 だかちやう 高町	23114		35度 2分 41秒	136度 56分 57秒	95年度 19950710～ 19951110	900㎡	道路建設
NA335号窯Ⅱ						96年度 19960610～ 19960802	250㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
円通寺古墓	墓跡	江戸	土坑・墓廣 106 溝 3	陶磁器 金属製品	多量の人骨
NA 335 号 窯 Ⅰ・Ⅱ	窯業址	平安～ 鎌倉	窯体 7	灰釉系陶器(山茶碗類)	窯体 4 基に床面下施設

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集

円通寺古墓
NA 335 号窯 I・II

1998 年 8 月 31 日

編 集 財団法人
発 行 愛知県埋蔵文化財センター
印 刷 (株)クイックス